

米倉山B遺跡

—米倉山ニュータウン造成に伴う発掘調査報告書—

1999. 3

山梨県教育委員会
山梨県土地開発公社

米倉山B遺跡

—米倉山ニュータウン造成に伴う発掘調査報告書—

1999. 3

山梨県教育委員会
山梨県土地開発公社

米倉山B遺跡発掘調査報告書正誤表

訂正箇所	誤	正
34頁第6図版	図版が天地左右逆転	図版差し替え
44頁10~11行	(図版第135- ~)、 木製のもの7個(同 ~)	(図版第135-11~24)、 木製のもの5個(同 6~10)



貨泉（1.5倍）



8号住居跡出土 S字状口縁台付壺



13号住居跡出土台付壺



茶碗
左 3号墓
右 5号墓



小碗
左 6号墓
中・右 14号墓



茶碗
26号墓



茶碗・小碗
左・中 62号墓
右 61号墓



茶碗
66号墓



小碗
70号墓



茶碗・小碗
96号墓



茶碗
左 143号墓
右 232号墓



仏飯具
136号墓



茶碗
左 147号墓
右 159号墓



茶碗
179号墓



茶碗
189号墓



徳利
202号墓



小碗・徳利
221号墓



眼鏡
232号墓

序

本報告書は、米倉山ニュータウン整備事業に先立ち、1991年から1995年にかけて発掘調査を実施した山梨県東八代郡中道町下向山字米倉山3,911番地他に所在する米倉山B遺跡遺跡などの成果をまとめたものです。

県の南東部の曾根丘陵の一角に位置する米倉山は、古くより遺跡の宝庫としてしられ、これまでに旧石器時代から弥生時代、それに古墳時代にかけての遺跡が数多く発掘調査、あるいは分布調査などがされてきた地域です。そしてこの米倉山の北東～南東斜面にかけての、約40ヘクタールにわたる地域が今回の事業地となったものです。事業地には、南東斜面を中心とした菖蒲池遺跡、北東斜面を中心とした米倉山B遺跡が確認されていましたが、調査の中で南東斜面の裾にくちゃあづか古墳が新たに発見されました。本書はこのうちの古墳時代を中心とした米倉山B遺跡、それにくちゃあづか古墳にかかる調査の報告書です。

米倉山B遺跡からは、弥生時代の竪穴住居跡39軒、古墳時代の竪穴住居跡13軒、古墳時代の方形周溝墓2基、円墳3基、江戸時代の墓245基、大溝1条が確認されました。このうち弥生時代の竪穴住居跡は、本県での確認例の少ない条痕文土器を伴う時期のものも幾つか含まれており、同時期の菖蒲池遺跡とともに弥生時代研究に欠くことのできない貴重な資料といえるものです。古墳時代の方形周溝墓は、東方の東山地域に位置する上の平遺跡の方形周溝墓群との関係、また、本県最古の須恵器を出土した土壙の存在は、同様に東山周辺に分布する初期須恵器をもつ円形周溝墓などとの関連が注目されるものであります。江戸時代の墓は、この地域での調査例は初めてのものであり、県内各地で調査されたものとの比較が興味を引くところとなります。また、円墳が2基調査され、南東斜面裾部で調査されたくちゃあづか古墳などとともに、米倉山古墳群の一翼を担うものであり、本県における古墳時代後期の社会様相を知る上で貴重な資料となるものです。さらに、大溝からは弥生時代後半代ころ中国で鋳造された貨泉が出土し、文化の大きな流に触れることができました。これらの成果が今後の研究の一助となれば幸甚です。

末筆ながら、ご協力等を賜った関係機関各位、ならびに直接発掘調査、整理作業に当たられた方々に厚くお礼申し上げます。

1999年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

例　　言

1. 本書は、山梨県東八代郡中道町下向山字米倉山3,911-6番地他に所在する米倉山B遺跡、そして同下向山字清水3,143-1番地に所在するくちゃあづか古墳の発掘調査報告書である。
2. 本事業は米倉山ニュータウン整備事業に先立って、山梨県教育委員会が山梨県土地開発公社より委託をうけて実施したものである。
3. 発掘調査および整理調査は山梨県埋蔵文化財センターが担当した。
4. 本書の編集は坂本美夫が担当し、執筆は坂本美夫及び当センター職員の保坂康夫（第3章第1節旧石器時代の遺物、同第2節縄文時代の遺物、第4章第1節旧石器時代の遺物、同第2節縄文時代の遺物）、三田村美彦（第4章第2節縄文時代の遺物）、石神孝子（第5章第2節10号土坑出土の須恵器甕について）があたった。また、付録には聖マリアンナ医科大学解剖学教室の平田和明・星野敬吾先生、（財）帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏より原稿を頂いた。
5. 写真撮影は、次の者が当たった。
遺構は、1次調査では小野正文、早川典孝（現山梨県立山梨高校教諭）、保坂康夫、平山 優（現山梨県史編纂室）があたった。

2次～4次調査では、遺構全般を一ノ瀬信一郎（現白根町立百田小学校教諭）、くちゃあ塚古墳を坂本、当センター職員の吉岡弘樹があたった。

5次調査では、雨宮芳夫（現甲府市立甲府南中学教諭）があたった。

遺物は、塚原明生（日本写真家協会員）があたった。

6. 本書中の墓碑の拓本は、山梨県立考古博物館教育主事原裕貴子（現敷島町立敷島中学教諭）が作成したものである。
7. 人骨の鑑定は、聖マリアンナ医科大学解剖学教室の平田和明・星野敬吾先生にお願いした。
8. 報告書にかかる記録図面、出土品、写真などは山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
9. 人骨のうち59・76・94・103・106・122・123・143・150・157・162・172・180・219・221・53・74・152・156・189・206・226号墓壙の人骨は、聖マリアンナ医科大学に保管してある。なお、53号墓壙以降のものは個体の一部保管である。
10. 調査に当たって地質については、帝京大学山梨文化財研究所第6室長河西 学氏のご教示を得た。
本報告書の作成にあたり、陶器類については神奈川県南足柄市教育委員会 市川正史氏に、須恵器については大阪府平安高等学校の萩本 勝氏、大阪府埋蔵文化財センターの小林義孝氏、阪口育功氏、大阪市埋蔵文化財センター田中清美氏、黒曜石については静岡県沼津高等専門学校望月明彦氏に、それぞれご教示いただいた。
11. 住居跡のうち35・39・41・45・47～50・54号住居跡は、欠番である。

凡　　例

1. 図版の縮尺は原則として遺構を1/60、遺物のうち土器、陶器、煙管などの金属製品などを1/3、近世墓の遺物のうちの鏡を1/1.5としたが、大きさにより任意の縮尺としたものもある。
2. 図版中の土層図、断面図の標高を示す数字の単位はm、土坑、柱穴の深さを示す数字の単位はcmである。
3. 図版中のスクリーン・トーンは次のような内容を示している。

 焼土又はカーボン

目 次

序

例言

凡例

第1章 調査の実施と経過	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査の実施	2
第2章 遺跡の環境	4
第1節 位置と地理的環境	4
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	4
第3節 米倉山遺跡群の研究史	7
第3章 第1次調査の概要	10
第1節 旧石器時代の遺物	10
第2節 縄文時代の遺物	10
第3節 弥生時代の住居跡と遺物	10
第4節 壁穴状遺構と遺物	18
第5節 土坑と遺物	18
第6節 溝・方形周溝墓と遺物	21
第4章 第2～5次調査の概要	23
第1節 旧石器時代の遺物	23
第2節 縄文時代の遺物	23
第3節 弥生時代以降の住居跡と遺物	24
第4節 溝と遺物	33
第5節 古墳と遺物	33
第6節 江戸時代の墓と遺物	39
第7節 墓石	75
第8節 甘藷貯蔵穴	76
第5章 各 説	78
第1節 遺構・遺物等の概要	78
第2節 第10号土坑出土の須恵器甕について	81
付編	
1 米倉山B遺跡出土の江戸時代人骨	84
2 米倉山B遺跡における断層について	105
おわりに	108

挿図目次

第1図	米倉山B遺跡位置と周辺遺跡分布図	5
第2図	調査区位置図	6
第3図	遺構配置図（住居跡ほか）（1）	11
第4図	遺構配置図（住居跡ほか）（2）	25
第5図	「貨泉」拓影	33
第6図	「貨泉」出土グリッド出土遺物	34
第7図	「貨泉」出土グリッド出土遺物分布状況	35
第8図	くちやあ塚古墳周辺地形図	38
第9図	墓壇位置図（1～7号墓壇）	38
第10図	墓壇位置図（10～249号墓壇）	41・42
第11図	2号墳周辺芋貯蔵穴平・断面図	77
第12図	須恵器大甕の類例と県内出土資料	82

表目次

第1表	米倉山遺跡の試掘調査	7
第2表	米倉山遺跡に関する文献目録	8
第3表	米倉山遺跡名称変遷	8

図版目次

図版第1	1号住居跡平・断面図
図版第2	2号住居跡平・断面図
図版第3	3号住居跡平・断面図
図版第4	4・5号住居跡平・断面図
図版第5	6号住居跡・5号土壙平・断面図
図版第6	7号住居跡平・断面図
図版第7	8号住居跡平・断面図
図版第8	9号住居跡平・断面図
図版第9	10・12号住居跡及び1・3・6・10号土壙平・断面図
図版第10	10・12号住居跡断面図及び10号土壙遺物出土状況
図版第11	11号住居跡平・断面図
図版第12	13号住居跡平・断面図
図版第13	14号住居跡・2号竪穴平・断面図
図版第14	15号住居跡・18号土壙平・断面図
図版第15	16・17号住居跡平・断面図
図版第16	18号住居跡平・断面図
図版第17	19号住居跡・20号土壙平・断面図
図版第18	20号住居跡・21号土壙平・断面図
図版第19	1号竪穴・4・7・11号土壙平・断面図
図版第20	12～17・19号土壙平・断面図
図版第21	1号方形溝平・断面図
図版第22	1号方形周溝墓平・断面図
図版第23	21・22号住居跡・炉平・断面図
図版第24	23号住居跡平・断面図
図版第25	24号住居跡・炉平・断面図
図版第26	25号住居跡・炉平・断面図
図版第27	26号住居跡・炉平・断面図
図版第28	27号住居跡・炉平・断面図
図版第29	28-1・28-2・28-3号住居跡・炉平・断面図
図版第30	29-1・29-2・29-3号住居跡・炉平・断面図
図版第31	30号住居跡・31号住居跡・炉平・断面図
図版第32	32号住居跡・炉平・断面図
図版第33	33・34号住居跡・炉平・断面図
図版第34	36・37号住居跡・炉平・断面図
図版第35	38号住居跡平・断面図
図版第36	40号住居跡平・断面図
図版第37	42・44号住居跡平・断面図
図版第38	46号住居跡平・断面図
図版第39	51号住居跡・炉平・断面図
図版第40	52・53号住居跡平・断面図
図版第41	55・56号住居跡平・断面図
図版第42	米倉山B-1号墳石室平面図及び掘方平・断面図

- 図版第43 米倉山B－2号墳墳丘平面図及び芋貯藏穴平面図
図版第44 米倉山B－2号墳石室平・断面図
図版第45 米倉山B－2号墳石室掘り方平・断面図
図版第46 くちゃあ塚古墳墳丘平面図及び断面図
図版第47 くちゃあ塚古墳石室平面図、正・側面見通し図
図版第48 くちゃあ塚古墳石室展開図
図版第49 くちゃあ塚古墳石室掘り方平・断面図
図版第50 1～6号墓墳平面図
図版第51 7、10～14号墓墳平・断面図
図版第52 15～20号墓墳平・断面図
図版第53 21～26号墓墳平・断面図
図版第54 27～31号墓墳平・断面図
図版第55 32・33・62・78・113号墓墳平・断面図
図版第56 34～40号墓墳平・断面図
図版第57 41～47・59号墓墳平・断面図
図版第58 48～50・69・82号墓墳平・断面図
図版第59 51～56・236号墓墳平・断面図
図版第60 57～64号墓墳平・断面図
図版第61 65～67・70～72号墓墳平・断面図
図版第62 73～77・79号墓墳平・断面図
図版第63 81・83～89号墓墳平・断面図
図版第64 91～95号墓墳平・断面図
図版第65 96～98・100・113・133号墓墳平・断面図
図版第66 101～107号墓墳平・断面図
図版第67 109～115号墓墳平・断面図
図版第68 116～121号墓墳平・断面図
図版第69 122～130号墓墳平・断面図
図版第70 131～137号墓墳平・断面図
図版第71 140～149号墓墳平・断面図
図版第72 150～156号墓墳平・断面図
図版第73 157～163号墓墳平・断面図
図版第74 164～169号墓墳平・断面図
図版第75 170～179号墓墳平・断面図
図版第76 180～185号墓墳平・断面図
図版第77 186～192号墓墳平・断面図
図版第78 193～198号墓墳平・断面図
図版第79 199～207号墓墳平・断面図
図版第80 208～215号墓墳平・断面図
図版第81 216～222号墓墳平・断面図
図版第82 223～230号墓墳平・断面図
図版第83 231～237号墓墳平・断面図
図版第84 238～243号墓墳平・断面図
図版第85 244～247・139・146号墓墳平・断面図
図版第86 旧石器～縄文時代出土遺物
図版第87 縄文時代出土遺物
図版第88 1～3号住居跡出土遺物
図版第89 5号住居跡出土遺物
図版第90 6～8号住居跡出土遺物
図版第91 8号住居跡出土遺物（2）
図版第92 8号住居跡出土遺物（3）
図版第93 8号住居跡出土遺物（4）
図版第94 8～11号住居跡出土遺物
図版第95 12・13号住居跡出土遺物
図版第96 14・15号住居跡出土遺物
図版第97 16～19号住居跡出土遺物
図版第98 20号住居跡出土遺物
図版第99 21・22号住居跡出土遺物
図版第100 22～24号住居跡出土遺物
図版第101 25号住居跡出土遺物
図版第102 26号住居跡出土遺物
図版第103 27・28号住居跡出土遺物
図版第104 28号住居跡出土遺物（2）
図版第105 29号住居跡出土遺物
図版第106 30～32・34号住居跡出土遺物
図版第107 34・36・38号住居跡出土遺物
図版第108 38・40・42・56号住居跡出土遺物

- 図版第109 3~20号土壙・1号方形溝出土遺物
図版第110 10号土壙出土遺物
図版第111 1号方形周溝墓出土遺物（1）
図版第112 1号方形周溝墓出土遺物（2）
図版第113 米倉山B-1号墳出土遺物
図版第114 米倉山B-2号墳出土遺物
図版第115 米倉山B-2号墳・くちゃあ塚古墳出土遺物
図版第116 1~11号墓壙出土遺物
図版第117 12~21号墓壙出土遺物
図版第118 23~35号墓壙出土遺物
図版第119 37~60号墓壙出土遺物
図版第120 61~72号墓壙出土遺物
図版第121 74~92号墓壙出土遺物
図版第122 94~107号墓壙出土遺物
図版第123 109~120号墓壙出土遺物
図版第124 121~136号墓壙出土遺物
図版第125 137~148号墓壙出土遺物
図版第126 149~162号墓壙出土遺物
図版第127 163~173号墓壙出土遺物
図版第128 174~183号墓壙出土遺物
図版第129 184~200号墓壙出土遺物
図版第130 201~220号墓壙出土遺物
図版第131 221~227号墓壙出土遺物
図版第132 228~246号墓壙出土遺物
図版第133 247号墓壙及びグリッド出土遺物
図版第134 墓壙出土装飾煙管類
図版第135 墓壙出土数珠類（1）
図版第136 墓壙出土数珠類（2）
図版第137 1~14号墓壙出土銭
図版第138 14~27号墓壙出土銭
図版第139 27~35号墓壙出土銭
図版第140 35~40号墓壙出土銭
図版第141 40~48号墓壙出土銭
図版第142 49~60号墓壙出土銭
図版第143 61~73号墓壙出土銭
図版第144 73~87号墓壙出土銭
図版第145 87~95号墓壙出土銭
図版第146 96~112号墓壙出土銭
図版第147 112~123号墓壙出土銭
図版第148 124~140号墓壙出土銭
図版第149 140~153号墓壙出土銭
図版第150 153~168号墓壙出土銭
図版第151 168~186号墓壙出土銭
図版第152 186~195号墓壙出土銭
図版第153 195~211号墓壙出土銭
図版第154 212~228号墓壙出土銭
図版第155 228~239号墓壙出土銭
図版第156 242~245号墓壙出土銭
図版第157 墓碑拓本（1）
図版第158 墓碑拓本（2）
図版第159 墓碑拓本（3）
図版第160 墓碑拓本（4）
図版第161 遺構・遺物（1）
図版第162 遺構・遺物（2）
図版第163 遺構・遺物（3）
図版第164 遺構・遺物（4）
図版第165 遺構・遺物（5）
図版第166 遺構・遺物（6）
図版第167 遺構・遺物（7）
図版第168 遺構・遺物（8）
図版第169 遺構・遺物（9）
図版第170 遺構・遺物（10）

第1章 調査の実施と経過

第1節 調査経過

1 発掘調査事務経過

平成3年7月22日 文化庁に第1次調査の発掘通知を提出する。
平成4年4月13日 文化庁に第2次調査の発掘通知を提出する。
平成5年4月13日 文化庁に第3次調査の発掘通知を提出する。
平成6年4月18日 文化庁に第4次調査の発掘通知を提出する。
平成8年4月4日 文化庁に第5次調査の発掘通知を提出する。
平成8年5月14日 第5次調査の終了をもって発掘調査が全て終了した。
なお、各調査次の調査終了後にそれぞれ南甲府警察署へ発見通知を提出した。

2 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 山梨県埋蔵文化財センター

第1次調査

副主幹文化財主事 末木 健、主査文化財主事 小野正文、主任文化財主事 保坂康夫、
文化財主事 高野玄明、同早川典孝、同平山 優

第2・3次調査

主査文化財主事 坂本美夫 主任文化財主事 一瀬新一郎

第4次調査

主査文化財主事 坂本美夫 文化財主事 石神孝子

第5次調査

主査文化財主事 坂本美夫 文化財主事 雨宮芳夫

なお、第2次調査において当センター職員の文化財主事 森原明廣、同笠原（旧姓高橋）みゆきの応援を得た。

作業従事者

発掘調査

調査員 小林健二

相川一枝、相川 洋、相原ツネ子、青柳 清、芦沢津屋子、雨宮加代子、雨宮米子、飯寄貞子、池谷さち子、出月多津子、出月多枝美、出月満寿江、出月遊亀子、市川喜博、猪股順子、今沢美代、岩沢 白、宇野和子、宇野文子、宇野富貴子、梅林はなこ、大須賀のぶ子、長田和子、長田くみ子、長田純子、長田富子、長田奈代子、長田久江、長田美和子、長田勇輝、小田切虎雄、河住照雄、河住ふさ子、橋田保雄、桑原良和、鯉潤滝三郎、高坂博子、小菅春江、後藤京子、後藤勇樹、小林五男、小林喜久子、小林 諭、小林みつ代、小林としみ、小林 旦、小林弘子、小林 学、小林 周、斎藤 隆、斎藤律子、佐々木未生、沢田幸一、塙島富美子、志沢美香、鈴木うた子、須田重則、平 重蔵、平美与枝、竜澤 功、竜澤 智、田中文雄、千野富子、千野雅志 角田 武、塙田よし江、土屋ふじ子、徳田康江、土橋園子、富永 明、富永茂樹、内藤純子、内藤由紀子、中込志ず江、中込隆夫、中込よしぶ、中沢敬子、名取 静、名取貴司、名取秀樹、名取八重子、波切徳一、萩原茂彦、林 哲也、平川 昇、古屋茂子、保坂友香、宮川ともゑ、宮坂晴幸、武川一美、向山和彦、村田美由紀、村松重夫、村松佳幸、森本通久、矢崎悦子、矢崎米子、柳川 正、山口義男、米山八重子、渡辺凧乃女、渡辺スミ江、渡辺征子、渡辺礼子

整理作業

池谷さち子、猪股順子、今沢美代子、伊藤順子、土橋園子、志田幸江、志村君子、斎藤律子、小菅春江、村田美由紀、山本有希、北原和江、中込星子、清水真弓

第2節 調査の実施

1 調査方法とグリッドの設定

本遺跡を含む米倉山遺跡群は、旧石器～平安時代までの遺跡として登録されている。古くは昭和50年に行われた学術調査がその最初のものであり、その後も何度も地点を変えての調査が行われた地域である。このため、遺物散布の認められる地域は全てグリッド方式で調査を行い、遺物散布の認められない地域に対しても、トレンチ方式で極力試掘調査をおこない、遺構などの有無を確認した。遺構などの確認された場合には、本調査を実施する方針で臨んだが、試掘調査によって確認されたものは全くない。なお、くちゃあ塚古墳は、清水地区での古墳の有無を確認する試掘調査中の踏査によって確認されたものである。

第1次調査は、本遺跡のほぼ中央あたりを通過する2本の農道のうちの、北側の農道の東側に続く下り勾配の斜面上、地番的には3,758番地と3,911-6番地である。

第2～3次調査は、北側の農道の両側、それに南側の農道の南側に続く上がり勾配の斜面、地番的には清水3,143-1番地ほかである。

第4次調査は、米倉山B遺跡よりほぼ南方1kmにある、南東斜面の裾部にあるくちゃあ塚古墳、地番的には清水3,143-1番地ほかである。

第5次調査は、米倉山B遺跡の北側の農道部分で、地番的にはおおよそ3,762-1番地に沿った部分である。これは第2～3次に調査した江戸時代墓地が農道に食い込んでいる部分の調査と、さらに農道の下に墓の存在が予想されたためにおこなった調査である。

調査グリッドは、国家座標系（平面直角座標W系）に基づいて設定した。50mメッシュで、東西をA～W、南北を1～17までのグリッドとした。そして本米倉山B遺跡では、このうちのR4～R5-Q5～Q4の杭（正方形、第図参照）を基準杭とした。これらの杭のうち国家座標が置かれているのは、R4（X=-46530.0m、Y=7210.0m）とQ5（X=-46480.0m、Y=7160.0m）である。グリッドは、第1次調査で4m、第2～3、5次調査で5mのグリッドを設定した。なお、第1次調査は、調査日程の関係で基本杭設定前に設定したものであり、2次以降の杭と整合性の取れるように、両者を併記した調査区がある。

2 調査の経過と概要

第1次調査では、北東斜面を中心にして弥生時代の竪穴住居跡20軒、古墳時代の方形周溝墓2基（内1基は溝状通構とされていたが、溝が「コ」の字状に回っており、方形周溝墓に近い形態をみせていることから、方形周溝墓とした）、土壙20基が調査された。

第2～3次調査では、弥生時代竪穴住居跡8軒、古墳時代13軒、大溝1条、古墳2基、平安時代の墓1基、それに江戸時代の墓245基が調査された。江戸時代の墓地の見られる地域にも、弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多数確認できた。プランの検出を行い、住居跡を設定してみたが、ごく一部の残存が確認されたに過ぎず、墓を造るときにそのほとんどが壊されたようである。このため、墓地の地域での住居跡番号の欠番が多くなったといえる。なお、墓地の北縁は、さらに北側の用地外まで延びていることが確認された。また、弥生時代の竪穴住居跡も同様である。

大溝からは、土器破片に混ざって中国で鋳造された「貨泉」が確認された。このため周辺についても慎重に掘りさげを進めたが、確認されたのは1枚きりであった。この溝は、実際には下に行くに従って幅の広がる沢と考えられるもので、人工的な痕跡はほとんど無く、自然の沢と考えられるものである。そしてこの沢の部分に土器などが廃棄されたものと考えられる。

米倉山B遺跡から南西方向560mほどの斜面裾部の荒地（小字清水3000-2・3番地）には、古墳の存在が想定されおり、当初より発掘調査の計画になっていた。トレンチ等を設定し確認調査を行ったが、古墳の存在の手掛かりとなる遺構や遺物は全く確認できなかった。さらに、想定地の周辺にもトレンチを設定して調査したが、遺構等を確認することはできず、古墳の存在はなかったものと考えられた。なお、この確認調査を通して、東方

150mほどの竹林北側にある南斜面において古墳（くちゃあ塚墳、小字清水3143-1番地）の石室の残存しているのを確認した。

第4次調査では、前回確認されたくちゃあ塚古墳を調査した。

第5次調査では、江戸時代の墓10基と、コンクリート舗装前の旧道路面などが確認された。

第3節 試掘調査地点

今回の調査を実施する中で、周囲の土地に対してトレンチ方式で試掘調査、さらに踏査を実施した。その結果については、前述のように遺構などの確認は皆無であった。特にトレンチの位置について図示できないので、実施した場所の地籍を列挙しておくこととする。

小字小生坂 3911-5、3912-3・4

小字新林 3743、3745、3746、3747、3749-1～3、3750、3752、3756-1・2・5・10、3768-1～6、
3770-1、3771-1・2、3774-1、3686

小字小平 3728、3740、3686、3688

小字土井平 3428、3429-1、3435

小字清水 3000-2・3、3011、3012、3015、3034、3035、3036、3037、3130-2、3143 3149

第2章 遺跡の環境

第1節 位置と地理的環境

1 位置

米倉山B遺跡の所在する東八代郡中道町は、甲府盆地の南東部に位置する。北を笛吹川を挟んで甲府市、石和町と、東を境川村、南を滝戸山、日蔭山、右左口峠などによって芦川村、上九一色村、西を豊富村、西八代郡三珠町と接する。L字状の町域を持ち、笛吹川から僅かに南に下ったあたりに標高260mほどの曾根丘陵が北東から南西に連なり、さらにその背後に御坂山地が控えるなどの、山間部の様相が強い町である。米倉山B遺跡は、この町域の北端あたりの曾根丘陵上の一枝丘、米倉山に位置している。

JR甲府駅より直線で南々東方向7.5km、中央自動車道甲府南・中道インターより南々東400mにある。

2 地理的環境

中道町の町域は、先のようにそのほとんどを曾根丘陵上においており、山間地的様相が強い。この曾根丘陵の縁は、人手状に幾つもの台地が突き出しており、その台地の間に御坂山地に源を発した中小河川が流れ、前面の笛吹川に流れ込んでいる。

米倉山B遺跡は、滝戸川と七覚川とに挟まれた台地である米倉山（標高380.8m）の東～南斜面に位置している。丘陵の前面は笛吹川の沖積地が広がっており、米倉山との標高差は135mほどになる。なお、米倉山は四周が低い台地であるが、頂上付近には湧水の吹き出しが（菖蒲池）があり、果樹が造られる前までは頂上付近に水田が造られていた。このような場所は曾根丘陵上に幾つかみられ、旱魃でも水の切れたことがないといわれている。また米倉山の北東側には、谷を挟んで東山（標高340m）の台地が、南西側にはやはり谷を挟んで宇山平（標高380m）の台地がみられる。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

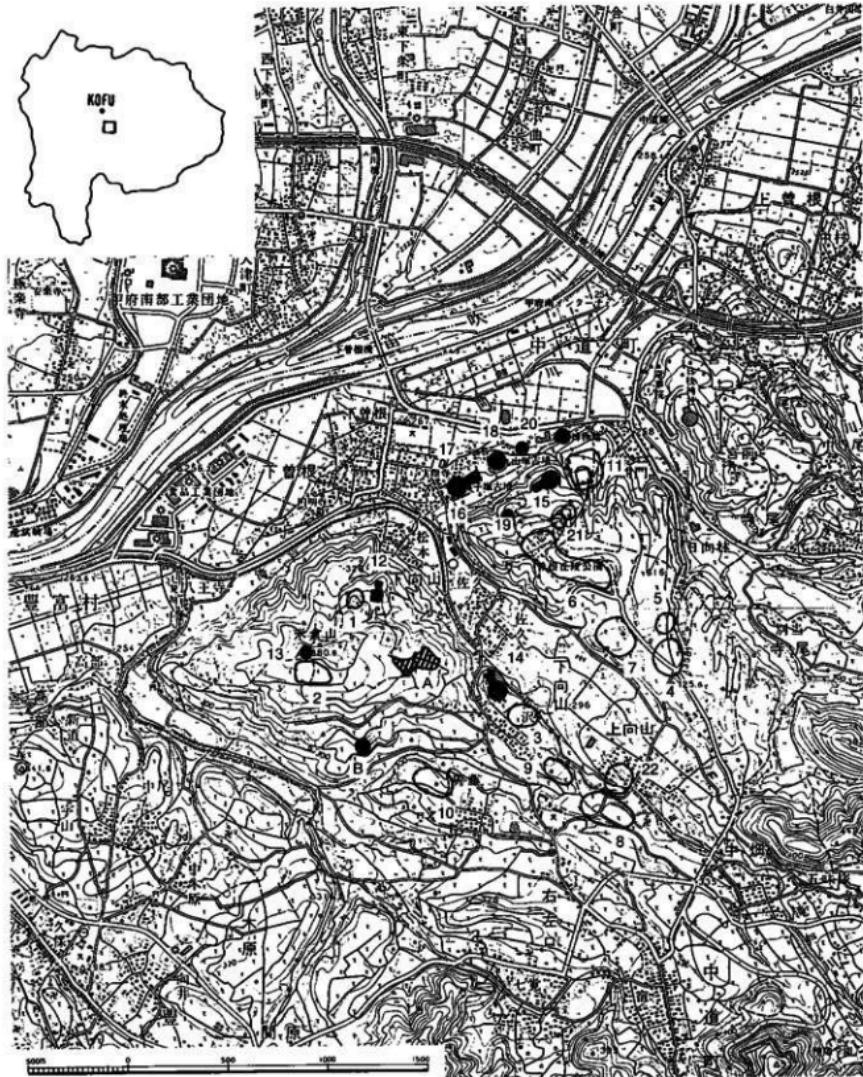
米倉B遺跡の所在する中道町地域は、旧石器時代より古代に至る間の遺跡が濃密に分布する地域である。また、米倉山に限つても昭和63年（1989）に中道町教育委員会によって行われた詳細分布調査によつても、本遺跡を含めた多くの遺跡の存在が改めて確認されている。そしてその中でも弥生時代より古墳時代に隆盛をみせ、特に古墳時代には本県の政治的中枢地となった地域である。

旧石器時代の遺跡としては、本遺跡の北東側に位置する東山の台地上に立石遺跡がみられる。それに調査地点などについては詳しく分からぬが、本遺跡の所在する米倉山地域においても調査によって細石器と細石核が確認されている。

縄文時代では、本遺跡の所在する米倉山地域に清水遺跡、小平沢遺跡、北東側の東山の台地上に立石遺跡、上の平遺跡、本遺跡の南東側において下向山遺跡、上野原遺跡などの存在が知られる。

弥生時代の遺跡としては、本遺跡の所在する米倉山地域に女沢遺跡、菖蒲池遺跡、本遺跡の東側に向山遺跡、北東側の東山の台地に熊久保遺跡、宮の上遺跡、弥生時代の終わりころから古墳時代にかけての多数の方形周溝墓で知られる上の平遺跡などが存在している。

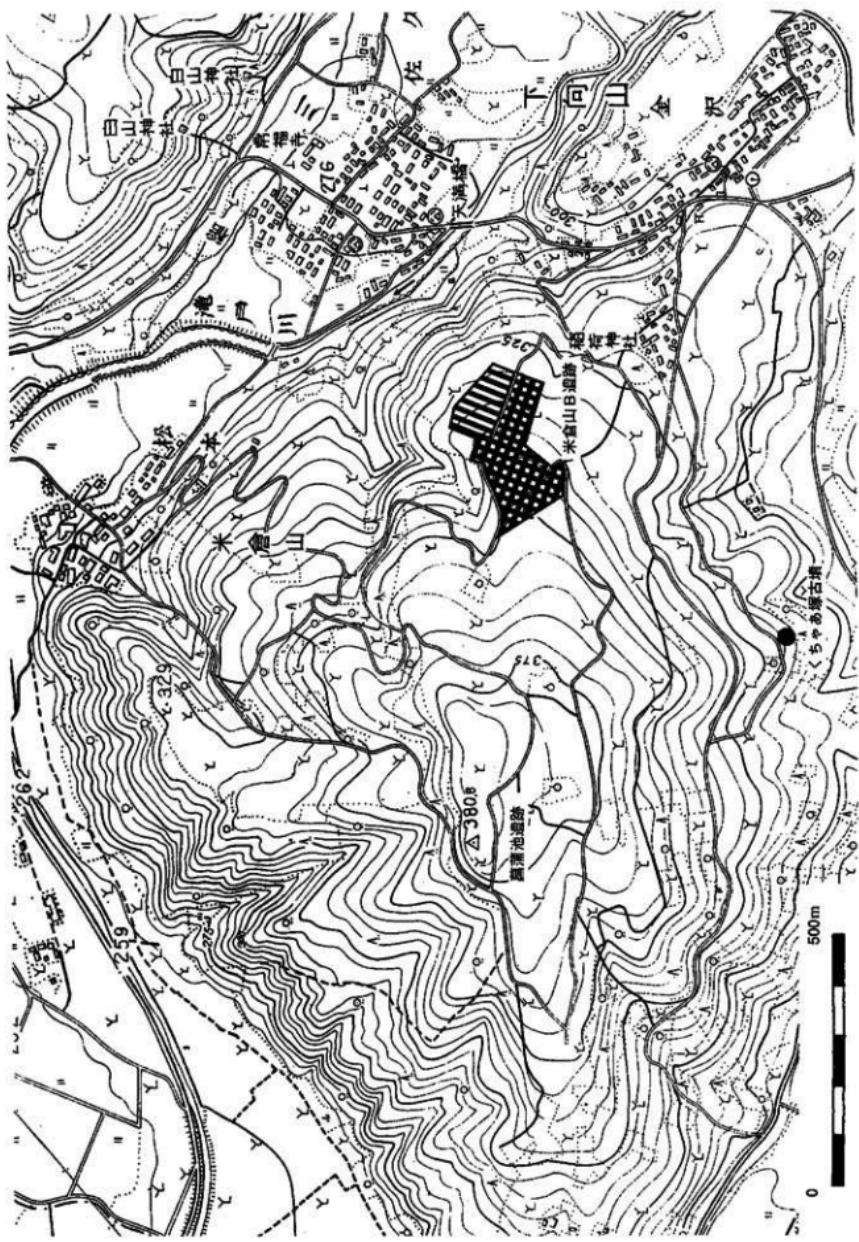
弥生時代の終わりころよりこの地域に遺跡が集中し、特に古墳時代前期には本県における中枢地を形成する。本遺跡の存在する米倉山には、本県最古の4世紀前半の築造と考えられる小平沢古墳（前方後方墳、全長45m）が、また、北東側の東山の台地上とその裾部に4世紀中頃から5世紀後半に築造されたとされる大丸山古墳（前方後円墳、全長99ないし120m）、銚子塚古墳（前方後円墳、全長167m）、丸山塚古墳（円墳、直径72m）、かんかん塚（茶塚）古墳（円墳、直径26m）などの前期古墳が存在する。これらの古墳は、東山古墳群と呼ばれているもので、本県屈指の古墳群である。さらに、この中の金沢地区にも、天神山古墳（前方後円墳、全長135m）といった前期古墳が存在する。これら3地域は古墳時代後期になつても古墳が造られ続けるが、その隆



第1図 米倉山B遺跡位置と周辺遺跡分布図

A. 米倉山B遺跡 B. くちゃあ塚古墳

1. 女沢遺跡
2. 菖蒲池遺跡
3. 天神遺跡
4. 立石遺跡
5. 能久保遺跡
6. 上の平遺跡
7. 宮ノ上遺跡
8. 向山遺跡
9. 下向山遺跡
10. 西原遺跡
11. 東山北遺跡（方形周溝墓を含む）
12. 小平沢古墳
13. 米倉山無名墳
14. 天神山古墳
15. 大丸山古墳
16. 銀子塚古墳
17. 丸山塚古墳
18. かんかん塚（茶塚）古墳
19. 稲荷塚古墳
20. 博物館構内古墳
21. 東山南遺跡1・2号墳
22. 向山氏館跡



第2図 調査区位置図 ■■■ 第1次 ■■■■ 第2・3・5次 ● 第4次(くちゃあ塚古墳)

盛期は弥生時代末から古墳時代前期ころにあり、この3地域が県内の他地域の古墳を圧倒している状況が明確に捕らえられ、この地域が弥生時代末ころより古墳時代前期にかけて本県の中核地として君臨していたことが捕らえられるのである。なお、これら支配者層の館などは現在まで確認されていない。この時期の集落跡については上の平遺跡、宮の上遺跡などから確認されていている。しかしこれらは、一般的な住居跡であって館などは確認されていない。恐らく館は背後の台地上ではなく、眼前に広がる盆地側の沖積地の中に存在するものと考えられるのである。この点については、笛吹川に架かる下曾根橋以下幾つかの橋の橋脚工事によって、これまでに橋脚下7~11m付近において弥生時代末から古墳時代前期ころの土器が確認されており、その可能性がすこぶる高いものといえる。いずれにしても、本遺跡は中道町地域が中核地を形成したころのものが主体であり、当然緊密な関係の中に置かれていたものといえるのである。

第3節 米倉山遺跡群の研究小史

米倉山は、古くから遺跡の宝庫として知られている。このため早くから考古学研究者によって調査が行われて来ているが、本事業により米倉山の約三分の一に及ぶ面積が開発されることになり、米倉山遺跡群のこれまでの調査などについて一応の整理をしておきたい。米倉山遺跡群の調査は昭和50年（1955）に始まり、今回の調査となるがこれらについて担当者の早川典孝がまとめた調査関係一覧表および考察があるので、これらを以下提示して研究史としたい。

「米倉山からの出土遺物は、大別して旧石器～縄文時代の石器と弥生時代の土器とに、分けられる。まず石器については、1955年に山本寿々雄氏が、1966年に谷口一夫・川崎昌宏氏が報告している。但し、1966年報告のものは、表掲資料である。これらの資料は、合計して11点あり、1985年に保坂康夫氏が再検討を行っている。1955年の山本報告では、発掘資料6点のすべてを旧石器時代のものとしていたが、保坂氏は縄文時代の石器も含まれているのではないかとの疑問を提示した。また、谷口・川崎報告で細石刃や細石核として報告された資料に疑問を投げかけ、これらの資料だけで細石刃文化の存在を想定するのは、危険であるとの見解を示した。なお、1987年の調査の際に、旧石器時代のものと思われるナイフ形石器が、小平沢遺跡から出土している。

統いて、弥生時代の遺物については、1952年に山内清男氏が、1957年に山本寿々雄氏が資料の見解を紹介する

第1表 米倉山遺跡の試掘調査

遺跡名	所在地	調査主体者	調査目的	調査期間	時代
		山本寿々雄	学術調査	50.7	
		山内清男・酒舘伸男・鎌木義昌	学術調査	51.3下旬	弥生
米倉山B遺跡	東八代郡右口村字米倉山	山本寿々雄・仁科義男・三枝善衛	学術調査	52.5.10~52.6.2	縄文・弥生
米倉山遺跡	東八代郡中道町字米倉山	山本寿々雄	学術調査	53.12~54.4	先土器
米倉山遺跡	東八代郡中道町字米倉山	都留文科大学考古学研究会	学術調査	67.8.6~67.8.9	弥生
米倉山B遺跡	東八代郡中道町字米倉山	中道町教育委員会	テクノポリス建設	87.11.19~87.12.11	縄文~古墳
小平遺跡	タ	タ	タ	タ	古墳
清水遺跡	タ	タ	タ	タ	縄文
久保沢遺跡	タ	タ	タ	タ	遺物なし
小生坂遺跡	タ	タ	タ	タ	平安
小平沢遺跡	タ	タ	タ	タ	先土器~古墳
女沢遺跡	タ	タ	タ	タ	縄文~平安
前山・三畳遺跡	タ	タ	タ	タ	不明
菖蒲池・三枚畠遺跡	東八代郡中道町字米倉山	中道町教育委員会	テクノポリス建設	88.10.25~88.11.10	縄文・弥生・平安

第2表 米倉山遺跡に関する文献目録

著者名	書名および論文名	出典およびページ数	出版年
山内清男	「第二トレンチ」	『吉胡貝塚』 P 123-4	1952
山本寿々雄	「山梨県下に於ける無土器文化の調査（米倉山の例）」	『石器時代』 1	1955
山本寿々雄	「縄文式文化以前の石器出現と本県考古学の現況」	『山梨日日新聞』	1955
明治大学	「日本旧石器時代展」	『旧石器文化研究文献目録』所収	1955
明治大学	「特集日本旧石器時代展」	『ミクロリス』 13	1956
山本寿々雄	「山梨県東八代郡米倉山B遺跡」	『日本考古学年報』 5 P 50	1957
山本寿々雄	「山梨県東八代郡米倉山遺跡」	『日本考古学年報』 7 P 31	1958
谷口一夫・川崎昌宏	「山梨県米倉山出土の細石核と細石器」	『甲斐考古』 1 P 1-2	1966
山本寿々雄	「山梨県の考古学」	P 69-70, 73, 96-7, 129, 214-5	1968
都留文科大学考古学研究会	「山梨県東八代郡中道町米倉山遺跡第一トレンチ出土の遺物について（略報）」	『甲斐考古』 5 の 1 P 47-51	1968
中道町史編纂委員会	『中道町史』 上	P 211-3, 430-1	1975
保坂康夫	「山梨県下の先土器時代資料の検討—1—」	『研究紀要』 2 P 1-12	1985
中山誠二	「甲斐における弥生文化の成立」	『研究紀要』 2 P 43-78	1985
中道町教育委員会	『米倉山地域遺跡詳細分布調査報告書』		1989

第3表 米倉山遺跡の名称変遷

年度	米倉山 遺跡名									
1965	米倉山 米倉山B									
1980	米倉山 米倉山A 米倉山B 清水 小平沢 女沢 女沢 女沢 前山									
1986	小平 久保沢 小生板 A B C 女沢 前山・三畑 三枚畑									
1987										
1988	菖蒲池・三畑 女沢 前山・三畑 三枚畑									
1991										

註1) それぞれの遺跡名の依拠資料は、以下の通りである。

1960年度 文化財保護委員会編『全国遺跡地図（山梨県）』1961年

1980年度 文化庁文化財保護部編『全国遺跡地図（山梨県）』1981年

1987年度 中道町教育委員会編『米倉山地域遺跡詳細分布調査報告書』1989年

1988年度 り

2) 1960年度より前の名称は、山本寿々雄氏の話から推測した。

3) 1986年度の名称は、中道町教育委員会からの委託により、山梨県考古学協会が作成した「米倉山地域遺跡詳細分布図」をもとにしている。

にとどめる。山内氏は、米倉山出土の土器を、愛知県吉貝塚第2トレンチ出土の「縄文式直後」の土器と併行するとしている。そして山本氏は、大洞A-Aに相当する土器を発見し、それが西志賀系の条痕文土器と併出していることを指摘した。なお、山本氏の記述によれば、両者の発掘地点は10m離れた所だという。これらのこととは、山梨県における弥生文化成立の問題を考える際に、重要なことを示唆するものである。すなわち、縄文晩期の土器と条痕文土器とが併出していることは、本県での弥生文化の成立が、弥生時代中期以前に遡るということになるからである。

1968年の都留文化大学考古学研究会の報告は、このことをより明確にした。ここでは、38点の土器片の拓本が掲げられており、縄文時代晩期に連なる遺跡であることが、明確な形で照明されたわけである。また、1985年の中山誠二氏の報告では、山梨県下の縄文時代晩期後半～弥生時代中期初頭の遺跡を集めて、それら出土土器の編年操作が試みられている。その中で、米倉山B遺跡（現在の菖蒲池・三枚畠遺跡と思われる）の土器を、畿内第Ⅱ様式に併行するものとして位置づけた。こうして、山梨県における弥生文化の成立が、次第に明らかとなりつつある。今後の調査では、縄文～弥生時代の集落の変遷過程が提示されることが、期待されよう」と、早川によってまとめられている。

なお、先に述べたように早川により作成された「米倉山遺跡の試掘調査」、「米倉山遺跡に関する文献目録」、「米倉山遺跡の名称の変遷」といった一覧表を併せて掲載しておく。

第3章 1次調査の概要

第1節 旧石器時代の遺物（図版第86）

発掘調査で確認されたものではないが、農道北側の北東斜面において弥生時代の住居跡を調査する中でナイフ形石器が検出された。

ナイフ形石器（同1）の素材は石刃で、素材の背面は打面方向と同一方向の剥離面と自然面によって構成される。石刃の打面側を先端として、左側縁に素材の刃部を残し、右側縁に先端から基部端部までプランティングを施し、左側部には基部のみにプランティングを施しているいわゆる二側縁加工のナイフ形石器である。プランティングは右側縁先端部側で直線的であるが、基部側両縁部は丸く仕上げられている。右側縁のプランティングは、先端側の一部に背面側からの対向剥離が残存するが、腹面側からのプランティング剥離より古く、腹面側からの剥離でその痕跡をほとんど失っているようである。腹面基部には両縁部からプランティング剥離を切って裏面調整が行われている。基部端部には、裏面調整より古い剥離で、背面側から端部を折るような角度で加撃された剥離面が見られ、端部に折り取ったような平坦面をわざわざ作り出しているように見える。なお、この剥離面の背面側に残った打点はポジティブであり、通常の剥離では考えられないものである。先端端部の刃部側に若干の微細剥離が見られる。刃部および左側縁基部側の一部が新しい剥離で失われている。透明で夾雜物がまったくない良質な黒曜石である。（保坂康夫）

第2節 繩文時代の遺物（図版第86）

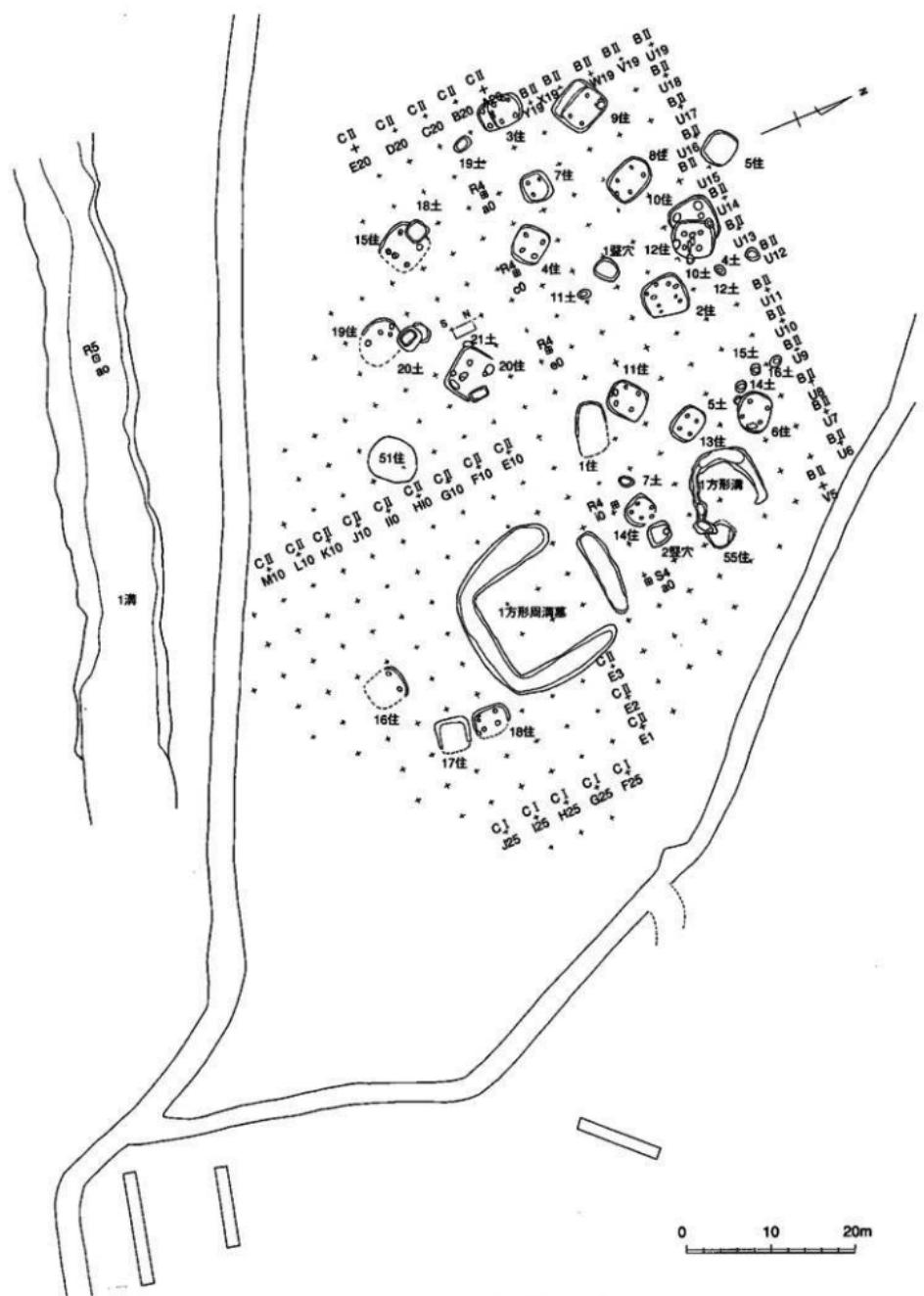
発掘調査で住居跡などの遺構の検出は全くなかったが、繩文時代の土器・石器等がほぼ全域から確認された。ここではこれら遺物の石器の中から、特に注目される遺物として剥片素材の両側縁部を深く抉ったコンケイブ・スクレイバーないしノッチド・スクレイバー（同2）を取り上げてみたい。この抉り部の剥片は剥離は両面調整で規模も大きい。この他、素材刃部に微細な剥離が多く見られるが、かなりローリングを受けたように刃が潰れている。また、剥離面の稜線もかなり磨耗しているものが多い。素材剥片の剥離面打面が残存し、打点が明瞭でバルバースカーの発達も著しい。こうした大型のノッチド・スクレイバーは繩文時代草創期初頭に顕著にみられ、片面調整が主体なのが気に掛かるものの、一応同時期のものとしておきたい。石材は不透明で青みがかかった黒曜石で、沼津高等専門学校の望月明彦氏に蛍光X線分析をお願いしたところ、神津島の恩馳島産であることが判明した。（保坂康夫）

第3節 弥生時代以降の住居跡と遺物

1号住居跡（図版第1・88）

C II-A 8・A 11・D 8・D 11の杭に囲まれたグリッド（以下同じ）で、単独で確認された。北西隅近くに11号住居跡が隣接している。ほぼ東西に長軸をもつもので、規模は東西6.72m、南北4.2mほどのやや長細い楕円形を呈する。壁は、東から北にかけての部分がほとんど確認できないほどに削平されている。壁の最も残存する南西側で40cmほどである。床は堅くたたき締められ、全体的に南西から北東方向に向かって徐々に下がって造られており、その差は最大で30cmほどになる。周溝、貯藏穴などは認められない。また明確な凸堤ないしベッド状遺構はみられないが、北側柱穴列の西から1本目と2本目との間に、「コ」の字状に造られた施設がある。柱穴は6本主柱穴で、直径20~40cm、深さ30~40cmほどである。なお、南東隅の柱穴の近くに小穴がみられるが、これは補強のための柱穴ないし入口部の施設に伴うものではないかと想像できる。炉は、中央と西側との柱穴の間に造られている。床を掘りくぼめた地焼炉であるが、枕石は見られない。

遺物はそれほど良好なものはなく、その多くが細片であった。図化できた遺物（図版第88）には、口縁部に刻目を施した台付甕（同1、2、4）、小型甕（同3）、台付鉢（同5）などがみられる。弥生時代末ころの時期が考えられる。



第3図 遺構配置図（住居跡ほか）(1)

2号住居跡（図版第2・88）

B II - W11・W13・Y11・Y13グリッドで単独で確認された。北西隅近くに10・12号住居跡が隣接している。長軸をほぼ東西にもつもので、規模は東西2.55m、南北5.05mほどの楕円ないし円形を呈する。壁は、東から北にかけて僅かにその残存部を確認できたに過ぎない。壁の最も残っている南西側で50cmほどであった。床は、堅くたたき締められている。全体的に南西から北東に向かって徐々に下がって造られており、その差は最大で20cmほどになる。なお、床面には、後世のものではないかと考えられる土坑3基が確認できる。周溝、貯蔵穴、凸堤ないしベッド状構造などは確認さなかった。柱穴は6本主柱穴で、直径20~40cm、深さ20~50cmほどである。北西隅の柱穴の脇に深さ20cmほどの小穴があり、また南西の壁際に深さ20~40cmほどの小穴がみられ、位置からして入口部の施設に伴うものではないかと考えられる。炉は、東側と中央の柱穴の間に造られている。床を掘りくぼめた地焼炉で、厚さ5cmほどに焼土が確認できる。枕石はみられない。北側列の中央と西側との柱穴の間に、偏平な石がみられたが、これは床より10cmほど浮いて確認されている。

遺物はそれほど良好なものはなく、その多くが細片の土器であった。図化できた遺物（図版第88）には、壺（同6・7）、小型壺（同8）、台付甕（同9、12）、小型甕（同10）、S字状口縁台付甕（11）（以下S字甕）、高杯の脚と考えられる破片（同13）などがある。このうちS字甕は混入品と考えられる。弥生時代末ころの時期が考えられる。

3号住居跡（図版第3・88・160）

B II - Y18・Y20、C II - B18・B20グリッドで、8号土壤と重複して確認された。新旧関係は8号土壤に東壁を切られている。長軸を南北にもつもので、規模は東西3.2m、南北4.78mほどのやや細長い隅丸長方形ないし楕円形を呈している。壁は全周から確認されているが、西側部分の残りが他に比べ比較的良く、30cmほどである。床は堅くたたき締められ、南から北に向かって徐々に下がって造られており、その差は最大で30cm前後になる。周溝、貯蔵穴、凸堤ないしベッド状構造などは確認されなかった。柱穴は6本主柱穴で、直径30~50cm、深さ30~50cmほどである。主柱穴の中央に直径30~40cm、深さ40cmほどの2個の小穴がみられる。炉は、北壁側にある柱穴の間に造られている。床を掘りくぼめた地焼炉で厚さ7cmほどに焼土が確認できる。また、枕石も設置されている。

なお、外見上は隅丸長方形ないし楕円形を呈しているが、住居跡の中央にみられる主柱穴の間に存在する2個の小穴が入口部の施設に伴うものとすれば、拡張ないし縮小された可能性があり、最大で2軒の可能性も考えられる。調査の段階では北側を3号-A住居跡、南側を3号-B住居跡としているが、床の状況からすれば1軒としておきたい。

遺物は、その多くが細片の土器で良好なものは少ない。図化できた遺物（図版第88）には、有段口縁壺（同14）、單純口縁壺（同17）、口縁部に刻目をもつ台付甕（同23・24）、小形甕（同21）、大小の瓶（同16・17）、高杯（同22）などがある。弥生時代末ころの時期が考えられる。

4号住居跡（図版第4）

B II - T14・T16・U14・U16グリッドで、耕作に伴うものと考えられる直径70cm、深さ20cmほどの不成型の土坑と、長さ3.5m、幅80cm、30cmほどの溝状の土坑などと重複して確認された。これら土坑は後世のものと捕らえられることから、新旧関係は本住居跡が土坑によって切られている。長軸を北東-南西にもつもので、規模は南北3.6m、東西2.8m（推定）ほどの楕円形を呈する。壁は、東側では全く残っておらず、その他の部分も10~20cmほどの残存であった。床は、壁同様に東側部分は残っていないが、その他の部分では堅くたたき締められている。南北はほぼ平らだが、東西は西から東に向かって徐々に下がっている。周溝、貯蔵穴、凸堤ないしベッド状構造などは確認できなかった。また、柱穴についても全く確認できなかった。炉についても、土坑によって壊されたものと考えられ、確認することができなかった。

遺物は細片の土器であり、図化できるものはなかった。遺物から時期を考えることはできないが、住居跡形態からみれば弥生時代末ころの時期を考えることができる。

5号住居跡（図版第4・89・160）

C II-A14・A16・C14・C16グリッドで、単独で確認された。北西隅近くに7号住居跡が隣接している。長軸を北西-南東にもつもので、規模は南北4.55m、東西2.7m（推定）ほどの楕円形を呈する。壁は、東側は全く残っていない。その他の部分では、10~35cmほどの残存がある。床は堅くたたき締められている。南北方向では、ほぼ平らに造られており、東西方向では西から東に向かって徐々に低くなり、その差は最大で25cmほどになる。周溝、貯蔵穴、凸堤ないしベッド状遺構などは確認されなかった。柱穴は4本主柱穴と考えられるもので、直径30~60cm、深さ20~40cmほどである。また、北西の柱穴の近くと、北西と南西の柱穴との間にも小穴がみられる。炉は北東と南東の柱穴の間に造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ10cmほどに焼土が確認できた。枕石はみられない。また、南西隅の柱穴の近くの床で、直径40cm、厚さ2cmほどの焼土化された場所が確認された。

遺物は、土器片が確認された。図化できた遺物（図版第89）には口縁部に刻目をもつ壺（同1）、折り返し口縁の壺（同2）、口縁部に刻目をもつ甕（同4）、単純口縁の甕（同5）、碗（同10）、瓶（同11）などがある。なお、甕については、台付甕（同7~9）である。弥生時代の末ころの時期が考えられる。

6号住居跡（図版第5・90）

B II-V7・V9・X7・X9グリッドで、5号土壤と重複して確認された。新旧関係は明確にならない。南側に13号住居跡が近接している。長軸をおおよそ南北にもつもので、規模は東西5.35m、南北3.65mほどの楕円形を呈する。壁は、ほぼ全周で確認され、その確認された部分でおおよそ10~50cmほどであった。床は、堅くたたき締められている。全体的に南から北に向かって徐々に下がって造られており、最大で20cmほどである。周溝は確認できなかったが、北壁の中ほどあたりから住居跡の中央に向かって、高さ15cmほどのやや変則な形のベッド状遺構の存在を確認できた。柱穴は4本主柱穴で、直径20~45cm、深さ10~45cmほどである。南東の柱穴の近くに貯蔵穴ないし土坑と思われるやや大きめな穴がある。炉は北西の柱穴の東よりに造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、枕石がみられる。また周囲にカーボン、焼土粒子の飛散が広範囲に確認できた。南西の柱穴際では、床に食い込んだ状況の石がみられた。

遺物は、土器片が確認されている。図化できた遺物（図版第90）には、単純口縁台付甕（同1・2・3）、片口様形態の台付甕（同6）、鉢（同5）の口縁部と考えられるものなどがある。住居跡形態などから弥生時代末ころの時期が考えられる。

7号住居跡（図版第6・90）

B II-Y16・Y18、C II-B16・B18グリッドで、単独で確認された。南東側に5号住居跡、北から西にかけて9・3号住居跡が近接する。長軸をほぼ東西にもつもので、規模は東西3.3m、南北2.75mほどの楕円形である。壁の立ち上がりは、やや緩やかな状況をみせる。床は、堅くたたき締められている。わずかであるが南西から北東に向かって傾斜している。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは確認できなかった。また、炉についても確認されていない。柱穴は、4本主柱穴であるが、北東の位置の柱穴が検出できなかった。これらは直径15~20cm、深さ30~40cmほどであった。

遺物はその多くが細片の土器であり、図化できたのは1点にすぎない。細片のため断定はできないが小型の壺ないし壺の口縁（図版第90-7）と考えられるものである。弥生時代末ころの時期が考えられる。

8号住居跡（図版第7・90~94、160）

B II-V15・V17・X15・X17グリッドで、単独で確認された。周囲に2・4・5・7・9・10号住居跡など

がみられる。長軸をほぼ南北にとるもので、規模は東西4.65m、南北6.05mの片方がやや膨らむ梢円形を呈する。壁はやや緩やかに立ち上がるもので、全周から確認された。西側が最もも残りがよく40cm、東側が最も残りが悪く10cmほどである。床は、堅くたたき締められている。南北方向ではほぼ平らに造られているが、東西方向では西から東に向かって徐々に低くなっているが、その差は僅かである。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは確認されなかった。柱穴は、4本主柱穴である。直径25~40cm、深さ40~50cmほどである。炉は、住居跡の中央や西北よりで北東と北西の柱穴の中間にみられる。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ10cmほどに焼土が確認できた。なお、枕石などはみられない。南壁の中央壁際あたりに、直径40cm、深さ35cmほどの小穴がみられるが、入口施設の梯子に伴うものであろう。

遺物は土器器で、本遺跡で最も豊富な量が確認された。図化できた遺物には折り返し口縁壺（図版第90-8~13）、単純口縁壺（同14~15）、口縁に刻目をもつ壺（図版第91-7~17）、S字壺（同18~19、図版第92、図版第93-1~6）、鉢（同8）、瓶（同12~16）、高杯（図版第94-1~4）、土垂（図版第93-3）などがある。このうち壺には、口縁部内面に波状文を施したもの（図版第90~14）もみられる。S字壺は口縁部に刺突文を施したもので、本県における最古の例である。さらにS字壺の中には、口縁部に刺突文をもつもので、胴部径が55cmにもなる大型の例（図版第92-8）もみられる。また台付壺の脚部には三角形の切り込みのみられるもの（図版第91-16）もある。高杯は、脚部据でラッパ状に開き、かつ脚部に横走する搔目痕をもつ例（図版第94-2~3）がある。古墳時代前期初頭ころの時期を考えることができる。

9号住居跡（図版第8・94）

B II-V17・V19・Y17・Y19グリッドで、単独で確認された。南側から東側にかけて3・7・8号住居跡が近接する。長軸をほぼ南北にもつもので、隅丸長方形を呈する。なお西側において同様な形態の住居跡と考えられる残存部が存在しており、位置関係などから拡幅されたものではなく、この住居跡を本住居跡が切っているものと考えられる。本住居跡は、東西3.9m、南北5.7mほどの規模である。なお西側に残存する住居跡は、東西1.15m（残存部）、南北5.85mほどである。壁は東側の残りが悪く10cm前後、北~西側が良好で最も残りの良いところで70cmほどであった。床は、堅くたたき締められ、ほぼ平らに造られている。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは確認できなかった。北東隅に直径1.4m、深さ50cmほどの穴がみられるが、貯蔵穴なのか土壙なのか明確にならない。しかし位置からは貯蔵穴でも支障はないものと考えられる。柱穴は4本主柱穴で、直径20~55cm、深さ20~55cmほどである。北東と北西の柱穴の間ぐらいで炉が造られている。床を掘った地焼炉で、厚さ10cmほどに焼土が確認できる。また枕石の設置もみられる。南壁の中央壁際あたりに直径50cm、深さ30cmほどの穴がみられるが、これは入口設備の梯子受けの穴と考えられるものである。

遺物は、細片の土器のため図化できた遺物（図版第94）は壺（同5）、口縁部に刻目をもつ壺（同6~10）。単純口縁壺（同11）、高杯（同18）などがある。弥生時代末ころの時期を考えることができる。

10号住居跡（図版第9・10・94）

B II-U13・U15・W13・W15グリッドで、12号住居跡、1・3・6・10号土壙と重複して確認された。新旧関係は12号住居跡に南西部を大きく切られ、また、1・3・10号土壙などに掘り込まれている。北西隅の壁で重複する6号土壙との新旧関係は、明確にならない。長軸をほぼ南北にもつもので、東西4.3m（残存部）、南北5.5mほどの隅丸長方形を呈する。壁は東壁を除き確認できた。壁の最も残っている北壁で50cmほどであった。床は、堅くたたき締められている。床は、西から東に向かって徐々に下がっており、その差は最大で10cmほどである。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは、確認されなかった。柱穴は4本主柱穴である。南東隅の柱穴については、12号住居跡内にみられる土壙が該当するものであろう。柱穴は、いずれも直径60cm前後、深さ50cm前後である。炉は、住居跡の中央から少し北に寄った北西の柱穴近くにみられるが、12号住居跡にその大半を切られている。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ10cmほどに焼土が確認できる。なお、枕石はみられない。

遺物は、土師器が確認された。しかし細片であり、図化できた遺物（図版第94）は少ない。壺（同19・20）、S字壺（同21）、台付壺（同22・23）、瓶（同24）などがみられる。S字壺については、口縁部に刺突文がみられるものである。また台付壺ないし鉢の台部（同25）と考えられる破片がある。古墳時代前期初頭ころの時期を考えることができる。

12号住居跡（図版第9・10・95）

B II-U12・U14・W12・W14グリッドで、10号住居跡、1・3・10号土壤と重複して確認された。新旧関係は10号住居跡を切り、1・3・10号土壤に切られあるいは掘り込まれてている。長軸をほぼ南北にもつもので、規模は東西4.65m、南北5.65mほどの隅丸長方形を呈する。壁はほぼ全周で確認でき、確認できた壁は20~50cmほどであった。床は、堅くたたき締められており、相対的に平らに造られている。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは確認されなかった。柱穴は4本主柱穴である。なお、南西側の柱穴には、土壤が接して掘り込まれている。柱穴は直径45~80cm、深さ30~50cmである。炉は中央やや北寄りで、北東と北西の柱穴の中間に造られているが、3号土壤によってその大半を切られている。厚さ10cmほどに焼土が確認できた。また、南西の柱穴に接した土壤に切られた部分にも若干の焼土が確認された。

遺物はほとんど細片での土器であり、図化できた遺物（図版第95）は、折り返し口縁の壺（同1）、単純口縁の壺（同2）である。なお、壺の口縁内面にはボタン状の張り付け文がみられる。弥生時代末から古墳時代初ころの時期を考えることができる。

11号住居跡（図版第11・94・160）

B II-Y9・Y12、C II-B9・B12グリッドで、単独で確認された。南側に1号住居跡が近接する。長軸を北東-南西にもつもので、規模は東西3.1m、南北3.8mの隅丸長方形を呈する。壁は、北東部分を大きく欠くが、そのほかの所では5~50cmほどで確認された。床は、堅くたたき締められている。東西方向では多少の凸凹はあるものの概して平らであるが、南北方向では南から北に向かって徐々に下がっており、その差は最高で20cmほどになる。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは確認できなかった。柱穴は4本主柱穴で、直径20~40cm、深さ30~40cmほどである。南西の柱穴は2本みられるが、片方が支柱穴であろう。南壁の中央壁際に深さ20cm前後の穴が2個みられるが、位置からすると小さいものが入口施設の梯子受けの穴で、大きいものが貯蔵穴の可能性がある。炉は、地焼炉と思われるが、位置を確認することはできなかった。

遺物は、土師器が確認された。図化できた遺物（図版第94）は、口縁部に刻目をもつ台付壺（同26・27）、S字壺（同28）、壺（同29）などがある。S字壺の口縁部外面には、細片のため刺突文の有無は確認できない。古墳時代前期初頭ころの時期が考えられる。

13号住居跡（図版第12・95）

B II-X8・X9、C II-A8・A9グリッドで、単独で確認された。周囲に6・14・1・11号住居跡、2号方形周溝墓などがみられる。長軸をほぼ南北にもつもので、規模は東西3.25m、南北4.65mほどの隅丸長方形ないし梢円形を呈する。壁は、ほぼ全周で確認され、その確認された部分でおおよそ20~75cmほどである。床は、堅くたたき締められ、南北、東西ともにほぼ平らに造られている。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは確認できなかった。柱穴は、4本主柱穴で、直径20~45cm、深さ25~35cmほどである。北東の柱穴の西側にも直径20cm、深さ20cmほどの穴がみられるが、これは壁から遠く離れていること、また炉の位置などとの関係から入口施設に伴うものでなく、支柱穴と考えられるものであろう。炉は、北東と北西との柱穴の間に造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ5cmほどに焼土が確認できる。枕石は設備されていない。

遺物は、比較的良好な形で確認された。図化できた遺物（図版第95）は、折り返し口縁壺（同3）、単純口縁壺（同5）、口縁部に刻目をもつ台付壺（同6・7・9）、単純口縁壺（同10）、瓶（同12~14）、鉢（同15・16）

などがある。弥生時代末ころの時期が考えられる。

14号住居跡（図版第13・96）

C II-A 6・A 8・C 6・C 8グリッドで2、号竪穴と東壁で接して確認された。新旧関係は明確にならなかった。また周辺には1・2号方形周溝墓、1・11・13号住居跡などがみられる。長軸を東西にもつもので、規模は東西3.85m、南北3.35mほどの椭円形を呈する。壁は北東側が大きく削られているが、その他の所では15~45cmほどで確認された。床は、堅くたたき締められている。南北方向はほぼ平らであるが、東西方向では西から東に向かって徐々に低くなり、その差は最高で10cmほどである。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは確認されなかった。柱穴は4本主柱穴で、直径25~30cm、深さ20~50cmほどである。東壁の中央壁際よりやや内側に直径30cm、深さ50cmほどの小穴がみられる。位置からして入口施設の梯子受けの穴と考えられるものである。炉は、中央や東寄りに造られていたようである。

遺物は、比較的良好な形で確認された。図化できた遺物（図版第96）は、折り返し口縁では、その内面と肩部外面に繩文をもつ壺（同1・2）、折り返し口縁壺（同3）、単純口縁の小形壺（同4）、単純口縁の台付壺（同9）、半球形の杯身の小型の高杯（同10・11）と大型の高杯（同12）などがある。高杯の脚部（13・14）は4~5個の孔が穿たれている。弥生時代末ころの時期を考えることができる。

15号住居跡（図版第14・96・160）

C II-D 16・D 18・F 16・F 18グリッドで、18号土壙と重複して確認された。新旧関係は、本住居跡が北壁の中央あたりを18号土壙によって切られている。長軸を南北にもつもので、規模は東西4.5m、南北5.3mほどの椭円形を呈する。壁は、西壁を除き18号土壙などに切られたりあるいは削平などされており、残存部が少ない。西壁部分で、20cmほど確認できた。床は、堅くたたき締められている。相対的に多少の凸凹はあるものの、平らに造られている。南壁際に部分的であるが幅10cm、深さ5cmほどの周溝がみられる。しかし、他の壁周りに確認することはできなかった。柱穴は4本主柱穴で、直径20~55cm、深さ35~55cmほどである。北東と南東の柱穴は、近接して複数確認された。おそらく立て直し、ないし支柱の柱穴と考えられるものである。南壁の中央壁近くに直径75cmほどの穴が確認できたが、位置から入口施設に伴うものと考えられる。炉は、中央や北西寄りに造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ5cmほどに焼土が確認できる。組み合わせの枕石が炉の北端に設置されている。炉と西壁の中間当たりには、偏平な礫がみられるが、据えられているかのようである。

遺物は、細片の土器などが僅かに確認された。図化できた遺物（図版第98）には、壺（同15）、台付壺（同17）、台付鉢（同18）などがある。弥生時代末ころの時期を考えることができる。

16号住居跡（図版第15・97）

C II-J 4・J 6・L 4・L 6グリッドで、単独で確認された。東から北にかけて17・18号住居跡、1号方形周溝墓が近接して存在する。本住居跡は、確実に床の確認できたのは北側の半分ほどで、南側については掘り方などが確認できたにすぎない。これからすれば南北に長軸をもつ椭円形の住居跡と考えられる。規模は東西3.95m、南北4.6mほどである。このうち南北で床の確認できたのは2.2mほどである。壁は、北側から西側にかけて確認できた。最も残存のよいところで15cmほどである。床は、堅くたたき締められている。南北方向ではほぼ平らに造られているが、東西方向では西から東に向かって僅かであるが徐々に低くなっている。柱穴は北東と北西との柱穴が確認されたにとどまり、主柱穴の数は4本なのか6本なのか分からず。確認された柱穴は、直径20cm、深さ30~40cmほどである。炉は、柱穴の中間や東寄りに造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ10cmほどに焼土が確認できた。

遺物は、細片の土器などが僅かに確認されたにすぎない。図化できたのは高杯（図版第97-1）の脚部である。住居跡形態からすれば、弥生時代末ころの時期が考えられる。

17号住居跡（図版第15・97）

C II - I 2・I 4・K 2・K 4グリッドで、単独で確認された。西側から北側にかけて16・18号住居跡それに1号方形周溝墓が近接して存在する。本住居跡も床の確認できたのは西半分で、東側は柱穴や掘り方から想定した。長軸をほぼ東西にもつもので、規模は推定で東西3.7m、南北3.55mほどの隅丸長方形を呈する。壁は西側半分で、高さ10~35cmほどである。床は、堅くたたき締められている。南北方向ではほぼ平らに造られているが、東西方向では僅かであるが西から東に向かって徐々に下がっているようにみられる。貯蔵穴、ベッド状遺構などは確認できなかった。周溝は住居跡の平面形態に沿って壁際に幅20cm、深さ5~20cmほどのものが確認された。柱穴は4本主柱穴で、直径25~40cm、深さ40~50cmほどである。炉は、中央やや西寄りに造られている。床を掘り廻めた地焼炉で、厚さ3cmほどの焼土が確認できた。また炉より北側50cmほど東西の柱穴間に、直径35cmほどで厚さ5cm程の焼土が確認できた。またこの焼土の上で礫が2個確認された。南壁の中央あたりの壁際に直径30cm、深さcmほどの小穴が確認されたが、位置からすると入口施設に伴うものと考えられる。

遺物は、細片の土器などが僅かに確認された。図化できた遺物（図版第97）には、口縁部に刻目をもつ台付壺（同2・3）がある。弥生時代末ころの時期を考えることができる。

18号住居跡（図版第16・97）

C II - H 2・H 4・J 2・J 4グリッドで、単独で確認された。南と北側に17号住居跡、1号方形周溝墓が近接して存在する。住居跡の東側が削平されている。長軸を南北にもつもので、規模は東西3.25m、南北4mほどの楕円形を呈する。壁は住居跡の北側から西そして南側にかけて確認できた。確認できたところで5~30cmほどであった。床は、堅くたたき締められ造られていた。南北方向では平らに造られているが、東西方向では西から東に向かって徐々に下がって造られており、最大で15cmほどである。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは確認されなかった。柱穴は4本柱穴で、直径30~40cm、深さ45~65cmほどである。なお、南西隅の柱穴は2本認められるが、内側のものが恐らく支柱穴と考えられる。炉は確認されなかったが、中央やや西寄りに礫がみられ、このあたりが炉の位置と考えることもできる。

遺物は、細片の土器などが僅かに確認できたにすぎない。図化できた遺物（図版第97）は、単純口縁の台付壺（同4）、口縁部に刻目をもつ台付壺（同5・6）などである。弥生時代末ころの時期が考えられる。

19号住居跡（図版第17・97）

C II - F 13・F 16・H 13・H 16グリッドで、20号土壤と重複して確認された。新旧関係は本住居跡が20号土壤に切られている。南東側を大きく削平されているが、長軸を北東-南西にもつ不整形の楕円形の形態をとる住居跡と考えられる。規模は東西5.2m。南北6mほどが推定できる。壁は北西側に確認されたにすぎないが、確認できた部分で15~20cmほどである。床は、堅くたたき締められて造られていた。北西から南東に向かって徐々に下がっており、その差は15cmほどである。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは確認されなかった。柱穴は3本ほど確認されたが、主柱穴が何本なのかはわからない。柱穴は、直径25~50cm、深さ25cmほどである。炉は、住居跡の中央やや北東寄り造られている。床を掘った地焼炉で、厚さ10cmに焼土が確認できた。北壁際に直径45cm、深さ20cm程の小穴がみられるが、入口施設に伴うものなのであろうか。

遺物は、細片の土器などが確認された。図化できた遺物（図版第97）は、肩部に縫り糸文それにボタン状張り付け文のみられる壺（同7・8）、口縁部に刻目をもつ壺（同9・10）、単純口縁壺（同11）、高杯（同13）などである。なお壺はいずれも台付壺（同12）であろう。弥生時代末ころの時期が考えられる。

20号住居跡（図版第18・98・161）

C II - D 11・D 14・F 11・F 14グリッドで、21号土壤と重複して確認された。新旧関係は不明である。長軸をほぼ南北にもつもので、規模は東西3.95m、南北4.65mほどの長方形ないし隅丸長方形を呈する。壁は、東側を

除きほぼ20~25cmほどで確認できた。床は、堅くたたき締められて、相対的に平らに造られている。周溝が、北壁中央から西壁、そして南壁の中央当たりまで確認できた。周溝は最も広いところで20cm、最も深いところで20cmほどである。凸堤ないしベッド状遺構などは、確認できなかった。柱穴は4本主柱穴であるが、南東隅のものが確認できなかった。また、北東隅の柱穴は、周りに大きな穴が掘られ搅乱を受けていたが、底近くが確認されたものである。柱穴はいずれも直径30cm、深さ35cmほどである。南壁の中央やや内側にみられる小穴は、入口施設に伴うものであろうか。また、南東隅と南西隅近くにみられる穴は貯蔵穴などであろうか。しかし、南東隅のものは大きすぎるようであり、土壌と考えることもできる。炉は、北西隅の柱穴近くに造られている。床を掘った地焼炉で、厚さ10cmほどで土壌が確認できる。また、炉の東側50cmほどのところに焼土が2箇所確認できた。

遺物は、土器片が確認された。図化できた遺物（図版第98）は、折り返し口縁で口縁部に刻目、内面に継り糸文を施す壺（同1）、これと組み合うものと考えられる胸部は、肩部に継り糸文それにボタン張り付け文（同2）をもつものであろう。口縁部に刻目をもつ壺（同3）、単純口縁壺（同4）、半球形の杯身で小型の高杯（同5）と大型の高杯（同6）などがある。弥生時代末ころの時期が考えられる。

第4節 竪穴遺構と遺物

1号竪穴（図版第19）

B II-X13・X14、C II-A13・A14グリッドで、単独で確認された。周囲に1・11号土壌、2・5・8号住居跡などが近接して存在する。円形の一か所に突出部のみられる形態である。直径2.8m深さ40cmほどの規模である。底はやや凸凹が見られる。

遺物は、土器片がわずかに出土しているが、本遺構に伴うのか否か明確でない。時期は不明である。

2号竪穴（図版第13）

C II-A5・A7・C5・C7グリッドで、14号住居跡と西壁で接して確認された。新旧関係は明確にならなかった。長軸をほぼ南北にもつもので、規模は東西2.55m、南北3mほどの隅丸長方形を呈する。底は、西から東、南から北に向かって低くなっている。また、中央付近に西壁から中央に向かって弧状に高さ10cmほどのベッド状遺構に似た高まりがみられる。さらに北壁に接して直径60cm、深さ40cmほどの貯蔵穴様の小坑が掘られている。なお、柱穴のような小穴は、全く確認されていない。

遺物は、土器片が僅かに出土しているが、本遺構に伴うものか否か不明である。時期についても不明である。

第5節 土壌と遺物

1号土壌（図版第9）

B II-U13・U14・V13・V14グリッドで、12号住居跡と重複して確認された。新旧関係は本土壌が12号住居跡を切っている。東西1.5m、南北90cm、深さ cm程の不定形を呈する。

遺物などは確認されていない。時期は、12号住居跡以降である。

3号土壌（図版第9・109）

B II-V12・V14・W12・W14グリッドで12号住居跡、10号土壌と重複して確認された。新旧関係は本土壌が12号住居跡を切っている。10号土壌との関係は、溝を介して一連の土壌のようにつながっており、明確にならない。直径1.15m、深さ30cmほどの円形を呈する。

遺物は、土器片が僅かに出土しており、図化できたのは高杯（図版第109-1）である。しかし本遺構に伴うのか否か不明である。時期は12号住居跡以降である。

4号土壙（図版第19・109）

B II - T12・T13・V12・V13グリッドで、単独で確認された。南側に10号土壙、10・12号住居跡などが近接して存在する。直径1.5m、深さ1.15mほどの円形である。

遺物は、底より80cmほど上から土器片が確認された。固化できた遺物（図版第109）には、杯身に三角形の窓を穿った高杯（同3）、壺の肩部（同2）であった。遺物からすると。弥生時代末ころの時期が考えられる。

5号土壙（図版第5）

B II - W8・W9・X8・X9グリッドで、6号住居跡と重複して確認された。新旧関係は本土壙が6号住居跡に切られている。楕円形を呈するものと考えられるが、現状で長軸1.1m、短軸90cm、深さ40cmほどである。

遺物などは確認されていない。時期は6号住居跡以前が考えられる。

6号土壙（図版第9）

B II - U13・U14・V13。V14グリッドで、10号住居跡と重複して確認された。新旧関係は本土壙が10号住居跡に切られている。東西1m、南北1.2m、深さ cm程の楕円形を呈する。

遺物などは確認されていない。時期は10号住居跡以前が考えられる。

7号土壙（図版第19）

C II - B7・B8・C7・C8グリッドで、単独で確認された。東側に14号住居跡、西側に1号住居跡が近接して存在する。長さ1.85m、幅1.15m、深さ40cmほどの長方形を呈する。

遺物などは確認されていない。時期は不明。

8号土壙（図版第3・109）

B II - Y18・Y19・A18・A19グリッドで、3号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、本土壙が3号住居跡を切っている。直径1.05m、深さ60cmほどの円形を呈する。

遺物は、細片が僅かに確認された。台付壺（図版第109-4）の脚部の破片であるが、本土壙に伴うのか否か不明。時期は3号住居跡以降と考えられる。

10号土壙（図版第9・10・110・163）

B II - V12・V13・W12・W13グリッドで、12号住居跡と3号土壙と重複して確認された。新旧関係は12号住居跡の東壁を本土壙が切っている。3号土壙との関係は、溝を介して一連の土壙のようにつながっており、明確にならない。直径70cm、深さ30cmほどの円形の小規模の土壙である。土壙の上部より須恵器片がまとまって確認された。やや浮いているような状況ではあるが、本土壙に伴うものと考えられる。

遺物は、須恵器片のみであるが、同一個体のものであり、ある程度器形を復元できるものであった（図版第110）。器形は口径57cm、胴部径80cmほどの大甕である。口縁部は、長い頸部をもつもので、肩部からやや垂直に近い状況で立ち上がり、口縁部端近くで急激に外側に反る形態である。この口縁部外面の端近くには、一条の凸帯が巡ぐっている。頸部には一切文様等をもたないものである。また、肩部と首部との接続部は、分厚く膨れ上がる形態である。外面調整は、叩きの後をすり消した滑らかな仕上げである。内面では、頸部と肩部との接続部に窓削りがみられるが、その前後では整形痕を消している。胎土は精製土で、色調は薄い紫色を呈する。なお外面は深緑色の自然釉が光沢をもつ状況を呈する。形態、整形、色調などから、大きさは大阪府陶邑窯跡製品のTK73窯跡ないしそれ以前の形式と考えられるものである。特に口縁部端と凸帯との相互に関わる形状や、口縁部と頸部との接合部の形状などからは、TK73窯跡と言うよりはむしろ一段階古い段階の形態とみて取れるようである。しかし、いずれにしても本県最古の須恵器であることに変わりない。時期的には、5世紀第2四半世

紀は下らないものであり、先程の観点からはさらに古い時期の5世紀第1四半世紀をも念頭に入れて考えなくてはならないものといえよう。

11号土壙（図版第19）

B II-Y13・Y14、C II-B13・B14グリッドで、単独で確認された。北側に1号竪穴、西側に5号住居跡が近接して存在する。長軸1.48m、短軸95cm、深さ cm程のほどの梢円形を呈する。

遺物などは確認されていない。時期は不明。

12号土壙（図版第20）

B II-U12・U13・W12・W13グリッドで、13・17号土壙と密集して確認された。東西2.2m、南北2.35mの矩形で、深さは35cmほどである。

遺物などは確認されていない。時期は不明。

13号土壙（図版第20・109）

B II-U11・U13・W11・W13グリッドで、12・17号土壙と密集して確認された。直径1.4m、深さ40cmほどの円形を呈する。

遺物などは確認されていない。時期は不明。

17号土壙（図版第20）

B II-U11・U13・W11・W13グリッドで、12・13号土壙と密集して確認された。直径1m、深さ20cmほどの円形を呈する。

遺物などは確認されていない。時期は不明。

14号土壙（図版第20）

B II-V8・V9・X8・X9グリッドで、15・16号土壙と密集して確認された。直径1.35m、深さ25cmほどの円形を呈する。

遺物などはなんら確認されていない。時期は不明。

15号土壙（図版第20）

B II-V8・V10・W8・W10グリッドで、14・16号土壙と密集して確認された。直径1m、深さ15cmほどの円形を呈する。

遺物などはなんら確認されていない。時期は不明。

16号土壙（図版第20）

B II-U8・U10・V8・V10グリッドで、14・15号土壙と密集して確認された。直径1.15m、深さ35cmほどの円形を呈する。

遺物などはなんら確認されていない。時期は不明。

18号土壙（図版第14）

C II-D16・D18・E16・E18グリッドで、15号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、本土壙が18号住居跡を切っている。基本的には東西2.9m、南北2.95m深さ30cmほどのほぼ正方形で、南西隅に小さな突出部がみられる。底は、ほぼ平らである。

遺物はなんら確認されなかった。時期は不明。

19号土壙（図版第20・109）

C II-B 18・B 19・C 18・C 19グリッドで、単独で確認された。北側に3号住居跡が近接して存在する。長軸1.65m、短軸1m、深さ60cmほどの楕円形を呈する。

遺物は土器片が僅かに確認された。口縁部に刻目をもつ台付壺（図版第110-9）である。細片のため本土壙に伴うものか否か不明。時期は不明。

20号土壙（図版第17・109）

C II-E 13・E 15・G 13・G 15グリッドで、19号住居跡と重複して確認された。新旧関係は本土壙が19号住居跡を切っている。平面形態は長軸2.1m、短軸1.75m、深さ1.9mほどの楕円形ないし長方形である。漏斗状に掘り込み、底では長方形を呈する。

遺物は、土器片が覆土中より僅かに確認された。図化できた遺物（図版第109）は、台付壺（同10・11）である。しかし、本遺構に伴うものではないであろう。時期も不明。

21号土壙（図版第18）

C II-D 13・D 15・F 13・F 15グリッドで、20号住居跡と重複して確認された。新旧関係は不明。長軸95cm、短軸25cmほどの土壙である。遺物は不明である。

第6節 溝・方形周溝墓と遺物

1号方形溝（図版第21・109）

B II-W 5・W 8、C II-B 5・B 8グリッドで、55号住居跡と重複して確認された。本溝が55号住居跡を切っている。北東から南西の一辺が8m、北西から南東の一辺が10mほどの「コ」の字型に溝が巡る。なお、溝の北東部の先端は、地形に沿って自然に消滅する。この溝は、狭いところで幅70cm、広いところで2.95m、深さ40~60cmほどである。周溝の形態からすれば、多少の凸凹はみられるものの南側に隣接する1号方形周溝墓同様に、周溝墓と考えてもよいものであろう。

遺物は土師器片などが僅かに確認された。図化できた遺物（図版第109）は土師器のみで、溝の中より確認された単純口縁壺（同12・13）、単純口縁壺（同14）などがある。なお、単純口縁壺については、同一個体と考えられる破片から形状を推定復元したものであり、胴部を大きく欠損している。時期は古墳時代前期の時期が考えられる。

1号方形周溝墓（図版第22・111~112・163・164）

C II-C 3・C 8・L 3・L 8グリッドで、単独で確認された。北側には、方形周溝墓と考えられる1号溝が近接して存在する。北東斜面と南東斜面とが接する辺りの、丁度突き出たような場所に造られている。北東隅と北西隅に陸橋をもつ形態である。長軸を南北にとる方形周溝墓で、規模は長辺19m、短辺17.8mと、僅かであるが長方形を呈する。周溝は、北側の周溝が幅2m、深さ60cmほどである。東側では1~2.8m、深さ20cm、南側では1.8~2.8m、西側では1.5~3.1m、深さ1.05mほどである。斜面に造られており、周溝は北と西それに南側が深く掘られている。周溝の底には大小幾つかの土坑が掘られているが、これらが埋葬にかかわるものか否か不明である。墳丘は、耕作などによってほとんど削平されており、盛り上げた土などは確認されなかった。このため埋葬主体部も、確認することができなかった。

遺物は、土師器片が周溝内から多数確認された。特に北側の周溝の西端近くと、西側の周溝の北端近くに集中

している状況がみられる。また西側の周溝の中央やや北寄りでほぼ完形品に近い壺が底面近くから確認された。さらに南側の周溝の中央やや東寄りでも、壺の胴部以下の一括の破片が確認された。図化できた遺物には、壺（図版第111-1～11）としては有段口縁壺（同1）、折り返し口縁壺（同3）、口縁の内側に繩文を施す単純口縁壺（同4）、小型壺（同5）などがある。このうち有段口縁壺は、西側の周溝の中央北寄りから、胴部11は南側の周溝から出土したものである。壺としては単純口縁台付壺で口縁部に刻目をもつ壺（同12～15）、単純口縁台付壺（図版第112-1～2）それに口縁部外面に刺突文のあるS字口縁台付壺（同4）などがある。このほか碗（同5～6）、小型の高杯（同8～9）、大型の高杯（10～12）、蓋（同7）などもみられる。時期は、古墳時代前期ころが考えられる。

第4章 第2～5次調査の概要

第1節 旧石器時代の遺物（図版第86）

從来より旧石器時代の遺跡として知られており、さらに第1次調査において表面採集品であるがナイフ型石器が確認され、また2号墳の周溝の覆土より槍先形尖頭器が確認された。このためグリッドごとに1m×1mの試掘坑120箇所余りを設けて、ハードロームまで掘り下げを試みた。地形的に起伏に富んでおり、また開墾などにより、ハードロームまでの深さはまちまちであったが、ローム層のブラックバンドの下おおよそ30cm～1.2mほどまで掘り下げた。

試掘坑の上部からは黒曜石片などが多少出土したが、耕作などの及んでいる範囲内と考えられる位置からであり、確実にソフトローム層からの確認ではない。また、出土した黒曜石片も細片のものが多く、旧石器時代の石器としてはP 4-b 5-b 6-c 5-c 6グリッドで確認された石刃1点、2号古墳の周溝の覆土中から確認された1点、表面採集品の1点、都合3点が確認された。以後、これらについて若干触れてみたい。

4(同4)は、端部破片である。折れによって打面側を欠損する。背面は打面側からの剥離のみがみられ、端部に自然面が残存する。若干の白濁が見られるが、透明感の強い良質な黒曜石である。

5(同5)は、2号墳の周溝の覆土から出土したもので、石刃の打面側破片である。腹面側からの力により折られている。折り面の打点は全く不明瞭である。打面は点状で狭いが剥離面である。頭部調整が著しい。背面の剥離は打面側からのみであり、自然面もみられない。左側縁に微細剥離がみられ、使用痕ある剥片である。白い雲状の白濁が見られるが、比較的透明で良質な黒曜石である。

6(同6)は、P 4-b 5-b 6-c 5-c 6グリッドで確認されたものである。打面が広く残存し、複剥離打面である。頭部調整が若干見られる。打面はやや不明瞭であり、またリップの発達も不明瞭である。背面は打面側からの加撃のみの剥離面で構成されている。端部を新しく欠損している。両縁部に微細剥離が見られ、使用痕ある剥片である。球状、粒状の夾雜物が多く入るが、透明感のある比較的良質な黒曜石である。(保坂康夫)

第2節 繩文時代の遺物（図版第86）

調査区のはば全域から、繩文時代の土器片、石器などが確認されているが、住居跡などの遺構を確認することはできなかった。このため遺物の中で特に注目されるものについて、触れてみることにする。

槍先形尖頭器(同3)は、2号墳の北西側の周溝覆土中より確認されたものである。加工は、両面加工のものである。扇端部側が折れによって欠損しており、その折りの剥離が正面にまで及んでいる。また、基部端部も欠損しているが、基部端からの剥離であり、あるいは衝撃剥離の可能性もある。調整は非常に平坦で、深くなされている。正面側では器体中央部付近まで剥離が及んでいるものが多いが、裏面側では左側縁側からの剥離が反対縁部まで及んでいる。この大規模な平坦剥離は両面とも、左縁部側からの剥離群が新しい。また、両面とも縁部に微細な細部調整がなされている。両面とも左側縁側では先端から基部まで連続して調整が施されているが、右縁部側は不連続である。また、両面とも左側縁の細部調整のほうが裏面のそれより新しい。器体中央が「く」の字状に屈曲するように見え、全体の形態を復元すると、基部側に最大幅がある御子柴尖頭器のような形態のように見える。非常に薄く仕上げられており、おそらく繩文時代草創期初頭の産物であろう。うっすらと白濁するものの、透明感の強い良質な黒曜石である。(保坂康夫)

異形局部磨製石器(第87図1)は、トロトロ石器と称される資料で、P 4-a 6グリッドから出土した。石材は、チャート製で、基部がやや灰黑色を呈するが、先端に近くなるにつれ白色となる。ほぼ完形品で先端部は丸みを帯び、両脚部は外へ張り出す。調整は念入りだが、先端から胴部中央にかけて、摩滅が著しい、全長6.4cm、基部幅3.4、中央で2.4cm、厚さ0.9cm、重さ18gを測る。本石器は繩文時代早期に比定され、鎌形を呈しているが、前述したように先端を丸く調整していることから刺突の機能を持たず非実用的とされる。岐阜県高山市前平山陵遺跡(高山市教育委員会 1993)では、大小4個のトロトロ石器が「井」の字に配されるように出土してい

ることから、祭祀的要素の強い石器と考えられている。本県での出土例は今回が初見と思われ、広範囲に分布する本石器の分布域に本県が加わったことを示す貴重な事例となろう。

トロトロ石器の出土した付近からの縄文土器には、次のようなものがある。やや厚めで、外面が無文、内外面に擦痕が認められ、かつ、胎土に纖維を含んだ縄文土器片（同4～7）と、先のものよりやや薄めで外面に縄文、竹管文、内面に削痕をもつ縄文土器（同8～13）などがみられる。このうち後者は、縄文時代前期諸磯土器aないし b式と考えられるものであり、前者はこれよりも一段古い縄文時代早期ころの土器と考えられるものである。トロトロ石器に組み合うものとすれば、前述したように縄文時代早期の時期が考えられており、前者の纖維を含む無文土器に組み合うものであろう。（三田村美彦）

垂飾（同3）が2号墳西側のP5-b3グリッド付近から出土している。石材は、グリンタフで、深緑色をしている。長さ4cm、幅2.5cmほどの細長い下膨れの形である。厚さ5mmほどで、全面が良く磨かれ滑らかに仕上げられている。幅の狭まる側に、直径1cmほどの三角形状の穴が穿たれている。また、この穴から横方向に幅4mm、ほどの浅い溝が掘られており、紐で結ぶためのものと考えられる。

抉状耳飾り（同2）が、弥生時代末から古墳時代初めの時期と考えられる36号住居跡から出土した。石材は、グリンタフで、深緑色である。台形状の形態と考えられるが、抉りのあるあたりで半分に折れている。抉りの先には、直径7mmほどの小穴が穿たれている。この脇にさらに小さな直径1.3mmほどの穴が、両面穿孔であけられている。おそらく補修穴と考えられる。現状で長さ2.5cm、高さ3.2cmほどの大きさで、厚さは研いで2mmほどの板状に薄く、滑らかに仕上げられている。また、形に沿って面取りがされている。

なお、縄文時代の石器としては、このほかに黒曜石・チャート製の石鎌、打製石斧、磨石などが確認されている。

第3節 弥生時代以降の住居跡と遺物

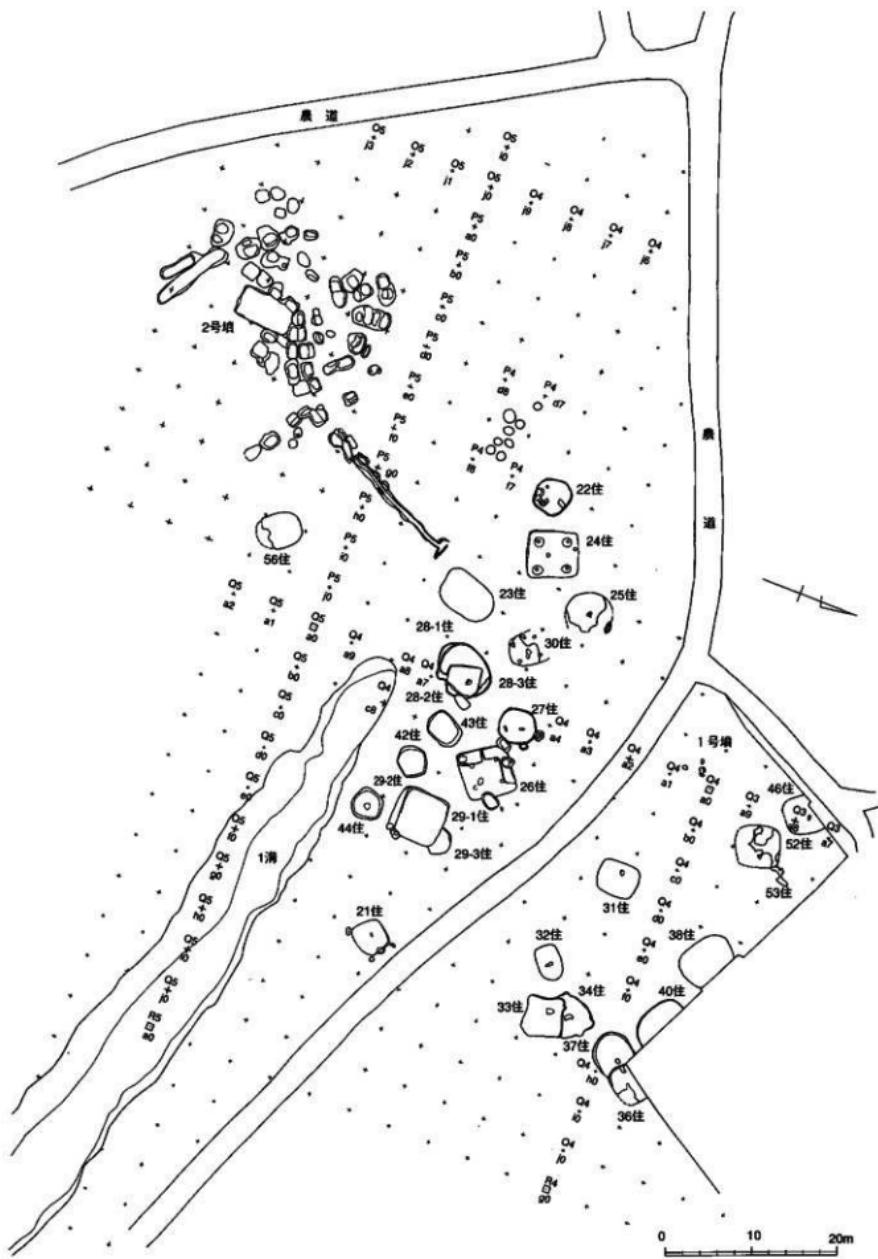
21号住居跡（図版第23・99・161）

Q4-f5・f7・h5・h7グリッドで、浅い土壌と重複して確認された。新旧関係は土壌が本住居跡を切っている。また、西側にはやや離れて29号住居跡が存在する。長軸を北東-南西にもつもので、規模は東西3.6m、南北3.7m程の矩形を呈する。壁の確認できたのは北・西・南壁の一部だけで、5cmほどであった。床は、堅くたたき締められ、ほぼ南北方向では平らに、東西方向では西から東に向かって徐々に下がって造られており、その差は15cmほどである。周溝、凸堤ないしベッド状造構などはみられない。柱穴は4本主柱穴である。しかし、この遺跡で確認された住居跡の柱穴はほとんどのものが住居内で確認されているのに対して、本住居跡例は住居跡外の4隅に造られている。直径30~80cm、深さ15cmほどである。炉は中央やや西寄りに造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ10cmほどに焼土が確認できる。また、枕石状に盛り上がった部分もみられる。

遺物は細片の土器片がほとんどである。図化できた遺物（図版第99）には、単純口縁壺（同1）、単純口縁で口縁部に刻目をもつ台付壺（同3）などがある。時期は古墳時代前半ころの時期を考えることができる。

22号住居跡（図版第23・99~100）

P4-e5・e7・g5・g7グリッドで、北側部分を後世の耕作などに伴う掘り込みで削られている。北東側に24号住居跡が近接して存在している。長軸は南北にあったものと考えられるが、先程述べた掘り込みで確認できない。現状の規模は東西4.2m、南北3.9mほどで、形態は南北に長い隅丸長方形と考えられる。壁は、東から南そして西側にかけて15cmほどが確認できた。床は堅くたたき締められ、全体的に平らに造られている。南壁の中央あたりに半月形の凸堤がみられ、壁際との間に方形の貯蔵穴とみられる掘り込みがある。また、貯蔵穴の東脇に小穴があり、入口施設に伴うものと考えられる。柱穴は南側で直径40~55cm、深さ25~40cmほどのものが2本確認できたのみである。炉は、確認されなかった。しかし、北壁の中央付近で床の赤褐色化した部分が確認できた。



第4図 造構配置図（住居跡ほか）(2)

遺物は、細片が多くかった。図化できた遺物（図版第99・100）には、棒状浮文をもつ有段口縁壺（同11）、口縁に張り付け文をもつ壺（同15）、折り返し口縁壺（同13）、小形壺（同22）、壺（同16）、口縁部に刻目をもつ台付壺（同17・18・24）、単純口縁壺（同20・21）、高杯（図版第100-2）などがある。時期は、弥生時代末から古墳時代前期初頭ころが考えられる。

23号住居跡（図版第24・100）

P 4-h 6・h 8・j 6・j 8グリッドで、単独で確認された。北側に24・30・28号住居跡が近接する。本住居跡は、床面の一部と平面形態が確認できたに過ぎない。長軸をほぼ南北にもつもので、規模は東西4.5m、南北6.6mほどの楕円形を呈する。柱穴、炉などは、確認できなかった。

遺物は、細片の土器が僅かに確認できたのみである。図化できたのは口縁内面に繩文のみられる折り返し口縁壺（図版第100-4）だけである。時期は、住居跡形態などから弥生時代末ころの時期が考えられる。

24号住居跡（図版第25・100・161）

P 4-f 4・f 7・h 4・h 7グリッドで、単独で確認された。西側に22号住居跡、東側に25号住居跡が近接する。長軸を南北にもつもので、規模は東西5.47m、南北5.9mほどの長方形を呈する。壁は、西壁の中央から南壁の中央に到間で、20cmほどの高さが確認できたにすぎない。床は、堅くたたき締められて造られている。南北ではほぼ平に作られているが、東西方向で西から東に向かって僅かであるが下がっている。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは確認されなかった。柱穴は4本主柱穴である。提示した図面は掘り方まで掘ったものであり、掘り方の大きさは直径1~1.1m、深さ80cmほどである。柱穴は実際にはいずれも直径20~30cmほどで確認されており、おおよその柱の大きさを知ることができる。炉は中心よりやや南寄りに造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ10cmほどに焼土が確認できる。枕石はみられない。遺物が、特に南西隅を中心にして確認された。

遺物は、土師器である。図化できた遺物（図版第100）は、肩部に繩文を施す壺（同5）、有段口縁壺（同6）、折り返し口縁壺（同7・9）、直口壺（同10・11）、単純口縁台付壺（同13~19）、半球形の杯身で小型の高杯（同20・21）、同大型の高杯（同22）、椀（同23）、器台（同24）などがある。古墳時代前半代を考えることができる。

25号住居跡（図版第26・101）

P 4-g 3・g 5・i 3・i 5グリッドで、単独で確認された。南西に24号住居跡、南東に30号住居跡が近接する。床と平面形態が確認できたのみである。また北壁の一部が不整形の土坑によって切られている。さらに北側から東、さらに南側の一部にかけては床が削平されている。平面形態は、円形を呈するもので、規模は直径5.35mほどである。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは確認できなかった。床は堅くたたき締められ、残存部では平らに造られている。柱穴は確認できなかった。炉が、住居跡のほぼ中心に造られている。床を掘った地焼炉で、厚さ10cmほどに焼土が確認できる。また焼土の北側に、炭化物が薄くみられた。

遺物は、土師器などが確認された。図化できた遺物（図版第 ）には、弥生土器として口縁部に刻目をもち口縁部以下に条痕文をもつ深鉢（同1・2）、同様の壺（同3）などがある。混入品と考えられる土師器には口縁部に棒状沈線をもつ有段口縁壺（同11）、折り返し口縁壺（同12・13）、単純口縁で口縁部に刻目をもつ台付壺（同14）、S字壺（同16~18）、高杯（同19）などがある。いずれも細片であるが、住居跡形態などから本住居跡は弥生時代前期の時期を考えている。

26号住居跡（図版第27・102・161）

Q 4-a 4・a 6・d 4・d 6グリッドで、3基の土壙と重複して確認された。新旧関係は、いずれもの土壙が本住居跡を切っている。また、西から東にかけて27・43・42・28号住居跡が近接している。長軸を北西-南東

にもつもので規模は東西5.55m、南北6.02mほどの長方形を呈する。壁は、北から西、それに南の一部にかけて10~20cmほどの高さが確認されている。床は、堅くたたき締められ造られている。東西はほぼ平らであるが、南北方向では北から南に向かって徐々に下がって造られており、その差は最大で30cmほどである。北壁から西壁にかけて途中で一旦切れるが、「L」字状の高さ5cmほどのベッド状遺構が確認できる。また、このベッド状遺構の西壁沿いの柱穴から南壁の間に、高さ4cm、幅30cmほどの凸堤がみられ、その内側の西壁との間に直径85cm、深さ60cmほどの不整円形の貯蔵穴が確認できる。柱穴は、4本主柱穴で、直径30~40cm、深さ60~70cmほどである。炉は、東隅の柱穴近くにみられる。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ10cmほどに焼土が確認できる。また炉の一端には、枕石がみられる。

遺物は、土師器片などである。図化できた遺物（図版第102）には、折り返し口縁壺（同1）、口縁部内面に条線文をもつ壺（同5）、單純口縁壺（同6~7）、口縁部に刻目をもつ單純口縁台付壺（同2・3）、S字壺（同11~31）、鉢（同32・33）、高杯（同34~36）、器台（同37~38）などがある。なおS字状壺は、口縁部に刺突穴のない、また肩部に横走るハケメのみられないものである。古墳時代前期ころの時期が考えられる。

27号住居跡（図版第28・103・161）

P4-j 4・j 6、Q4-b 4・b 6グリッドで、3基の土壙と重複して確認された。東側には26号住居跡が近接する。新旧関係は、北東隅の小規模の土壙を本住居跡が切り、大きい2基の土壙に本住居跡が切られている。長軸を南北にもつもので、規模は東西3.8m、南北4.33mほどの梢円形を呈する。壁はほぼ全周で確認でき、5~20cmほどである。床は、堅くたたき締められている。北東から南西方向に向かって、僅かであるが徐々に下がっている。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは、確認できなかった。柱穴は、4本主柱穴で、直径8~15cm、深さ30~50cmほどである。南東の柱穴の脇から、南壁に沿うように幅30cm、長さ85cm、高さ5cmほどの凸堤が造られており、この凸堤と南壁との壁際に直径30cm、深さ40cmほどの小穴が掘られている。小穴は、入口施設に伴うものであろう。炉は、中央やや北寄りに造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ12cmほどに焼土が確認できる。また土器片が石枕の代用品として使われている。

遺物は、細片の土器がほとんどである。図化できた遺物（図版第103）には、壺（同8）、口縁部に刻目をもつ單純口縁台付壺（1~5）などがある。弥生時代末から古墳時代初めころの時期が考えられる。

28-1号住居跡（図版第29・104）

P4-i 5・i 7、Q4-b 5・b 7グリッドで、28-2号住居跡、28-3号住居跡と重複して確認された。新旧関係はやや壁の立ち上がりなどが不明確であるが、28-2号住居跡の上部に見られる床を28-3号住居跡の貼床と考え、本住居跡を28-3号住居跡が切っていると考えておきたい。また、28-2号住居跡の上部において28-3号住居跡の貼床が見られることは、28-2号住居跡が28-3号住居跡より古いことを示している。だが28-1号住居跡と28-2号住居跡との直接的な新旧関係を示すものはない。しかしいずれにしても、住居跡形態や遺物からすれば、時間的には接着しているものと考えられる。

28-1号住居跡は、ほんの僅かに壁と床と考えられる部分が確認されたに過ぎない。

遺物も図化できたのはS字壺（図版第104-6）のみで、また本住居跡に伴う証拠はない。

28-2号住居跡（図版第29・103・104・162）

28-1号住居及び28-3号住居跡と重複して確認されたもので、新旧関係は28-1号住居跡で述べたとおりである。本住居跡は北西側と南西側とが掘り過ぎとなってしまい、本来的な形は点線のように梢円形を呈するものである。長軸を南北にもつもので、東西3.75m、南北3.92mほどの規模である。壁はほぼ全周で確認され、5~15cmほどである。床は、堅くたたき締められている。そして北から南に向かって僅かであるが徐々に下がっている。柱穴は確認できなかった。炉は、中央やや北寄りに造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ20cmほど

に焼土が確認できた。また、枕石も設置されていた。

遺物は、土器片である。図化できた遺物には、口縁部下に刻目をもつ凸帯を巡らした壺（図版第103-9）、棒状沈線をもつ有段口縁壺（同10）、折り返し口縁壺（同11-12、14）、単純口縁で縁に刻目をもつ台付壺（同25）、単純口縁壺（同15-30）、S字壺（図版第104-1・4・5）、椀（同2-3）、高杯などがある。住居跡形態からS字壺は混入品と考えられる。弥生時代末から古墳時代前期初頭ころの時期が考えられる。

28-3号住居跡（図版第29・104）

28-1号住居跡それに28-2号住居跡と重複して確認された。新旧関係は28-1号住居跡で述べたとおりである。長軸を北東から南西にもつもので、規模は東西4.95m、南北6.6mほどの楕円形を呈する。壁は東側を除きほぼ20cmほどで確認された。床は、ほぼ平らに造られている。柱穴、炉などは、不明である。南壁付近に焼土がみられたが、炉に伴うような状態のものではなかった。

遺物は、土器片などが確認された（図版第104-7-16、32-40）。図化できたのは、単純口縁壺（同-9）、単純口縁で縁に刻目をもつ台付壺（同10・12・14）、高杯（同15・16）などである。弥生時代末から古墳時代前期初頭ころが考えられる。

29-1号住居跡（図版第30・105・162）

Q4-c5・c7・e5・e7グリッドで29-2号住居跡及び29-3号住居跡と重複して確認された。新旧関係は本住居跡と29-2号住居跡とが、29-3号住居跡を切っている。なお、29-1号住居跡と29-2号住居跡との関係は、床が一面であり、かつ柱穴などの状況から、29-1号住居跡が29-2号住居跡のように拡幅されたものと考えられる。なお、本住居跡の南東側は北東から南西方向に走る浅い2本の溝によって壊されている。長軸を東西にもつもので、規模は東西6.1m、南北5.4mほどの長方形を呈する。壁は北と西壁が確認されたに過ぎない。確認された壁は、10-25cmほどである。床は、堅くたたき縮められている。北西から南東に向かって僅かであるが徐々に下がっている。周溝、凸堤ないしベッド状造構などは確認できなかった。柱穴は4本主柱穴で、直径20cm前後、深さ～cmほどである。なお北東隅にみられる小穴は、29-3号住居跡の柱穴と考えられるものである。炉は、南側の柱穴の中間造られている。炉は、床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ10cmほどに焼土が確認できる。枕石も設置されている。

遺物は土師器片などである。図化できた物に壺（図版第105-1-2）、直口壺（同3）、単純口縁できる縁に刻目をもつ台付壺（同6-7）、S字壺（同21-30）、半球形の杯身で小型の高杯（同32-33）、同様な杯身で大型の高杯（同34）などがある。時期は、古墳時代前期ころが考えられる。

29-2号住居跡（図版第30・162）

29-1号住居跡及び29-3号住居跡と重複して確認された。新旧関係は29-1号住居跡で述べたとおりである。29-1号住居跡が確認された南側の柱穴と壁とが70cmほど外側に拡幅されたものである。規模が東西6.1m、南北6.14mほどのきぼとなる。

遺物などは基本的には29-1号住居跡と同じで、時期もほとんど同時期と考えられる。

29-3号住居跡（図版第30・162）

29-1号住居跡と29-2号住居跡と重複して確認された。新旧関係は29-1号住居跡で述べたとおりである。壁は全く残っておらず、床と平面形態の輪郭が確認されたに過ぎない。長軸を東西にもつもので、東西3.32m、南北2.8mほどの楕円形を呈するものとかんがえられる。床は、堅くたたき縮められ、ほぼ平らにつくられている。柱穴は29-1号住居跡の北東隅の小穴が本住居跡に伴うものと考えられる。直径25cm、深さcmほどである。また住居跡の中央付近で、29-1号住居跡に切られてはいるが焼土が確認できる。恐らく本住居跡の地焼炉であ

ろう。

遺物は、土器片が僅かに確認されたに過ぎないが、住居跡形態から弥生時代末ころの時期が考えられる。

30号住居跡（図版第31・106）

P 4 - i 4 · i 6 · j 4 · j 6 グリッドで、単独で確認された。周間に23・24・25・28号住居跡が近接している。本住居跡はほぼ住居跡に沿って後世のものと考えられる浅い溝が掘られ、住居跡の中央付近の床面と、柱穴それに住居跡の平面形態が確認されたに過ぎない。住居跡の形態は長軸を北西-南東にもつ隅丸長方形と考えられるもので、長軸が現状で3.7m、短軸が3.7mほどである。残っている床は、堅くたたき締められ、若干中央で低く造られている。周溝はみられないようである。

遺物は、口縁部の縁に縄文の施された有段口縁壺（図版第106-1）、折り返し口縁壺（同2~4）、単純口縁台付壺（同5・6・11）、S字壺（同12~14）、高杯（同15）、瓶（同16）などである。なお、混入品と考えられるS字壺は口縁部外面に刺突文みられない。弥生時代末ころの時期が考えられる。

31号住居跡（図版第31・106・162）

Q 4 - c 0 · c 2 · e 0 · e 2 グリッドで、単独で確認された。南東側に32号住居跡、北東側に38号住居跡、北西側に52・53号住居跡などがみられる。検出状況は江戸時代に共同墓地が造られ墓壙が多数据られており、住居跡の平面形態、炉などが確認されたに過ぎない。長軸をほぼ南北にもつもので、規模は東西3.8m、南北4.58mほどの隅丸長方形を呈する。壁は全く残存せず、床が部分的に確認され、柱穴は確認できなかった。炉が中央西寄りで確認された、床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ8cmほどに焼土が確認できる。また、枕石が、炉の南端あたりに設備されている。

遺物は、土器片などが僅かに確認された。図化できた遺物（図版第106）には壺（同17~19）がある。住居跡形態などから、弥生時代末~古墳時代前期初頭ころが考えられる。

32号住居跡（図版第32・106・162）

Q 4 - e 1 · e 3 · g 1 · g 3 グリッドで、江戸時代の墓壙と重複して確認された。このため住居跡の平面形態、炉などが辛うじて確認されたに過ぎない。北東側に、33・34号住居跡などが近接している。壁は全く残存していない。長軸を北東から南西にもつもので、規模は短軸方向で2.82m、長軸方向で4.02mほどの楕円形を呈する。僅かに残っている床面は、堅くたたき締められている。炉は住居跡のほぼ中央に造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ10cmほどに焼土が確認できる。炉の中央あたりには、土器を使った枕石が設備してある。

遺物は、土器片などが僅かに確認されたに過ぎない。図化できたのは壺（図版第106-20・21）だけである。弥生時代末から古墳時代初めころの時期を考えられる。

33号住居跡（図版第33・107・162）

Q 4 - f 0 · f 3 · h 0 · h 3 グリッドで、34号住居跡と重複して確認された。当初は34号住居跡を含めて一軒の住居跡と考えていたが、調査する中で2軒の重複住居跡であり、かつ、本住居跡が34号住居跡を切っていることが確認できた。長軸をほぼ東西にもつもので、規模は4.64m、南北4.32mほどの長方形を呈する。壁は、北~西壁が僅か7cm前後残存するに過ぎない。床は、堅くたたき締められている。全体的に、ほぼ平らに造られている。周溝、凸堤ないしベッド状遺構はみられない。柱穴は、北西隅のものが1本確認できたにすぎない。位置から4本主柱穴と考えられる。炉は、確認できなかった。

遺物は、土器片などが確認された。34号住居跡出土品のうち、S字口縁台付壺（図版第107-6~8）は本住居跡に伴うものであろう。口縁部に刺突文の施されていない形態である。住居跡の平面形態や遺物などから、古墳時代前半の時期が考えられる。

34号住居跡（図版第33・106～107・162）

Q 4 - f 0 · f 3 · h 0 · h 3 グリッドで、33号住居跡と重複して確認された。検出状況は33号住居跡に述べたとおりで、かつ江戸時代の墓壙が掘られている。新旧関係では江戸時代の墓壙は当然のこと、33号住居跡にも切られている。住居跡は、現状で東西5m、南北5.1mほどの不整形を呈する。壁は、西壁を中心に確認され、最も残っているところで20cmほどである。床は、堅くたたき締められている。全体的に、平らに造られている。周溝、凸堤ないしベッド状遺構などは確認できなかった。また、柱穴についても不明である。炉が、住居跡中央北寄りに造られている。床を掘り込んだ地焼炉で、厚さ7cmほどに焼土が確認できる。

遺物は、土器片などである。折返し口縁壺（図版第106-22）、単純口縁で縁に刻目をもつ台付壺（図版第107-1）、小形壺（図版第106-27～31）などが、本住居跡に伴うものであろう。弥生時代末ころの時期が考えられる。

36号住居跡（図版第34・107）

Q 3 - g 8 · i 8 、 Q 4 - g 1 · i 1 グリッドで、37号住居跡と重複して確認された。新旧関係は、本住居跡が37号住居跡を切っている。西側が事業地外のため、平面形態が明確にならない。また、住居跡の南側も削平を受け、壁、床などが確認できない。それでも南北が4.62mほどの隅丸方形ないし隅丸長方形を呈するものと考えられる。床は、堅くたたき締められ、ほぼ平らに造られているようである。壁は、南西側付近で確認できたのみであり、高さ38cmほどであった。柱穴、炉などは確認できなかった。

遺物は、土器片であった。図化できたものには、口縁部に指頭痕を施す粘土紐を回した壺（第107-18）、口縁部に棒状沈線文をもつ有段口縁壺（同11）、口縁部に刻目をもつ単純口縁台付壺（同12～15）、単純口縁壺（同16）、S字壺（同17）などがある。このうち口縁部に粘土紐をもつ壺は、他の土器などとの間に違和感があり、37号住居跡に伴うものかあるいは混入品ではないかと考えられる。古墳時代前期ころの時期が考えられる。

37号住居跡（図版第34）

Q 3 - g 8 · i 8 、 Q 4 - g 1 · i 1 グリッドで、36号住居跡と重複して確認された。また、南側の壁際には江戸時代の墓壙が掘られている。新旧関係は、本住居跡が江戸時代の墓壙はもちろんのこと、36号住居跡などに切られている。また、北側の一部が事業地外となっている。直径4.5mほどの円形ないし梢円形を呈する。壁は南側部分で確認でき、良好なところでは38cmほどの残存が確認できる。床は、堅くたたき締められ、ほぼ平らに造られている。柱穴は、住居跡の中央や南側で確認できたもの以外は不明である。炉が住居跡の中央や北寄りで確認され、床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ4cmほどに焼土が確認できる。

遺物は、細片の土器などが僅かに確認されているが、図化できたものはない。弥生時代末ころから古墳時代始めころの時期が考えられる。

38号住居跡（図版第35・107・108）

Q 3 - d 8 · f 8 、 Q 4 - d 0 · f 0 グリッドで、江戸時代の多数の墓壙と重複して確認された。また、北側の一部が事業地外となっている。このため平面形態が辛うじて確認されたに過ぎない。長軸を北西から南東にもつもので、規模は長軸方向で6.48m、短軸方向で4.8m（推定）ほどの梢円形を呈する。柱穴、炉などは確認できなかった。

遺物は、土器片が僅かに確認されたに過ぎないが、これらは条痕文の土器片（図版第108-1・2）であり、弥生時代前期ころの時期を考えることができる。

40号住居跡（図版第36・108）

Q 3 - d 8 · h 8 、 Q 4 - e 0 · h 0 グリッドで、江戸時代の墓壙と多数重複して確認された。また、北西に38号住居跡、南東に36・37号住居跡が近接する。新旧関係は、本住居跡に墓壙が掘り込まれていることはもちろ

のことである。長軸を北西から南東にもつものであるが、北側は事業地外となっている。規模は長軸6.8m、短軸2.68m（現存部）ほどの楕円形を呈する。壁は比較的残っており、10~30cmほどの残存である。床は、堅くたたき締められている。南東から北西に向かって僅かに低くなっている。南東壁付近に、半月状で高さ5cmほどの凸堤がみられる。しかし、凸堤の内側の状況は、墓壙が掘られており土坑などの有無は分からぬ。周溝、ベッド状造構、炉、柱穴などは確認できなかった。

遺物は、弥生土器片などが出土した。弥生土器片で図化できた遺物はないが、条痕文をもつ深鉢の破片（図版第108-3~6）と考えられるもので、弥生時代前半から中期初めころが考えられる。

42号住居跡（図版第37・108）

Q 4-b 6・b 8・d 6・d 8グリッドで、単独で確認された。西側から北・東側にかけて43・26・29-1・29-2・44号住居跡などが近接する。直径3.65mほどの円形を呈するものと考えられるが、南側が削平されている。壁は5~50cmほどの残存であった。床は、堅くたたき締められ、ほぼ平らに造られている。周溝、凸堤、炉などは確認されなかった。柱穴は、6本主柱穴で、直径25~50cm、深さ25cmほどである。

遺物は、細片の土器などが確認された。図化できたのは小型壺（図版第108-7）のみである。弥生時代末ころの時期が考えられる。

43号住居跡（第4図）

Q 4-a 5・a 7・c 5・c 7グリッドで、単独で確認された。西側から東側にかけて28-2・27・26・24号住居跡が近接する。長軸 m、短軸 mの隅丸長方形である。柱穴、炉などは確認できなかった。

遺物は、細片の土器などが少量出土したにすぎず、図化できたものはない。住居跡形態などから弥生時代末ころの時期が考えられる。

44号住居跡（図版第37）

Q 4-c 6・c 8・e 6・e 8グリッドで、単独で確認された。西側から北側に42・29-1・29-2号住居跡が近接する。直径3.5mほどの円形を呈する。壁は、所々が確認される程度で、20cm前後の残存であった。床は、堅くたたき締められ、ほぼ平らに造られている。柱穴は、4本主柱穴で、直径20cm、深さ20cmほどである。住居跡残って中央に地焼炉がみられる。周溝、凸堤などは確認できなかった。

遺物は、細片の土器などが僅かに出土したに過ぎず、図化できたものはない。住居跡形態などから弥生時代末ころの時期が考えられる。

46号住居跡（図版第38）

P 3-a 7・a 9・Q 3-b 7・b 9グリッドで、江戸時代の墓壙などと重複して確認された。単独で確認された。南東側に52・53号住居跡が近接している。新旧関係は、本住居跡を墓壙などが掘り込んでいる。残存状況は良くない。壁は南・北壁で部分的に確認されたに過ぎず、高さ10cmほどの残存である。床も部分的に確認されたに過ぎない。確認された部分は、堅くたたき締められていた。柱穴は確認することができなかった。炉が住居跡中央やや北寄りに造られている。床を掘り廻めた地焼炉で、枕石を設備している。

遺物は、土器片などが少し確認されたが、図化できるものはなかった。古墳時代前半の時期が考えられる。

51号住居跡（図版第39）

1次調査のC II-G 10・G 12・I 10・I 12グリッドで、単独で確認された。床の一部と、住居跡の平面形態などが確認されたに過ぎない。長軸5.85m、短軸5.05mほどの楕円形を呈する。確認された床は、堅くたたき締められている。西から東に向かって低くなっているようである。住居跡中央やや北寄りの床面に、直径50cmほどの

範囲で厚さ5~10cmほどに焼土化した所が3箇所確認できた。これらのうちの何れかが炉であり、地焼炉であろう。遺物は、土器片が多少確認されたに過ぎず、また、図化できたものはない。住居跡形態などから、弥生時代末頃の時期が考えられる。

52号住居跡（図版第40）

Q3-a7・a9・c7・c9グリッドで、53号住居跡、江戸時代の墓壙と重複して確認された。北西側に46号住居跡が近接している。新旧関係は、本住居跡が53号住居跡を切っているものと考えられ、また、墓壙が本住居跡を切っている。床および住居跡形態のごく一部が確認されたに過ぎない。確認された床は、堅くたたき締められて、ほぼ平らである。規模は、推定でmほどの隅丸方形ではないかと考えている。

遺物は、土器片が僅かに確認されたに過ぎない。推定ではあるが住居跡形態などから、古墳時代初めころの時期が考えられる。

53号住居跡（図版第40）

Q3-a7・a9・c7・c9グリッドで52号住居跡、江戸時代の墓壙などと重複して確認された。新旧関係は、本住居跡が52号住居跡に切られ、これら住居跡を墓壙が掘り込んでいる。本住居跡は床のほんの一部が確認されたにすぎない。

遺物は、ほとんど確認できなかった。52号住居跡との関係から、弥生時代末~古墳時代初めころの時期が考えられる。

55号住居跡（図版第41）

1次調査の最も東側の位置から確認された。BII-Y4・Y6、CII-A4・A6グリッドで、1号溝と重複して確認された。本住居跡が1号溝に切られている。本住居跡からは炉などが確認されず、1次調査で確認された竪穴造構の可能性もある。北東側が削平されている。壁は25~40cmの残存が確認された。床は、堅くたたき締められている。

遺物は、土器片が僅かに確認されたに過ぎず、図化できたものはない。住居跡形態から弥生時代末ころの時期が考えられる。

56号住居跡（図版第41・108・162）

P5-h1・h3・j1・j3グリッドで、単独で確認された。西側に2号墳が近接する。長軸を南東から北西にもつもので、規模は長軸4.8m、短軸3.7mほどの楕円形である。壁は北西側において僅かに確認されたのみで、高さ5~15cmほどの残存である。床は、堅くたたき締められ、ほぼ平らに造られている。柱穴は、4本主柱穴と思われるが、西側の2本が確認できたのみである。炉は、住居跡の中央や北寄りに造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ10cmほどに焼土が確認できる。周溝、凸堤などは確認できなかった。

遺物は、細片の土器などである。図化できたのは口縁部に刻目、口縁部の直下に指頭押圧痕のような文様のみられる口外帯をもつ壺（図版第108-8）、口縁部直下に指頭押圧痕のような文様の施された口外帯をもつ壺（同9）、首部にやはり指頭押圧痕のような文様の施された凸帯を回し、それ以下に縄文を施す鉢（同10）、台付壺（同12）などがある。弥生時代前期の時期を考えられる。

57号住居跡（第10図）

Q4-b2・d2・b3・d3グリッドで、住居跡の南側を農道（轍跡）によって切られた状況で確認された。残存状況は極めて悪く、住居跡の輪郭が辛うじて確認されたにすぎず、他については確認できなかった。平面形態は東西、南北とも3.9mほどの方形を呈する。

遺物は、細片の土器などが僅かに確認されたに過ぎない。古墳時代前半ころの時期が考えられる。

第4節 溝と遺物

1号溝（第3～7図、図版第164）

農道南側で、ほぼ農道に沿って確認された。しかし、溝と言うよりは浅い自然の埋没谷と考えられるものである。Q 4-a 7-a 9杭あたりを起点として、南東斜面をほぼ西北西から東南東方向に向かって幅を徐々に広げながら下り、およそ S 5-a 2-a 4杭あたりで自然地形のなかに消える。長さにしておよそ105mほどの距離である。岸線は凹凸をみせながら先に述べたように徐々に幅を広げ、最大幅が R 5-j 1-j 4杭あたりにあり、およそ11.4mほどである。底は斜面に沿いほぼ平といえるようである。深さは上部で深く、下部に行くに従い次第に浅くなり、最終的には前述のように自然の地形の中に消える。

この溝のQ 4-c 8-c 9-d 8-d 9グリッドより、「貨泉」（第5図）が出土した。「貨泉」は、溝を埋めた埋土中の上層から確認された。本溝からは縄文時代の土器はもちろんのこと、弥生時代前期それに弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての土器が確認されている。「貨泉」出土グリッドに限って、どのような土器が出土しているのかみてみると第6図のようになる。その内容は弥生時代前期の条痕文土器（同1～5）としては、口唇部及び口縁部突帯刻目を施した壺（同1）、口縁部突帯に刻目を施し以下に条痕をもつ壺（同2・3）などがある。弥生時代末から古墳時代前期の土器としては、口唇部に刻目をもつ単純口縁壺（同6）、折り返し口縁壺（同7～9）、脚部を八の字状に開く高壺（同10・11）、脚部が柱状で据部で開く高壺（同12）、S字口縁台付壺（同14～16）、単純口縁壺（同17）などがある。これら土器の水平及び垂直分布状況をみたのが第7図であるが、これをみると各時期の土器が「貨泉」の下から合い前後して確認されていることが確認できる。このことは、「貨泉」が厳密にどちらの時期の土器に伴うのかまでは、限定することができない状況を示しているものといえるであろう。



第5図 貨泉拓影

「貨泉」は、周縁部の一部が欠けているが、直径2.2～2.3cm、厚さ0.1mmほどの大きさで、重さは2.3gほどである。中央に錢の大きさに比べ、一辺8mmとやや大きな方形の孔があけられている。そして孔の向かって右側に「貨」、同左側に「泉」の文字が、やや不鮮明であるが確認できる。

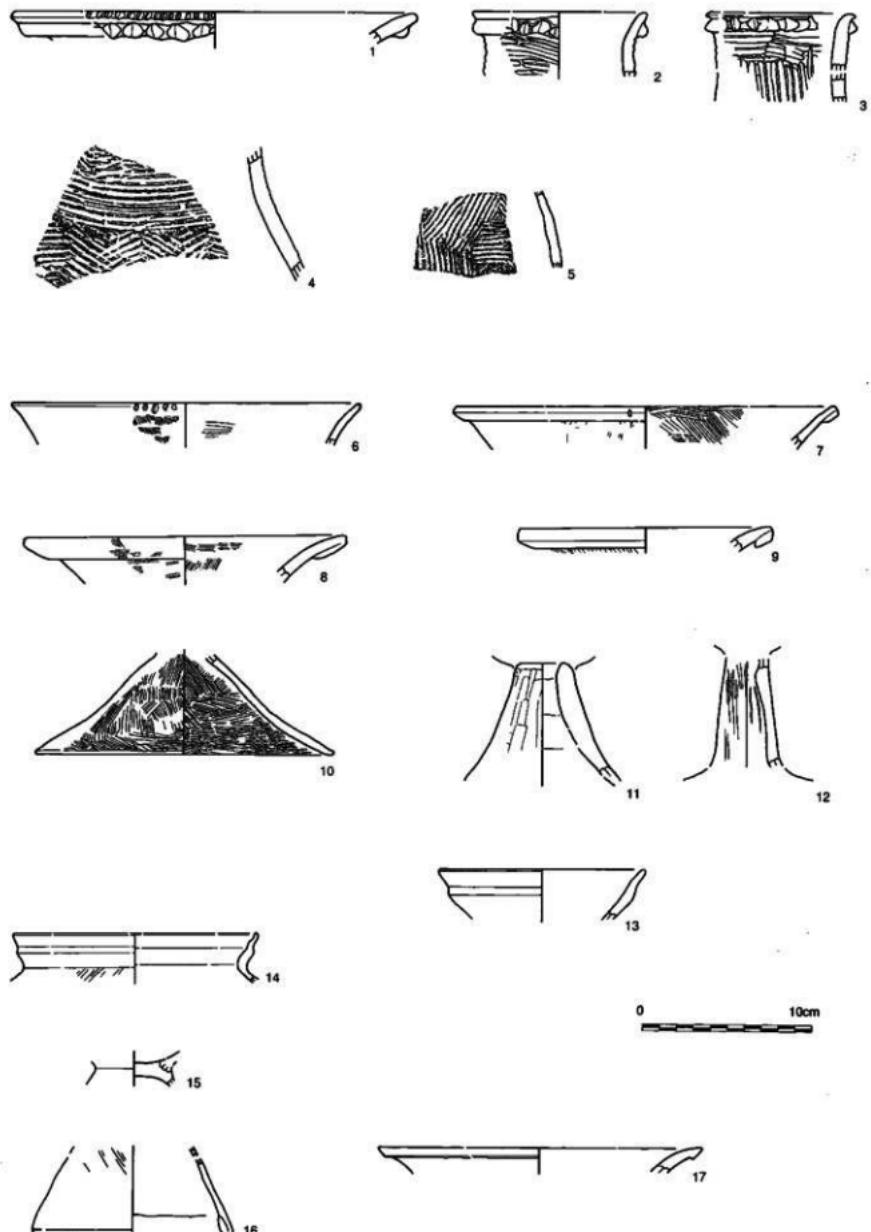
「貨泉」は、中国の「新」王朝を建国した王莽が西暦14～40年の間に鋳造し、我国に伝わったのが弥生時代後期と考えられている。このような「貨泉」は、我が国の中世までの遺跡から出土したものを持めれば全国に及んでいる。さらに弥生時代末から古墳時代前期までの遺跡に限定すると、九州～近畿地方の9遺跡36例となる。そしてその東限は大阪府の瓜破・龜井・巨摩庵寺遺跡とされてきたが、本遺跡例は東日本での同時代の遺跡としては初めての出土の確認された遺跡といえるのである。

第5節 古墳と遺物

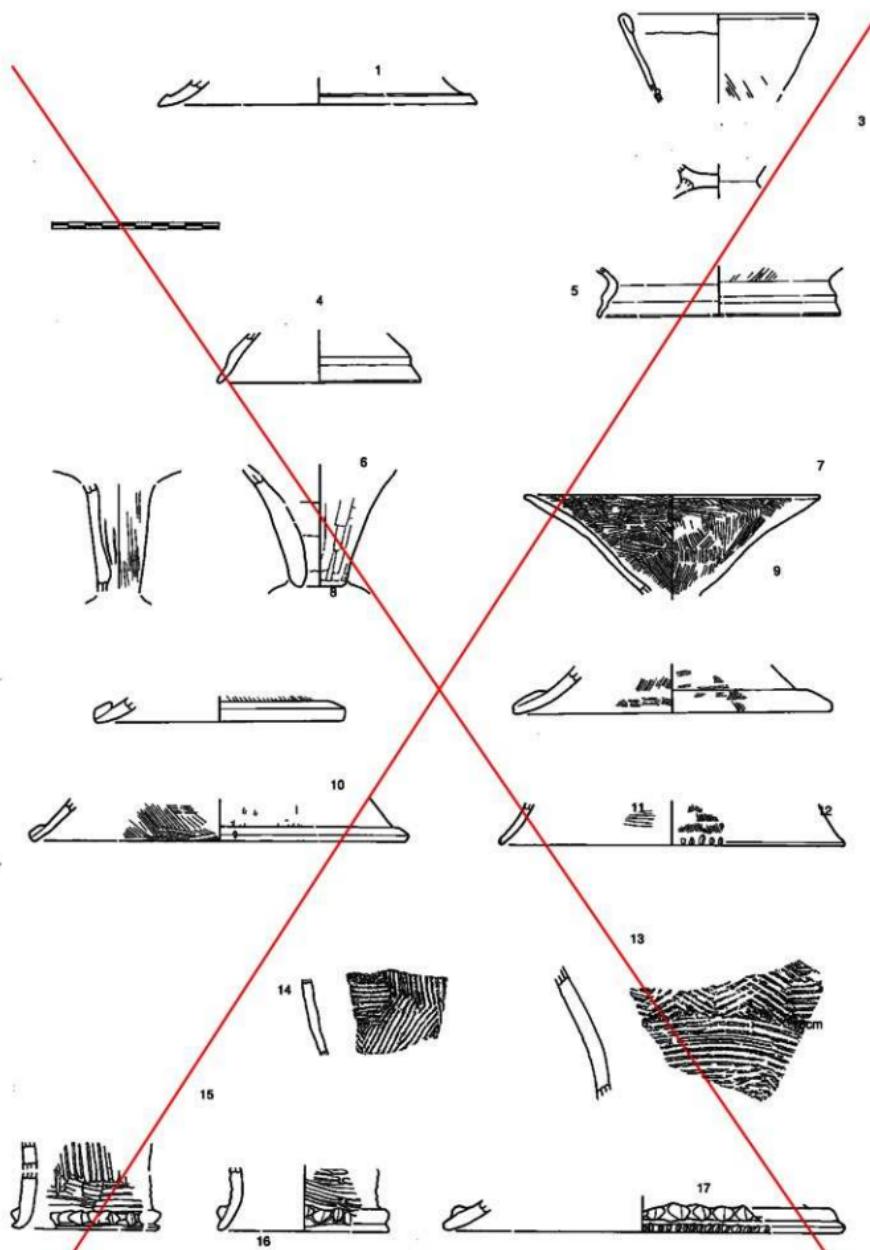
1号墳（図版第42・113・164）

P 4-a 0-a 2、Q 4-a 0-a 2グリッドに位置する。1号墳は、米倉山北東斜面上に立地する。この斜面は、標高370m付近で一旦平坦に近いような鞍部を形成するが、本古墳はちょうどこの平坦地に造られたものである。なお、北側には深い沢が北東方向に走っている。

本墳の所在地には県番号18069の無名墳（『山梨県遺跡地名表』昭和54年、山梨県教育委員会）がかつてあったとされていたが、調査前の現状ではその痕跡を確認することは全くなかった。今回の調査によってその古墳の存在が改めて確認されたのであったが、所在地に精通していた住民によると、かつて若干高まりの存在していたこ



第6図 「貨泉」出土グリッド出土遺物



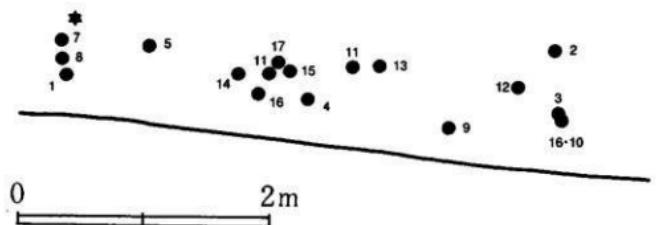
第6図 「貨東」出土グリッド出土遺物

Q5c8

Q5d8



345.200



第7図 「貨泉」出土グリッド出土遺物分布図
(●土器、番号は第6図遺物番号に同じ)

とを覚えているという。このようにその痕跡を残さないまでに削平された古墳であったといえる。このため墳丘の残存部は全く確認できなかった。周溝については、当初から無かったのか否か分からぬが、調査によってその存在を確認することはできなかった。確認できたのは、石室の極一部だけであったが、主軸をほぼ東西にもつた横穴式石室であることが確認できた。しかし、確認できた横穴式石室は、長さにして僅か2mほどであり、また検出状況も側壁の再下段に据えられた石材が北側の壁で3個、南側の壁で1個、それにこの間に敷かれた敷石だけであった。石室の規模は長さは分からぬが、幅は1.5mほどのものである。敷石は、拳大から頭大の石材を敷いたものである。敷石の東端に敷石の空白部があるが、その周囲の石の設置状況をみると、大型の石材を据えるために漏斗状に掘り詰めた周囲に根固めのために置かれた形態をみせる。そしてこのような形態の塗みが、両壁から指し渡したように並んでいる。このような形態は横穴式石室のどこにみられるものであろうか。2号墳の横穴式石室は一段掘り詰めた中に横穴式石室の床面が造られているが、この場合正面に比較的大きな石材を掘り方に沿って据えている。しかし、根固めの石材は1号墳のような漏斗状のように設置されていない。このような漏斗状の形態をとるものとしては、むしろ奥壁が一般的であり、本横穴式石室は西に開口したもので山頂の方角が入口となる。開口部方向にやや違和感をもつが、このような例は中道町の考古博物館構内古墳においてもみられることから、妥当といえよう。なお、石室の正面に当たる部分は大きく攪乱を受けており、敷石も全く存在し得ない状況である。

遺物（図版第113）は、攪乱を受けている部分を中心に出土が確認された。鉄刀（同1～5）、轡鏡板（同6）、飾り金具（同7）、鉄鎌（同8・9）、弓弭（同10・11）、金環（同12・13）、小玉（同14～25）、丸玉（同26）、白玉（同27）、管玉（同28～30）、切子玉（同31・32）、須恵器蓋坏（同33）、同壺（同34）、同提瓶（同35）などである。鉄刀は、途中で折れ曲がっていたものを復元実測したものである。そして1と2とは同一固体と考えられるものであり、現存長は83.3cmほどである。轡鏡板は立闇付近の小片を元に復元したもので、環体が円形に近い板状立闇素環鏡板轡である。小玉にはガラス製の緑色（同14～19）、同じくガラス製の緑青色（同20・21）、それに材質は不明だが石材で作られた黒色（同22～25）のものがある。白玉は、ホルンフェルス製で淡緑色を呈する。管玉には、ホルンフェルス製の淡緑色で両面穿孔（同28）のもの、へき玉製の深緑色（同29・30）のものがある。切子玉は、ガラス製の無色である。

須恵器のうち蓋坏は、ほぼ形の分かるもので、湖西編年のII 4～5期前後で、6世紀後葉ころの時期が考えられる。壺は口縁部の破片であり、口縁部形態から中村編年のII - 4期前後（中村浩 1981『和泉陶邑窯の研究』）、湖西編年のII期第4小期（静岡県教育委員会 1986『静岡県の窯業遺跡』）と考えられるもので、6世紀後半代の時期ころを想定できる。一方、轡はその形態から6世紀第4四半世紀ころの時期が考えられる。これらから本墳に6世紀後半代の一定点が存在することを確認できる。

2号墳（図版第43～45・114・115・164）

P 4 - b 2 - b 8 - e 2 - e 8 グリッドに位置する。米倉山北東斜面上で、1号墳から約70mほど南側の一段上の鞍部に立地する。標高373mの地点である。

本古墳は1次調査によって確認されたものである。墳丘は僅かであるが盛り上がりが確認できた。墳丘は地山を整形し、その上に版築をして盛り上げたものであるが、版築の確認された部分は僅かである。また、横穴式石室の最下段の袖石が残っているに過ぎず墳丘の大半が開墾などによって削平されたことになる。円墳であるが、墳丘の墳端と考えられる個所がとらえられたのは、西側のみであった。これから復元すると直径19.5mほどの大きさとなる。周溝についても西側に周溝の外側の肩と考えられる個所がとらえられ、墳端から幅1.8mほどの位置である。この周溝と墳端と考えられる位置の、特に北西の前後を中心同心円状に芋穴が多數掘られている。周溝はこの北西部で少し広くなり、南東側の地形的に低まる傾向で自然地形の中に消えるものと考えられる。周溝の深さは西側で20cm、北西部ではやや深くなり80cmほどになるものと考えられる。甘藷を貯蔵するための芋穴は、正面ばかりでなく墳丘裾部を取り囲むように造られており、調査によって50基ほどの多数が確認された。戦後の

食料増産のときに、この付近は一面の甘藷畠だったことを、調査中に見学にきた近所の古老より聞くことができた。この芋穴は長さ1.8m、幅1.3m、深さ90cm前後に及ぶもので、このため墳丘裾部を大きく壊しているところもみられ、周溝の良好に残っていた部分はあまり多くはなかった。なお芋穴は、石室の奥壁から、側壁の中程までのすぐ脇にまで造られていた。この芋穴などから僅かであるが「寛永通宝」や煙管（図版第115-23）などが出土しており、この付近にも江戸時代の墓の存在していた可能性が高い。

墳丘のほぼ中央当たりに掘り方がみられ、横穴式石室を構築したものである。この掘り方は長さ5m、幅2m、深さ30cm~60cmほどの大きさである。石室は、さらにこの掘り方の中に、基底部の壁石を固定して据えるために漏斗状に土坑を掘り、基底部の壁石を平らになるように据え、さらに上部に積み上げたものである。これら土坑は、ほぼ掘り方に沿って連なって掘られているのが確認できる（図版第45）。なお、東側の側壁の南端の土坑は、それより奥壁側の土坑の掘られている位置に比べ、やや内側に入っているのが確認できる。これは、あるいは片袖部の有ったことを物語るものであろうか。なお、県内にみられる古墳の横穴式石室のはとんどが、入り口の前部から奥壁まで一面で造られているのに対して、本墳では入口の処理がどのようなものであったか不明であるが、石室が一段低く造られている違いがみられる。

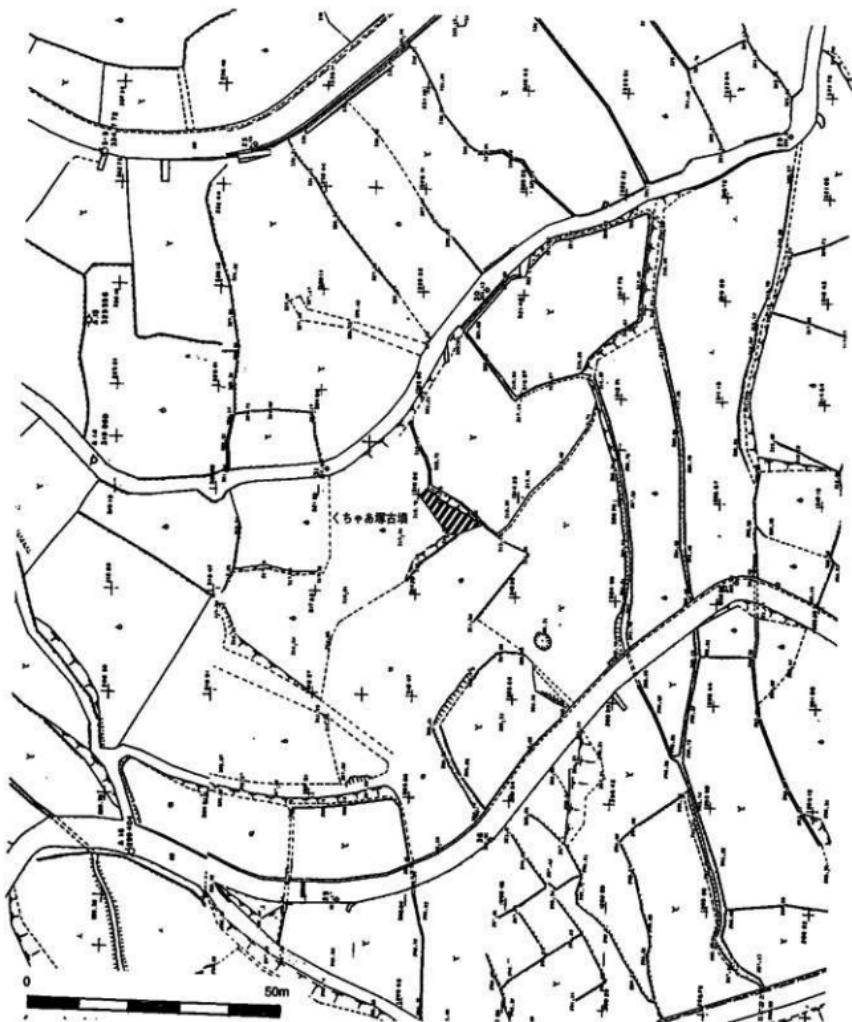
横穴式石室は、長さ5.9m、幅1.85mの大きさである。袖の有無は分からぬが、前述のように内側に掘られた土坑の存在から袖部をもつ可能性は高いのではないかと考えている。横穴式石室の残存状況は極めて悪い。入口部の西側の部分と奥壁付近の敷石、それに東壁の奥壁付近の鋪壁の基底部の石材が僅かに1個確認されたに過ぎない。敷石は、拳大から人頭大の偏平に近い石を敷き詰めている。奥壁部では奥壁の回りを取り囲んだように根石が漏斗状になっているのが確認できた。掘り方の南側から1mほどの所で、閉塞石ではないかと考えられる石積みが確認できた。また南側の縁に沿って比較的大きな石が据えられているのが確認できる。これらから本横穴式石室は南側に開口するものであることが分かる。

遺物は、鉄鎌（図版第114-1~17）、刀子（同18~21）、刀装具（同22）、金環（図版第115-1）、切子玉（同2）、丸玉（同3）、須恵器（図版第114-23~26、図版第115-4~22）などが確認された。鉄鎌は、石室内の敷石の間からある程度の量が出土した。片刃式（図版第114-1~4）、両刃式（同5~8）の尖根鎌である。切子玉、須恵器は、掘り方の正面外側から芋穴などで壊された陸橋部あたりまでの間を中心に出した。切子玉は、水晶製である。蓋杯（図版第114-23、図版第115-4~6）、杯身（図版第114-24~26、図版第115-7~17）、塵（同18）、直口壺（同19~22）などである。このうち蓋杯には、半球形（図版第114-23）のものと宝珠のつまみのもの（図版第115-6）がある。前者は中村編年II-6形式、静岡編年のII-5・6小期で7世紀前半、後者は中村編年III-1形式以降で7世紀前半代の時期が考えられる。杯身も口径10cm以上のもの（図版第114-24ほか）と、10cm以下のもの（同25・26ほか）との2形態がある。前者は中村編年II-5形式ころで6世紀末から7世紀初め、後者は中村編年II-6形式ころで7世紀初めころが考えられる。これらから本古墳には、6世紀末から7世紀初めころの時期の定点を確認することができる。

くちゃあ塚古墳（図版第46~49・115・165・166）

くちゃあ塚古墳は、米倉山B遺跡より南方約1kmほどの米倉山南東斜面、標高317m付近に所在する。地番的には、東八代郡中道町下曾根字清水3143-1番地にある。本墳は、平成4年度の清水遺跡の試掘調査の折りに、地権者の一人の指摘で、桑畑などの中にあった荒撫地においてその存在が新たに確認されたものである。従ってこれ以前には、遺跡台帳への登録のなかった古墳であることから、古墳名をこの地域の土地所有者の古老らの間で「くちゃあ塚」と呼ばれていたことが確認されたことから、これを本墳の名称とした。

本古墳の調査前の状況は、東側に南北方向に延びる幅80cmほどの地境溝、北から西側にかけて幅60cmほどの根切り溝が周り、南に開口する横穴式石室内に天井石が落ち込んでいた。これら溝のうち、東側の地境溝は古墳の周溝の一部をさらに深く掘り込んだものであった。また、根切り溝の方では、根切り溝の外側に本来の周溝の存在したことを確認できた。これら周溝は、石室正面から左右に積まれた石積から出て、古墳を取り巻くものであ



第8図 くちやあ塚古墳周辺地形図

る。根切り溝側で確認された周溝は、残存部で幅80cm、深さ10cm前後ほどあるが、石室の正面付近では斜面の下方にあるため、地形の中に自然に消える状況であった。この周溝の規模は、東西方向の内側で直径6mほどであり、ここより墳丘が積み上げられることになる。

周溝の内側に、横穴式石室を造るために掘り方がみられる。南北に長い長方形の掘り込みで、奥壁側で深さ1.2m、側壁中ほどで50cm、正面は斜面の下側にあるため地形の中に自然に消える状況である。掘り方の中にはさらに、壁を積み上げる基底部を設置するための調整用溝ないし小穴が掘られている。また石室中央部にみられる樋石、入口部の閉塞石などを設置する調整用溝などが、規模に応じて掘られている。

墳丘は、直径10m、高さ3.2m（現状）ほどである。古墳の高さは実際には、石室内に落ちている天井石とさらにその上までを覆うのであり、4mほどとなろう。墳丘は黒色土と褐色土との互層の版築で構築されている。版築は、最低でも4層をほどを確認でき、堅くたたき締められている。また、石室正面の下部も、崩れないように礫などを混入した基盤を造っている。

石室はN-52°-Wに主軸をおき、南に開口する無袖型の横穴式石室で、石室全長4.15m、玄室長3.12m、奥壁幅0.67m、玄室中央幅1m、羨門幅0.82mを計り、やや胴張状を呈する長方形の石室である。また、奥壁より1.8mほどとのところに框石を設置することで、玄室を区画している。奥壁は偏平な石材を2段で広口積し、側壁にもたせかけるような状態で造られている。側壁は、奥壁から2~3石あたりまでが原形のまま残っている。しかし、それより入口部までの間は、上部の石材が抜き取られている。基本的には小口積みであるが、何カ所かで横口積みがみられた。側壁は奥壁近くで7~8段積み、中央から入口あたりが現状で3~4段積みで確認できる。側壁は、順次持ち送り式に造られ、特に中段あたりから強くなり、上部で狭まるように積み上げられている。閉塞石は羨道部分を全て充満するように設置され、3段の石積が確認できた。基底部は大型と小型の石の組み合わせで造られ、2段目以上は大型の石を設置し、その間に小石を充填している。なお、大型の石材はいずれも小口面を奥壁側に向けて設置されている。框石を挟んだ奥壁から閉塞石までの床面は、一面に敷石が敷かれていた。敷石は20cm前後の石材が使われ、あいだには小石を入れて平らな状態になるよう敷かれている。敷石は、框石の前後で約5cmほどの高低差がある。框石から奥壁の敷石が高く造られており、玄室と意識して造られたものであろう。なお、敷石は閉塞石の下には敷かれていません。

石室は、掘り方内に構築されたものであるが、奥壁、側壁とともに裏込石がまったくと言っていいほど使われていない。これは調査時に墳丘が極めて堅かったことが確認されており、版築が裏込石の役まで果たしたものであろう。

遺物は、須恵器の蓋杯が4点が完全な形で、閉塞石と側壁との南東隅で確認された。しかし、他の遺物は全く確認されなかった。この蓋杯（図版第116-1~4）は宝珠をもつものであり、中村編年のⅢ期-2型式、静岡編年のⅢ-2前半代あたりと考えられるもので、7世紀中頃の時期が考えられるものである。従って本墳に7世紀中頃の一定点を求めることができる。

第6節 江戸時代の墓と遺物

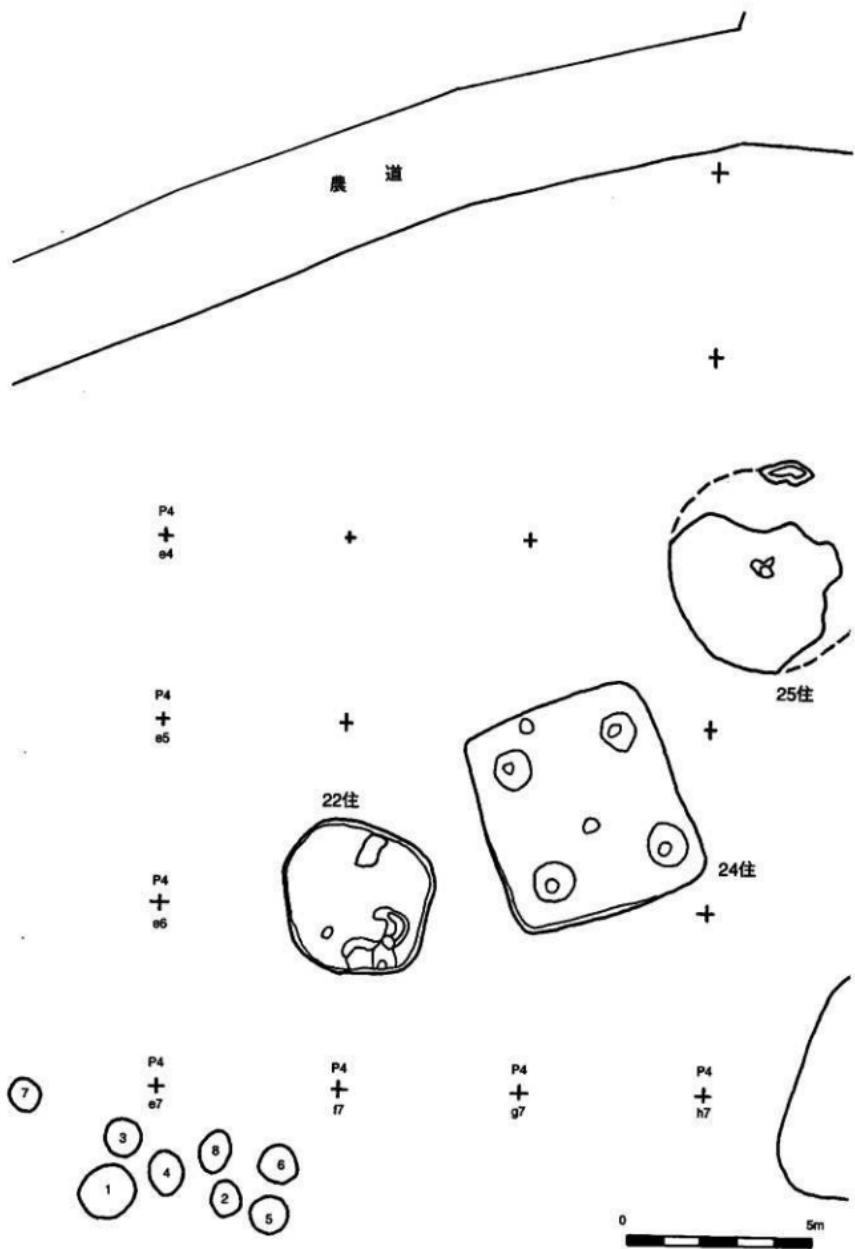
米倉山B遺跡における、江戸時代の墓は農道を挟んだ北側と南側にある。総数248基の地域別の内訳は、北側が農道下のものも含めて240基、南側が8基である。南側はグリッドにすればP4-d7·d8·f7·f8のグリッドにこじんまりと、また切り合いもなく造られている。これに対して北側では、単独のものも多いが、多数の墓壙が切り合って造られているものもまた事実である。

1号墓塚（図版第50・116・137）

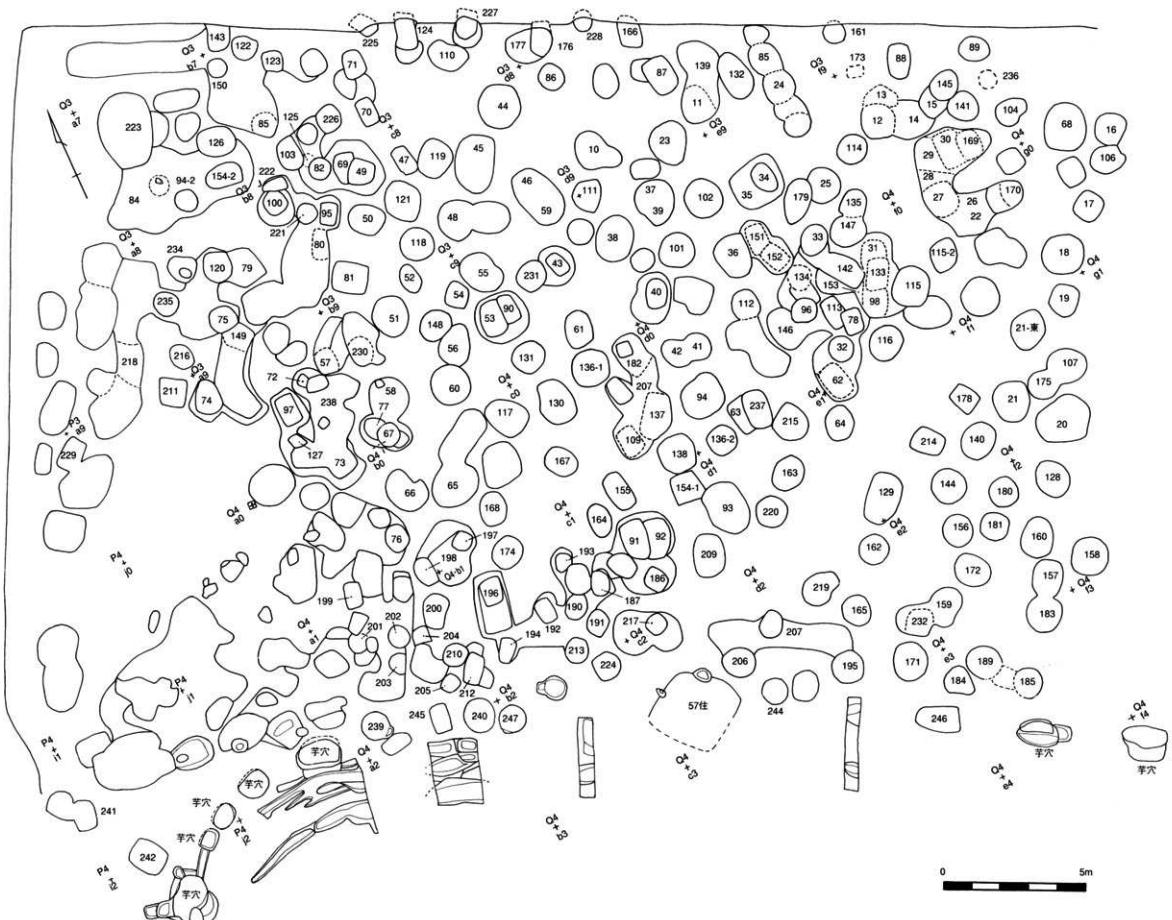
P4-d7·e7·d8·e8グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.07m、短軸1m、深さ（確認面から。以下同じ）80cmを測る楕円形である。埋葬形態は、北西向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、それに銅鏡6枚であった。銅鏡は全て寛永通寶で、そのうちの1枚が背に「文」をもつものである。

2号墓塚（図版第50・116・135・137）

P4-e7·f7·e8·f8グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.3m、深さ90cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬と考えられる。出土遺物は、鏡6枚と数珠のみで、他のものはみられなかった。鏡は3枚が寛永通寶の銅鏡、残り3枚も鉄鏡びでかたまつていて直接確認できないが、寛永通寶の鉄鏡



第9図 墓壙位置図（1～8号墓壙）



第10図 墓場位置図（10～247号墓場）

と考えられるものである。数珠（図版第135－1～5）は木製で、5個確認された。

3号墓壙（図版第50・116・137・169）

P 4-d 7・e 7・d 8・e 8グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.14m、短軸1.04m、深さ80cmほどの梢円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、陶器碗、銭6枚である。人骨の脇から出土した陶器は、手描きの瀬戸美濃染付広東碗である。絵柄は、外面に松竹梅文、またみこみには2段の同心円文と梅花文が描かれている。銭は、銅銭6枚、鉄銭1枚である。銅銭は全て寛永通寶で、そのうち1枚は背に「文」をもつものである。鉄銭は鎧で確認できないが寛永通寶であろう。

4号墓壙（図版第50・116・137）

P 4-e 7・f 7・e 8・f 8グリッドで、単独で確認された。平面形態は長さ1.35m、幅1.13m、深さ65cmほどの長方形を呈する。人骨は、残りが非常に悪い。埋葬形態は、骨の具合から寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金と火打石、銭である。火打石は石英製で、火打金に鉄鎧で付着していた。銭は4枚で、全て銅銭の寛永通寶である。うち1枚は、背に「文」を持つものである。

5号墓壙（図版第50・116・137）

P 4-e 7・f 7・e 8・f 8グリッドで、単独で確認された。平面形態は直径1.1m、深さ90cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石、銭、磁器碗であった。火打石は石英製で、火打金に付着していた。銭は3枚出土し、1枚が銅銭の寛永通寶で、2枚は鎧びた破片である。人骨の脇から出土した磁器碗は、手描きの肥前染付碗である。絵柄は、外面に樹木のような文と蝙蝠文とが描かれている。17世紀後半代のものと考えられる。

6号墓壙（図版第50・116・137）

P 4-e 7・f 7・e 8・f 8グリッドで、単独で確認された。平面形態は長軸1.2m、短軸1.1m深さ70cmほどの梢円形を呈する。人骨は、歯の一部などが確認されたのみで、保存状態は極めて悪く、埋葬形態は分からない。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（石英製）、銭5枚、陶器碗である。銭は3枚が銅銭の寛永通寶で、2枚は鉄銭で、鎧で固まっている。陶器碗は、削り出し高台で内外面に黒褐色の鉄釉が施されている。ぐい飲みと考えられるものである。

7号墓壙（図版第51・116・137）

P 4-d 7・e 7・d 8・e 8グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.05m、深さ1mほどの円形を呈する。人骨の残りが悪く、埋葬形態は分からないが、底の直径が55cmほどであることから、座葬であろう。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（石英製）、銭6枚、磁器碗である。火打石は、鉄鎧で火打金に付着していた。銭は3枚が銅銭の寛永通寶で、うち1枚の背には「小」ないし「十」を持つものである。残り3枚は鉄銭で鎧で固まっている。磁器碗は、手描きの肥前染め付けである。絵柄は、表に草花文らしきものがみられる。

8号墓壙（第9図）

P 4-e 7・f 7・e 8・f 8グリッドで、単独で確認された。形態から墓壙と考えられるが、人骨、出土遺物は全く確認されていない。

9号墓壙 欠番

10号墓壙（図版第51・116・137）

Q 3 - d 8 · d 9 · e 8 · e 9 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.33m、短軸1.05m、深さ46cm程の楕円形に近い形態である。人骨は頭部のみが確認された。埋葬形態は、頭蓋骨のみで不明であるが、墓壙の形態、大きさなどからは寝葬と考えられる。出土遺物は、頭蓋骨の脇から出土した寛永通寶1枚のみである。銅錢で、背に「文」を持つものである。

11号墓壙（図版第51・116・135・137）

Q 3 - d 8 · d 9 · f 8 · f 9 グリッドで、単独で確認された。北側で他の墓壙と重複する。平面形態は、長軸1.15m、短軸95cm、深さ60cm程の楕円形を呈する。人骨の残りは悪い。埋葬形態は、墓壙形態や、頭蓋骨の位置から、西向きの寝葬と考える。出土遺物は銭6枚と数珠のみである。全て銅錢の寛永通寶で、そのうちの2枚には背に「文」をもつものである。数珠は、ガラス製で白色のもの14個（図版第135～）、木製のもの7個（同～）である。

12号墓壙（図版第51・117・137・169）

Q 3 - f 9 · g 9 · Q 4 - f 0 · g 0 グリッドで、13・14号墓壙と重複して確認された。13・14号墓壙を切っている。平面形態は、長軸1m、短軸90cm、深さ40cmほどの楕円形ないし長方形を呈する。埋葬形態は、墓壙形態や頭蓋骨の位置から南、西向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、銭5枚、陶器碗、磁器碗片などである。銭は頭蓋骨の脇から出土した。いずれも銅錢の寛永通寶である。陶器碗は、いずれも瀬戸美濃窯跡の手描きの染付である。2は丸碗で、絵柄は表面に梅と思われる文様、内に松葉状の文様を持つものである。3は端反碗で、絵柄は外面に菊、内に松葉と思われる文様を持つものである。磁器碗は破片で、絵柄が銅版印刷されたもので、明治期のものであろう。絵柄は、外面に松と家が描かれているもので、おそらく混入品であろう。

13号墓壙（図版第51・135・137・169）

12号墓壙と同じグリッドで、単独で確認された。12号墓壙に切れられ、14号墓壙に切られているようである。平面形態は長軸1.1m、短軸90cm、深さ35cm程の楕円形ないし長方形を呈する。骨の残りは悪い。埋葬形態は、墓壙形態などから寝葬と考えられる。出土遺物は、数珠の小玉39個、銭5枚である。銭はいずれも銅錢で、3枚が背に「文」を持つ寛永通寶、1枚が背に「治」の文字をもつ加治木錢の洪武通寶、1枚が中国錢の聖宋元寶である。

14号墓壙（図版第51・117・137・138・169）

12号墓壙と同じグリッドで、単独で確認された。12・13号墓壙に切られているようである。平面形態は、長さ13.5m、幅1mほどの長方形を呈するものと考えられるが、南東側が乱れているようである。なお、深さは35cmほどである。埋葬形態は墓壙形態や、頭蓋骨の位置などから寝葬と考えられる。遺物は、火打金、火打石（石英製）、銭12枚、陶器小碗2個である。銭はいずれも銅錢である。寛永通寶は11枚あり、内4枚が背に「文」を持つものである。残りの1枚は、朝鮮通寶である。陶器は、いずれにも褐色釉がかかっている。

15号墓壙（図版第52・117・138）

12号墓壙と同じグリッドで、14・141・145号墓壙と重複して確認された。平面形態は、長さ94cm、幅63cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、寝葬で、脚部を交差して折り曲げている。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金（この形態的は苧引金の形態に似るが、以下本文中では火打金として扱う）、火打石（長石製）、銭5枚である。銭の内訳は、銅錢の寛永通寶2枚、鉄銭3枚である。

16号墓壙（図版第52・117・138）

Q 4 - g 0 · g 1 · h 0 · h 1 グリッドで、106号墓壙、37号住居跡と重複して確認された。37号住居跡を掘り込んでいる。平面形態は、直径1m、深さ1.05mほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、銭5枚である。銭の内訳は、銅錢の寛永通寶2枚、不明銅錢1枚、鉄錢2枚である。

17号墓壙（図版第52・117）

16号墓壙と同じグリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径94cm、深さ80cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金（火打石付着）である。

18号墓壙（図版第52・117・138）

Q 4 - f 0 · h 0 · f 1 · h 1 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.1m、深さ70cmほどのほぼ円形を呈する。埋葬形態は、南向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、銭である。銭は、銅錢の寛永通寶1枚と、鉄製品の鋸に付着し銭種は確認できないが、何枚かの銭の破片がみられる。

19号墓壙（図版第52）

Q 4 - f 1 · g 1 · f 2 · g 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径90cm、深さ75cmほどの円形を呈する、やや小規模な墓壙である。埋葬形態は、やや骨の残りが少ないが、北向きの座葬と考えられる。本墓壙からは、副葬品がまったく確認されなかった。

20号墓壙（図版第52・117）

Q 4 - f 1 · g 1 · f 3 · g 3 グリッドで、墓壙か否か不明だが土坑と重複して確認された。西側に接して土壙は、深さ25cmほどの浅いものであるが、この土坑を本墓壙が切って掘っているのか、逆に立坑に切られているのか不明である。平面形態は、直径1.06m、深さ1mほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部のみであった。

21号墓壙（図版第52・117・138）

Q 4 - f 1 · g 1 · f 2 · g 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長径1.30m、短径1.16のほぼ円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）2、銭7枚である。銭の内訳は、背に「元」の文字をもつものを含む銅錢の寛永通寶5枚、それに鉄錢2枚である。

21-東墓壙（図版第53・117）

21号墓壙と同じグリッドで、単独で確認された。平面形態は、上部で長径1.38m、短径1.12m程の楕円形を呈する。しかし、深さ92cm程で底に達するが、底は楕円形の中心からやや外側にずれており、かつ底の形態も横幅85cmほどの隅丸正方形を呈している。埋葬形態は、西向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）である。

22号墓壙（図版第53・138・169）

Q 4 - f 0 · g 0 · f 1 · g 1 グリッドで、26・170号墓壙などと重複して確認された。26号墓壙に切られている。平面形態は長軸77cm、短軸64cm、深さ85cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、東向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銭6枚である。銭はいずれも銅錢で、背に「文」の文字をもつもの3枚を含む寛永通寶5枚、中国銭の元□通寶である。

26号墓壙（図版第53・118・138・169）

22号墓壙と同じグリッドで、22・27号墓壙と重複して確認された。22号墓壙を切って、27号墓壙に切られている。平面形態は、縦横80cm、深さ65cmほどの方形を呈する。埋葬形態は、脚部を折った南向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、装飾をもつ銀製煙管の雁首部と吸い口部、銭6枚、磁器碗である。銭はいずれも銅銭の寛永通寶である。磁器碗は瀬戸美濃窯の染め付け広東碗である。外面に同じ草花文が3面にかかり、内側にも2段の同心円文、みこみにも草花文が書かれている。なお、草は筆書きで花の部分は印判かと考えられる。

23号墓壙（図版第53・118）

Q3-d8-e8、Q4-d0-e0グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.62m、短軸1.2m、深さ50cmほどの長方形ないし椭円形を呈する。埋葬形態は、北向きの寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、それにかわらけである。かわらけは、直径9.7cm、深さ2.4cmほどのもので、底は、回転糸切りのものである。

24号墓壙（図版第53）

Q3-e8-f9、Q4-e8-f9グリッドで、85号墓壙などと重複して確認された。平面形態は長軸1m、短軸93cmほどの長方形ないし円形を呈する。墓壙の埋土中上部に、頭大の蝶が5個ほどが確認された。埋葬形態は、南向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、なにもみられない。

25号墓壙（図版第53・138）

Q3-e9-f9、Q4-e0-f0グリッドで、179号墓壙と重複して確認された。両者が縁で重なった程度で、それぞれへの影響はない。平面形態は、長軸1.18m、短軸1mほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、南向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、銅銭6枚である。内訳は、寛永通寶5枚、うち背に「文」の文字をもつもの3枚である。もう1枚は中国銭であるが、銭種は不明である。

27号墓壙（図版第54・118・136・138・139・169）

Q4-f0-g0-f1-g1グリッドで、26・28号墓壙などと重複して確認された。26・28号墓壙を切っている。平面形態は、直径71cm、深さ93cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、南向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、銭6枚、数珠である。雁首部には刻みがみられる。銭は銅銭の寛永通寶で、内1枚は背に「元」の文字をもつものである。数珠（図版第136-1）は、直径1.05cmほどの大きさのものが1個確認された。ガラス製で白色を呈する。

28号墓壙（図版第54・118・139・169）

Q3-f9-g9、Q4-f0-g0グリッドで、27・30号墓壙などと重複して確認された。本墓壙が27・29号墓壙に切られ、僅か残っているに程度で、平面形態はわからない。人骨も僅かな残りで、埋葬形態はわからない。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、銅銭6枚、かわらけである。銅銭はいずれも寛永通寶で、内3枚には背に「文」の文字がある。かわらけは直径9.6cm、高さ2.1cmで、底に回転糸切痕がある。

29号墓壙（図版第54・118・139・169）

28号墓壙と同じグリッドで、28・30号墓壙などと重複して確認された。28号墓壙を切り、30号墓壙の上に乗る。平面形態は、直径1m、深さ53cmほどの円形を呈するものと考えられる。埋葬形態は、南向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、銅銭6枚である。銅銭はいずれも寛永通寶で、内3枚

の背に「文」の文字がみられる。

30号墓壙（図版第54・118・136・139・169）

29号墓壙と同じグリッドで、29・169号墓壙などと重複して確認された。平面形態は、長さ1.11m、幅84cm、深さ73cm程の長方形を呈する。埋葬形態は、南向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、銅鏡4枚、数珠、陶器碗である。銅鏡はいずれも寛永通寶で、内1枚は背に「文」の文字をもつ。数珠（図版第136-2～4）は、ガラス製の白色（同2～3）のもの2個と、深緑色（同4）のもの1個である。陶器碗は瀬戸美濃窯製品で、内外面に飴釉が塗られている。

31号墓壙（図版第54・118）

Q4-e0・f0・e1・f1グリッドで、133号墓壙と重複して確認された。本墓壙が133号墓壙の上に乗って造られている。平面形態は長軸1.1m、短軸93cm、深さ58cmほどの梢円形を呈する。埋葬形態は、脚部を折り曲げた北向きの座葬である。出土遺物は、瀬戸美濃窯製品の陶器碗で、飴釉が塗られている。

32号墓壙（図版第55・118）

Q4-e0・f0・e1・f1グリッドで、62・78号墓壙などと近接して確認された。平面形態は、長軸98cm、短軸79cm、深さ87cmほどの梢円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、陶器である。陶器は、灰釉を内外面に塗った小碗で、ぐいのみであろう。

62号墓壙（図版第55・120・143）

Q4-e0・f0・e2・f2グリッドで、32号墓壙と近接して確認された。平面形態は、長さ1.08m、幅77cm、深さ85cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、銅鏡6枚、大小の陶器碗である。銅鏡は、いずれも寛永通寶で、内1枚の背に「文」の文字がみられる。陶器は、小さいものが内外面に飴釉を塗った小碗で、ぐいのみであろう。大きいものが、唐津焼きの刷毛目碗で、内外面と高台の内側に黒褐色と白色の釉が渦巻き状に塗られている。

78号墓壙（図版第55・121・144）

Q4-e0・f0・e1・f1グリッドで、113号墓壙と重複して確認された。本墓壙が113号墓壙を切っている。平面形態は、長さ92cm、幅71cm、深さ88cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、脚部を折り曲げた南向きの寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、銅鏡6枚である。銅鏡はすべて寛永通寶で、内2枚が背に「文」の文字をもつ。

113号墓壙（図版第55・123・147）

78号墓壙と同じグリッドで、78・96号墓壙と重複して確認された。本墓壙が、78・96号墓壙に切られている。平面形態は、長さ98cm、幅69cm、深さ40cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、頭が南向きでかつ横向きの寝葬と考えられるものである。出土遺物は、銅鏡6枚、磁器碗の破片である。銅鏡はいずれも寛永通寶で、内1枚の背に「文」の文字がある。磁器碗は、瀬戸美濃焼きの染め付けの端反碗である。

33号墓壙（図版第55・139）

Q3-e9・f9、Q4-e1・f1グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.5m、短軸1.05m、深さ30cmほどの不整形の梢円形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りが悪く不明である。出土遺物は、銅鏡6枚である。いずれも寛永通寶で、内2枚の背に「文」の文字がある。

34号墓壙（図版第56・118・139）

Q3-e9・f9、Q4-e0・f0グリッドで、35号墓壙と重複して確認された。本墓壙が35号墓壙を切っている可能性が強い。平面形態は、長軸1.3m、短軸90cm、深さ50cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、南向きの寝葬ではないかと考えられる。出土遺物は、銅鏡6枚、陶器碗である。銅鏡は、全て寛永通寶で、内2枚の背に「文」の文字がある。陶器碗は、瀬戸美濃焼きで内外面に鉄釉が塗られた小碗で、ぐいのみと考えられる。なお内面と底部とに重ね焼きの目跡がみられる。

35号墓壙（図版第56・118・139）

34号墓壙と同じグリッドで、34号墓壙と重複して確認された。本墓壙が34号墓壙に切られている可能性が強い。平面形態は、長軸1.46m、短軸1.1m（推定）、深さ30cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、南向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、火打金、火打石（長石製）、銅鏡22枚、磁器碗片である。銅鏡は全て寛永通寶で、内8枚の背に「文」の文字がみられる。磁器碗は、半磁器のような瀬戸美濃焼きの染め付けの端反碗である。

36号墓壙（図版第56・140）

Q3-d9・e9、Q4-d1・e1で、151号墓壙と接して確認された。墓壙の埋土中の上部において、頭大の躰2個を確認した。平面形態は、長軸1.4m、短軸1.15m、深さ55cmほどの楕円形ないし長方形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど残っておらず、平面形態からすれば、寝葬と考えられる。出土遺物は、銅鏡14枚である。いずれも寛永通寶で、内4枚は背に「文」の文字をもつ。

37号墓壙（図版第56・119・140）

Q3-d9・f9、Q4-d0・f0グリッドで確認された。墓壙内の西壁側に中段があることから、この中段に対して39号墓壙とした。39号墓壙の人骨、出土遺物などから、本墓壙が39号壙を切って掘り込まれたものと考えておきたい。平面形態は、直径95cm、深さ90cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、南向きの座葬と考えられる。出土遺物は、39号と分けることができないが、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、寛永通寶の銅鏡6枚である。

39号墓壙（図版第56・119・140）

37号墓壙を参照。

38号墓壙（図版第56・119・140）

Q3-c9・e9、Q4-c0・e0グリッドで、単独で確認された。平面形態は直径1.35m、深さ50cmほどの円形と考えられる。埋葬形態は、南向きの寝葬と思われる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、銅鏡6枚、かわらけである。銅鏡は背に「文」の文字をもつもの3枚を含む寛永通寶5枚と、中国鏡の元祐通寶である。かわらけは直径10.8cm、高さ2.5cmで、底部が回転糸切りである。

40号墓壙（図版第56・119・140・141）

Q3-d9・e9、Q4-d1・e1グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.12m、幅80cm、深さ38cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打石（長石製）、銅鏡6枚である。銅鏡は全て寛永通寶で、内2枚の背に「文」の文字がある。

41号墓壙（図版第57・119・141）

Q 4 - d 0 · e 0 · d 1 · e 1 グリッドで、42号墓壙と重複して確認された。平面形態は、直径88cm、深さ68cmほどの円形と考えられる。埋葬形態は、北向きの座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部が2本、寛永通寶の銅錢3枚である。

42号墓壙（図版第57）

41号墓壙と同じグリッドで、41号墓壙と重複して確認された。平面形態は、直径80cm、深さ85cmほどの円形と考えられる。埋葬形態は、北向きの座葬と考えられる。出土遺物は、まったくない。

43号墓壙（図版第57・119・141）

Q 3 - c 9 · d 9 · Q 4 - c 0 · d 0 グリッドで、231号墓壙と重複して確認された。墓壙の埋土中の上部において、頭大の環が4個ほど確認された。平面形態は、西壁側に中段をもつ長さ1.13m、幅1.05m、深さ80cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きの座葬が考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に「文」の文字をもつもの4枚を含む寛永通寶の銅錢6枚である。

44号墓壙（図版第57・119・141）

Q 3 - c 8 · d 8 · c 9 · d 9 グリッドで、単独に確認された。平面形態は、直径1.25m、深さ60cmほどの円形である。埋葬形態は、南向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、銅錢の寛永通寶6枚である。

45号墓壙（図版第57・119・141）

44号墓壙と同じグリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径90cm、深さ88cmほどの円形である。埋葬形態は、人骨が僅かに残っているのみで不明であるが、平面形態から座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の吸い口部、火打金、背に「文」の文字をもつもの1枚を含む寛永通寶の銅錢6枚である。

46号墓壙（図版第57・141）

Q 3 - c 8 · d 8 · Q 4 - c 0 · d 0 グリッドで、59号墓壙と接して確認された。平面形態は、長さ1.17m、幅95cm、深さ35cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど残っておらず不明である。出土遺物は、銅錢12枚である。うち寛永通寶は10枚で、うち背に「文」の文字をもつものが8枚を占める。残りはいずれも中国錢の元祐通寶である。

59号墓壙（図版第57・142）

46号墓壙と同じグリッドで、46号墓壙に接して確認された。平面形態は、長さ1.2m、幅1m、深さ53cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、脚部を折った東向きの座葬である。出土遺物は、背に「元」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

47号墓壙（図版第57）

Q 3 - b 8 · d 8 · b 9 · d 9 グリッドで、119号墓壙と接して確認された。平面形態は、長さ1.3m、幅1m、深さ48cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、まったくみられない。

48号墓壙（図版第58・119・141）

Q 3 - c 8 · d 8 · c 9 · d 9 グリッドで確認された。平面形態は、長さ1.1m、幅95cm、深さ50cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、不明である。出土遺物は、雁首部と吸い口部とが竹で繋がれた完全な銅製煙管、火

打金、背に「文」残りは文字をもつもの3枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

49号墓壙（図版第58・142）

Q 3 - b 7 · c 7 · b 9 · c 9 グリッドで、69号墓壙などと重複して確認された。本墓壙が69号墓壙を切っている。平面形態は、直径93cm、深さ1.21mほどの円形を呈する。埋葬形態は、西向きの脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、背に全て「文」の文字をもつ寛永通寶の銅錢6枚である。

69号墓壙（図版第58・120・143）

49号墓壙と同じグリッドで、49号墓壙と重複して確認された。49号墓壙に切られている。平面形態は、長さ1.16m、幅70cm（推定）、深さ88cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつもの1枚を含んだ寛永通寶の銅錢5枚、大小のかわらけ2個である。大きい方が直径10.7cm、深さ2.8cm、小さい方が直径6.4cm、深さ1.4cmほどで、底はいずれも回転糸切りである。

82号墓壙（図版第58・144）

69号墓壙と同じグリッドで、125号墓壙と重複して、また69号墓壙と近接して確認された。平面形態は、直径72cm、深さ65cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きの脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅錢の寛永通寶1枚である。

125号墓壙（図版第58）

Q 3 - b 7 · c 7 · b 8 · c 8 グリッドで、82・103号墓壙と重複して確認された。これらに切られたものと思われ、平面形態は不明である。人骨も、僅かに確認されたのみで、埋葬形態は不明である。また、出土遺物も全くみられない。

50号墓壙（図版第58・119・142）

49号墓壙と同じグリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.25m、短軸1.1m、深さ40cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど残っておらず不明だが、平面形態から寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の歯首部、火打金、背に「文」の文字をもつもの3枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚、かわらけ1個である。かわらけは、直径9.2cm、深さ2.5cmで、底は回転糸切りのものである。

51号墓壙（図版第59・119）

Q 3 - b 9 · c 9 、 Q 4 - b 0 · c 0 グリッドで単独で確認されたが、上下に2段に埋葬がおこなわれていた。平面形態は直径1.4m、深さ1.22mほどの楕円形を呈する。

上段のものは深さ60cmほどに埋葬されている。脚部を折った南向きの座葬である。出土遺物は、錢がある。下段は深さ98cmほどに埋葬されていた。脚部を折った東向きの座葬である。遺物は寛永通寶と銅製煙管の吸い口部である。

52号墓壙（図版第59）

Q 3 - b 8 · c 8 、 Q 4 - b 0 · c 0 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸77cm、幅63cm、深さ32cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りが少なく分からない。出土遺物は、全くない。

53号墓壙（図版第59・119）

Q 3 - b 9 · d 9 、 Q 4 - b 0 · d 0 グリッドで、90号墓壙と同一墓壙内で重複して確認された。本墓壙が90

号墓壙を切っている。平面形態は、長さ1.3m、幅90cm、深さ73cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、脚部を折り曲げた南向きの寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金2である。

90号墓壙（図版第59・121・145）

53号墓壙と同じグリッドで確認された。53号墓壙と同一墓壙内で、53号墓壙に切られている。平面形態は、長さ1.2m、幅80cm（推定）、深さ38cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど残っておらず確定できないが、平面形態から寝葬と考えられる。出土遺物は、火打金、全て背に「文」の文字をもつ寛永通寶の銅錢6枚、かわらけ1枚である。かわらけは、直径9.5cm、高さ2.4cmほどで、底は回転糸切りである。

54号墓壙（図版第59・119・142）

Q 3 - b 9 · c 9、Q 4 - b 0 · c 0 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ78cm、幅70cm、深さ28cmほどの矩形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど残っておらず、不明である。出土遺物は、銅錢6枚、かわらけ2枚である。銅錢は、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶4枚、中国錢の永楽通寶1枚、同元祐通寶1枚である。

55号墓壙（図版第59・119・142）

Q 3 - c 9 · d 9、Q 4 - c 0 · d 0 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.44m、短軸1.13m、深さ84cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど残っていないため不明である。しかし墓壙の底が狭いことから座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の吸い口部、背に「文」の文字をもつもの2枚を含む寛永通寶の銅錢5枚である。

56号墓壙（図版第59・119・142）

Q 3 - b 9 · c 9、Q 4 - b 0 · c 0 グリッドで、148号墓壙などと接して確認された。平面形態は、長さ1.36m、幅75cm、深さ50cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、脚部を折り曲げた南向きの寝葬である。出土遺物は、櫛、銅錢6枚、かわらけ1枚である。銅錢は背に「文」の文字をもつもの2枚を含めた寛永通寶5枚、それに中国錢の1枚である。かわらけは、直径11.3cm、高さ2.7cmで、底は回転糸切りである。

57号墓壙（図版第60・119）

Q 3 - a 9 · b 9、Q 4 - a 0 · b 0 グリッドで、単独で確認された。なお本墓壙に続く北東側に、墓壙と考えられる掘り込みがみられる。本墓壙の平面形態は、直径80cm、深さ40cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、東向きの座葬と考えられる。出土遺物は、直径4.4cmほどの肥前焼きの白磁紅猪口のみである。

58号墓壙（図版第60・142）

Q 3 - b 9 · c 9、Q 4 - b 0 · c 0 グリッドで、67・77号墓壙と接しながら確認された。平面形態は、長軸1.26m、短軸1.07m、深さ40cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど残っておらず不明である。出土遺物は、いずれも寛永通寶の銅錢で、内1枚は背に「文」の文字をもつものである。

60号墓壙（図版第60・119・142）

Q 3 - b 9 · c 9、Q 4 - b 0 · c 0 グリッドで、56号墓壙と接して確認された。平面形態は、直径1.28m、深さ75cmほどの不整円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、寛永通寶の銅錢3枚と鉄銭1枚である。

61号墓壙（図版第60・120・143）

Q 3 - c 9 · d 9 、 Q 4 - c 0 · d 0 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、1.11m、幅91cm、深さ53cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、南向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつものの2枚を含めた寛永通寶6枚、陶器碗、かわらけである。陶器碗は内外面に灰釉を塗った小碗である。かわらけは直径11.5cm、高さ3.2cmで、底の周辺に回転糸切痕がみられる。

63号墓壙（図版第60・120・143）

Q 4 - d 0 · e 0 · d 1 · e 1 グリッドで、237号墓壙と重複して確認された。本墓壙が237号墓壙を切っている。平面形態は、長軸1.22m、短軸81cm、深さ56cmほどの楕円形を呈する。南向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に「文」の文字をもつもの3枚を含めた寛永通寶の銅錢7枚である。

64号墓壙（図版第60・120・143）

Q 4 - d 1 · f 1 · d 2 · f 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、上部は長軸1.1m、短軸96cmほどの楕円形を呈するが、深さ82cmの底部では長さ77cm、幅66cmほどの長方形となる。埋葬形態は、南向きで脚部を折った寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、直径3.5cmほどの半球形で上部に紐通しのような直径7mmほどの鉄製小環を取り付けた銅製品、寛永通寶の銅錢2枚と鉄錢2枚である。

65号墓壙（図版第61）

Q 4 - b 0 · c 0 · b 1 · c 1 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.3m、短軸1.07m、深さ1mほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬と考えられる。出土遺物は、鉄錢2枚である。

66号墓壙（図版第61・120・143）

Q 4 - a 0 · c 0 · a 1 · c 1 グリッドで、単独で確認されたが、北壁が3段に掘られており、他の墓壙の存在も考えられる。平面形態は、直径80cm、深さ1mほどの円形を呈する。埋葬形態は南向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、背に「文」の文字をもつ寛永通寶の銅錢1枚、陶器碗である。陶器碗は瀬戸美濃焼きで、外面に灰釉を施し2箇所に鉄軸を流して模様としている。なお修理痕が認められる。

67号墓壙（図版第61・120）

Q 3 - b 9 · c 9 、 Q 4 - b 0 · c 0 グリッドで、77号墓壙などと重複して確認された。本墓壙が77号墓壙を切っている。平面形態は、直径84cm、深さ1.17mほどの円形を呈する。埋葬形態は、東向きの座葬である。出土遺物は銅製煙管の雁首部と吸い口部である。

68号墓壙（図版第10図）

Q 3 - f 9 · h 9 、 Q 4 - f 1 · h 1 グリッドで、単独で確認された。人骨などは全く確認されなかった。

70号墓壙（図版第61・120・143）

Q 3 - b 7 · c 7 · b 8 · c 8 グリッドで、単独で確認された。平面形態は長さ1.24m、幅77cm、深さ66cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は南向きの脚部を折った寝葬である。出土遺物は、銅製煙管、内外面に鉄軸を施した陶器小碗、寛永通寶の銅錢5枚、中国の銅錢の元祐通寶1枚である。

71号墓壙（図版第61・120・143）

70号墓壙と同じグリッドで単独で、確認された。平面形態は長さ1m、幅96cm、深さ88cmほどの矩形を呈する。埋葬形態は、西向きで脚部を折った寝葬である。出土遺物は、火打石（長石製）の張り付いた火打金、背に「文」の文字をもつもの2枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚、内外面に鉄軸を施した陶器の高台付碗、それに混入品である昭和期の磁器碗である。

72号墓壙（図版第61・120）

Q3-a9・b9、Q4-a0・b0グリッドで、57号墓壙と接して確認された。墓壙の埋土中の上部に、頭大の蝶1個の入っているのが確認された。平面形態は、長さ77cm、幅54cm、深さ55cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は不明である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、かわらけである。かわらけは直径10.2cm、高さ2.2cmほどで、底部は回転糸切りである。

73号墓壙（図版第62・143・144）

Q3-a9・b9、Q4-a0・b0グリッドで、単独で確認された。角張った土坑の隅で確認されたもので、平面形態は長方形ではないかと考えられる。埋葬形態は、南向きの脚部を折った寝葬と考えられる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

74号墓壙（図版第62・121・144）

P3-a9、Q3-b9、P4-j0、Q4-b0グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.35m、短軸1.11m、深さ55cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は南向きの脚部を折った寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、寛永通寶の銅錢6枚である。

75号墓壙（図版第62・121・144）

Q3-a8・b8・a9・b9グリッドで、149号墓壙と重複して確認された。平面形態は直径72cm、深さ50cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、灰軸を内外面に施した陶器高台碗大小、背に「文」の文字をもつもの1枚を含む寛永通寶6枚である。

76号墓壙（図版第62）

Q4-a0・b0・a1・b1グリッドで、単独で確認された。ただし大きな土坑の中に掘られており、他に墓壙のあった可能性もある。平面形態は、長軸1.6m、幅1.1m、深さ60cmほどの楕円形を呈する。また底部には小穴があり、中に石がみられる。埋葬形態は、南向きの脚部を折った寝葬である。出土遺物はない。

77号墓壙（図版第62・121・144）

Q3-a9・c9、Q4-a0・c0グリッドで、67号墓壙と重複して確認された。本墓壙が67号墓壙に切られている。平面形態は、直径1m、深さ55cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に「佐」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶のうど銅錢3枚、鉄銭3枚である。

79号墓壙（図版第62・121・144）

Q3-a8・b8・a9・b9グリッドで、120号墓壙に近接して確認された。

本来の平面形態は長方形と考えられるが、西側に張り出しがみられ、重複していた可能性もある。おおよそ長さ1.1m、幅85cm、深さ30cmほどのものと考えられる。人骨はほとんど残っていないが、墓壙の形態から脚部を折

り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に「文」の文字をもつ寛永通寶の銅錢1枚である。

80号墓壙（図版第10図）

Q 3 - b 8 · c 8 · b 9 · c 9 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.25m、幅91cm、深さ48cmほどの長方形を呈する。人骨がほとんど残っておらず埋葬形態は、不明である。また、出土遺物も全く確認できなかった。

81号墓壙（図版第63・121・144）

Q 3 - b 8 · c 8 · b 9 · c 9 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.27m、幅95cm、深さ45cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りが少なく不明だが、墓壙形態からすれば、脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石、背に「文」の文字をもつもの5枚を含めた寛永寶6枚、それに調査時に形が崩れてしまったが拂などである。

83号墓壙（図版第63・144）

Q 3 - b 7 · c 7 · b 8 · c 8 グリッドで、単独で確認された。平面形態は長さ90cm、幅80cm、深さ70cmほどの長方形のような形を呈するが、底の形態から円形といえよう。人骨が僅かに確認されたに過ぎないが、墓壙の形態から座葬と考えられる。出土遺物は、背に「小」の文字をもつもの1枚、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢4枚である。

84号墓壙（図版第63・121・144）

P 3 - a 8 · a 9 、 Q 3 - a 8 · a 9 グリッドで、確認された。石の脇の円形の窪みから硯と銭とが出土したので墓壙としてとらえたが、人骨は全く認められなかった。このため墓壙の平面形態や、埋葬形態は不明である。硯は、薄い緑色を呈したもので、
製である。銭は寛永通寶の銅錢3枚である。

85号墓壙（図版第63・121）

Q 3 - e 8 · f 8 · e 9 · f 9 グリッドで、24号墓壙などと接して確認された。平面形態は長さ90cm、幅60cm、深さ68cmほどの長方形を呈するが、上縁と底の形態に齟齬が見られる。埋葬形態は、南向きの脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、かわらけである。かわらけは、直径10.9cm、高さ2.7cmほどで、底部は回転糸切りである。

86号墓壙（図版第63・121・144）

Q 3 - d 8 · e 8 · d 9 · e 9 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径96cm、深さ1.06mほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きの脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、火打金、寛永通寶の銅錢6枚、かわらけである。かわらけは、直径9.5cm、高さ2.6cmほどで、底は回転糸切りである。

87号墓壙（図版第63・144・145）

Q 3 - d 8 · e 8 · d 9 · e 9 グリッドで、他の墓壙と重複して確認された。平面形態は、長さ1.26m、幅90cm、深さ60cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きの脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつもの3枚を含めた寛永通寶の銅錢5枚である。

88号墓壙（図版第63・121・145）

Q 3 - f 8 · g 8、Q 4 - f 0 · g 0 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.15m、幅74cm、深さ75cmほどの長方形を呈する。人骨はほとんど残っていないが、埋葬形態は墓壙から脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、内外面に鉄軸を施し高台付碗、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

89号墓壙（図版第63・121）

Q 3 - f 9 · h 9、Q 4 - f 0 · h 0 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径84cm、深さ1mほどの円形ないし椭円形を呈する。埋葬形態は、西向きの脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の吸い口部、火打金、火打石（長石製）、錫び付いた銅錢2枚、鉄錢4枚である。

91号墓壙（図版第64・145）

Q 4 - c 1 · d 1 · c 2 · d 2 グリッドで、92号墓壙と重複して確認された。平面形態は、長さ1.3m、幅75cm、深さ76cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きの脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢3枚である。

92号墓壙（図版第64・121・145）

91号墓壙と同じグリッドで、91号墓壙と重複して確認された。平面形態は、長さ1.2m、幅90cm、深さ77cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど残っていないが91号墓壙同様の寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、火打金、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

93号墓壙（図版第64・145）

Q 4 - c 1 · e 1 · c 2 · e 2 グリッドで、154-1号墓壙と接して確認された。平面形態は、長さ1.3m、幅90cm、深さ74cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、人骨は残りが少ないものの、墓壙の形態から東向きの脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、寛永通寶の銅錢6枚である。

94-1号墓壙（図版第64・122・145）

Q 4 - d 0 · e 0 · d 1 · e 1 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.29m、短軸1m、深さ70cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、墓壙形態とは違う座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部1と吸い口部2、火打金、火打石、寛永通寶の銅錢1枚、それに鉄錢4枚である。

94-2号墓壙（図版第64・145）

Q 3 - a 7 · b 7 · a 8 · b 8 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸96cm、短軸69cm、深さ18cmほどの楕円形を呈する。人骨の残りが僅かであったため、埋葬形態は不明である。しかし、墓壙形態からは座葬と考えられる。出土遺物は、寛永通寶の銅錢4枚、それに鉄錢1枚である。

95号墓壙（図版第64・145）

Q 3 - b 8 · c 8 · b 9 · c 9 グリッドで、221号墓壙と近接して確認された。また北側にも墓壙状の掘り込みがみられる。平面形態は、長さ1.02m、幅96cm、深さ68cmほどの長方形と考えられる。埋葬形態は、南向きの脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつもの1枚を含む寛永通寶の銅錢6枚である。

96号墓壙（図版第65・122・146）

Q 4 - e 0 · f 0 · e 1 · f 1 グリッドで、113号墓壙と重複して確認された。本墓壙が113号墓壙を切っている。平面形態は、直径95cm、深さ88cmほどの円形と考えられる。埋葬形態は、北向きの脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部1、吸い口部2、背に「文」の文字をもつもの1枚を含む寛永通寶7枚と鉄鏡4枚、中国の銅錢の宣和通寶1枚、内外面に鉄軸を施した陶器高台付碗、内外面に灰釉と鉄軸を施した陶器高台碗、外面とみこみ部に輪花文をもつ瀬戸美濃の陶器染付の広東碗、外面に草花文を描く信楽焼端反碗などである。

なお、96・134号墓壙との間にも、長さ1.05m、幅80cm、深さ78cmほどの平面形態が長方形を呈する部分があり、人骨、出土遺物は全く残っていないが墓壙と考えられるものである。

134号墓壙（図版第65・124・133・148）

96号墓壙と同じグリッドで、113号墓壙に切られて確認された。平面形態は、直径80cm、深さ1.15mほどの円形を呈する。埋葬形態は、東向きかと考えられる座葬である。出土遺物は、銀製で彫り彫りの施された煙管の雁首部と吸い口部、火打石（長石製）の付着した火打金、カンザシ、背に「文」の文字をもつもの1枚を含む寛永通寶2枚である。

97号墓壙（図版第65・122・146）

Q 3 - a 9 · b 9 、 Q 4 - a 0 · b 0 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.25m、幅90cm、深さ94cmの長方形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど残っておらず不明であるが、墓壙形態からすれば寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、背に「文」の文字をもつもの1枚を含む寛永通寶の銅錢6枚である。

98号墓壙（図版第65・122・146）

Q 4 - e 0 · f 0 · e 1 · f 1 グリッドで、133号墓壙と重複して確認された。どちらが切っているのか、両者が完全に残っており、前後関係は分からぬ。平面形態は、長さ1.08m、幅82cm、深さ72cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きの脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢1枚、瀬戸美濃の磁器の染付広東碗である。

133号墓壙（図版第65・124・148）

98号墓壙と同じグリッドで、31・98号墓壙と重複して確認された。31号墓壙が上にのり、98号墓壙との前後関係は分からぬ。平面形態は、長さ98cm、幅78cm、深さ87cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きの脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、内外面に灰釉を施す陶器高台付碗、寛永通寶の銅錢6枚である。

100号墓壙（図版第65）

Q 3 - a 8 · c 8 、 Q 4 - a 9 · c 9 グリッドで、222号墓壙を本墓壙が切ったような状況で確認された。平面形態は、長軸1.25m、短軸98cm、深さ54cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど残っておらず不明である。しかし墓壙の底が円形に近いことから、座葬と考えられる。出土遺物は、みられなかった。

101号墓壙（図版第66・122・146）

Q 3 - d 9 · e 9 、 Q 4 - d 0 · e 0 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.23m、深さ76cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、南向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に「小」の文字をもつもの1枚を含む寛永通寶の銅錢6枚である。

102号墓壙（図版第66・122・146）

Q 3 - d 9 · e 9, Q 4 - d 0 · e 0 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、2段に掘り込まれた墓壙で、直径1.26m、深さ76cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の吸い口部、吸い口部に付着した火打金、それに火打石（長石製）、寛永通寶の銅錢4枚、鉄錢1枚である。

103号墓壙（図版第66・122）

Q 3 - b 7 · c 7 · b 8 · c 8 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.75m、短軸75cm、深さ36cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、南向きの脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、かわらけ1枚である。このかわらけは直径4.1cm、高さ2.3cmほどで、底は回転糸切りである。

104号墓壙（図版第66・145）

Q 3 - f 9 · h 9, Q 4 - f 0 · h 0 グリッドで、単独で確認された。平面形態は直径80cm、深さ1.12mほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬と考えられる。出土遺物は、寛永通寶の銅錢1枚と鉄錢3枚である。

105号墓壙（図版第66・122・133）

Q 3 - f 9 · g 9, Q 4 - f 1 · g 1 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸94cm、短軸80cm、深さ36cmの楕円形ないし円形である。埋葬形態は、西向きの脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銀製の煙管、鉄錢4枚である。煙管は雁首部に4箇所にわたって条線が刻まれ、吸い口部には、キキョウなのであるか文様が彫り込まれている。

106号墓壙（図版第66・122）

Q 4 - g 0 · h 0 · g 1 · h 1 グリッドで、16号墓壙と接して確認された。平面形態は、長径96cmほどの不整円形を呈するが、深さ88mほどの底では長さ83cm、幅68cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、付着して固まった鉄錢である。

107号墓壙（図版第66・122・146）

Q 4 - f 1 · g 1 · f 2 · g 2 グリッドで、単独で確認された。なお、西側に墓壙状のものが接している。平面形態は、直径89cm、深さ76cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、西向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢4枚、鉄錢1枚である。

108号墓壙 欠番

109号墓壙（図版第67・123・146）

Q 4 - c 0 · d 0 · c 1 · d 1 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.09m、幅71cm、深さ91cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢5枚で、内1枚は拓本不能である。

110号墓壙（図版第67・123・146）

Q 3 - c 7 · d 7 · c 8 · d 8 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.18m、短軸94cm、深さ88cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、人骨が少ないものの北向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつもの3枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚、瀬戸美濃焼きで内外面に鉄釉を施した陶器高台付小碗である。

111号墓壙（図版第67・123・146）

Q3-c8・e8、Q4-c0・e0グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径87cm、深さ70cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、西向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢6枚である。

112号墓壙（図版第67・123・146・147）

Q4-d0・e0・d1・e1グリッドで、墓壙と考えられる掘り込みに接して確認された。平面形態は、長さ1.03m、幅90cm、深さ93cmほどの長方形を呈するものと考えられる。埋葬形態は、南東に向く脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢4枚である。

114号墓壙（図版第67・123）

Q3-e9・g9・e0・g0グリッドで、単独で確認された。平面形態は長軸93cm、短軸82cm、深さ68cmほどの梢円形ないし円形を呈する。埋葬形態は、脚部を折り曲げた横位の寝葬かと考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金である。

115号墓壙（図版第67・123・147）

Q4-e0・f0・e1・f1グリッドで、墓壙と考えられる掘り込みと重複して確認された。平面形態は、長さ1.16m、幅1.03m、深さ95cmほどの正方形ないし円形と考えられる。埋葬形態は、脚部を折り曲げた寝葬と考えられるが定かでない。出土遺物は、銅製煙管の雁首部1と吸い口部2、寛永通寶の銅錢6枚である。

115-2号墓壙（図版第67・156）

Q4-f0・g0・f1・g1グリッドで、単独で確認された。平面形態は、上部では梢円形に近いが、底では長さ95cm、幅68cm、深さ73cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、東向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、寛永通寶の銅錢2枚である。

116号墓壙（図版第68・123・147）

Q4-e0・f0・e1・f1グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.12m、短軸99cm、深さ86cmほどの梢円形ないし円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、寛永通寶の銅錢4枚、鉄錢2枚である。

117号墓壙（図版第68・123・147）

Q4-b0・d0・b1・d1グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.12m、深さ1.04mほどの円形を呈するものと考えられる。埋葬形態は、南向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、火打金、寛永通寶の銅錢2枚である。

118号墓壙（図版第68・123・147）

Q3-b8・c8・b9・c9グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.1m、深さ95cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、完全な銅製煙管、火打金、火打石（長石製）、寛永通寶の銅錢5枚である。

119号墓壙（図版第68・123・147）

Q3-c8・d8・c9・d9グリッドで、47号墓壙と接して確認された。平面形態は、長軸1.3m、短軸

95cm、深さ57cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、完全な銅製煙管、火打金、背に「文」の文字をもつもの5枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

120号墓壙（図版第68・123・147）

Q 3-a 8・b 8・a 9・b 9グリッドで、東側に墓壙かと考えられる掘り込みと接して確認された。平面形態は、1.01m、深さ1.05mほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢5枚、鉄錢である。

121号墓壙（図版第68・124・147）

Q 3-b 8・c 8・b 9・c 9グリッドで、単独で確認された。墓壙は2段で掘られており、あるいは他に墓壙の存在した可能性もある。平面形態は、長軸1.5m、幅1.01m、深さ82cmほどの楕円形ないし円形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りが僅かで正確でないが、座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢4枚、鉄錢1枚である。

122号墓壙（図版第69・124・147・156）

Q 3-b 7・c 7・b 8・c 8グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径90cm、深さ64cmほどの円形と考えられる。埋葬形態は、西向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に波文をもつもの1枚、背に「文」の文字をもつもの1枚を含む寛永通寶の銅錢4枚である。

123号墓壙（図版第69・147）

Q 3-b 7・c 7・b 8・c 8グリッドで、単独で確認された。しかし、墓壙の外側で人骨が確認されており、西側に別の墓壙の存在した可能性がある。平面形態は、直径75cm、深さ46cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、南東向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、背に波の文様をもつもの1枚を含む寛永通寶の銅錢5枚である。

124号墓壙（図版第69・148）

Q 3-c 7・d 7・c 8・d 8グリッドで、単独で確認された。なお、北側の半分ほどが事業用地外である。平面形態は、長さ1.2m、幅80cm、深さ88cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、頭部付近から出土した寛永通寶の銅錢1枚である。

125号墓壙（図版第58）

Q 3-b 7・c 7・b 8・c 8グリッドで、82・103号墓壙に挟まれるような格好で確認された。しかし、両墓壙の間に人骨が僅かに確認できたに過ぎず、墓壙の平面形態、埋葬形態は不明である。出土遺物は、全くみられない。

126号墓壙（図版第69・124・148）

Q 3-a 7・b 7・a 8・b 8グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1m、幅1m、深さ57cmほどの円形ないし方形を呈する。埋葬形態は、南東向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の吸い口部、火打金、火打石（長石製）、寛永通寶の銅錢4枚、鉄錢1枚である。

127号墓壙 欠番。

128号墓壙（図版第69・124・148）

Q 4 - f 2 · g 2 · f 3 · g 3 グリッドで、単独で確認された。上部は長軸1.45m、幅95cmほどの楕円形を呈するが、深さ79cmほどの底部で円形を呈しており、もともとの平面形態は円形と考えられる。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢1枚、それに鉄錢のかたまりである。

129号墓壙（図版第69・124・148）

Q 4 - d 1 · f 1 · d 2 · f 2 グリッドで、単独で確認された。直径1.32m、深さ1.16mほどの、やや不整形の円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢4枚、それに鉄錢の銷びた塊である。

130号墓壙（図版第69・124・148・169）

Q 4 - c 0 · d 0 · c 1 · d 1 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.33m、短軸69cm、深さ49cmほどの楕円形ないし長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた横位の寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、寛永通寶の銅錢6枚、内外面に灰釉を施した陶器高台付小碗である。

131号墓壙（図版第70・124・148）

Q 3 - c 9 · d 9 · Q 4 - c 0 · d 0 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径92cm、深さ95cmほどの円形を呈するものである。埋葬形態は、北東向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、寛永通寶の銅錢6枚である。

132号墓壙（図版第70・124・148）

Q 3 - e 8 · f 8 · e 9 · f 9 グリッドで、139号墓壙と接して確認された。平面形態は、長軸1.67m、短軸95cm、深さ1.04m程の楕円形ないし長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、家具の鉄製蝶番、寛永通寶の銅錢11枚、中国の銅錢の照寧元寶1枚、それに南無阿弥陀仏の文字をもつ葬儀銭1枚である。

135号墓壙（図版第70）

Q 3 - e 9 · f 9 · Q 4 - e 0 · f 0 グリッドで、147号墓壙と接して確認された。平面形態は、直径84cm、深さ24cmほどの円形を呈する。調査では、人骨が僅かに確認されたに過ぎない。また、出土遺物についても何ら確認できなかった。

147号墓壙（図版第70・125）

Q 3 - e 9 · f 9 · Q 4 - e 1 · f 1 グリッドで、135号墓壙と接して確認された。平面形態は、長さ1.14m、幅1.02m、深さ60cmほどの、矩形を呈する。埋葬形態は、北東向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部2と吸い口部1、信楽の陶器広東碗である。広東碗は、褐緑色を呈していて、口縁部外面に梅枝に咲く花が描かれている。

136-1号墓壙（図版第70・124）

Q 4 - c 0 · d 0 · c 1 · d 1 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、1.25m、深さ1.1mほどの円形を呈する。なお、墓壙は2段で掘られている。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺

物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、灰釉陶器の仏向具、鏡などである。

136-2号墓壙（図版第70・124）

Q 4-d 0・e 0・d 1・e 1グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径84cm、深さ73cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、向きは不明だが座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部である。

137号墓壙（図版第70・125・148）

Q 4-c 0 d 0 c 1 d 1グリッドで、109号墓壙と近接して確認された。平面形態は、長軸1.32m、短軸96cm、深さ75cmほどの楕円形ないし長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）4、寛永通寶の銅錢6枚である。

138号墓壙 欠番

139号墓壙（図版第85・125・148）

Q 3-e 8・f 8・e 9・f 9グリッドで、11号墓壙などと接して確認された。平面形態は、長軸1.42m、短軸98cm、深さ25cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、寛永通寶の銅錢5枚である。

140号墓壙（図版第71・125・148-149）

Q 4-e 1・f 1・e 2・f 2グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.15m、深さ63cmほどの円形と考えられる。埋葬形態は、人骨がほとんど残っておらず不明である。墓壙形態からすれば、座葬の可能性が高い。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、寛永通寶の銅錢2枚、それに鉄錢1枚である。

141号墓壙（図版第71・125・149）

Q 3-f 9・g 9、Q 4-f 0・g 0グリッドで、15・145号墓壙と接して確認された。平面形態は、直径1m、深さ65cmほどの円形と考えられる。埋葬形態は、西向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅製煙管の吸い口部、寛永通寶の銅錢3枚である。

142号墓壙（図版第71・125・149）

Q 4-e 0・f 0・e 1・f 1グリッドで、単独で確認された。上部では、長軸1.24m、短軸85cm、深さ60cmほどの楕円形を呈するが、底部からすれば平面形態は長さ84cm、幅75cmほどの長方形ないし円形と考えられる。埋葬形態は、座葬である。出土遺物は、ほぼ完全な銅製煙管、内外面に鉄軸を施す陶器高台付小碗、寛永通寶の銅錢6枚である。

143号墓壙（図版第71・125・149）

Q 3-b 6・c 6・b 8・c 8グリッドで、単独で確認された。なお、北側の半分ほどが事業用地外である。平面形態は幅1m、深さ35cmほどで、長さが1.2m前後の長方形を呈するものではないかと考えられる。埋葬形態は、人骨の残りが少なくて不明である。出土遺物は、ほぼ完全に近い銅製煙管、火打金、火打石（長石製）、寛永通寶の銅錢3枚、瀬戸美濃製品で外面に輪花文を、みこみにも花文を描いた陶器碗である。

144号墓壙（図版第71・125・149）

Q 4-e 1・f 1、Q 4-e 3・f 3グリッドで、単独で確認された。平面形態は直径1.08m、深さ95cmほど

の円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢 3 枚である。

145 号墓壙（図版第71・125・149）

Q 3-f 9-g 9、Q 4-f 0-g 0 グリッドで、15・141号墓壙と接して確認された。平面形態は、長さ 1m、幅 95cm、深さ 65cm ほどの長方形を呈するものと考えられる。埋葬形態は、西向きで脚部を折り曲げた寝葬と思われる。出土遺物は、火打金、背に「文」の文字をもつもの 1 枚を含めた寛永通寶の銅錢 6 枚である。

146 号墓壙（図版第85・133）

Q 4-d 0-e 0-d 1-e 1 グリッドで、96号墓壙と接して確認された。平面形態は、長軸 1.54m、幅 94cm、深さ 42cm ほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、背に「文」の文字をもつもの 2 枚を含む寛永通寶の銅錢 5 枚、内外面に灰釉を施した陶器高台付碗、内外面に鉄釉を施した陶器小碗、かわらけである。かわらけは、直径 9.9cm、高さ 2.9cm ほどの大きさで、底は回転糸切りである。

148 号墓壙（図版第71・125・149）

Q 3-b 9-c 9、Q 4-b 0-c 0 グリッドで、56号墓壙と接して確認された。平面形態は、直径 93cm、深さ 83cm 程の円形を呈する。埋葬形態は、北向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の吸い口部、火打石（長石製）の付着した火打金、背に「文」の文字をもつもの 1 枚を含めた寛永通寶の銅錢 5 枚、内外面灰釉を施した陶器高台付小碗である。

149 号墓壙（図版第71・126・149）

Q 3-a 8-b 8-a 9-b 9 グリッドで、75号墓壙と接して確認された。平面形態は、長さ 1m、幅 70cm、深さ 45cm ほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、火打金、火打金（長石製）、背に「文」の文字をもつもの 6 枚を含む寛永通寶の銅錢 7 枚、かわらけ 1 枚である。かわらけは、直径 11cm、深さ 2.5cm ほどで、底は回転糸切りである。

150 号墓壙（図版第72・126・149）

Q 3-b 7-c 7-b 8-c 8 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸 74cm、短軸 60cm、深さ 43cm ほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、背に「文」、「元」の文字をもつもの各 1 枚を含めた寛永通寶の銅錢 3 枚、鉄錢 1 枚ほかである。

151 号墓壙（図版第72・126・149）

Q 3-d 9-f 9、Q 4-d 0-f 0 グリッドで、152号墓壙と重複して確認された。前後関係については不明。平面形態は、長さ 1.12m、幅 85cm、深さ 51cm ほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、鍵穴様の穴が穿たれた 7.6 × 6.4 cm ほどの家具の鉄製金具、火打金、寛永通寶の銅錢 3 枚、鉄錢 2 枚、不明銅錢 1 枚である。

152 号墓壙（図版第72・126・149）

Q 3-e 9-f 9、Q 4-e 1-f 1 グリッドで、151号墓壙と重複して確認された。新旧関係は不明。平面形態は、長さ 1.05m、幅 63cm、深さ 68cm ほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と火打石（長石製）の付着した火打金、寛永通寶の銅錢 4 枚、内外面に鉄

釉の施された陶器高台付小碗3である。

153号墓壙（図版第72・149・150）

Q4-e0・f0・e1・f1グリッドで、98号墓壙と重複して確認された。平面形態は、楕円形と考えられるが、その大半が他の墓壙などで壙されているようである。埋葬形態は、定かではないが脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、寛永通寶の銅錢3枚、鉄錢1枚、中国の銅錢の元豊通寶1枚である。

154-1号墓壙（図版第72・126・150）

Q4-c1・d1・c2・d2グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.03m、幅80cm、深さ70cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢4枚、かわらけ1枚である。かわらけは、直径9cm、深さ2.3cmほどである。

154-2号墓壙（図版第72・150）

Q3-a7・b7・a8・b8グリッドで、単独で確認された。平面形態は長軸1.21m、幅70cm、深さ42cm程の楕円形と考えられる。埋葬形態は、人骨がほとんど残っておらず不明である。出土遺物は、寛永通寶の銅錢2枚である。

155号墓壙（図版第72・150）

Q4-c0・d0・c1・d1グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.3m、幅73cm、深さ40cmほどの長方形ないし楕円形を呈する。埋葬形態は、背骨の位置から西向きの脚部を折り曲げた横臥葬かと思われる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢5枚、中国の銅錢の永樂通寶1枚である。

156号墓壙（図版第72・126・150）

Q4-e2・f2・e3・f3グリッドで、単独で確認された。平面形態は長軸1m、短軸87cm、深さ84cmほどの円形を呈する。埋葬形態は東向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢3枚である。

157号墓壙（図版第73・126・169）

Q4-f2・g2・f3・g3グリッドで、183号墓壙と接して確認された。平面形態は、長軸1.29m、短軸1.07m、深さ84cmほどの楕円形である。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢6枚である。

158号墓壙（図版第73・126・150）

Q4-f2・g2・f3・g3グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.18m、深さ92cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、火打石（長石製）、背に波紋をもつ寛永通寶1枚、鉄錢2枚である。

159号墓壙（図版第73・126）

Q4-e2・f2・e3・f3グリッドで、232号墓壙に接して確認された。平面形態は、直径97cm、深さ94cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬ないし寝葬である。出土遺物は、肥前染付磁器碗、銭である。なお、肥前染付磁器碗は、18世紀前半以前のものである。

160号墓壙（図版第73・126・150）

Q 4 - e 2 · g 2 · e 3 · g 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は長軸1.31m、短軸96cm、深さ91cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、西向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、寛永通寶の銅錢1枚、それに鉄錢5枚である。

161号墓壙（図版第73・126）

Q 3 - f 8 · g 8 · f 9 · g 9 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径80cm、深さ37cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部である。

162号墓壙（図版第73・126・150）

Q 4 - d 2 · e 2 · d 3 · e 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.11m、短軸97cm、深さ72cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、寛永通寶の銅錢3枚、鉄錢3枚である。

163号墓壙（図版第73・127・150）

Q 4 - d 1 · e 1 · d 2 · e 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.32m、短軸1.05m、深さ1.02mほどの、楕円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打石（長石製）、寛永通寶の銅錢2枚、鉄錢3枚である。

164号墓壙（図版第74・127・150）

Q 4 - c 1 · d 1 · c 2 · d 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.26m、短軸83cm、深さ92cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、寛永通寶の銅錢6枚である。

165号墓壙（図版第74・127・150）

Q 4 - d 2 · e 2 · d 3 · e 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.08m、深さ1.19mほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、火打金、寛永通寶の銅錢2枚、鉄錢2枚である。

166号墓壙（図版第74・127・150）

Q 3 - d 8 · e 8 · d 9 · e 9 グリッドで、単独で確認された。なお、北側半分ほどが事業用地外にある。平面形態は、長さ1m、幅90cm、深さ78cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、背骨の位置から東向きで脚部を折り曲げた横臥葬であろう。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚、かわらけ1枚である。かわらけは、直径5.7cm、高さ1.1cmほどである。

167号墓壙（図版第74・127・150）

Q 4 - c 0 · d 0 · c 1 · d 1 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.25m、短軸94cm、深さ50cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど残っておらず不明である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢4枚である。

168号墓壙（図版第74・127・150・151・136）

Q 4 - b 0 · c 0 · b 1 · c 1 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.25m、短軸94cm、深さ63cmほどの橢円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつもの5枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚、かわらけ1枚、ガラス製の白色数珠玉（図版第136－5～7）、木製の数珠玉（同8～9）である。かわらけは、直径9.5cm、高さ2.3cmほどで、底は回転糸切りである。

169号墓壙（図版第74・127・151）

Q 3 - f 9 · g 9、Q 4 - f 0 · g 0 グリッドで、30号墓壙と重複して確認された。平面形態は、長さ1.09m、幅75cm、深さ90cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に「元」の文字をもつもの2枚を含めた寛永通寶の銅錢5枚、鉄錢1枚である。

170号墓壙（図版第75・127・151）

Q 4 - f 0 · g 0 · f 1 · g 1 グリッドで、22号墓壙と近接して確認された。平面形態は、直径1m、深さ95cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、東向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、寛永通寶の銅錢4枚、鉄錢1枚である。

171号墓壙（図版第75・127・151）

Q 4 - d 2 · e 2 · d 4 · e 4 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.33m、短軸1.11m、深さ76cmほどの橢円形を呈する。埋葬形態は、西向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、寛永通寶の銅錢5枚、鉄錢1枚、肥前の筒型碗、煙草入の銅製蓋金具（文様入り）である。なお、肥前の筒型碗は18世紀後半代のものである。

172号墓壙（図版第75・127・151）

Q 4 - e 2 · f 2 · e 3 · f 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は直径1.19m、深さ1.35mほどの円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、寛永通寶の銅錢6枚である。

173号墓壙（第10図、図版第127）

Q 3 - f 8 · g 8、Q 4 - f 0 · g 0 グリッドで、墓壙を確認することはできなかったが、墓壙から出土する陶器やかわらけが発見されたことから、浅い墓壙のあった可能性がみられたことから173号墓壙とした。出土した陶器は、内外面に鉄釉薬を塗った高台付小碗と、かわらけである。また、かわらけは直径9.9cm、高さ3cmほどで、底は回転糸切りである。

174号墓壙（図版第75・128・151）

Q 4 - b 0 · c 0 · b 2 · c 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は直径1.2m、深さ92cmほどの、およそ円形を呈するものである。埋葬形態は、座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、寛永通寶の銅錢5枚である。

175号墓壙 欠番

176号墓壙（図版第75・128）

Q 3 - d 7 · e 7 · d 8 · e 8 グリッドで、177号墓壙と接して確認された。なお、北側半分ほどは事業用地外である。平面形態は、長さ82cm、幅70cm、深さ85cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南東向きで脚部を折

り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、鋸びでお互いが付着している銅製煙管の吸い口部と火打金である。

177号墓壙（図版第75・128・151）

Q3-c7・e7・c8・e8グリッドで、176号墓壙と接して確認された。平面形態は長さ1.01m、幅1.05mほどの矩形を呈する。埋葬形態は、西向きで脚部を折り曲げた座葬ではないかと考えられる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつもの4枚を含む寛永通寶6枚、ともに直径9.5cm、高さ2.1cmほどで底が回転糸切りのかわらけ2枚である。

178号墓壙（図版第75・128・151）

Q4-e1・f1・e2・f2グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.08m、幅80cm、深さ44cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、骨の位置から西向きで脚部を折り曲げた横臥葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢2枚、鉄錢1枚である。

179号墓壙（図版第75・128・151）

Q3-e9・f9、Q4-e0・f0グリッドで、25号墓壙と接して確認された。平面形態は、長軸1m、短軸80cm、深さ74cmほどの楕円形を呈する。北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打石（長石製）の付着した火打金、寛永通寶の銅錢6枚、肥前磁器のくらわんか茶碗である。くらわんか茶碗は菊花井桁文がコンニャク印判と手描きで3面にみられる18世紀前半のもの、染付の丸文散らしの18世紀のものとの2点ある。

180号墓壙（図版第76・128）

Q4-e2・f2・e3・f3グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.1m、深さ92cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部である。

181号墓壙（図版第76・128・133・151）

180号墓壙と同じグリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径98cm、深さ53cmほどの円形である。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、寛永通寶の銅錢6枚である。

182号墓壙（図版第76・128・151）

Q4-c0・d0・c1・d1グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.1m、幅83cm、深さ35cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げ寝葬と考えられる。出土遺物は、寛永通寶の銅錢1枚、鉄錢5枚である。

183号墓壙（図版第76・128）

Q4-e2・f2・e3・f3グリッドで、157号墓壙と接して確認された。平面形態は、長軸1.26m、短軸1.03m、深さ98cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、北東向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、銭で拓本の取れたものはない。しかし鉄錢が4枚ある。

184号墓壙（図版第76・129）

Q 4 - d 3 · f 3 · d 4 · f 4 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.13m、短軸90cm、深さ98cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部である。

185号墓塚（図版第76・151）

Q 4 - e 3 · f 3 · e 4 · f 4 グリッドで、188号墓塚と重複して確認された。平面形態は、長軸1.15m、短軸95cm、深さ1.23mほどの楕円形ないし円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、寛永通寶の銅錢2枚と、判読不能な中国の銅錢1枚である。

186号墓塚（図版第77・129・151・152）

Q 4 - c 1 · d 1 · c 2 · d 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1m、幅85cm、深さ82cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢5枚、元豊通寶と考えられる中国の銅錢1枚である。

187号墓塚（図版第77・129・136・152）

Q 4 - c 1 · d 1 · c 2 · d 2 グリッドで、単独で確認された。しかし西側や北側に接した土坑は墓塚と考えられるものである。平面形態は、長軸1m、短軸75cm、深さ60cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、背に「文」の文字をもつものの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚、薄緑色のボタン状石製品（図版第136-10）である。

188号墓塚（図版第77・129・152）

Q 4 - e 3 · f 3 · e 4 · f 4 グリッドで、185・189号墓塚と重複して確認された。平面形態は、長軸1.05m、短軸63cm、深さ61cm程の楕円形を呈する。埋葬形態は、東向きの座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金の一部が付着した火打金（長石製）、銅製の小さな吊り金具、寛永通寶の銅錢4枚、鉄錢2枚である。

189号墓塚（図版第77・129・152）

188号墓塚と同一グリッドで、188号墓塚と重複して確認された。平面形態は、長軸1.2m、短軸97cm、深さ70cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、座葬と考えられるが、人骨の残りが少ない。出土遺物は、背に「文」の文字をもつものの1枚を含めた寛永通寶の銅錢2枚、鉄錢1枚、肥前焼きの磁器染付碗で雪の輪と梅樹文が描かれている。

190号墓塚（図版第77・129・152）

Q 4 - b 1 · c 1 · b 2 · c 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸90cm、短軸73cm、深さ76cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りが少なく不明である。出土遺物は、寛永通寶の銅錢5枚、内外面に灰釉を施した陶器の高台付小碗、手文庫などの引き出しに付けられた考えられる飾り金具などである。

191号墓塚（図版第77・129・152）

190号墓塚と同一のグリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径91cm、深さ58cmほどのほぼ円形を呈する。埋葬形態は、東向きで脚部を折り曲げた横臥葬と考えられる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつものの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚、内外面に灰釉を施した陶器の高台付小碗である。

192号墓壙（図版第77・129・152）

191号墓壙と同じグリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ90cm、幅70cm、深さ64cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

193号墓壙（図版第78・152）

192号墓壙と同一のグリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径90cm、深さ60cmほどの楕円形ないし円形を呈するものと考えられる。埋葬形態は、南向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつもの2枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

194号墓壙（図版第78・129・152）

193号墓壙と同一のグリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸93cm、短軸75cm、深さ60cmほどの楕円形を呈するものと考えられる。埋葬形態は、南向きの寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

195号墓壙（図版第78・129・152・153）

Q4-d2-e2-d3-e3グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.08m、深さ1.11mほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢4枚、鉄錢2枚、内外面に灰釉を施した陶器高台付小碗である。

196号墓壙（図版第78・129・153）

Q4-b1-c1-b2-c2グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.49m、幅1.24m、深さ66cmほどの長方形を呈する。人骨は僅かであるが、墓壙の形態からすれば埋葬形態は寝葬であろう。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

197号墓壙（図版第78・129・153）

Q4-b0-c0-b1-c1グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径93cm、深さ78cmほどの円形を呈する。人骨の残りは少ないが、埋葬形態は西向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢6枚である。

198号墓壙（図版第78・129）

Q4-a0-b0-a2-b2グリッドで、芋の貯蔵穴と考えられる土坑と重複して確認された。新旧関係は、この芋の貯蔵穴に本墓壙が切られている。平面形態は、長軸1.33m、短軸95cm（推定）、深さ28cmほどの楕円形である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部である。

199号墓壙（図版第79・129・153）

Q4-a0-b0-a1-b1グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.01m、幅70cm、深さ40cmほどの長方形を呈する。人骨の残りは少ないが、人骨の位置、墓壙形態から寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚、内外面に灰釉を施した陶器高台付小碗である。

200号墓壙（図版第79・129・153）

Q 4 - a 1 · b 1 · a 2 · b 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.22m、短軸95cm、深さ91cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りが少しで分からぬが、墓壙形態からすれば寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、寛永通寶の銅錢6枚である。

201号墓壙（図版第79・130）

Q 4 - a 1 · b 1 · a 2 · b 2 グリッドで、墓壙ではと考えられる土坑と重複して確認された。平面形態は、深さは分からぬが直径52cmほどの円形を呈するものと考えられる。埋葬形態は、人骨の残りが少なくて明確にならないが、墓壙形態からすれば座葬であろう。出土遺物は、銅製煙管の吸い口部である。

202号墓壙（図版第79・130・133・153）

Q 4 - a 1 · b 1 · a 2 · b 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径80cm、深さ30cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢3枚、鉄錢の固まり、瀬戸美濃焼きの鉄釉を塗った徳利（俗称ベコカン）である。なお、雁首部には「せい」といった名前と考えられる文字が彫り込まれている。

203号墓壙（図版第79）

Q 4 - a 1 · b 1 · a 2 · b 2 グリッドで、墓壙と考えられる他の土坑などと重複して確認された。このため平面形態は、幅70cmほどの楕円形ないし長方形と推定される程度である。埋葬形態は、人骨の残りが僅かで不明である。出土遺物は、みられない。

204号墓壙（図版第79・153）

Q 4 - a 1 · b 1 · a 2 · b 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ98cm、幅84cm、深さ30cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、寛永通寶の銅錢6枚である。

205号墓壙（図版第79）

Q 4 - a 1 · b 1 · a 2 · b 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径70cm、深さ47cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、鉄錢の固まりである。

206号墓壙（図版第79・130・153）

Q 4 - c 2 · d 2 · c 3 · d 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.07m、深さ85cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、寛永通寶の銅錢2枚と、鉄錢の固まり、内外面に灰釉を施す陶器高台付小碗である。

207号墓壙（図版第79・153）

Q 4 - c 0 · d 0 · c 1 · d 1 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ95cm、幅90cm、深さ65cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りが僅かなため分からぬが、墓壙形態からすれば脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつ寛永通寶の銅錢2枚である。

208号墓壙（図版第80・153）

Q 4 - c 2 · e 2 · c 3 · e 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径83cm、深さ53cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げ仰向けに葬られている。出土遺物は、寛永通寶の銅錢1枚、鉄錢2枚である。

209号墓壙（図版第80・130・153）

Q 4 - c 1 · d 1 · c 2 · d 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.42m、短軸1m、深さ38cmほどの楕円形ないし長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打石（長石製）、寛永通寶の銅錢4枚、錢種の不明な銅錢1枚である。

210号墓壙（図版第80・153）

Q 4 - a 1 · b 1 · a 2 · b 2 グリッドで、212号墓壙と接して確認された。平面形態は、直径90cm、深さ65cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、寛永通寶の銅錢2枚、銭鉄の固まりである。

212号墓壙（図版第80・130・154）

Q 4 - a 1 · c 1 · a 2 · c 2 グリッドで、210号墓壙と接して確認された。平面形態は、長さ1.04m、幅70cm、深さ57cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南北向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打石（長石製）の付着した火打金、背に「文」の文字をもつもの2枚を含む寛永通寶の銅錢6枚、内外面に鉄釉を塗った陶器高台付小碗2個、瀬戸美濃焼きの内外面に灰釉を塗った香炉である。

211号墓壙（図版第80・130・153）

P 3 - j 8 、 Q 3 - a 8 、 P 4 - j 0 、 Q 4 - a 0 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.04m、幅88cm、深さ58cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南西向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢6枚、内外面に灰釉を塗った陶器高台付小碗2などである。

213号墓壙（図版第80・154）

Q 4 - b 1 · c 1 · b 2 · c 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.04m、深さ82cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りが僅かで分からぬが、墓壙の形態から座葬と考えられる。出土遺物は、寛永通寶の銅錢4枚、銭鉄の固まりである。

214号墓壙（図版第80）

Q 4 - e 1 · f 1 · e 2 · f 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.13m、幅96cm、深さ25cmほどの矩形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りが僅かであり分からぬ。墓壙の大きさなどから寝葬が考えられる。出土遺物は、みられない。

215号墓壙（図版第80・130）

Q 4 - d 0 · e 0 · d 1 · e 1 グリッドで、63号墓壙と接して確認された。平面形態は、直径1.07m、深さ50cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部である。

216号墓壙（図版第81・130・154）

P 3 - j 8 · j 9 、 Q 3 - b 8 · b 9 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.02m、短軸68cm、深さ15cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬が考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、背に「文」の文字をもつもの3枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

217号墓壙（図版第81・130）

Q 4 - c 1 · d 1 · c 3 · d 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.32m、深さ98cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、鉄錢4枚、錢種の不明な銅錢1枚である。

218号墓壙（図版第81・130・154）

P 3 - j 8 · j 9、Q 3 - a 8 · a 9 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.1m、短軸85cm、深さ37cmほどの梢円形を呈するものと考えられる。埋葬形態は、人骨が僅かに残っていたのみで分からぬ。出土遺物は、火打金、寛永通寶の銅錢8枚である。

219号墓壙（図版第81・130・154）

Q 4 - d 2 · e 2 · d 3 · e 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.05m、深さ1.08mほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢5枚、錢種不明の銅錢1枚である。

220号墓壙（図版第81・130・154）

Q 4 - d 1 · e 1 · d 2 · e 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.2m、深さ90cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、煙管の雁首部と吸い口部、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

221号墓壙（図版第81・131）

QQ 3 - b 8 · c 8 · b 9 · c 9 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径87cm、深さ50cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りが僅かで明確にできないが、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、瀬戸美濃焼きの磁器染付爛徳利、瀬戸美濃焼きの磁器染付小盃などである。なお、爛徳利の外面には四君子思想に基づく竹、蘭、梅、菊といった草木の絵と、これらを歌い込んだ銘文「竹分蘭相秀 梅邊菊未衰 卯時五 甲戌中冬日 石翁写」とが呉須で描かれている。また、底には焼き繼ぎの跡がみられ、かつ「ト廿五」なる焼き繼ぎ屋の控え番号と思われる墨書きがみられる。なお、時期的には明治期の製品である。一方の小盃の外面にも、竹それに蘭と思われる模様が呉須で描かれ、さらに小盃の内面には「幽谷 佳人 有(?)」なる文字がやはり呉須で描かれている。この小盃は、造りなどが爛徳利に近いものがあり、同様の明治時代に造られたものであろう。

222号墓壙（図版第81）

Q 3 - b 8 · c 8 · b 9 · c 9 グリッドで、100号墓壙と重複して確認された。平面形態は、長さ1.04m、幅58cm、深さ15cmほどの長方形ないし梢円形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど残っておらず分からぬが、墓壙形態からは脚部を折り曲げた寝葬が考えられる。出土遺物は、みられない。

223号墓壙（図版第82・131）

Q 3 - a 7 · b 7 · a 8 · b 8 グリッドで、西側半分ほどを芋の貯蔵穴と考えられる土坑で切られている。平面形態は、直径89cm、深さ33cmほどの円形を呈するものと考えられる。埋葬形態は、人骨の残りが僅かなため不明である。出土遺物は、瀬戸美濃焼きの磁器染付端反碗、眼鏡である。眼鏡は、銅製の枠に僅かに中央部が膨らんだ凸レンズをはめ込み、繋ぎ部をネジで止めている。耳にかける竿の端は円環が取り付けたり、紐などで止めたものであろう。

224号墓壙（図版第82・131）

Q 4 - b 2 · c 2 · b 3 · c 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径1.13m、深さ88cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りが僅かであり明確にならない。しかし墓壙形態からすれば座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部火打金、火打石（長石製）である。

225号墓壙（図版第82・131・154）

Q 3 - c 7 · d 7 · c 8 · d 8 グリッドで、単独で確認された。なお、北側半分ほどが事業用地外にある。平面形態は、長さ92cm、幅60cm、深さ53cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に「文」の文字をもつもの4まいを含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

226号墓寶（図版第82・131）

Q 3 - b 7 · c 7 · b 8 · c 8 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、一辺86cm、深さ34cmほどの方形を呈する。埋葬形態は人骨の残りが僅かで明確にならないが、東向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、裏表に文様が僅かに施された半折の銅製耳はじり、銅製のピン、瀬戸美濃焼き磁器染付端反碗である。

227号墓壙（図版第82・131・154）

Q 3 - c 7 · d 7 · c 8 · d 8 グリッドで、単独で確認された。なお、北側半分は事業用地外にある。平面形態は、長さ1.05m、幅80cm、深さ98cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銀製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、家具などにつけられた鉄製蝶番、寛永通寶の銅錢5枚である。

228号墓壙（図版第82・132・154・155）

Q 3 - d 7 · e 7 · d 8 · e 8 グリッドで、単独で確認された。なお、北側半分が事業用地外にある。平面形態は、直径80cm、深さ93cmほどの不整円形を呈する。埋葬形態は、東向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打石（長石製）、寛永通寶の銅錢6枚である。

229号墓壙（図版第82・132・133・155）

P 3 - i 9、Q 3 - a 0、P 4 - i 0、Q 4 - a 0 グリッドで、土坑と重複して確認された。平面形態は、長さ1.17m、幅90cm、深さ58cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、確認できた人骨の位置などから西向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、刻印のみられる銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、寛永通寶の銅錢6枚である。

230号墓壙（図版第82・132・136・155）

Q 3 - b 9 · c 9、Q 4 - b 0 · c 0 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1m、幅91cm、深さ42cmほどの方形ないし円形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りがほとんどなく不明である。しかし墓壙の形態などからは、寝葬を考えられる。出土遺物は、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚と数珠の小玉（図版第136-11～42）32個である。

231号墓壙（図版第83・132・155）

Q 3 - c 9 · d 9、Q 4 - c 0 · d 0 グリッドで、43号墓壙と接して確認された。平面形態は、直径1.05m、深さ1.1mほどの円形を呈する。埋葬形態は、北向きで脚部を折り曲げた座葬と考えられる。出土遺物は、銅製

煙管の雁首部と吸い口部、背に「文」の文字をもつもの1枚を含む寛永通寶の銅錢6枚である。

232号墓壙（図版第83・132）

Q 4 - d 2 · f 2 · d 3 · f 3 グリッドで、159号墓壙などと重複して確認された。平面形態は、長さ1m、幅80cm、深さ51cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りが僅かであり不明である。しかし墓壙の形態からは脚部を折り曲げた寝葬が考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部、火打石（長石製）の付着した火打金、瀬戸美濃焼きの磁器染付広東碗である。

233号墓壙 欠番

234号墓壙（図版第83・132・155）

Q 3 - a 8 · b 8 · a 9 · b 9 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸95cm、短軸80cm、深さ25cmほどの楕円形ないし長方形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど残っておらず不明である。しかし墓壙の形態からは脚部を折り曲げた寝葬が考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に「文」の文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢6枚である。

235号墓壙（図版第83・132・136・155）

P 3 - j 8 · j 9 · Q 3 - b 8 · b 9 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径91cm、深さ68cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、東向きで脚部を折り曲げて仰向けて埋葬されたと考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、背に「文」残って文字をもつもの1枚を含めた寛永通寶の銅錢5枚、「正」文を表面に散りばめた乳白色の丸玉（図版第136-43）である。

236号墓壙（図版第83・155）

Q 3 - f 9 · g 9 · Q 4 - f 0 · g 0 グリッドで、単独で確認された。墓壙の残りが悪く、僅かに底部付近の輪郭と人骨とが確認されたにすぎない。平面形態は、直径50cmほどの円形と考えられるものである。埋葬形態は、おそらく座葬であろう。出土遺物は、火打金、背に「文」の文字をもつ寛永通寶の銅錢3枚である。

237号墓壙（図版第83・132）

Q 4 - d 0 · e 0 · d 2 · e 2 グリッドで、63号墓壙と重複して確認された。本墓壙が63号墓壙に切られている。平面形態は、長さ1.23m、幅95cm（復元）、深さ17cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、人骨がほとんど無く分からぬ。しかし、墓壙形態からすれば、脚部を折り曲げた寝葬が考えられる。出土遺物は、外側に灰釉を塗った陶器高台付小碗である。

238号墓壙（図版第84・132・155）

Q 3 - a 9 · b 9 · Q 4 - a 0 · b 0 グリッドで、72号墓壙と重複して確認された。平面形態は、長さ1.2m、幅1.17m、深さ28cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金2枚、背に「文」の文字をもつもの1枚を含む寛永通寶の銅錢6枚である。

239号墓壙（図版第84・155）

Q 4 - a 1 · b 1 · a 2 · b 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径96cm、幅73cm程の円形を呈する。埋葬形態は、人骨の残りが少なく不明であるが、墓壙形態からは座葬と考えられる。出土遺物は、寛永通寶の銅錢5枚と、鉄錢1枚である。

240号墓塚（図版第84）

Q 4 - a 1 · b 1 · a 3 · b 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.17m、短軸1m、深さ95cmほどの楕円形ないし円形を呈する。埋葬形態は、西向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、みられない。

241号墓塚（図版第84）

P 4 - h 1 · j 1 · h 2 · j 2 グリッドで、墓塚と考えられる土坑と重複して確認された。平面形態は、長さ1.1m、幅76cm、深さ55cmほどの長方形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、みられない。

242号墓塚（図版第84・132・156）

P 4 - i 1 · j 1 · i 3 · j 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ1.26m、幅1.01m、深さ48cmほどの長方形を呈する。人骨が僅かに残る程度であるが、墓塚形態から脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、寛永通寶の銅錢7枚である。

243号墓塚（図版第84・132）

Q 4 - b 2 · c 2 · b 3 · c 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径80cm、深さ70cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、脚部を折り曲げた座葬であろう。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部である。

244号墓塚（図版第85）

Q 4 - c 2 · d 2 · c 3 · d 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、直径96cm、深さ75cmほどの円形を呈する。埋葬形態は、人骨が僅かに残っている程度である。しかし、墓塚形態から座葬と考えられる。出土遺物は、みられない。

245号墓塚（図版第85・156）

Q 4 - a 1 · b 1 · a 2 · b 2 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長さ89cm、幅70cm、深さ55cmほどの長方形を呈する。人骨はほとんど残っていない。埋葬形態は、墓塚形態から、脚部を折り曲げた寝葬と考えられる。出土遺物は、寛永通寶の銅錢3枚である。

246号墓塚（図版第85・132）

Q 4 - d 3 · e 3 · d 4 · e 4 グリッドで、単独で確認された。当初墓塚と考え調査を行ったが、その結果、陶磁器の破片が幾つか出土したものの人骨の出土は全く見られず、形態的にも墓塚でなく芋の貯蔵穴の形態をとることから、墓塚ではないと判断した。なお、出土した陶磁器は肥前焼きなどもみられるが、さらに新しい時期のものもみられる。

247号墓塚（図版第85・133・156）

Q 4 - a 2 · c 2 · a 3 · c 3 グリッドで、単独で確認された。平面形態は、長軸1.08m、短軸88cm、深さ80cmほどの楕円形を呈する。埋葬形態は、南向きで脚部を折り曲げた座葬である。出土遺物は、銅製煙管の雁首部と吸い口部、火打金、火打石（長石製）、寛永通寶の銅錢4枚（内2枚は鉄錢に付着）、鉄錢2枚、肥前焼きの碗、瀬戸美濃焼きの碗である。

第7節 墓石

調査区の北西隅において、万靈塔を初めとする墓石11基（1～11号墓石）を確認した。また、発掘調査においても3基の墓石（12～14号墓石）が確認された。墓石の実測は万靈塔のみで、他は拓本とした。以下、墓石についてその概要に触れておきたい。

1号墓石（図版第157－1）

板碑型（庚申懸話会編 1985 『石仏研究ハンドブック』による分類で、以下同じ）の墓石である。正面に「妙法道本信士」、向かって右側面に「天明七丁未年」、同左側面に「四月□日死去」とある。

2号墓石（図版第157－2）

箱型の墓石である。正面の中央に「常山淳清禪定門」、その向かって右脇に「天明七未天」、同左脇に「十月十六日」とある。

3号墓石

舟型で如意輪觀音像を陽刻した墓石である。如意輪觀音像の向かって右側に「自元秋岳禪定尼位」、同左側に「元文二丁巳九月廿日」とある。

4号墓石

箱型の墓石である。正面の中央に「實相道口禪定門」、その向かって右脇に「天明二寅天」、同左脇に「二月十四日」とある。

5号墓石（図版第157－3）

板碑型の墓石である。正面の中央上部に日輪、その向かって右側に「月桂科霜禪尼」、同左側に「本光持法禪門」とある。

6号墓石（図版第157－4）

板碑型の墓石である。正面の中央上部に「会」、その向かって右側に「宝永八巳亥九月十二日」、「晚窓良秋禪定門」、同左側に「月窓妙追禪定門」、「寛政七巳卯十二月十八日」とある。

7号墓石（図版第157－5）

板碑型の墓石である。正面の中央に「帰源密山道口禪定門」、その向かって右側に「安永四乙未天」、同左側に「四月廿二日」とある。

8号墓石（図版第157－6）

板碑型の墓石である。正面の上部に「回舍」、その向かって右側に「三月廿七日」、「岳傳禪定門」、同左側に「妙賀禪定尼」、「二月□四日」、そして両戒名の下の中間に「位」とある。

9号墓石（図版第160－1）

板碑型の墓石である。正面の中央に「得相妙容禪定尼位」、その向かって右側に「宝曆八寅年」、同左側に「二月十八日」とある。

10号墓石（図版第160－2）

箱型の墓石である。正面の中央に「妙法妙道信女」、その向かって右側に「寛政五丑天」、同左側に「二月二十七日」とある。

11号墓石（図版第158・159）

角柱型の万靈塔である。大きさは縦90.4cm、横37.4cm、厚さ31.3cmほどである。正面に「南無阿弥陀仏」、向かって右側の面に「三界万靈等」、同左側の面に「父母六親眷属」、裏面の右下に「施主」、左側に「時正徳四甲午天七月日 二十二人」とある。

12号墓石（図版第160-3）

板碑型の墓石である。正面の中央上部に「回」、下部に「位」、この間に二行にわたり「道椿禪男」、「秋岳禪尼」が、また向かって右側に「元文三戌午二月十七日」、同左側に「元文二丁巳九月廿五日」とある。

13号墓石（図版第160-4）

板碑型の墓石である。正面の中央に「檀窓自口禪定尼」、向かって右側に「寛保三天」、同左側に「亥三月十日」とある。

14号墓石（図版第160-5）

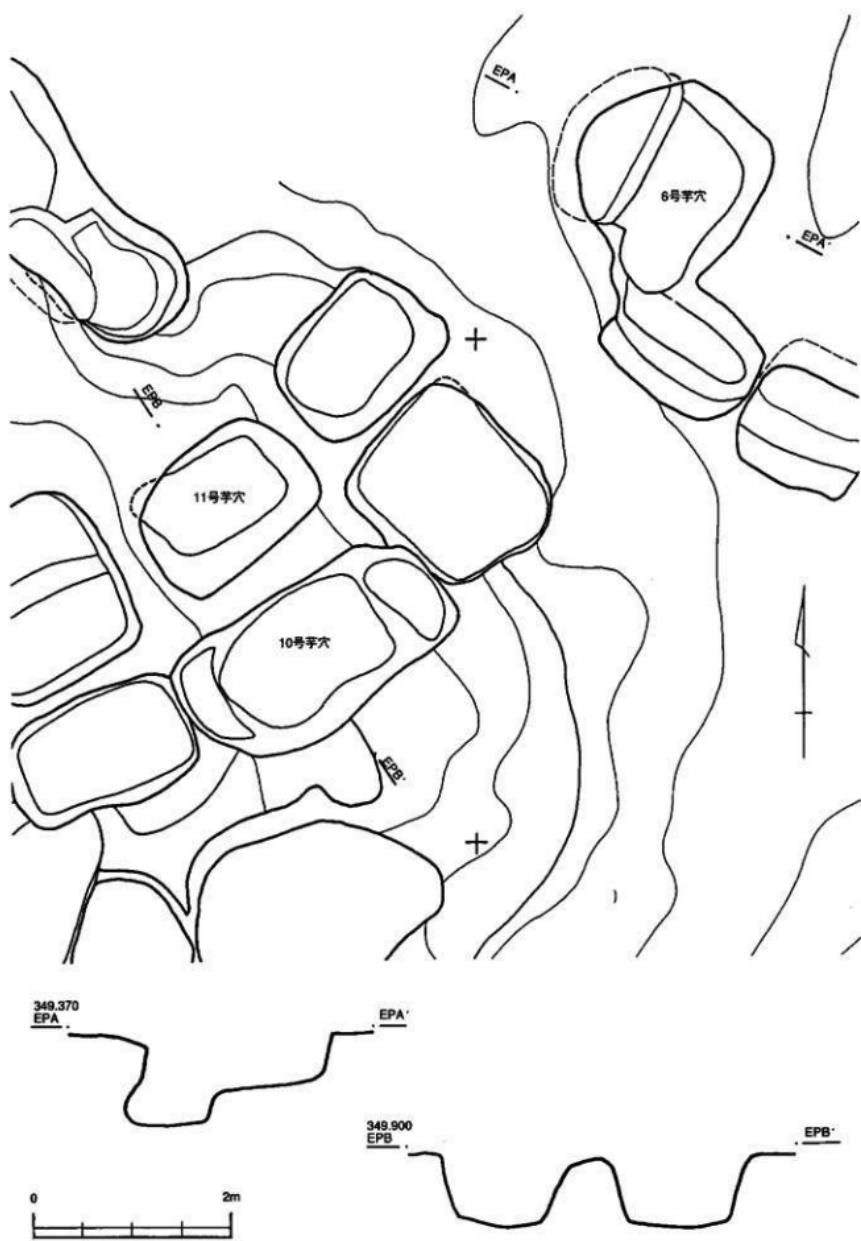
板碑型の墓石である。正面の中央上部に「同舎」、その右側に「十一月廿八日」、「越山玄超信男」、同左側に「越室真壽信女」とある。

第8節 甘藷貯蔵穴（第11図、図版第170）

2号墳の周辺には、多数の土坑がみられた。これらの土坑は長方形ないし方形に近い形態であり、一見墓壙ではないかと思われるが、そのほとんどが甘藷の貯蔵穴である。戦中から戦後にかけ、この付近が甘藷畠になつた話を地域の古老から聞くことができた。これらの穴は、収穫した甘藷を長期間に渡って貯蔵するもので、2号墳の回りだけでも50に近い数を確認できる。

甘藷貯蔵穴の形態は、穴の中に入ると一旦平らな面（作業用空間か）となり、さらに一段下がってその先に甘藷を直接貯蔵（伏せる）するための施設を横穴状に掘り込むのが典型的な形態といえる。しかし、絶てがこのような形態ではなく、墓壙のようにただ堅穴状に掘り込まれたものも多少みられるようである。

このような甘藷貯蔵穴は2号墳の周囲だけでなく、北側で確認された多数の墓壙の中、またそれに続く農道部分にも幾つかその存在を確認できた。



第11図 2号墳周辺芋貯蔵穴平・断面図

第5章 各 説

第1節 遺構等の概要

1 旧石器時代

米倉山B遺跡が古くより旧石器時代の遺跡として知られていたことは、研究史で述べたおりである。その時の調査地点については明確されていないが、細石器と細石核とが得られ、旧石器時代終末期の遺跡として位置付けられていた。その後、近年に至り石器の再検討が行われナイフ型石器2点、剥片1点が旧石器時代に属するものと区別され、時期的にも古く位置付けられるようになった。今回の発掘調査では、数は少ないものの第1～2次調査でナイフ型石器1点、第3～5次調査で石刃3点が確認された。ナイフ型石器は基部調整と両側縁調整の二側縁加工の完形品であり、本遺跡におけるナイフ型石器の形態を知るうえでこれまでのナイフ型石器が小形製品と半折製品のみであったことへの補強資料となるであろう。石刃は、3点の内の2点までに使用痕の認められるものであった。これら石器類は、それぞれが同一地層からの出土か否か明確とならないが、それでもおおよそ同時期と考えられるものであり、米倉山B遺跡の石器類の組み合わせを知る手掛かりとなり、また時期を特定するうえでも重要な資料となろう。

2 繩文時代

本調査においては、住居跡などの遺構を確認することは全くできなかった。しかし、第1次～2次調査においてコンケイブ・スクレイパーないしノッチド・スクレイパーが確認され、また、第3～5次調査において槍先形尖頭器、異形局部磨製石器（通称トロトロ石器）それに、垂飾り、抉状耳飾りなどの出土が確認された。もちろん1～2、3～5次調査において、石鏃、打製石斧、磨製石斧や繩文土器片などの確認されたことはもちろんのことである。

コンケイブ・スクレイパーないしノッチド・スクレイパーの本県での確認は、本調査例が初めてのことといえるものである。その分布の確認された意義は大きなものがあり、周辺地域との制作技術などの比較研究の好資料となろう。また、トロトロ石器も、本県での出土例は今回が初めてのもので、南は鹿児島県から東は茨城県ないし福島県（岡本東三 1983「トロトロ石器考」「人間・遺跡・遺物」わが考古学論集1）といった広範囲に分布する本石器の分布域に、本県が加わったことを示す貴重な事例となろう。なお、トロトロ石器の確認された付近から出土した繩文土器には、胎土に纖維を含む繩文時代早期の土器片と、繩文、竹管文をもつ繩文時代前期諸磯土器片（a・b式）とがみられる。これらの土器片のうち、トロトロ石器に組み合うものとすれば、前述したように前者の纖維を含む早期の土器片であろう。

3 弥生時代～古墳時代

弥生時代の遺構としては、住居跡が3軒が確認され、今回の調査の主体を占めるものとなった。

弥生時代前期の条痕土器は、量はそれほど多くないが調査区全体から確認されている。その中で遺構として確認できたのは4軒ほどである。第3～5次調査の第38・56号住居跡などがその代表例であり、これらの住居跡形態は小判形（楕円形）の形態をみせるものである。このことからすれば、遺物からそれほど明確にならない住居跡については、弥生時代末ころの時期に含めたもののうち、さらに何軒かが該当する可能性もあり、先程の軒数が多少増加するものと思われる。江戸時代の墓地の北東側に広がる斜面上に、弥生時代前期と考えられる土器がみされることから、この時期の集落跡の中心は今回の調査地域を含めてた北東側に存在していたものと考えられる。そして対峙する東方には、弥生時代前期から古墳時代前半ころまでの集落跡、方形周溝墓群である上の平遺跡があり、本地域も古墳時代前期までの集落跡などが継続して営まれていることから、社会変革に緊密な関係をもちながら存在したものであろう。

弥生時代末ころが本遺跡の隆盛した時期と考えられ、住居跡数が最も多く確認された。第1～2次調査で確認された北東斜面に存在する住居跡のことごとくがこの時期のものであり、形態的には隅丸方形ないし椭円形を呈するもので、その後の調査のものを含めて35軒ほどが確認された。立地的には先の弥生時代前期とは重なった地域にみられるものである。前期に引き続き、この地域においての重要な拠点として存在したものであろう。

古墳時代初めの時期の住居跡としては、口縁部にハケによる刺突を持つS字口縁台付壺を出土した第8号住居跡など4軒ほどが確認された。おおよそ隅丸方形の形態を呈するもので、立地としては前代を踏襲する形となっている。特に口縁部に刺突をもつS字口縁台付壺は、同類の中で県内最古の形態をみせるものであり、この地域が古墳時代前期に本県の中枢地を形成することを考えれば、S字口縁台付壺のその後の県内流入への基地的性格を持っているように考えられる。

古墳時代前半代の住居跡は第24号住居跡に代表され、方形を呈する形態である。9軒ほどが確認されている。このうち第26号住居跡は、内部にベッド状遺構を有するものである。本形態の住居跡は第26号住居跡1軒のみであるが、規模も大きく周辺にいくつかの住居跡を従えているような状況が認められる。本遺跡の周辺地域においても確認される形態であるが、特に塙市西田遺跡においては集落構造の中心的役割を担っていたことが伺えるもので、かつ、隣接する方形周溝墓に開わりをもつ住居形態と考えたところである。ところが、本遺跡では弥生時代に属する方形周溝墓は全く確認されておらず、古墳時代前期に属する方形周溝墓が1ないし2基確認されているのみであり、また、本遺跡に続く周囲の試掘調査においても、方形周溝墓を確認することは全くできなかつた。この状況は上の平遺跡とは多いに違う状況をみせることになるが、上の平遺跡に確認された124基に上る方形周溝墓群を造った集落として上の平遺跡で確認された集落跡の規模では納まりがつかないのではないかと考えたことがある。とすれば、本遺跡を含めた周辺集落の統合された墓域が上の平遺跡の方形周溝墓群と考えることもできるのではないかだろうか。うがってみれば、墓域を紐帯とした地縁、血縁の共同体が形成され、中枢地を形成する原動力となつたのではないだろうか。

土壤が幾つか確認されたが、その中の第10号土壤は内部より本県最古の須恵器大甕が確認された。詳しくは後述するが、大阪府陶邑窯跡群のTK73型式ないしそれよりも若干逆上の時期のもので、5世紀前葉ころが考えられている。これまで本県で確認されなかつたものであり、しかも中枢の地域で確認されたことは、その背景との関わりを検討する上で貴重な資料となる。

米倉山B遺跡の所在するこの地域は「貨泉」出土地、最古のS字口縁台付壺の出土地、本県最古の古墳築造地、さらに最古の須恵器の出土地と、特異な状況をみせることは明確である。このことは古墳の伝統的地域を形成した地域であるから別段不思議ではないが、物流の基地、文化の基地としての性格が強く読み取れるのではないだろうか。また、これらの流入経路が、富士山の西麓経由であったことを強く示唆するものであろう。そして最後の須恵器の流入時期ころに、地域社会に再び大きな変化が訪れ、地域独自の中枢地としての役割を終わることになり、古墳の動向と正に機を一にしていることがとらえられるのである。

古墳時代後期の時期としては、3基の古墳が確認されている。いずれも円墳、横穴式石室の古墳で、規模的には直径10m前後である。1号墳は、残りの状況が非常に悪く、石室のごく一部が確認されたに過ぎない。幸い副葬品については多少なりとも確認することができ、おおよそ6世紀後半に造られたものとかんがえられる。副葬品としては馬具（板状立聞素環鏡板付轡）が特筆されるものであろう。この時期でこの地域から確認された馬具には、このほかに稻荷塚古墳、博物館構内古墳、出土地は不明であるが米倉出土の馬具が知られており、小地域から比較的まとまって出土している状況である。2号墳は周囲に芋穴が多数確認され、その墳端は差ほど明確にならなかった。1号墳同様に残りが悪く、石室の僅一部が確認されたに過ぎない。しかし、石室の掘り方はきれいに残っていて、石室形態にあわせて長方形に掘りこまれているものであった。このため石室の入口と玄室とが段差をもつ造りであることが確認できた。石室の残りの悪い中にあって、副葬品は比較的多く確認された。その中で、古墳の入口付近を中心に破片であるが須恵器が比較的多数確認され、これらから本墳は、6世紀後半に造られたものと考えられる。

くちやあ塙古墳は、1・2号古墳とはやや離れた南側地域の傾斜面にあり、また規模もやや小規模なものと考えられる。石室は、良好な残りをみせていたが、その反面、副葬品については僅かに須恵器蓋坏が4点確認されたに過ぎない。しかしこの須恵器は7世紀後半代ころと考えられるものである。このような須恵器は1・2号墳からも若干確認されているが追葬にかかるものと確認できるものであり、これに対して本古墳の場合は須恵器のみからすれば初葬にかかる可能性が高いと考えられ、本県の終末期古墳の貴重な資料となるものといえるのである。

4 江戸時代

江戸時代の遺構としては、245基にのぼる墓が確認された。さらにこの数は、人骨などの伴っていない墓壙などの存在を考えればさらに増えることは間違いない。そしてこれらのうち1～8号墓壙が農道の南側にこじんまりとして屋敷墓のような状況で確認されたのに対して、残りの10号墓壙以降の230基は農道北側にまとまって集団墓（共同墓地）として確認されている。確認された墓壙の時期は、出土遺物から若干明治時代のものもみられるが、その大半が江戸時代を中心としたものであり、出土遺物からすれば時期的にはそれほど掛け離れているとは考えられず、ほぼ同じ時期でありながら何故に存在場所を違えているのか、その理由を考えなければならない。この周辺の畠などの中にも、農道の南側で確認されたような状況で数基から10数基の墓（石）を確認することができる。このような在り方は、県内にみられる両墓制との状況を想定できるものなのであろうか。今回はそこまでの分析はしていないが、周辺にこじんまりと存在する墓と共同墓地との間に時間的、制度的にどのような関わりがあるのか否か、今後出土品を通して考える必要があろう。特に六道銭である寛永通寶などは数百種類の鋳造が知られており、これらから更に細かな時期設定ができるものと考えており、改めて検討するつもりである。また、人骨からの性別、年齢などについての検討は、聖マリアンナ医科大学の平田教授による鑑定結果を別編に収録しているので、それを参考にしていただきたい。ここでは先程のような墓の存在を巡る課題は今後の検討課題として、発掘調査などから得られた所見述べておきたい。

まず、墓壙の形態は、円形、方形、長方形がみられるが、最も多いのが円形である。単独で埋葬されたものや、あるいは幾つかの墓壙が切り合って埋葬されたりしているが、このうち切り合っての埋葬については、家族が次々に埋葬された結果であろう。埋葬形態は、原則として樽型の棺桶には座葬、そして方形、長方形の棺桶には足を折り曲げて仰向け、あるいは横臥の形で埋葬されることが、発掘によって検出された人骨の状況から窺うことができる。

副葬品には、煙管（雁首部、吸い口部）、火打金、火打石、銭（六道銭）、陶器類、かわらけ、数珠、櫛、漆器類などが基本的なものと考えられるが、このほかに簪、眼鏡、硯、さらには蝶番の存在から手文庫のような什器類も副葬されたのではないかとみられる。なお、漆器類や什器類は木製部は腐ってしまい漆膜あるいは金具などが残っているに過ぎない。この中で特に数量的に目に付くのが煙管、火打金、火打石、銭などであり、大半の墓壙から確認されている。そのうちの銭は、葬儀に欠かせないので極楽浄土を強く意識したものであろうか。また、煙管は全墓壙のおおよそ154基（63%）から確認でき、煙草の喫煙率の高さを窺うことができる。これに次ぐのが火打金、火打石ということになり、さらに陶器類、かわらけ類と続く。稀なもののうち眼鏡について触ると、全国各地の調査で確認されており、また江戸時代の文人画などに装着している状況が描かれているなど、量の多少はあるものの、ある程度の流通が知られるところである。本県でも本例の他に北巨摩郡須玉町塩川遺跡などで確認されており、それなりの流通を確認することができる。

墓壙出土の陶器類から求められる時期は17～18世紀代であるが、この時期は調査区の北西隅で確認された墓石の最も古い時期の正徳4年（1740）を多少逆上るものであることから、墓の造営の時期も陶器類から求められた時期の17世紀まで逆上るものであろう。このような墓地について、地域の人達の間には知られていたのであろうか。畠の中に存在する墓石の存在から、屋敷墓的な小規模な墓地の存在は知っていたであろうが、このような大規模な共同墓地の存在まで知っていた地域の人はほとんど無いようである。ある時期までは記憶にあったのであろうが、最も新しい明治時代を経たその後の時期に忘れられたのであろう。この地域の寺院としては、本丘院の直下で北東方向300mに米蔵山安福寺（曹洞宗）があり、墓地の墓石の年号も本遺跡で確認された墓石とほぼ同時期のものである。さらに現存ではないが、本遺跡から300mほど南東側にあたる金沢地区の火の見櫓の周囲には、無縫塔、三界万靈塔をはじめとして墓石などがみられ、寺院が存在していたものと考えられる。この寺院については、金沢地区にかけて「仏身山法沢寺」という曹洞宗寺院の存在していたことが『中道町史』（下巻 1976）に記されており、法沢寺に關係するものであろう。また、ここにみられる墓石の年号も、本遺跡の墓石のものとほぼ同時期のものである。

このように本遺跡の墓地に関わりをもつ寺院としては、安福寺、法沢寺が上げるのである。しかしこれらのうち、どちらの寺院が関わりをもつものなのか明確にならないが、いずれにしても本地域の先祖であることには疑いのないところであろう。

第2節 10号土坑出土の須恵器壺について

1.はじめに

本県の初期須恵器は、1979年の中央自動車道建設工事に先立って行われた東八代郡御坂町二之宮・姥塚遺跡の発掘調査によって一気にその数を増やした¹⁾。そしてそれ以降、少しづつではあるが資料は増加し続けている。しかしそれでも全体数は極めて希薄であり、須恵器を含む該期の土器様相は未だ不明瞭といわざるを得ない。このような状況の中で、本遺跡出土の須恵器壺は、胴下半部を欠損するものの、全体的に古相で、本県の初期須恵器がいつ、どのように盆地内にもたらされたかを知る一つの手がかりになり得るものと思われる。そこで本稿では、本遺跡出土の須恵器大壺を考察することで、本県の出現期の須恵器の様相についてその一端を知るきっかけとしたい。

2.須恵器壺について

須恵器大壺が出土した第10号土坑は直径約70cm、深さ30cm程で、出土した大壺の他には遺物はほとんど見られなかった。大壺は口縁部から胴上部までが残存し、口径57cm、残存高約40.5cmを測る。口唇部は若干つまみ上げられ内湾しており、口縁部外面には凸帯が巡る。頸部は無文で胴部より直に立ち上がり、若干長くやがて上部へ向かってラッパ状に開く。胴部は大きく膨らむもので、残存する部分で直径約80cmを測る。外面調整はタタキの後、それを丁寧にすり消している。また内面の調整も外面同様に丁寧にすり消されており、わずかに輪積痕及びヘラナデの残る箇所も見受けられる。

さて、これらの特徴を既存の須恵器大壺と比較・検討しておきたい。まず口縁部外面に巡る凸帯については、現在須恵器の最古段階であるT G231・232号窯出土のほとんどの壺口縁部に付されている²⁾。その後T K208型式以降徐々にシャープさが失われ、T K23型式及びT K47型式段階においては形骸化しているものが多々見受けられる。そしてそれ以降はほとんど付されなくなるものである。このように見た場合、凸帯の存在は古い要素を含むものであることを理解することができる。県内の須恵器壺の出土例はそれほど多くないものの、これらについても例外ではなく、T K216型式段階に比定される二之宮遺跡259号住居跡出土の壺口縁部は、凸帯部分が口縁部と一体化しているように見え、それでいて非常にシャープな印象を受ける。T K208型式段階に位置づけられる二之宮西46号住居跡出土の須恵器壺口縁部及びT K23型式段階に比定される東八代郡中道町岩清水遺跡第1・2号円形低墳墓出土の壺口縁部は完全に形骸化が進んでいる。

さらに本資料は胴部からほとんど直線的に立ち上がった頸部が、口縁部付近で上部へラッパ状に開くような形態をとる。このような形態は口縁部外面に付される凸帯とともに比較的古段階に類例を求めることができる。大阪府堺市に所在する野々井西遺跡ではT K73型式の範疇にありながら、T K73号窯出土の資料より若干古段階の須恵器を伴う窯跡（ON231号窯跡）が確認されている³⁾。ON231号窯跡では本資料に類似した資料の出土が見られる。それらの特徴に加え、本資料は器壁内外面の調整を丁寧にすり消しており、表面・裏面ともに調整痕はほとんど観察できない。上記のような初段階に位置づけられる須恵器壺にはこのような形態のものが数多く、本資料もそれらに属するものと思われる。

以上のような観察の結果から、本資料はON231号窯跡の須恵器壺と極めて類似していることを指摘できる。そのため本資料はT K73型式段階の範疇でもT K73号窯出土の資料より古相に位置づけることができるものであると推測される。

3.県内最古の須恵器と歴年代

近年、5世紀の所産である初期須恵器⁴⁾は除々に資料数を増やしつつある。これらの資料を整理し、出現や定着の様相を知るために筆者は県内の出土資料についてまとめ、若干の考察を試みたことがある⁵⁾。その時点では東山南（B）遺跡第2号墳出土の梯形壺を含む須恵器群がT K216型式段階に位置づけられ、甲斐地域では最古段階の須恵器の一群であった。しかしそれ以前の時期に位置づけられる集落跡が存在すること、信濃や上野、武

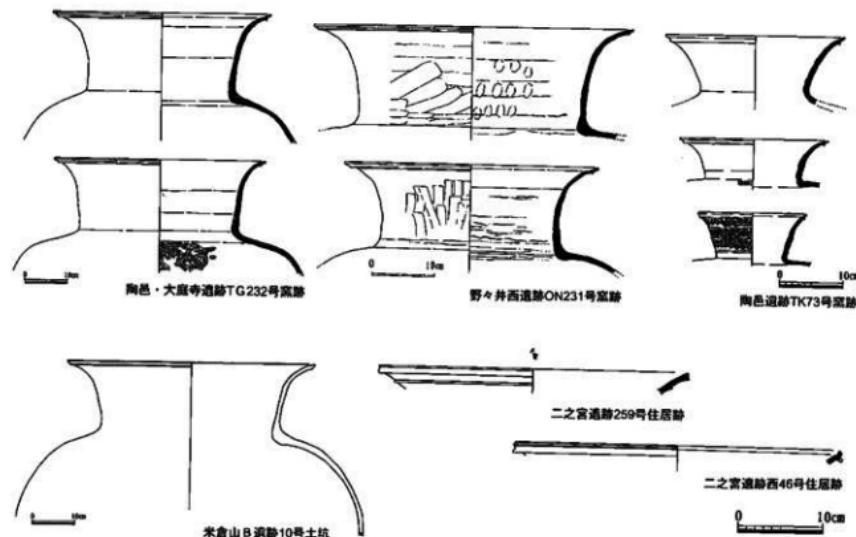
藏など甲斐を取り巻く他の地域ではそれより古い時期の須恵器が各種の遺構から出土していることなどを考えあわせて、甲斐地域にもTK216型式以前の須恵器が将来的に出土するであろうことが予測できた。

今回出土した須恵器大甕は前述のようにTK73型式の中でも古相段階に比定できるものであった。だが共伴遺物が存在しないため、5世紀の土器の変遷の中でこれがどの時期に相当するのか、厳密に知ることは難しい。ただ須恵器大甕がTK73型式段階の中でも比較的前葉から中葉にかけての所産であるのに対して、樽形ハを含む一群がTK216型式の後半にあたるものであることを考えると、それらの間にはまだ若干空白の期間があると推測される。かつて筆者はTK216型式段階に比定した東山南(B)遺跡第2号墳出土の須恵器を5世紀第2四半期後半に位置づけた⁶⁾。これらと本資料に若干の時間的な空白が存在することを想定した上で、本資料の暦年代を考えた時、本資料はおよそ第1四半期後半から第2四半期前半期の間に位置づけることが可能であると思われる。なお、本遺跡出土の大甕から東山南(B)遺跡第2号墳出土須恵器の一群までの時間の変遷過程の中で、どのような段階が存在するのかはさらなる資料の増加を待ちたい。

以上、甲斐には、5世紀の間には他地域の窯から、波のように絶え間なく次々と様々な器種の須恵器がもたらされた。本資料を含む遺構の性格は明確にはできなかったものの、5世紀代においてはそれらは曾根丘陵に集中して所在する円形低墳墓の周溝部に供えられ、また盆地内に所在する集落で利用された。集落から出土する初期須恵器については、集落内でも比較的大型の住居跡から出土する傾向があり、須恵器が権力の象徴であった可能性が指摘されている⁷⁾。一方で円形低墳墓に副葬されるような須恵器については、祭祀的性格が強いものであることが推測されている⁸⁾。当地域においてそれがもたらされる背景がどのようなものであったのかは、今後土師器・須恵器を含めて、該期の墳墓や集落など多角的に検討して行かなくてはならない。

4.おわりに

今回は甲斐地域の初期須恵器がTK216型式をさかのぼって存在することを確認した。結果として須恵器は他地域同様甲斐地域においても例外なく5世紀前半期にもたらされ、その後徐々に数を増していくことが理解された。



第12図 須恵器大甕の類例と県内出土資料

これら甲斐地域では最古段階の須恵器がどの段階の土師器と共に伴するのか、どのような器種が持ち込まれたのか、また他の社会現象とどのように関わっているのかなど、明らかにすべきことはまだまだ山積している。従ってこれらの詳細な分析が今後の課題であり、これらをひとつづつ紐解いていくことが当地域の該期の様相を知る糸口になり得るものと考えている。

最後になりますが、小稿を草するにあたり平安学園高等学校の萩本勝氏、大阪府埋蔵文化財センターの小林義孝氏・阪口育功氏、(財) 大阪市文化財協会の田中清美氏には有益なご指導と助言を賜りました。記して感謝の意を表します。

(石神孝子)

註

- 1) 坂本美夫ほか 1987 「二之宮遺跡」 山梨県教育委員会
末木 健ほか 1987 「姥塚遺跡・姥塚無名墳」 山梨県教育委員会
- 2) 岡戸哲紀ほか 1995 「陶邑・大庭寺遺跡IV」 大阪府教育委員会ほか
- 3) 西口陽一 1994 「野々井西遺跡・ON231号窯跡」 大阪府教育委員会ほか
- 4) 県内では5世紀代に位置づけることのできる須恵器は非常に数少なく、須恵器が定着の様相を見せるのは5世紀第四四半期頃であると推測される。そこでここでは便宜的に5世紀代の須恵器についてはすべて初期須恵器と呼んでおく。
- 5) 石神孝子 1999 「甲斐における初期須恵器の展開」『山梨考古学論集IV』 山梨県考古学協会
- 6) 石神孝子 1999 「甲斐における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- 7) 宮沢公雄 1999 「甲斐における出現期の須恵器とその周辺」『山梨考古学論集IV』 山梨県考古学協会
- 8) 坂口 一 1987 「群馬県における須恵器出現期の様相」『考古学ジャーナル』No.316 ニュー・サイエンス社
坂口 一 1991 「荒砥北三木堂遺跡出土の土師器と須恵器の縦年-農耕集落分析の基礎的作業-」
『荒砥北三木堂遺跡I』 群馬県教育委員会ほか

付編1 山梨県米倉山B遺跡出土の江戸時代人骨

聖マリアンナ医科大学解剖学教室 平田和明 星野敬吾

人骨所見

以下に1号人骨から247号人骨についての所見を示す。頭蓋長幅指数、推定身長算出のための計測はMartin法による。身長の推定にあたっては、大腿骨または脛骨の最大長から藤井の式を用いて算出した。

また、歯種の表記に以下の略称を用いた。

I: 切歯、C: 犬歯、P: 小臼歯、M: 大臼歯

1号 女性 老年 頭蓋の保存は良好である。頭蓋は中頭型。三主要縫合は内板では完全に閉鎖し、外板でも骨結合化の傾向を示す。顎骨には残存歯が認められず、歯槽も吸収しており、同個体がかなり高齢であることが示唆される。眉弓の膨起度はBrocaの3度。寛骨は一部破壊を受けながらも、ほぼ全容がつかめる程度に残っており、大坐骨切痕の弯曲は大きい。また耳状面にいわゆる妊娠痕を認める。四肢骨は小さく、このことからも同個体が女性であることが示唆される。

2号 男性 熟年 頭骨は保存状態が良好である。頭蓋は中頭型。三主要縫合は内板では完全に閉鎖し、外板でも大部分閉鎖の傾向を示す。眉弓の膨起度はBrocaの3度。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの3度。乳様突起は大きい。咬耗度はMartinの1~2度。下顎右の、I2・P1・M2に齶歯が見られる。腰椎で椎体辺縁部のリッピングを認める。

3号 女性 壮年 三主要縫合は内板では一部骨結合化の傾向を示すが、外板では未閉鎖である。咬耗はMartinの1度。歯石の沈着がみられる。乳様突起は小さい。四肢骨はきしゃである。大坐骨切痕の弯曲は大きい。

4号 性別不明 壮年 前頭骨の一部が残存する。歯は数本残っており、咬耗度はMartinの1~2度。下顎右M1に齶歯が見られる。四肢骨は大腿骨骨体部、脛骨骨体部、上腕骨骨体部が残り、そのサイズから少なくとも成人には達していたことが示唆される。性別についてははっきりしない。

5号 女性 壮年 三主要縫合は内板で一部骨結合化するが、外板では解放する。乳様突起は小さい。外後頭隆起はBrocaの1度。咬耗度はMartinの1~2度。明らかに別個体と思われる遊離歯3本が混入している。大坐骨切痕の弯曲は大きい。四肢骨は全体的にきしゃである。上顎左のP2・M1・M2に齶歯が見られる。

6号 性別不明 壮年 保存状態は不良。下顎左M2~M3部位は、歯の脱落後歯槽骨の吸収閉鎖がみられるので、少なくとも成人には達していたと考えられる。咬耗度はMartinの1度である。齶歯は上顎左右のM3、および下顎右M1に認める。

7号 性別不明 年齢不詳 保存状態は極めて悪く、破片骨しか残っていない。

10号 性別不明 壮年 保存状態は不良で頭骨の破片しか残っていない。三主要縫合は内板では閉鎖している。外板は保存状態が悪く観察できない。咬耗度はMartinの1~2度。銭4枚および櫛と思われる遺物を伴う。

11号 男性 壮年 三主要縫合は内板、外板とも未閉鎖である。また咬耗度はMartinの1度。一部残る下顎の歯槽部が閉鎖していることから同個体が齶歯もしくは歯周病によって、比較的早い時期に歯を喪失していたことが推測される。

12号 男性 熟年 頭骨の破片など断片的な骨片のみ残存している。乳様突起が大きいこと、頭蓋骨が厚いこと、大腿骨の骨体部の頑丈性などから同個体は男性と判断された。歯槽部は吸収閉鎖しており、熟年に達したものと推定される。

13号 男性 壮年 乳様突起は中程度の大きさを示す。咬耗度はMartinの1~2度。外後頭隆起のBrocaの3度である。頭蓋骨に病変が認められる。

14号 男性 壮年 三主要縫合は内板、外板とも未閉鎖である。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの2度。乳様突起が大きい。大坐骨切痕の弯曲は小さい。遊離歯が20本ほど残存するが、咬耗度は概ねMartinの1~2度である。

15号 男性 (?) 青年 三主要縫合は内板、外板とも未閉鎖。乳様突起は中程度の大きさである。また大坐骨切痕の弯曲も中程度である。性別は男性である可能性が高いと思われるが、もし男性であったとしたら、かなりきやしゃな体格であろう。咬耗度はMartinの1度。歯槽性突顎を認める。上顎右P2・M1に齶歯が見られる。臼歯部に歯石の沈着がみられる。椎骨骨体は完全に骨結合化しておらず、同個体の属する年齢は15、6歳から20歳前後であろう。推定身長は145cm。

16号 男性 壮年 三主要縫合は内板では完全に閉鎖し、外板でも骨結合化がかなり進んでいる。咬耗度はMartinの1~2度。眉弓の膨隆度はBrocaの3度である。上下顎の歯槽部はいびつであり、生前同個体が歯周疾患をもっていた可能性が高い。また上顎は中程度の歯槽性突顎を示す。また下顎には軽度の下顎隆起がみられる。大坐骨切痕の弯曲は大きい。大腿骨の粗線はよく発達し、四肢骨は頑丈である。推定身長は154cm。

17号 女性 青年 頭蓋は短頭型。三主要縫合は内板、外板とも解放している。乳様突起は小さい。咬耗度はMartinの1度。上顎骨および左右の脛骨に骨膜炎様の病変が認められる。

18号 女性 壮年 頭蓋は前頭骨、側頭骨および頂頭骨が比較的よく残っているが、後頭骨と頭蓋底を欠く。右眼窩にクリップラオルビタリ亞を認める。三主要縫合は内、外板ともに未閉鎖である。下顎の大臼歯はすべて脱落している。切歯、犬歯にエナメル質減形成がみられる。咬耗度はMartinの1~2度。歯石沈着が認められる。大坐骨切痕の弯曲は大きい。左右の大腿骨、脛骨、腓骨および脛骨に骨膜炎の痕跡がみられる。推定身長は164cm。

19号 女性 壮年 本人骨は20号と混入しているため、報告書によって便宜上、頭骨をそれぞれ19号、20号と番号付けした。三主要縫合は内板ではすべて閉鎖し、外板でも骨結合化の傾向がみられる。咬耗度はMartinの1~2度。乳様突起は比較的小さい。

20号 女性 壮年 20号とされた人骨は、19号より一回り小さい。同個体に対応すると考えられる下顎は前歯部の歯槽部が閉鎖している。頭蓋は長頭型。また三主要縫合は内板では完全に閉鎖しているが、外板では骨結合化に到っていない。四肢骨については、19号と20号の判別はできないが、四肢骨はきやしゃである。眉弓の膨隆度はBrocaの2度。上顎の左右I1は特殊な咬耗をしており、生前の何らかの職業的なものに起因すると思われる。

21号 男性 壮年 外後頭隆起の膨隆度はBrocaの3度。咬耗度はMartinの1~2度。左下顎のM3が萌出しかけている。歯石の沈着がみられる。大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長156cm。

22号 男性 壮年 三主要縫合は内、外板とも未閉鎖。外後頭隆起はBrocaの3度。頭蓋骨は厚く、下顎にごく弱い下顎隆起がみられる。

23号 性別不明 壮年 保存状態不良。乳様突起は破壊しており、寛骨も残っていないので性別は不明である。下顎および左上顎の歯列が残っており、咬耗度はMartinの1~2度である。M3が完全に萌出していることから少なくとも成人には達していたであろう。

24号 女性 壮年 頭骨および四肢骨が断片的に残る。三主要縫合は内板では一部閉鎖しているが、外板では解放している。咬耗度はMartinの1~2度。乳様突起は小さい。大坐骨切痕の弯曲は大きい。

25号 性別不明 成人 保存状態は悪い。頭骨は左側頭部が残っており、大きさから判断して成人には達していた可能性が高い。上顎右I1が残っており、咬耗度はMartinの1度である。唇側面歯頸部齶歯が見られる。

26号 男性 壮年 保存状態は概ね良好。頭蓋は長頭型。三主要縫合は内板が閉鎖傾向にあるが完全ではなく、外板では未閉鎖である。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの3度。乳様突起は小さいが、大坐骨切痕の弯曲は小さく、男性と推定される。四肢骨もきやしゃである。M3の萌出がみられるが、咬耗度はMartinの1度であり、咬頭がよく残っていることから、それほどの年齢には達していない。推定身長は148cm。

27号 男性 壮年 三主要縫合は内板では閉鎖しているが外板では解放している。咬耗度はMartinの1度である。齶歯が見られないが、歯石の沈着が著しい。乳様突起は大きい。大坐骨切痕の弯曲は小さい。左右の大腿骨、脛骨、腓骨に骨膜炎様の病変があり、左眼窓にはクリップラオルビタリ亞を認める。推定身長154cm。

28号 保存状態不良の頭骨、四肢骨の破片のみ残る。上顎右M3、上顎左P2・M1・M2、下顎右M1に齶歯

を認める。遊離歯9本が残存し、植立歯ともども咬耗度はMartinの1～2度である。

29号 性別不能 熟年 咬耗度はMartinの2度。齶触が上頸左M2・上頸左P2・M2に認められる。左右眼窩にクリブラオルビタリアを認める。四肢骨の大きさおよび頑丈性から男性である可能性が高い。頭蓋骨に病変あり。

30号 女性 熟年 三主要縫合は内板では完全に閉鎖し、外板でもほとんど閉鎖している。咬耗度はMartinの1～2度である。乳様突起は小さい。上頸左M3・下頸右M3に齶触が認められる。

31号 男性 壮年 保存状態は良好である。頭蓋は短頭型。三主要縫合は内板、外板とも未閉鎖である。眉弓の膨隆度はBrocaの3度である。外後頭隆起の膨隆度はBrocaの2度。咬耗度はMartinの1度である。大坐骨切痕の弯曲は小さく、乳様突起は大きい。歯槽性突顎が認められる。下頸左M1は齶触による残根状態であり、下頸右I1・下頸左I2には齶触は認められないが、その歯槽部には譲瘍が形成されている。推定身長は164cm。

32号 女性 未成年 三主要縫合は内板外板とも解放しており、四肢骨の骨端や腸骨稜が未骨化である。大坐骨切痕の弯曲は大きい。咬耗度はMartinの1度である。外後頭隆起はBrocaの2度。左眼窓にクリブラオルビタリアを認める。腸骨耳状面にいわゆる妊娠痕を認める。推定身長は153cm。

33号 性別不明 成人 保存状態はきわめて不良。右側頭部（乳様突起含む）左寛骨耳状面付近などが残存。ほとんどが細片化しており観察は困難である。

34号 男性 成人 保存状態はきわめて不良。三主要縫合において内板で骨結合完了しており、外板でも部分的に骨結合が見られる。外後頭隆起は大きい。上下肢骨については部分的にしか残っていないが比較的きやしゃなようである。

35号 女性 壮年 保存状態はきわめて不良。頭蓋の三主要縫合は骨結合していない。額部は比較的よく残っており、その咬耗度はMartinの0～1度。上下肢骨はほとんど残っていないがきやしゃなようである。

36号 女性 成人 保存状態はきわめて不良。細片が残存するのみで、乳様突起がやや小さいことから女性と推定される。

37号 女性 壮年 保存状態は不良。三主要縫合は内板の冠状縫合・矢状縫合部で骨結合が見られる。外板部ではやはり冠状縫合部で部分的に骨結合が見られる。乳様突起は小さい。咬耗度はMartinの1～2度。上下肢骨は比較的きやしゃである。

38号 女性 壮年 保存状態は不良。乳様突起はやや小さめで、外後頭隆起は小さい。咬耗度はMartinの1度。上下肢骨は比較的きやしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。

39号 2個体分が混在する。

(A) 男性 壮年 保存状態は不良。三主要縫合において内板で骨結合は完了しているが外板では認められない。乳様突起、外後頭隆起とともに大きい。額骨は上下ともよく残っており、咬耗度はMartinの1～2度。上下肢骨は頑丈である。

(B) 女性 老年 保存状態はきわめて不良。39-Aとの明らかな重複部位は、右側頭蓋錐体部、右頸骨、蝶形骨、後頸骨後頭頸付近、下頸骨である。他に左右肩甲骨の関節窩付近、環椎、左鎖骨なども老年女性のものと思われる。下頸骨は完全に歯槽閉鎖しており、下頸体も貧弱である。乳様突起は小さい。

40号 女性 青年(18歳前後) 保存状態はきわめて不良。左右大腿骨と、左右脛骨の遠位端、いくつかの頸椎、頭蓋骨が残存する。三主要縫合は内板外板とともに未結合である。脛骨は比較的よく残っており、M3が未萌出であったり、萌出途中であったりすることから、18歳前後と推定される。四肢骨の骨端は癒合完了している。残存する下肢骨はきやしゃである。

41号 女性 熟年 保存状態は不良。頭蓋は短頭型。三主要縫合は内板で骨結合完了し、外板でも冠状縫合部および矢状縫合部で骨結合完了、ラムダ状縫合部でも骨結合が部分的に認められる。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。額骨は上下ともに完形で、右上顎のM2・M1・P1、左上顎のM1、右上顎のM2で歯槽閉鎖が見られる。咬耗度はMartinの1～3度。上下肢骨はきやしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は145cm。第

9～10胸椎が強直しており、椎体部で完全に癒合している。

42号 女性 老年 保存状態は不良。三主要縫合は内板で骨結合完了し、外板でも部分的に骨結合が認められる。外後頭隆起は小さい。上下頸骨はともに完形で残っているが、完全に歯槽閉鎖していて歯は一本も残っていない。上腕骨、大腿骨、脛骨と思われる骨片が少量存在するが、その様子はややきしゃなようである。寛骨の大坐骨切痕付近も残っているが、その弯曲は大きいようである。頭蓋骨において、左の側頭下窩から顎関節窓にかけての部位に骨陥凹がある。8mm 径のものふたつと10mm 径のものがひとつである。深さはいずれも3mm 程度。内頭蓋底にも、左の中頭蓋窓の卵円孔の前方15mm 四方に渡って骨陥凹がある。

43号 女性 熟年 保存状態はきわめて不良。三主要縫合は内板、外板とともに骨結合完了している。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。頸骨は、上顎は歯槽部の破損がひどくよくわからない。下顎は右半が残存。CからP 2までは植立、M 1からM 3までは歯槽閉鎖。他、遊離歯が5本確認できる。咬耗度はMartin の1～2度。上下肢骨はきしゃである。

44号 男性 壮年 保存状態は不良。乳様突起、外後頭隆起とともに大きい。咬耗度はMartin の1～2度。上下肢骨は頑丈で大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は160cm。第5腰椎の仙骨化が見られる。

45号 女性 成人 保存状態はきわめて不良。左右の大腿骨骨頭、寛骨片、その他四肢骨片が残存する。その大腿骨骨頭の大きさから女性である可能性が強い。

46号 性別不明 成人 保存状態はきわめて不良。右大腿骨骨幹部のほか、少量の四肢骨片が残存する。

47号 男性 熟年 保存状態はきわめて不良。上下頸骨および歯はよく残っている。他には左側頭骨と左右大腿骨の骨幹部が多少残っているのみである。乳様突起は大きい。咬耗度はMartin の2度。上顎右I 2が生前脱落している。歯周疾患と思われる。下肢骨は比較的きしゃなようである。

48号 女性 壮年 保存状態はきわめて不良。ほぼ完形の頭蓋と大腿骨遠位端後面、脛骨後面が残存する程度である。三主要縫合は内板の冠状縫合部で一部骨結合が見られるほかは外板も含めて骨結合は見られない。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。頸骨も上下ともにはば完形で、その咬耗度はMartin の1～2度である。下顎の左右のM 1で歯槽閉鎖が認められる。下顎左のM 3は未萌出のようである。

49号 男性 熟年 保存状態は不良。三主要縫合において内板ではほぼ骨結合完了しているが、外板では未結合である。乳様突起は大きい。咬耗度はMartin の2～3度。上下の大臼歯部に歯周疾患が見られる。下肢骨については比較的頑丈なようである。

51号 男性 壮年 保存状態は不良。乳様突起は比較的小さい。頸骨は比較的残りが良いが、全歯にわたって歯周疾患の進行が激しい。下顎左のP 2、下顎右のP 2、M 1は齶歯により歯冠が崩壊している。上下肢骨は頑丈で、大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は164cm。

52号 性別不明 小兒（3歳前後） 左錐体部、および少量の頭蓋片、多数の遊離歯が残存する。その永久歯の歯冠形成の状態から3歳前後と推定される。永久歯の歯冠片を12個確認、その他16本の乳歯を確認できる。

53号 女性 壮年 保存状態は不良。頸骨は完形で残存し、その咬耗度はMartin の1～2度。軽度の歯周疾患が認められる。上下肢骨はきしゃである。

推定身長は144cm。左外耳道から中耳にかけて炎症性の骨欠損あり。

54号 性別不明 小兒（8歳前後） 保存状態はきわめて不良。左大腿骨骨体の近位半、および遊離歯10数本が残存。10数本のうち5本が乳歯でその他永久歯の歯冠形成の状態などから8歳前後と推定される。

55号 男性 熟年 保存状態はきわめて不良。頭蓋冠の一部が残存、冠状縫合、矢状縫合部において骨結合は認められない。頸骨は比較的よく残っているが、歯周疾患が進行しており、歯の植立しているものはない。遊離歯の咬耗度はMartin の1度。下顎左右のM 1において、隣接歯間歯頸部に齶歯あり。左右大腿骨の一部が確認できたが、比較的頑丈なようである。

56号 男性 壮年 保存状態はきわめて不良。頭蓋冠後半部が残存し、三主要縫合では内板外板とともに骨結合は認められない。乳様突起は大きく、外後頭隆起はそれほど大きくない。頸骨は上下ともに完形、咬耗度は

Martinの1～2度。上顎左のP1, P2の隣接歯間歯頸部に軽度の齶歯。下顎左のM1部位で歯槽閉鎖。全体に中程度の歯周疾患が見られる。左右の大腿骨と、脛骨の一部とが確認できるが、それらは頑丈である。大坐骨切痕の弯曲は小さい。

57号 性別不明 小児（13歳前後） 保存状態はきわめて不良。頭蓋冠は完形ではないが三主要縫合はほぼ確認できる。骨結合は認められない。乳様突起は小さい。顎骨は主に上顎右半、下顎左半が残る。他、遊離歯も多数あり、ほぼ一個体分が残存する。下顎でM1が萌出途上である。咬耗度はMartinの0～1度。上下肢骨はきやしゃである。左尺骨の近位端で骨端が癒合途中であり、大腿骨骨頭、脛骨近位端および遠位端、寛骨臼、距骨などで骨端などが未癒合なのが確認できる。歯の状態と骨端の状態で、11歳から15歳の間であると推定できる。

58号 性別不明 青年（17歳前後） 保存状態はきわめて不良。前頭骨の眼窩辺縁およびグラベラ付近、左右の錐体部から外耳道にかけての部位、上下顎骨などを確認できる。顎骨は上顎左半、下顎左右の後歯部を中心に残存し、遊離歯を含めるとほぼ全歯がそろう。M3は萌出途中で歯根も8割程度しか完成していない。咬耗度はMartinの0～1度。眼窩の一部から、クリブラオルビタリアの痕跡を確認できる。

59号 女性 壮年 保存状態は良好で、頭蓋は短頭型に属する。頭蓋の三主要縫合の骨結合はラムダ縫合の内板部に一部認められ、外板では認められない。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。上顎右M1、M2、下顎右M2で歯槽閉鎖。上顎右M3、上顎左P1、P2、下顎右P2、下顎左P2に歯冠崩壊に至る齶歯。上顎左I1、歯體腔に達する齶歯。咬耗度はMartinの1～2度。上下肢骨はきやしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は150cm。下顎頭が欠損する。顎関節症と思われる。頭蓋骨に軽度の星状瘢痕。左右大腿骨遠位半、右脛骨骨幹中央部、左上腕骨に骨髓炎。右寛骨耳状面、右鎖骨などに炎症性骨欠損が認められる。感染症による特異性骨炎が推定される。椎骨に椎体陥没多数あり。頸椎C3、4強直。

60号 男性 熟年 保存状態は不良。三主要縫合は内板で完全に骨結合化完了し、外板でも冠状縫合の一部で骨結合が認められる。乳様突起は大きい。顎骨は上顎は右M2部位から右Cまでが残存し、下顎は右M3から右P2までが残存する。上顎の右M2部位で歯槽閉鎖。同じく上顎右M1において頬側根が完全に歯槽から遊離している。歯槽骨吸収像が滑らかすぎるため、歯周疾患以外の可能性もある。その上顎右M1の隣接歯間部に軽度の齶歯あり。下顎は完全に歯槽閉鎖。上下肢骨は頑丈である。

61号 女性 熟年 保存状態はきわめて不良。ほとんど細片化しており観察可能な部分は少ない。頭蓋の三主要縫合はまったく骨結合していない。遊離歯が2本発見されたが、咬耗度はMartinの2度である。上下肢骨は細片が多量に存在するが、ややきやしゃなようである。

62号 女性 老年 保存状態は不良。左大腿骨骨幹部、頭蓋の一部、左上腕骨遠位端、大腿骨頭、などが確認できる。頭蓋縫合では矢状縫合部を確認、内板外板ともに骨結合化している。顎骨では上顎のみ確認できるが、完全に歯槽閉鎖している。大腿骨の様子はややきやしゃである。

63号 男性 熟年 保存状態は不良。左右大腿骨骨幹部、右脛骨骨幹部、下顎骨の一部、多数の遊離歯、その他頭蓋片を含む骨片が多量に残存する。下顎左M3と推定される遊離歯の咬合面に軽度の齶歯が認められる。左右の下顎M1に3根が認められる。下肢骨は頑丈である。特に右脛骨のヒラメ筋線が異常に発達している。

64号 男性 壮年 保存状態は不良。三主要縫合は内板外板とともに未結合である。乳様突起、外後頭隆起は小さい。顎骨は上下ともに完形で、咬耗度はMartinの0～1度。上下肢骨は頑丈である。推定身長は155cm。

65号 男性 壮年 保存状態は不良。三主要縫合は内板で骨結合完了し、外板でも部分的に骨結合が認められる。外後頭隆起はやや大きい。顎骨は上下の前歯部から右後歯部までが残存し、半数程度が植立している。歯槽閉鎖は見られない。遊離している順位不明の下顎大臼歯に歯冠崩壊に至る齶歯が認められる。咬耗度はMartinの1～2度。上下肢骨は頑丈で、大坐骨切痕の弯曲は小さい。

66号 男性 熟年 保存状態は不良。頭蓋は短頭型。三主要縫合において内板で骨結合完了し、外板でも半ば以上完了している。外後頭隆起は大きい。上顎骨の歯槽部がわずかに残存するが歯は死後脱落で残存しない。咬耗度は不明である。上下肢骨は頑丈で、特に下肢で顕著である。大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は162cm。

67号 男性 熟年 保存状態は不良。頭蓋は中頭型。三主要縫合においては内板で骨結合完了、外板でも矢状縫合部などで部分的に結合あり。乳様突起、外後頭隆起ともに大きい。咬耗度はMartinの3~4度。上下肢骨は頑丈で大坐骨切痕の弯曲は小さい。頸椎にリッピングが見られる。

69号 女性 成人 保存状態はきわめて不良。頭蓋底、肩甲骨関接窩、上腕骨骨頭などが残存するのみ。ややきやしゃなようである。

70号 女性 壮年 保存状態はきわめて不良で、量的にも少ない。乳様突起は小さい。頸部は比較的よく残っており、咬耗度はMartinの1度。上下肢骨はきわめてきやしゃである。

71号 女性 壮年 保存状態は不良。頭蓋は中頭型。三主要縫合においては内板で部分的に骨結合しているが外板では骨結合は見られない。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。上下肢骨はきやしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は147cm。

72号 性別年齢不明 頭蓋冠の骨片がわずかに残存するのみ。個体情報を推定するほどの材料はない。

73号 女性 成人 保存状態きわめて不良。左大腿骨から女性と推定される。他に四肢長骨骨体部、頭蓋冠、寛骨臼などが残存。

74号 女性 熟年 保存状態はきわめて不良。三主要縫合では外板部は腐食が強くてやや判別しがたいが、内外ともにほぼ骨結合が完了している様子である。乳様突起は小さく、外後頭隆起は比較的大きい。頸骨は上顎の右半分が残存するが、歯槽部は破損しており観察は難しい。遊離歯が3本あり、その咬耗はMartinの2度である。上下肢骨について、骨体部がいくらか残存し、それらはきやしゃな印象を与える。

75号 女性 壮年 保存状態はきわめて不良。三主要縫合においては冠状縫合部の内板で骨結合が見られるほかは骨結合していない。上顎はほぼ完形で残存し、咬耗度はMartinの1~2度。四肢骨は下肢の骨体部がいくらか残存しており、比較的きやしゃなようである。

76号 男性 熟年 保存状態は良好。三主要縫合では内板で骨結合完了し、外板でも冠状縫合部を中心に骨結合が認められる。乳様突起、外後頭隆起ともに大きい。頸骨は上下とも完形で残る。上顎前歯、下顎後歯で歯槽閉鎖が顕著であり、植立していても歯槽の退縮が全体に顕著である。歯石の沈着も著しく、咬合面を覆うほどである。咬耗度はMartinの2~3度。上下肢骨は頑丈で大坐骨切痕の弯曲は小さい。頸椎C5、C7の横突孔にブリッジングあり。胸腰椎が全体に魚椎様変形し楔状椎もいくつか認められる。特に顕著なのがT8、T12、L3である。椎間接合の関節炎も多数認められる。他にも、頭蓋では前頭蓋窓の前頭蓋後付近に炎症性の骨増殖が見られる。

77号 女性 熟年 保存状態は不良。頭蓋冠は骨片しか残っていないが、冠状縫合部と矢状縫合部を部分的に確認できた。内板、外板ともに骨結合化が完了しているようである。乳様突起は小さい。上顎骨は存在しないが、下顎骨はほぼ完形を残している。下顎左M2、M3が歯槽閉鎖している。他、上顎歯の遊離歯が7本残存する。咬耗度はMartinの1~2度。上下肢骨はきやしゃである。左寛骨耳状面の最上端のさらに上方に6mm径の小孔が貫通している。外傷や死後の破損ではないようである。

78、79号 少なくとも一名は男性 両者とも壮年 2体分が混在しており、分別は困難である。明らかな重複部分はその歯である。その咬耗から、両者とも壮年期の個体と推定できる。一方はMartinの1度、もう一方は遊離歯が数本存在するのみだが、おなじく2度である。保存状態の良い寛骨が一体分存在し、そこから少なくとも一名は男性であることが推定できる。残存する上下肢骨はほぼ一体分であり、比較的きやしゃである。乳様突起については一方は大きく一方は小さい。

81号 男性 成人 保存状態はきわめて不良。外後頭隆起が観察できたがそれほど大きくなない。遊離歯が4本残存する。咬耗度はMartinの1度。下顎骨の右半が残存し、後歯部で歯槽閉鎖が認められる。左右の大腿骨体が確認できたが、頑丈な様子である。

82号 男性 熟年 保存状態は不良。右側頭部を確認、乳様突起は大きい。頸骨は主に右半が確認可能、下顎右P2、M1部位で歯槽閉鎖途中である。咬耗度はMartinの2~3度。四肢骨は頑丈で、大坐骨切痕の弯曲は小さい。左右の脛腓骨に広範な骨膜炎を認める。

83号 女性 熟年 保存状態は不良。頭蓋冠と寛骨の一部と右大腿骨の近位半が比較的よく残っている。その他四肢長骨片多数といくつかの椎骨、部位不明の骨片が多数残る。三主要縫合は内板で骨結合が完了し、外板でも縫合線をようやく確認できる程度まで骨結合化が進んでいる。乳様突起は小さい。顎骨は上顎では右Cから外側が破損、下顎では右P2より外側で破損している。そのうち、上顎左Cから左M3まで、下顎右M2から左Cまで、下顎左M1からM3までが歯槽閉鎖している。歯は、遊離歯が2本、上顎右I1と上顎右C1が残る。咬耗度はMartinの2度。上顎右I1の隣接歯間歯頸部に軽度の齲歯。四肢骨はきやしゃなようである。大坐骨切痕の弯曲は大きい。

85号 女性 熟年 保存状態は不良。頭蓋の三主要縫合部位において骨結合化は認められない。乳様突起、外後頭隆起は小さい。顎骨から、上顎右P1部位および下顎左M1部位で歯槽閉鎖が確認できる。咬耗度はMartinの1~2度で、上顎右P2、上顎左M2に隣接歯間歯頸部の齲歯あり。上顎右P2の歯根部に膿瘍痕あり。上下肢骨はきやしゃである。推定身長は144cm。クリップラオルビタリアが確認できる。

86号 2個体分が混在する。

(A) 女性 老年 保存状態は良好。頭蓋は長頭型。三主要縫合では内板で骨結合化完了し、外板でも部分的に骨結合化している。乳様突起、外後頭隆起とともに比較的大きい。咬耗度はMartinの3度に達する。上顎右M3、I2、I1、上顎左I1が強度の齲歯におかされ、特に上顎右M3、I2は歯冠崩壊に至る。歯槽の退縮も激しく、歯槽閉鎖の部位も多い。上下肢骨はややきやしゃである。大坐骨切痕の弯曲は比較的大きい。推定身長は147cm。仙椎の1~3が残存し、椎弓破裂が見られる。

(B) 女性 成人 保存状態は不良。個体 86Aとの重複部位は頭蓋の眉間部（グラベラ付近）・右錐体部・左顎関節部・左大腿骨・左上腕骨遠位端・右桡骨遠位端・左尺骨近位1/2。四肢骨の様子はややきやしゃである。

87号 女性 熟年 保存状態は良好。頭蓋は中頭型。三主要縫合では内板で骨結合化完了し外板でも部分的に骨結合化が認められる。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。咬耗度はMartinの2度。歯周疾患が認められ、特に上顎右M2で歯周疾患が認められる。上下肢骨はきやしゃで大坐骨切痕の弯曲はやや大きめである。推定身長は150cm。

88号 女性 成人 保存状態は不良。左右大腿骨片が残存する。その骨頭の大きさから女性と推定される。大腿骨骨部もややきやしゃなようである。

89号 男性 熟年 保存状態は良好。頭蓋は中頭型。三主要縫合では内板では骨結合完了し、外板でも部分的に骨結合化が見られる。乳様突起、外後頭隆起とともに大きい。咬耗度はMartinの2度。下顎左右のI1で歯槽閉鎖。骨縁の鋭角なことから人為的な抜歯が疑われる。上顎右M3、M2も歯槽閉鎖が認められるがこれらは歯周病の疑いが強い。上下肢骨は頑丈で、大坐骨切痕の弯曲は比較的小さい。推定身長は152cm。右外耳道に骨欠損あり。外耳道炎が疑われる。変形性脊椎症。L5で椎弓の分離が認められた。胸骨の第一肋骨との関節部に激しい骨増殖が認められる。

90号 男性 熟年 保存状態は不良。左右寛骨の一部、仙骨の一部、左右大腿骨、いくつかの椎骨、遊離歯多数が残存する。遊離歯は下顎の14本（左右M3を除く）と上顎左M1で、合わせて15本が確認できる。咬耗度はMartinの2度。大腿骨はきやしゃである。大坐骨切痕の弯曲は小さいようであるが、保存が悪く断定しがたい。仙骨の前面、第1~2仙椎のあたりに炎症性の骨吸収像が認められる。

91号 男性 青年（20歳前後）保存状態は不良。乳様突起はやや大きい。顎骨は上下ともに完形。上顎M3は萌出完了しているが、下顎M3は萌出途中である。咬耗度はMartinの0~1度。上顎左I1に特徴的な咬耗が認められる。歯冠の1/5程度が大きくU字にえぐれている。その他の骨片から大腿骨や脛骨の一部が確認できるがやや頑丈な様子である。92号人骨と同様に保管されているが分別は困難である。なお、頭蓋の左錐体部の重複が3個体分存在する。

92号 女性 熟年 保存状態はきわめて不良。乳様突起は小さい。顎骨は左上顎の後歯部と、左下顎の最後方M3のあたりのみが残存する。咬耗度はMartinの1~2度。

少量の四肢骨片が残存し、ややきしゃなようである。91号人骨と同様に保管されているが分別は困難である。頭蓋の左錐体部の重複が3個体分存在することは上記のとおりである。

93号 女性 熟年 保存状態は不良。頭蓋の矢状縫合後半とラムダ縫合とを確認、内板、外板で骨結合が認められる。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。顎骨は上下そろっており、一部に歯槽閉鎖が認められる。上顎左M2に歯冠崩壊に至る齶歯が認められる。四肢骨では保存の悪い左右の大脛骨が残存するが、きしゃなようである。

94号 男性 壮年 保存状態は良好。頭蓋は中頭型。三主要縫合において内板で大部分結合完了し、外板でも部分的に骨結合が見られる。乳様突起、外後頭隆起とともにそれほど大きくなない。咬耗度はMartinの1~2度。下顎左M1に齶歯が見られ、歯冠が崩壊している。下顎右M1は生前脱落している。上下肢骨は頑丈で大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は160cm。左脛骨の骨体中央部外側面と、右腓骨の下部1/3のあたりとに骨髓炎が見られる。

95号 女性 熟年 保存状態はきわめて不良。咬耗度はMartinの1~2度。上顎右P2~P1、下顎右P2~P1の隣接歯冠の歯頸部に齶歯が見られる。上下肢骨は骨体部がわずかながら観察されるのみだが、きしゃである。

96号 2個体分の人骨が混在する。

(A) 女性 老年 保存状態は良好。頭蓋は中頭型。三主要縫合は内板で骨結合化完了し、外板でも部分的に骨結合が見られる。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。顎骨は上下ともにはば完全に歯槽閉鎖しており、わずかに上顎右Pが2本植立するのみである。咬耗度はMartinの2度。上下肢骨はきしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は146cm。腰椎に顯著なリッピングが見られる。変形性脊椎症と見られる。L4とL5に強直が認められる。これらは椎体椎弓とともに完全に癒合している。L2に楔状椎が認められる。

(B) 性別不明 成人 右寛骨臼の一部、左脛骨近位端後面の一部、左右不明の大脛骨頸部ほか長骨片少量、などが重複する。完形で残存する左右脛骨は個体Bのものである可能性が強い。

97号 性別不明 熟年 保存状態はきわめて不良。少量の頭蓋片と4個の歯冠片が残る。歯冠片は右上顎M1~M3と左上顎M3と推定される。咬耗度はMartinの1~3度。

98号 女性 熟年 保存状態は不良。頭蓋片から三主要縫合は内板で骨結合化が完了しており、外板でも部分的に骨結合が認められる。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。咬耗度はMartinの1~2度で、歯周疾患による歯槽の退縮が著しい。上下肢骨はきしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は153cm。

100号墓 性別不明 成人 保存状態はきわめて不良。頭蓋片2個の歯冠片が残存。歯冠片はCと下顎Pで、咬耗度はMartinの1~2度。

101号 女性 壮年 保存状態は良好。頭蓋は中頭型で三主要縫合において骨結合は認められない。乳様突起はやや小さめ、外後頭隆起も小さい。顎骨もほぼ完形で全歯が植立している。その咬耗度はMartinの1~2度。上下肢骨もよく残っているが、ややきしゃである。大坐骨切痕の弯曲はそれほど大きくなない。推定身長は145cm。

102号 女性 壮年 保存状態は不良。三主要縫合において内板では骨結合が完了しており、外板でも部分的に骨結合している。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。咬耗度はMartinの1~2度。歯周疾患が見られる。上下肢骨はきしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は140cm。

103号 男性 壮年 保存状態は不良。頭蓋は長頭型。三主要縫合において骨結合は見られない。乳様突起、外後頭隆起とともに大きい。咬耗度はMartinの1~2度。上下肢骨はきしゃである。推定身長は153cm。多発性の炎症性骨病変を認める。右大脛骨下端から1/3辺りの後面に10cmに渡って炎症性の骨肥厚、腐骨の形成などが見られる。骨髓炎と認められる。左大脛骨のやはり後面下端から1/5辺りに4cm程度の、骨破壊と骨増殖の混在が見られる。骨膜性骨炎と思われる。頭蓋の前頭骨、左右頭頂骨にも癓瘍状の陥凹がみられる。その他、右上腕骨にも遠位1/3あたりに7cmあまりの範囲に骨炎。右鎖骨の肩峰端側1/2あたりを7cm程度の範囲で、骨破壊と骨増殖が混在する骨炎像を呈している。感染症による特異性骨髓炎と思われる。

104号 女性 老年 保存状態は良好。頭蓋は中頭型。三主要縫合においては、冠状・矢状縫合で内板外板とも

に骨結合が認められる。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。頸骨はほぼ完形で残っており、咬耗度はMartinの1~2度を示す。特に上顎で歯槽閉鎖が激しく、強度の歯周疾患が観察される。上下肢骨はややきしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は141cm。第5腰椎の仙骨化が見られる。それもその右側のみで起こり、しかも融合しきっていない。その融合面は関節炎様に異常な骨増殖を呈する。

105号 女性 熟年 保存状態は不良。三主要縫合については内板では冠状・矢状縫合とラムダ状縫合の一部で骨結合完了し、外板でも矢状縫合部で骨結合完了、冠状縫合部でも半ば以上骨結合している。乳様突起は小さく、外後頭隆起はやや大きい。頸骨は比較的残っており、咬耗度はMartinの2度。中程度の歯周疾患が認められる。上下肢骨はきしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。頭蓋冠の頭頂孔にあたる部位に直径5mmの大の小孔が左右にそろって貫通している。

106号 女性 熟年 保存状態は不良。三主要縫合は内板部では冠状縫合、矢状縫合ではほぼ骨結合完了しており、外板においても部分的に骨結合が見られる。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。咬耗度はMartinの1~2度。歯槽の退縮が著しく、歯槽窩の形状がまともに残っているものは少数である。植立歯は2本、その他16本の遊離歯が確認された。上下肢骨はきしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。腰椎のひとつに圧迫骨折と思われる魚椎様変化が認められた。その他、両大腿骨において、骨幹が外側に大きく弯曲している。くる病の疑いがある。

107号 女性 熟年 保存状態は不良。頭蓋は短頭型。三主要縫合は内板で骨結合完了し、外板でも冠状縫合部、矢状縫合部において部分的に骨結合している。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。咬耗度はMartinの1~2度。歯周疾患があり、下顎左M2 M3には咬合面齶歯、下顎左M1が生前脱落している。上下肢骨はきしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は145cm。

109号 女性 壮年 保存状態は不良。三主要縫合は内板部で完全に骨結合完了し、外板部でもほとんど完了している。乳様突起は小さいが、外後頭隆起は大きい。咬耗度はMartinの1~2度。上顎右Cが埋伏。上下肢骨はきしゃである。左右脛腓骨、および左右大腿骨の遠位端に、骨膜炎を認めた。

110号 女性 老年 保存状態は不良。咬耗度はMartinの1~2度。歯頸部の齶歯多数あり。上顎左M2、下顎左P1には歯冠崩壊にまで至る齶歯が見られる。そのほか、大臼歯部を中心に、歯周疾患によると思われる歯の脱落が認められる。上下肢骨はきしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。

111号 男性 壮年 保存状態は良好。頭蓋は短頭型。三主要縫合は内板で大部分骨結合し、外板では冠状縫合と矢状縫合とで部分的に骨結合している。乳様突起、外後頭隆起は大きい。咬耗度はMartinの1~2度。歯周疾患があり、大臼歯の生前脱落が多い。上下肢骨はそれほど頑丈ではない。大坐骨切痕の弯曲は小さい。軽度のクリップラオルビタリアが認められる。左脛腓骨上部に骨膜炎。左鎖骨胸骨端下面に炎症性骨増殖が見られる。頸椎および腰椎に変形性脊椎症。推定身長は153cm。

112号 2個体が混在する。

(A) 女性 壮年

保存状態は不良。三主要縫合は骨結合していない。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。咬耗度はMartinの0~1度。M3が4本とも萌出途中である。上下肢骨はきわめてきしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。

(B) 女性 壮年

保存状態はきわめて不良。三主要縫合は骨結合していない。乳様突起、外後頭隆起ともに小さく、咬耗度はMartinの1度。下顎左M2の咬合面に齶歯。上下肢骨はきわめてきしゃである。

113号 女性 熟年 保存状態はきわめて不良。乳様突起は大きい。咬耗度はMartinの2~3度。下顎M3(左右不明)の歯頸部に齶歯。上下肢骨はほとんど残っていないが大腿骨の骨幹部などから判定するときしゃであるらしい。右眼窩部しか残っていないが、クリップラオルビタリアが認められる。

114号 男性 熟年 保存状態は不良。頭蓋は中頭型。三主要縫合は内板で大部分骨結合し、外板でもほとんど骨結合化している。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。咬耗度はMartinの1~2度。上下肢骨は頑丈で大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は151cm。

115号 2個体が混在する。

(A) 女性 老年 保存状態は不良。三主要縫合は部分的にしか観察できないが、内板外板とも骨結合化していたようである。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。上下頬とも完全に歯槽閉鎖。上下肢骨はきやしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は 150cm。

(B) 女性 壮年 保存状態は不良。三主要縫合において骨結合は見られない。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。咬耗度はMartinの1~2度。上下肢骨はきやしゃである。推定身長は150cm。

116号 2人分の骨が混在している。二者ともに熟年女性で身体特徴も似かよっているため、それぞれの部位を二者に分けるのは非常に困難である。

保存状態はいずれも不良。頭蓋について、一方は中頭型で、三主要縫合については冠状縫合、矢状縫合部ではとんど骨結合している。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。咬耗度はMartinの1~2度。下顎前歯の唇側に発達した歯石あり。歯周疾患を認める。もう一方の頭蓋は、一部しか残存せず、乳様突起は小さい。咬耗度はMartinの1~2度。歯周疾患あり。上下肢骨についても2個体部の骨が重複して存在し、いずれもきやしゃである。より長身な方の推定身長は142cmである。骨盤も2個体分がほぼ完形で残存する。大坐骨切痕の弯曲はどちらも大きい。

117号 男性 老年 保存状態は不良。三主要縫合はほとんど骨結合完了している。乳様突起、外後頭隆起とともに大きい。咬耗度はMartinの2~3度。下顎の前歯・左大臼歯などで歯槽閉鎖。歯周疾患あり。上下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は159cm。

118号 男性 熟年 保存状態は不良。三主要縫合は内板で大部分骨結合し、外板部でも部分的に骨結合が認められる。乳様突起は大きく外後頭隆起は小さい。咬耗度はMartinの1~2度。上顎右M2に歯周疾患を認める。上顎左M2の遠心歯頸部に齶歯。下顎左I2の歯槽部舌側に歯根腫瘍の瘻孔あり。上下肢骨は頑丈で、推定身長は154cm。

119号 男性 老年 保存状態は不良。乳様突起は小さい。咬耗度はMartinの2~3度。下顎左のM1からM2の近心根部位にかけて大きな歯周ポケットがある。上下肢骨は頑丈で、大坐骨切痕の弯曲は小さい。

120号 男性 熟年 保存状態は不良。顎骨はほぼ完存し、咬耗度はMartinの1~2度。歯周疾患が見られる。上下肢骨は頑丈である。腰椎にリッピングが目立つ。

122号 女性 老年 保存状態は不良。乳様突起は比較的大きい。外後頭隆起は小さい。歯槽は上下とも大部分が閉鎖。残存する5本の遊離歯について咬耗度はMartinの2~3度。上下肢骨はきやしゃ。大坐骨切痕の弯曲は大きい。右脛骨上部に軽度の骨膜炎。L1に楔状椎。下部腰椎に発達したリッピングがある。変形性脊椎症と考えられる。Th11~12間で右椎間関節部に瘻合が見られる。推定身長は143cm。

123号 男性 熟年 保存状態は不良。乳様突起は大きい。咬耗度はMartinの2度。多数の歯に進行した齶歯があり、おもに歯頸部、隣接歯間部に認められる。同様に歯周疾患も認められる。上下肢骨は頑丈で、推定身長は155cm。左右大腿骨・左腓骨・左右上腕骨に骨膜炎が見られる。特に大腿骨は腐骨・瘻孔の形成が見られ、非常に顯著である。また左右脛骨・頭蓋骨(前頭部・口蓋)にも骨膜骨炎が見られることから、感染症による特異性骨膜炎と考えられる。

124号 女性 老年 保存状態は不良。頭蓋は短頭型。三主要縫合において内板で大部分骨結合し、外板部でも部分的に骨結合が見られる。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。咬耗度はMartinの2~3度。歯周疾患あり。下顎右I1に歯根膿瘍。

125号 性別不明 成人 ほとんど残存していない。数本の遊離歯が残る。永久歯の歯冠が存在し、その咬耗から成人であることは間違いないと思われる。その他についてはなにもわからない。

126号 男性 熟年 保存状態は不良。歯はよく残っており、歯頸部の齶歯が多数の歯に見られ、下顎Cには発達した歯石が見られる。歯周疾患がある。上下肢骨はややきやしゃで、左右脛骨に広範な骨膜炎が認められ、両大腿骨にも同様な骨膜炎が軽度に認められる。

128号 男性 老年 保存状態は良好。三主要縫合は大部分骨結合が完了している。乳様突起、外後頭隆起ともに大きい。咬耗度はMartinの1~2度だが、歯槽閉鎖の部分が多く、年齢のわりに咬耗は弱い。下顎歯は右M2のみが残存し、歯頸部の齶歎がある。残存している歯すべてにおいて歯槽の退縮著しい。上下肢骨は頑丈。推定身長は164cm。腰椎にリッピングが目立つ。

129号 男性 壮年 保存状態は良好。三主要縫合部で骨結合は見られない。乳様突起、外後頭隆起とともに大きい。咬耗度はMartinの2度。上下肢骨は頑丈で、大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は152cm。左右大腿骨の全周囲に骨膜炎があり、また大腿骨頭最下端（小転子前方）において左右同じような骨増殖が認められる。左右脛骨、左右橈骨遠位端にも骨膜炎を認める。

130号 男性 壮年 保存状態は不良。三主要縫合において骨結合は見られない。乳様突起は小さく、外後頭隆起は大きい。咬耗度はMartinの1~2度。上下肢骨は頑丈で、推定身長は160cm。胸腰椎の椎体上下面に骨陥凹が認められる。右鎖骨の下面、胸骨側1/2程度に骨陥凹あり。

131号 男性 壮年 保存状態は不良。頭蓋は長頭型。三主要縫合は内板で大部分に骨結合が見られ、外板部でも半分程度が骨結合している。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。咬耗度はMartinの1~2度。下顎右M1の咬合面に齶歎。上下肢骨は頑丈で大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は157cm。軽度のクリップラオルビタリアの痕跡が残る。

132号 女性 熟年 頭蓋のみ保存状態良好。長頭型。三主要縫合は内板の大部分で骨結合が見られる。外板ではほとんど見られない。外後頭隆起は小さい。乳様突起も小さい。咬耗度はMartinの1~2度。上下肢骨はきしゃ。

133号 男性 熟年 保存状態は不良。三主要縫合において内板で大部分骨結合完了し、外板では骨結合は見られない。乳様突起は大きく、外後頭隆起は小さい。咬耗度はMartinの1~2度。歯周疾患が見られる。上下肢骨は頑丈。推定身長は154cm。腰椎に変形性脊椎症が見られる。

134号 女性 壮年 保存状態は不良。前頭縫合が認められる。三主要縫合は骨結合していない。外後頭隆起は小さい。咬耗度はMartinの1度。下顎右M2の咬合面に軽度の齶歎あり。上下肢骨はきしゃ。

135号 女性 熟年 保存状態は不良。外後頭隆起は小さい。咬耗度はMartinの2~3度。上下肢骨はきしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。

136号 2個体が混在する。

(A) 男性 壮年 保存状態は良好。頭蓋は中頭型。三主要縫合は内板で大部分が骨結合し、外板でも冠状縫合の一部で骨結合している。外後頭隆起は小さい。乳様突起は小さい。咬耗度はMartinの1~2度。上顎左M1に齶歎がある。上下肢骨は頑丈。推定身長は156cm。

(B) 女性 熟年 保存状態は良好。三主要縫合は内板で大部分骨結合し、外板ではあまり結合が見られない。外後頭隆起は小さく、乳様突起は小さい。咬耗度はMartinの2~3度。下肢骨はきしゃである。

137号 女性 青年（20歳前後）保存状態は良好。乳様突起は小さい。咬耗度はMartinの1~2度。歯周疾患が認められる。上下肢骨はきしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は146cm。左右上腕骨の上部1/3辺りの後面に対称的なかたちで骨侵食が認められる。左大腿骨後面の内側顆直上にも骨侵食あり。

138号 男性 壮年 保存状態は不良。乳様突起は大きい。咬耗度はMartinの1度。大臼歯の咬頭がそのまま残存しているほど咬耗は弱い。上下肢骨はきしゃだが、大坐骨切痕の弯曲は小さい。

139号 性別不明 青年（20歳前後） 保存状態は悪くないが残存部位が少ない。少量の長骨骨体部と頸骨と歯が比較的よく残っている。咬耗度はMartinの1度。M3以外は完全に萌出完了。歯根未完成のM3（下顎）が逆離歯として存在。上下肢骨はきしゃである。

140号 女性 熟年 保存状態は不良。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。咬耗度はMartinの1~2度。咬耗は弱い。下顎右M2、M3、および左右の下顎I1部位が歯槽閉鎖している。その歯槽骨は鋭角な稜線を描いている。隣接歯などの様子からは齶歎がひどかったとは思われない。物理的な事故による歯の脱落の可能性が強い。

上下肢骨はきゃしゃ。推定身長は147cm。

142号 男性 熟年 保存状態は良好。頭蓋は長頭型。三主要縫合は、内板では大部分に骨結合化があり、外板でも冠状縫合の一部に骨結合がみられる。外後頭隆起は比較的大きい。乳様突起はそれほど大きくない。咬耗度はMartin の1~3度。上下肢骨は頑丈で、大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は154cm。

143号 女性 老年 保存状態は不良。歯槽は大部分が閉鎖している。上下肢骨はきゃしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。下部胸椎に楔状椎。また別の胸椎で、椎間関節で癒合したものがある。

144号 男性 壮年 保存状態は不良。三主要縫合は内板で大部分が骨結合し、外板部でも特に矢状縫合と冠状縫合においてほとんど骨結合している。乳様突起は大きい。外後頭隆起は小さい。咬耗度はMartin の1~2度。歯槽退縮が激しく、大臼歯部で特に顕著である。上下肢骨はきゃしゃで、大坐骨切痕の弯曲は小さい。左大脛骨骨体中央部後面に強い骨増殖あり。右脛骨が側方に弯曲（内側に凸）し、左と比べて1cm程度長い。推定身長154cm。

145号 女性 壮年 保存状態は不良。乳様突起は小さい。咬耗度はMartin の0~1度。上下肢骨はきゃしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。

147号 2個体が混在する。

(A) 男性 青年（20代前半） 保存状態は良好。三主要縫合について骨結合は見られない。乳様突起、外後頭隆起ともに大きい。咬耗度はMartin の0~1度。M3が萌出途上にある。上下肢骨は頑丈で、大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長155cm。クリブラオルビタリアが認められる。

(B) 男性 熟年 保存状態は不良。三主要縫合では冠状縫合、矢状縫合で骨結合が見られる。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。顎骨は上顎のみ残存し、歯はすべて死後脱落している。歯周疾患が認められる。上下肢骨は頑丈。

148号 2個体が混在する。

(A) 女性 壮年 保存状態は不良。乳様突起は小さい。咬耗度はMartin の1度。大臼歯の咬頭もほとんどかたちを残している。上下肢骨はきゃしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。

(B) 男性 老年 保存状態は不良。三主要縫合においてほとんど骨結合が完了している。咬耗度はMartin の2度。上顎は完全に歯槽閉鎖し、下顎でも数本を残すのみで歯槽の退縮が著しい。年齢のわりに咬耗は弱い。

150号 女性 壮年 保存状態は良好。頭蓋は長頭型。三主要縫合では冠状縫合部と、矢状縫合部の前方1/2程度が内板のみ骨結合し、外板では骨結合は見られない。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。咬耗度はMartin の1度。上下肢骨はきゃしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は150cm。腰椎に側方楔状椎が認められる。とくにL4で半椎及びその癒合椎と見られる所見が認められる。この椎骨は左方で椎弓根が上下に2本存在し、右方では椎弓根は1本である。先天的な発生異常と考えられる。

151号 男性 熟年 保存状態は良好。頭蓋は中頭型。三主要縫合は内板部で大部分骨結合し、外板部でも部分的に骨結合が認められる。乳様突起は大きく、外後頭隆起は小さい。咬耗度はMartin の1~2度。上下肢骨は頑丈で、大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は153cm。

152号 男性 熟年 保存状態は不良。三主要縫合において内板で骨結合が見られ、外板でも部分的に骨結合が見られる。乳様突起は大きい。咬耗度はMartin の2~3度。上下肢骨は頑丈である。左脛骨の外側後面に突起状の骨増殖。筋炎由来と思われる。

153号 女性 熟年 保存状態は不良。三主要縫合は内板外板ともに骨結合が見られる。乳様突起は小さい。咬耗度はMartin の2度。下顎大臼歯部などに歯槽閉鎖が見られる。上下肢骨はきゃしゃ。

154号 男性 老年 保存状態は不良。三主要縫合は内板で大部分骨結合し、外板でも部分的に骨結合が見られる。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。咬耗度はMartin の2~3度。下顎右M3の歯頸部、下顎左M1の根間部に齶歯。歯周疾患が見られる。上下肢骨は頑丈で、大坐骨切痕の弯曲は小さい。

155号 女性 熟年 保存状態は不良。三主要縫合は冠状縫合部と矢状縫合部の一部の内板のみで観察可能で、

それらに骨結合を認めることができる。乳様突起は小さい。咬耗度はMartinの2~3度。上顎右Cに強い咬耗による歯齶の露出からくる齶歯あり。大坐骨切痕の弯曲は大きい。

156号 女性 壮年 保存状態は良好。頭蓋は中頭型で、三主要縫合は内板で完全に骨結合完了し、外板では冠状縫合の一部で骨結合している。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。咬耗度はMartinの1~2度。上下肢骨はきやしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は150cm。腰椎に骨折痕あり。

157号 女性 老年 保存状態は良好。頭蓋は中頭型で、三主要縫合は冠状縫合・矢状縫合部で内外板ともに骨結合し、ラムダ状縫合部で骨結合は見られない。下顎が残存するが齒槽は大部分閉鎖し、残っていた下顎左M1、M3についての咬耗度はMartinの3度。上下肢骨はきやしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は143cm。腰椎に魚椎様変形を認め、また楔状椎も認められる。

158号 男性 壮年 保存状態は良好。三主要縫合は、内板では冠状縫合と矢状縫合との大部分に骨結合化があり、外板でも矢状縫合の大部分が骨結合化している。外後頭隆起の膨隆は小さい。咬耗度はMartinの1~2度。上下肢骨は比較的きやしゃ。大坐骨切痕の弯曲は大きい。上顎、および下顎前歯部に歯周疾患あり。

159号 女性 熟年 保存状態は不良。頭蓋は短頭型。三主要縫合について内板外板ともに大部分骨結合している。ラムダ状縫合の外板部で一部未結合部分がある。外後頭隆起は小さい。咬耗度はMartinの1~2度。歯周疾患が見られ、また歯頭部、隣接歯間部の齶歯が見られる。特に上顎右M1は歯冠の3/4以上が崩壊する。上下肢骨はきやしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。左右脛骨の遠位端に骨膜炎あり。頭蓋左前頭部に広範な骨侵食あり。

160号 男性 壮年 保存状態は不良。三主要縫合について骨結合は見られない。咬耗度はMartinの1度。上下肢骨はきやしゃだが、大坐骨切痕の弯曲は小さい。第5腰椎と仙骨が融合している。

161号 男性 壮年 保存状態は良好。頭蓋は中頭型。三主要縫合は内板の冠状縫合・矢状縫合で骨結合が見られ、外板では認められない。乳様突起は大きく、外後頭隆起は小さい。咬耗度はMartinの1~2度。歯周疾患が認められる。上下顎合わせて11本の歯に歯頸部齶歯が認められる。上下肢骨は頑丈で、大坐骨切痕の弯曲は小さい。四肢長骨の多くに広範囲の骨膜炎をみとめる。特に左右脛骨の外側面に強く現れている。

162号 男性 老年 保存状態は良好。頭蓋は長頭型。三主要縫合で内板部で完全に骨結合完了し、外板部でも半ば以上骨結合完了している。乳様突起、外後頭隆起とともに大きい。下顎は完全に齒槽閉鎖し上顎も一部しか残存せず、残存部位でも齒槽退縮が著しいことがわかる。上下肢骨は頑丈で大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は153cm。左右脛骨の内側上関節面に關節炎が見られる。(erosionあり。)

胸腰椎(T10~L1推定)に強直が見られる。椎体前面に厚く韌帯骨化が見られ、椎体後面、椎体関節部にも骨の癒合が認められる。そのほか、腰椎に骨棘の発達が認められ、仙腸関節にも骨棘を認める。強直性脊椎炎の疑いがある。他に右上腕骨頭、右桡骨の橈骨粗面、中手骨、手根骨、手指骨にも骨棘の発達が認められる。

163号 女性 老年 保存状態は不良。乳様突起は小さい。下顎が残存しているが、全歯について齒槽閉鎖。上下肢骨はきやしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。下部胸椎に圧迫骨折。左脛骨に強い骨膜炎。全身的に骨密度の減少が著しい。

164号 男性 熟年 保存状態は不良。前頭縫合が認められる。三主要縫合は内板では矢状縫合の大部分に骨結合があり、外板では骨結合はない。乳様突起は大きく膨隆し、外後頭隆起も大きい。咬耗度はMartinの2~3度。上下肢骨は頑丈。推定身長は163cm。

165号 女性 老年 保存状態は不良。三主要縫合において内板で大部分骨結合し、外板でも部分的に骨結合している。咬耗度はMartinの1~2度。しかし下顎について完全に齒槽閉鎖しているため、咬耗以上に年齢は進んでいると思われる。歯周疾患あり。上顎右M3の咬合面、上顎左M1~M3の隣接歯間の歯頸部に齶歯。上下肢骨はきやしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。

166号 女性 壮年 保存状態は不良。三主要縫合において骨結合なし。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。咬耗度はMartinの1度。下顎左右のM2で咬合面齶歯。上下肢骨はきやしゃ。

168号 女性 熟年 保存状態は不良。三主要縫合において内板部で骨結合が見られ、外板部でも部分的に骨結合が見られる。乳様突起は小さく、外後頭隆起は大きい。咬耗度はMartinの2~3度。上下肢骨はきやしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は154cm。

169号 女性 熟年 保存状態は不良。三主要縫合は内板外板ともにほとんど骨結合完了。乳様突起は大きく、外後頭隆起は小さい。咬耗度はMartinの1~3度。上顎左M1に齲歯と歯周疾患あり。上下肢骨はきやしゃである。

170号 男性 熟年 保存状態は良好。三主要縫合は矢状縫合部で内板・外板ともに骨結合しているが、そのほかでは骨結合していない。乳様突起は小さく、外後頭隆起も大きい。咬耗度はMartinの2~3度。上顎右M1、M2の歯槽部に歯周疾患あり。上下肢骨は頑丈で大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は154cm。腰椎に変形性脊椎症。

171号 女性 熟年 保存状態は不良。頭蓋は中頭型。三主要縫合は内板部は観察できないが、外板部で冠状縫合の一部が骨結合している。乳様突起は小さく、外後頭隆起は比較的大きい。咬耗度はMartinの2~3度。大臼歯の歯頸部に齲歯あり。歯周疾患あり。大坐骨切痕の弯曲は大きい。両膝関節に骨棘の発達が認められる。

172号 女性 熟年 保存状態は不良。内板の冠状縫合部において溝が残る。矢状縫合部は大部分骨結合。外板部で部分的に骨結合あり。乳様突起は大きいが外後頭隆起は小さい。咬耗度はMartinの2度。上下顎後歯部の歯頸部に齲歯。同じく上下顎大臼歯歯槽部に顕著な歯周疾患。上下肢骨はきやしゃ。大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は151cm。

174号 女性 壮年 保存状態は不良。乳様突起は小さい。咬耗度はMartinの1~2度。細片が残るのみである。右外耳道が異常に拡大している。外耳道炎の疑いあり。

176号 女性 壮年 保存状態は良好。頭蓋は中頭型。三主要縫合は骨結合化していない。乳様突起は比較的大きいが、外後頭隆起は小さい。咬耗度はMartinの1度。齲歯により下顎右M3が歯冠崩壊、下顎右M2の咬合面(裂溝)にも齲歯あり。上下肢骨はきやしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は146cm。

177号 性別不明 壮年 保存状態は悪くないが、残存量が少なく部分的に細片が残るのみ。左尺骨の近位端、左乳様突起の小さることなどからやや女性的と判断される。他に遊離歯が14本残存。咬耗度はMartinの1度。上顎左M2は齲歯によって歯冠の3/4が崩壊している。四肢骨はほとんど残っていないが、ややきやしゃな印象。

178号 女性 壮年 保存状態は不良。乳様突起は小さい。咬耗度はMartinの1~2度。上顎右P2の隣接歯面、上顎左M3および下顎右M3の歯頸部に齲歯。上下肢骨はきやしゃである。

179号 男性 壮年 保存状態は良好。頭蓋は長頭型。三主要縫合は骨結合は見られない。乳様突起は大きく、外後頭隆起は小さい。咬耗度はMartinの1度。歯周疾患があり、歯頸部に連続したかたちで軽度の齲歯が見られる。上下肢骨は頑丈で大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は155cm。

180号 女性 老年 保存状態は不良。頭蓋は中頭型。三主要縫合で内板で大部分骨結合し、外板でも部分的に骨結合が見られる。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。上下顎とも歯槽は大部分閉鎖している。上下肢骨はきわめてきやしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は133cm。T h 10に圧迫骨折、T h 11~12の椎間関節部に骨癒合が見られ、T h 11が楔状椎。

181号 男性 壮年 保存状態は良好。頭蓋は中頭型。三主要縫合において骨結合は認められない。乳様突起は小さく、外後頭隆起は大きい。咬耗度はMartinの1~2度。歯石の付着が顕著で、大臼歯部を中心として歯周疾患が見られる。下顎左M3、下顎右M2に齲歯。上下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は153cm。腰椎にリッピングが見られる。

182号 女性 小児(15歳前後) 保存状態は良好。頭蓋は長頭型。三主要縫合に関して骨結合は認められない。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。咬耗度はMartinの1度。M3が萌出途中である。上下肢骨は頑丈。大坐骨切痕の弯曲は大きく、推定身長は155cm。左右大腿骨の骨幹遠位部後方に炎症性の骨増殖が見られる。左右脛骨の骨幹前面に骨髓炎らしき骨欠損あり。左脛骨の上部1/3の辺りが骨肥厚している。

183号 男性 老年 保存状態は不良。三主要縫合に関して内板外板とともにほぼ骨結合が完了している。乳様突起は小さいが、外後頭隆起は大きい。咬耗度はMartinの1~3度。下顎大臼歯部で歯槽が閉鎖しており、咬合ていなかったと見られる上顎大臼歯は咬耗が弱い。上下肢骨は頑丈である。

184号 女性 熟年 保存状態は不良。頭蓋は短頭型。三主要縫合では内板部でほぼ骨結合完了し、外板でも冠状縫合・矢状縫合の部分でほぼ骨結合完了している。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。咬耗度はMartinの1~2度。上顎右M1、上顎左M3、下顎右M1~M3の歯頸部に齶歯。上下肢骨はきやしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は150cm。

185号 女性 老年 保存状態は不良で、頭蓋骨、下顎骨、及び環椎と軸椎、そして左右大腿骨、左右脛骨、上腕骨、椎骨、寛骨などの骨片が残存する。頭蓋は長頭型で、三主要縫合は内板で骨結合完了し、外板でもわずかながら骨結合が認められる。乳様突起、外後頭隆起は小さい。額部はよく保存されているが、歯槽閉鎖部位が多い。11本の歯が植立しているのが確認できる。そのうち上顎右のI1とC1に歯頸部に齶歯が認められる。咬耗度はMartinの3~4度に達する。

その大腸骨はきやしゃで女性的である。

186号 男性 老年 保存状態は不良である。頭蓋の三主要縫合は、矢状縫合の後半部とラムダ縫合の一部で観察可能であるが、骨結合は認められない。頸骨は上下顎とともに残るが、ほとんど歯槽閉鎖している。2本のみ残る歯の咬耗度はMartinの2~3度を示す。

187号 女性 熟年 保存状態は不良である。頭蓋は上顎骨の一部と細片化した骨片が残る。咬耗度はMartinの2度を示す。上下肢骨の様子はきやしゃであり、大坐骨切痕の弯曲は大きい。

188号 男性 壮年 保存状態は不良であるが、頭蓋の顎面部がほぼ完形で残り、他、左寛骨の大部分、四肢長骨の骨体部がよく残っている。頭蓋の三主要縫合は内板外板ともに骨結合化していない。乳様突起は大きく、男性的である。頸骨もほぼ完形で、咬耗度はMartinの1~2度を示す。四肢骨は頑丈で、寛骨の大坐骨切痕の弯曲は小さい。

189号 女性 壮年 保存状態は不良。頸骨はほぼ全壊しているが、遊離歯は30本相当が残存する。欠損歯は上顎右I2と下顎左Cである。下顎左M1の咬合面に齶歯がある。下顎において、左右のI1が癒合歯を形成している。咬耗度はMartinの1~2度に達する。上下肢骨はきやしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。左右の脛腓骨に軽度の骨膜炎が認められる。

190号 女性 熟年 保存状態は不良で、頸骨の一部、四肢骨片、接合不可能な頭蓋片などが残る。大腿骨の骨体部のきやしゃな様子から、女性と推定される。下顎骨と右上顎骨に歯周疾患が認められる。咬耗度はMartinの2~3度に達する。

191号 女性 壮年 保存状態はきわめて悪い。頭蓋の三主要縫合は骨結合していない。歯はよく残っており、咬耗度はMartinの1~2度を示す。頭蓋の外後頭隆起の発達は弱く、上腕骨骨体もきやしゃである。

192号 女性 熟年 保存状態は不良。頭蓋の三主要縫合は全く未結合である。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。上顎骨と下顎骨左半が残存する。全部で12本の歯が植立し、他に遊離歯が8本存在する。中程度の歯周疾患が認められる。上下肢骨はややきやしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きいようである。部位特定困難の頭蓋片(前頭鱗か頭頂骨のいずれかと思われる)に径14mm程度の良性の骨腫瘍が認められる。

193号 女性 壮年 保存状態は不良。頭蓋の三主要縫合は全く未結合である。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。頸骨は存在しないが遊離歯が6本残存する。上顎Cと上顎I1とに齶歯が認められる。

194号 女性 老年 保存状態は不良だが、頭蓋は比較的よく残っている。前頭結節の発達、眉上隆起の貧弱さ、外後頭隆起の未熟さは女性的である。乳様突起は大きい。三主要縫合は、内板で骨結合完了しており、外板でも矢状縫合部で完了、冠状縫合部でも半ば骨結合化している。上顎歯の遊離歯が7本残るが、セメント質が発達しており、老年と推定させる。咬耗度はMartinの1度で弱い。しかし、残存する下顎骨がすべて歯槽閉鎖していることから、早い時期から咬合が成立していなかった可能性がある。咬耗の弱さはそこに起因すると考えられる。

舌下神経管二分が認められる。左大腿骨の骨頭部位が不完全ながら残っている。ややきしゃなようである。

195号 女性 壮年 保存状態は不良である。頸骨はよく残っており、咬耗度はMartinの1~2度を示す。中程度の歯周疾患が認められる。上下肢骨はきしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。椎骨に変形性脊椎症が認められる。

196号 女性 熟年 保存状態は極めて悪く、骨質はもろい。頸骨も破損しているが、重度の歯周疾患が確認できる。歯は歯石が顕著である。咬耗度はMartinの1度にとどまる。四肢骨では右の上腕骨が比較的よく残っているが、きしゃである。その他、椎骨、肩甲骨等からもきしゃで女性的であることがわかる。

197号 女性 熟年 保存状態は不良である。頭蓋はよく残っており、三主要縫合は冠状縫合及び矢状縫合部で内板が骨結合し、ラムダ縫合部の内板では未結合である。外板では全体に骨結合は認められない。歯の咬耗度はMartinの1~2度を示す。歯石の沈着が見られる。上下肢骨はややきしゃである。大坐骨切痕の弯曲は大きく、さらに妊娠痕が認められる。頭蓋冠の上矢状洞溝に炎症性と思われる骨欠損が認められる。

198号 女性 成人 保存状態はきわめて不良である。左右の大腿骨骨体が残る。その粗線の発達具合は貧弱で女性的である。他に頭蓋冠片と、右錐体から外耳孔にかけての部位が残っている。

199号 男性 壮年 保存状態は不良である。左右の大腿骨骨体部と左右の脛骨骨体部、右の上腕骨の遠位端付近の骨体の一部などが残る。やや頑丈な様子で、どちらかというと男性的である。頸骨は下顎の右半、P1~M3の部位が残る。そのP1~M3は植立している。他に遊離歯が14本残存し、下顎左のI2~M3、上顎の左P1~右I1、上顎右M2、M3が確認できる。上顎右のM2に、近心半が崩壊する齶触が認められる。

200号 女性 熟年 保存状態はきわめて不良である。頭蓋は顔面部から冠状縫合までと左頭頂骨の一部が残る。その冠状縫合と矢状縫合前半部において骨結合は認められない。頸骨は上顎はほぼ完形で、下顎は右半全体と左Cの部位までが残る。上顎の左右ともにM2、M3部位で歯槽閉鎖している。右P1が歯冠崩壊に至る齶触。下顎では右M1、右I1部位で歯槽閉鎖している。下顎で植立しているのは右M2と右Cのみで、残る部位では歯槽解放している。他に遊離歯が2本あり、左下P1、P2が残存する。

201号 女性 老年 保存状態は不良である。頭蓋の前頭骨、下顎骨、幾つかの椎骨、左大腿骨遠位端、左肩甲骨関節窩などが残る。頭蓋で冠状縫合の一部が観察可能だが、内板で骨結合が認められるが外板では認められない。上顎骨の一部と下顎骨で、すべての歯が完全に歯槽閉鎖していることが確認できる。

202号 2個体分が混在する。

(A) 女性 老年 保存状態は良好である。頭蓋の三主要縫合は内板外板ともにすべて骨結合化が完了している。左頭頂骨に小孔群、位置は頭頂結節のすぐ内側で24×22mm程度に広がる。右頭頂骨の同様の部位は破損のため観察しづらいが、やはり小孔群が観察できる。貧血症と思われる。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。頸骨は上下ともにほぼ完形で残る。上顎は右M1~左M1の部位が残るがすべて歯槽閉鎖している。下顎は全体が残るが、右P2が歯槽解放、右P1、右C、左P2の3本が植立、それ以外はすべて歯槽閉鎖している。3本の歯の咬耗度は1度である。上下肢骨はきしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は140cm。

(B) 男性 熟年 保存状態は不良である。下顎骨(完形)、右脛骨骨体、左上腕骨骨体、左右尺骨骨体が残存する。四肢骨の様子はやや頑丈なようである。下顎は右M3~右P1、左P2~左M3の9本が植立している。右C~左P1の部位は歯槽解放、もしくは頸骨破損のため不明である。右M3に齶触が認められる。

203号 性別不明 成人 右の大腿骨体の後面部のみが残存する。骨質は堅牢であるが、その全体像は掴めないので詳細は不明である。

204号 女性 壮年 2個体分の人骨が混在している。保存状態は不良である。重複部位は左右側頭骨の錐体部と後頭骨十字隆起部である。遊離歯が3本残っており、下顎左のP2、M1、M2である。咬耗度は1度にとどまる。乳様突起は1個体分の左側頭骨で確認可能であるが、発達は弱く、女性的である。2個体分の十字隆起、外後頭隆起の発達を観察すると、両者ともに女性である可能性が強い。上下肢骨はきしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。

205号 性別不明 小児(5~7歳前後) 保存状態は良好である。頭蓋はなく、四肢骨及び体幹骨が残る。四

肢長骨の骨端はすべて未癒合であり、寛骨も三分されたままである。椎骨の椎弓と椎体は癒合完了している。大腿骨頭はおよそ3cm大である。

206号 男性 壮年 保存状態は不良。頭蓋は頭蓋冠の一部と頸骨、少しの顔面骨が残存する。三主要縫合は全くの未結合で、明瞭な前頭縫合が認められる。舌下神経管二分が左に認められる。乳様突起は小さめだが外後頭隆起は大きい。頸骨はほぼ完形で全歯が植立する。咬耗度は1度。上下肢骨は頑丈で大坐骨切痕の弯曲は小さい。推定身長は165cm。腰椎のL5に椎弓分離が見られる。頸椎のひとつに圧迫骨折が認められる。

207号 性別不明 小児（5歳前後） 保存状態は良くなく、左右の錐体部、左右の舌下神経管部位、そして下顎歯の遊離歯が残る。4本の乳臼歯が歯根の未呼吸な状態で確認でき、その他に歯冠形成途中的永久歯が13本残存する。その形成状況から5歳前後の小児と推定できる。

208号 女性 壮年 保存状態は良好である。頭蓋はほぼ完形で、中頭型を示す。三主要縫合は冠状縫合の内板でわずかに骨結合が認められるのみで、ほとんどが未結合である。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。頸骨もほぼ完形で残り、咬耗度は1～2度である。上下肢骨はきやしゃで、大坐骨切痕の弯曲も大きい。推定身長147cm。

209号 女性 壮年 保存状態は不良で細片化が激しい。頸骨は比較的の残りがよく、咬耗度はMartinの1度にとどまる。下顎左P2が埋状しており、下顎左第二乳臼歯が歯列に残留している。上顎右I1の上方に埋状した余剰歯（矮小歯）が存在する。鼻腔下面（上顎骨）に炎症像が認められる。上下肢骨はきやしゃである。

210号 女性 熟年 保存状態は不良。頭蓋縫合は内板外板ともに骨結合化している。乳様突起は小さく、外後頭隆起はやや大きい。頸骨はほぼ完形で残存しており、咬耗度はMartinの2～3度。上顎左P1に歯冠崩壊に至る齶歯あり。上下肢骨はきやしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。妊娠痕あり。

211号 女性 老年 保存状態はきわめて悪く、骨質はもろい。頭蓋片から、縫合の内板で骨結合があり、外板では未結合であることがわかる。下顎骨は完全に歯槽閉鎖しており、上顎の遊離歯7本が別に残る。咬耗度はMartinの1～2度を示す。大腿骨、上腕骨などはきわめて貧弱であり、女性的である。

212号 男性 壮年 保存状態は不良である。乳様突起は大きいが、外後頭隆起は小さく貧弱である。大腿骨骨体は頑丈な様子で、男性的である。咬耗はMartinの1度にとどまる。

213号 女性 熟年 保存状態は不良である。頭蓋の三主要縫合は内板で骨結合完了し、外板でも冠状縫合及び矢状縫合の一部で骨結合が認められる。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。咬耗度はMartinの1～3度である。上下肢骨はややきやしゃである。

214号 性別不明 成人 右大腿骨の骨体部が骨質堅牢な状態で残っている。性別年齢の推定は不可能である。

215号 女性 熟年 保存状態は不良で、頭蓋片、四肢骨片などが残る。頭蓋の三主要縫合は内板で骨結合が完了しており、外板でも一部に骨結合で認められる。頸骨はよく残っており、咬耗度はMartinの1～2度を示す。中程度の歯周疾患が認められる。上下肢骨はきやしゃである。

216号 性別不明 青年（20歳前後） 左右の大腿骨の骨体部、及び破壊の進んだ頸骨と遊離歯が残る。咬耗度はMartinの1度である。上顎のM3が萌出途中であることから、20歳前後であると推定される。大腿骨骨体はややきやしゃであるが、性別の推定が可能なほどではない。

217号 女性 熟年 保存状態は良好である。頭蓋は中頭型で、三主要縫合は内板で骨結合完了し、冠状縫合及び矢状縫合の外板で骨結合が認められる。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。頸骨は完形で残り、咬耗度はMartinの2～3度に達する。一部歯槽閉鎖が見られる。上顎の左P1、P2、下顎の右M3に齶歯が認められる。特に上顎の2本は歯冠崩壊に至るほどである。全体にも中程度の歯周疾患が見られる。寛骨の大坐骨切痕の弯曲は大きく、上下肢骨はきやしゃである。左脛骨に軽度の骨膜炎が認められる。

218号 性別不明 成人 保存状態はきわめて不良で、腐食が激しい。頭蓋骨が残っているが、後頭骨、左右錐体以外は細片化が激しく、鑑定は難しい。

219号 男性 熟年 保存状態は不良である。頭蓋はよく残っており、長頭型を示す。三主要縫合は内板で骨

結合が完了し、外板でも冠状縫合部及び矢状縫合部で半ば以上の骨結合が認められ、ラムダ縫合部でも一部で骨結合化している。乳様突起、外後頭隆起とともに大きい。頸骨は歯槽退縮が激しく、咬耗度はMartinの2度を示す。上下肢骨は頑丈で大坐骨切痕の弯曲は小さい。椎骨(Th9～L5)に強直が認められる。他にも、胸骨と右第一肋骨との間節に激しい骨増殖があり、ASH(強直性脊椎骨増殖症)が推定される。

220号 男性 壮年 保存状態は比較的良好である。頭蓋の三主要縫合には骨結合は認められない。乳様突起、外後頭隆起ともに大きく男性的である。頸骨は完形で、下顎骨体の下面(左M3部位に相当する)に骨窩凹みられる。環椎は左右分離し、右側が頭蓋骨後頭頸と癒合している。頸椎の横突孔にブリッジング。椎体T12が前方楔状椎を呈する。

221号 男性 老年 保存状態はきわめて不良である。頭蓋は前頭鱗から顔面部にかけてと左右の側頭骨(錐体含む)が残る。乳様突起は大きいが、眼窓上隆起の発達は弱い。前頭鱗の内板に多数の小孔が存在する。位置は前頭竇の直上で、広さは22×35mm程度である。頸骨は上顎では欠損、下顎骨は一部が残る。その下顎角は鈍角を呈しており、高齢であることをうかがわせる。左右のM2～M3の部位が確認できるが、歯槽は閉鎖している。四肢骨片が多数あるが、ややきしゃな印象を受ける。左大腿骨頭と右上腕骨下端などの大きさから、より男性的であると判断できる。胸腰椎に強度の魚椎様変形、楔状椎を認める。

222号 性別不明 年齢不詳 保存状態はきわめて不良である。細片化が激しく、性別年齢ともに不明である。錐体の一部が確認できる。他、頭蓋片らしきものが多いが詳細は不明である。

223号 性別不明 壮年 保存状態はきわめて不良である。眼窓部などの頭蓋骨片、椎骨の椎弓部が2片ほど、大腿骨と思われる四肢骨片がいくらか残るが、鑑定は困難である。頸骨は下顎左半の歯槽部のみが残存する。下顎左半の8本は植立が確認できる。他、遊離歯が13本残る。咬耗度は1～2度。

224号 男性 熟年 保存状態は良好である。頭蓋骨もほぼ完形で残る。頸骨もよく残り、歯の咬耗度はMartinの2～3度に達する。下顎右M3に咬合面齶歯が認められる。上下肢骨も頑丈で男性的である。

225号 男性 壮年 保存状態は不良。乳様突起、外後頭隆起とともに大きい。咬耗度はMartinの1～2度。頸骨はよく残っており、ほとんどの歯が植立している。左右の上顎中切歯に特殊な咬耗を認める。切縁の中央に軽いくびれが見られる。また、下顎左I1、I2にも、切縁の両端が低くなり山型になる摩耗が認められる。体肢骨では、下部腰椎にリッピングがあり、同腰椎の椎体前面に炎症性と思われる骨増殖がある。他に、胸椎の椎弓板前面に不規則な骨増殖を認める。

226号 女性 壮年 保存状態は不良。頭蓋の三主要縫合は未結合である。乳様突起、外後頭隆起とともに小さい。頸骨は上顎の右半全体から左P1までが残存する。右M2、M3が歯槽閉鎖。左P1に齶歯。左I1に歯根の屈曲が認められる。中程度の歯周疾患。上下肢骨はきしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きいようである。右上顎洞に炎症像が認められる。

227号 男性 壮年 保存状態は比較的良好である。頭蓋も顔面部がよく残っている頭蓋の三主要縫合は骨結合化は見られない。歯には歯石が見られ、咬耗度はMartinの1～2度である。乳様突起、外後頭隆起はそれほど大きくないが、寛骨の大坐骨切痕の弯曲は小さく、上下肢骨も頑丈な様子から男性であることは間違いないと思われる。

228号 女性 壮年 保存状態は良好である。頭蓋は下顎骨を含めて完形で残っており、中頭型である。三主要縫合は内板で完全に骨結合化が完了し、外板では縫合線の痕跡が残る程度である。乳様突起は小さいが、外後頭隆起はやや発達している。上下ともに完形の頸骨には26本の歯が植立している。歯槽解放している部位はなく、上下左右4本のM3と、下顎の左右のI1は欠損している。歯列に空隙は認められない。これらは先天的な欠失と思われる。上顎の左右のI2が棒状歯である。全体に中程度の歯周疾患が観察される。下顎右M2、M1、下顎左M1の3本の頬側歯頭部に齶歯が認められる。上下肢骨はきしゃで、大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は148cm。

229号 性別不明 成人 保存状態はきわめて不良である。大腿骨と推定される四肢骨の骨体部が断片的に残

る。ややきしゃなようである。

230号 女性 成人 保存状態は不良で、左大腿骨骨体と頭蓋片（左錐体部、左蝶鱗縫合付近）、他、微量の骨片が残る。大腿骨骨体はきしゃで女性的である。

231号 女性 壮年 保存状態は良好だが、完形で残る骨は少ない。頭蓋は中頭型で、三主要縫合は冠状縫合の内板部で一部骨結合が認められる程度で他は未結合である。乳様突起、外後頭隆起は小さく女性的である。頸部はよく残っており、下頸左M1に歯槽腔に達する齶触が認められる。その他の頸部は健常な状態である。咬耗度はMartinの1度である。上下肢骨はきしゃで大坐骨切痕の弯曲も大きい。右上腕骨に滑車上孔を認める。

232号 男性 熟年 保存状態は良好である。頭蓋の三主要縫合は内板で骨結合完了し、外板でも一部に骨結合が認められる。乳様突起、外後頭隆起とともに大きい。咬耗度はMartinの2~3度に達し、重度の歯周疾患が認められる。

234号 女性 成人 保存状態は不良。頭蓋片が多少残存するのみである。乳様突起の小さいことから女性であると考えられる。

235号 男性 成人 保存状態は不良である。上下肢骨はやや頑丈で、大坐骨切痕の弯曲は小さい。椎骨がほぼ全数残っているが、頸椎C4~5が強直している。関節炎と考えられる。

238号 2個体分が混在する。

(A) 女性 壮年 保存状態は不良。頭蓋の三主要縫合に骨結合は認められない。乳様突起、外後頭隆起ともに小さい。頸骨は上下ともほぼ完形で、歯槽の退縮も弱い。咬耗度はMartinの1~2度。上下肢骨はきしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。推定身長は144cm。

(B) 男性 壮年 保存状態は不良。左大腿骨骨体。下顎の一部、左右の錐体および岩部（外耳道含む）、後頭骨鱗部などが重複している。下顎は下顎枝前線から左のM3~M2までが残存する。他に遊離歯として左上顎のM3とM2が残存する。咬耗度はMartinの1~2度で、上下のM3の歯頸部に齶触が認められる。大腿骨は頑丈な様子である。

239号 性別不明 壮年 保存状態はきわめて不良。細片化が激しく、頭蓋骨片、肋骨片、四肢骨片などが存在するが、ほとんどわからない。遊離歯が5本残存する。ほとんどの遊離歯の歯頸部に齶触があり、特にひどいのが上顎小白歯で側方に貫通している。咬耗度はMartinの0~1度。

240号 男性 熟年 保存状態は良好で、骨質は堅牢である。頭蓋冠がやや破損しており、三主要縫合では冠状縫合の一部とラムダ縫合の一部が確認可能である。ラムダ縫合では内板外板ともに骨結合は認められず、冠状縫合の内板では骨結合は完了、外板でも一部に認められる。乳様突起、外後頭隆起とともに大きく発達している。頸骨は完形で、咬耗度はMartinの1~2度である。上顎右のM3に歯冠崩壊するほどの齶触がある。上下肢骨は頑丈で、大坐骨切痕の弯曲は小さい。右の股関節に関節炎が認められる。また、変形性脊椎症が認められる。

241号 性別不明 成人 保存状態は不良で、細片化が激しい。最もよく残っているのは右大腿骨骨体で、成人骨であることがわかる。他に多少の四肢骨片が残るが、観察は困難である。

242号 性別不明 熟年以上 保存状態はきわめて悪く、骨質はもろく風化が激しい。遊離歯が26本残っており、咬耗度はMartinの3~4度に達する。かなりの年配である可能性が高い。その他には四肢骨片などが残っている。

243号 女性 小兒（12歳前後） 保存状態は不良で、右大腿骨骨体部、左側頭骨、左頭頂骨などを主として、骨片が残る。他、頸部、遊離歯が残っており、上下顎のM2が歯根未完成であることなどから、12歳前後と推定される。咬耗度はMartinの1度である。大腿骨の遠位端と思われる骨位端が未結合であった様子からも、若年個体に間違いない。

244号 女性 壮年 保存状態は不良。冠状縫合及び矢状縫合に骨結合は認められない。頸骨は多少破損しているが、遊離歯を含めると27本の歯が残る。咬耗度はMartinの1度である。上顎右M3に咬合面齶触が認められる。同じく上顎右M3にエナメル芽腫らしき変性を認める。左脛骨に骨膜炎、上顎骨の鼻腔下面に炎症像が認め

られる。

245号 性別不明 年齢不詳 極微量の骨片が残るのみである。細片化が激しく、何もわからない。

247号 女性 老年 保存状態は良くないが、頭蓋骨は比較的よく残る。短頭型に属し、三主要縫合は内板で骨結合は完了しているが外板では未結合である。乳様突起、外後頭隆起は小さく女性定期である。顎骨はほぼ全体が残っているが、重度の歯周疾患が認められる。歯は遊離歯が10本残る。咬耗度はMartinの1~2度を示す。上顎前歯部は歯槽閉鎖している。上下肢骨はきしゃで大坐骨切痕の弯曲は大きい。

考察

米倉山B遺跡から出土した江戸時代人骨表1に示すように成人192体、未成人14体と性別、年齢不詳3体の計は209個体である。

(1) 性別・年齢構成

表1. 出土人骨個体数

	成 人					未 成 人				計
	老 年	熟 年	壮 年	不 詳	小 計	乳幼児	小 児	青 年	小 計	
男 性	9	28	28	3	68	0	0	2	2	70
女 性	21	41	37	9	108	0	2	2	4	112
不 明	0	2	4	10	16	2	3	3	8	24
計	30	71	69	22	192	2	5	7	14	206

表1の他に、性別年齢不詳な個体が3個体

総計209個体分が出土している。

男女比を見ると女性が多く、その数はおよそ1.5倍である。

成人、未成人の出土比は圧倒的に成人が多く、個体数で10倍以上の開きがある。この点で、未成人個体の出土の多い塩川遺跡（山梨県、江戸時代）の例とは大きく違っている。ちなみに塩川遺跡では成人人骨96個体と未成人骨28個体が出土しており、その比はおよそ3:1である（森本岩太郎ほか、1992）。成人の年齢構成については、男女の合計で老年期30体、熟年期71体、壮年期69体であり、その比はおよそ1:2:2である。この点でも、壮年期個体の出土の割合の多い塩川遺跡とは大きく違っている。

(2) 人骨形質の特徴

頭蓋長幅指數を計算できたのは、男性18体、女性28体である。頭型の内訳は、男性では長頭型6体（33%）、中頭型10体（56%）、短頭型2体（11%）、女性では長頭型5体（18%）、中頭型16体（57%）、短頭型7体（25%）である。男女ともに中頭型が一番多いことがわかる。また、これらの頭蓋の最大長、最大幅、長幅指數を表2にまとめた。これによると、頭蓋長幅指數の平均値は、男性7.6、5、女性7.7で、男女共に中頭型に属する値を示す。

表2. 頭蓋計測値 (mm) および長幅指數

	男 性			女 性		
	資 料 数	平 均 値	標準偏差	資 料 数	平 均 值	標準偏差
頭蓋最大長	18	183.4	±5.03	28	175.7	±6.03
頭蓋最大幅	18	140.3	±5.26	28	136.4	±5.80
頭蓋長幅指數	18	76.5	±2.90	28	77.7	±3.50

次に、大腿骨または脛骨の最大長から算出した推定身長を表3に示す。用いた資料は男性29体、女性31体である。この表から一番資料数の多い右脛骨最大長を用いた推定身長の平均値を見ると、男性では156.9cm、女性では145.7cmである。

表3. 大腿骨・脛骨最大長からの推定身長

	男 性					女 性				
	資料数	平均値	標準偏差	最 小	最 大	資料数	平均値	標準偏差	最 小	最 大
右大腿骨最大長から	15	155.3	±4.33	149	163	16	145.8	±5.58	130	155
左大腿骨最大長から	12	156.4	±3.35	153	163	14	146.6	±4.55	139	155
右脛骨最大長から	15	156.9	±4.55	152	165	17	145.7	±3.70	141	154
左脛骨最大長から	14	155.7	±3.52	151	164	14	145.2	±4.95	133	153

以上の頭蓋長幅指數と推定身長について、男性のデータを用いて考察する。まず頭蓋長幅指數では、江戸時代人（関東地方）男性の平均値は約77で中頭型、また中世（関東地方）の男性の平均値は74で長頭型であり、現代人では約79で短頭に近い中頭を示すという（鈴木尚、1969）。米倉山B遺跡出土の男性頭蓋の平均は関東江戸時代人の値に近く、地域差を感じさせない。次に男性推定身長については、鎌倉時代人159.0cm、室町時代人156.8cm、江戸時代人157.1cmと言われるが（平本嘉助、1972）、米倉山B遺跡出土人骨の推定平均身長は約156cmであり、関東の江戸時代人とほぼ同等の値を示す。

(3) 疾病 歯についてみると、齶歯が男性24体、女性32体、計56体に認められた。体幹骨で、変形性脊椎症が男性10体、女性3体、計13体に認められた。他にASH（強直性脊椎骨増殖症）と見られる個体が男性2体、女性1体に認められた（162号人骨男性、219号人骨男性、172号人骨女性）。骨粗鬆症からくると思われる楔状椎、魚椎様変形、椎体の圧迫骨折が多数存在し、男性5体、女性9体に認められた。また、150号人骨壯年女性に先天性の異常である腰椎の半椎が認められた。四肢骨をみると、多數例の骨膜炎が観察されたが、なかでも59号人骨壯年女性、103号人骨壯年男性、および123号人骨熟年男性では全身的に骨炎、骨髓炎が認められる。この3例は、特異的な感染症によるものと考えられる。

(4) まとめ 米倉山B遺跡出土の江戸時代人骨は209体分である。その内訳は男性70体、女性112体、性別不明24体、男女数に差がみられた。成人骨は192体、未成人骨は14体で圧倒的に成人個体が多い。頭蓋長幅指數、推定身長の値は他地域（関東）江戸時代と同等の値を示す。歯の齶歯は56体（27%）に認められ、変形性脊椎症は13体（6%）に認められた。その他、四肢骨にみられる非特異的な骨膜炎や、関節炎などもみられた。

付編2 米倉山B遺跡における断層について

帝京大学山梨文化財研究所 河西 学

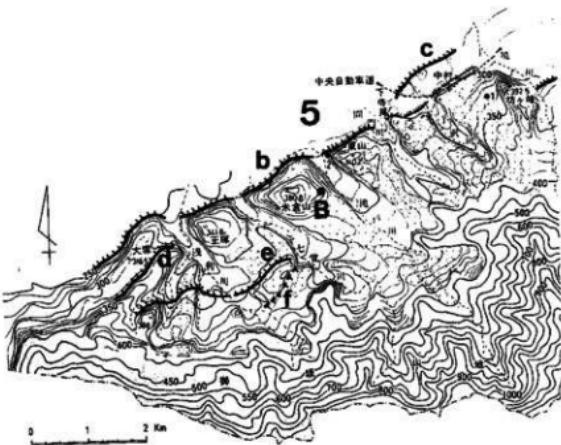
米倉山は、甲府盆地南東部に位置する曾根丘陵の一部を構成している。甲府盆地と接する曾根丘陵前縁部には曾根丘陵断層群が報告されている（澤，1981，平川，1982，活断層研究会，1991）。米倉山の東部に位置する米倉山B遺跡のトレチ内において断層と地層の変位が観察されたので、以下に報告する。

遺跡の位置を第1図に示す。曾根丘陵断層群は、北東方向の走向をもつ縦ずれ断層で、市之瀬台地の断層に比べ活動度は低く、丘陵前縁の崖は抉曲崖で、崖の地形なりに変形した段丘堆積物がみられる（活断層研究会，1991）。澤（1981）は、丘陵前縁の崖が抉曲崖であることの推定の裏付けとして、中道町役場前露頭で蓮崎岩層流堆積物を含む曾根層群が北へ急傾斜していること、松本集落背後の米倉山を開析する沢での曾根層群尾砂礫層が 20° 北傾斜していることなどを挙げている。なお1991～1992年には松本集落背後の米倉山東斜面（遺跡の東方）において地滑り現象が発生している。本遺跡は、約8～10万年前に御岳火山から噴出した御岳第一軽石On-Pmlとそれ以上の褐色ローム層に覆われる澤（1981）のⅡ面上に位置している。

断面の記載

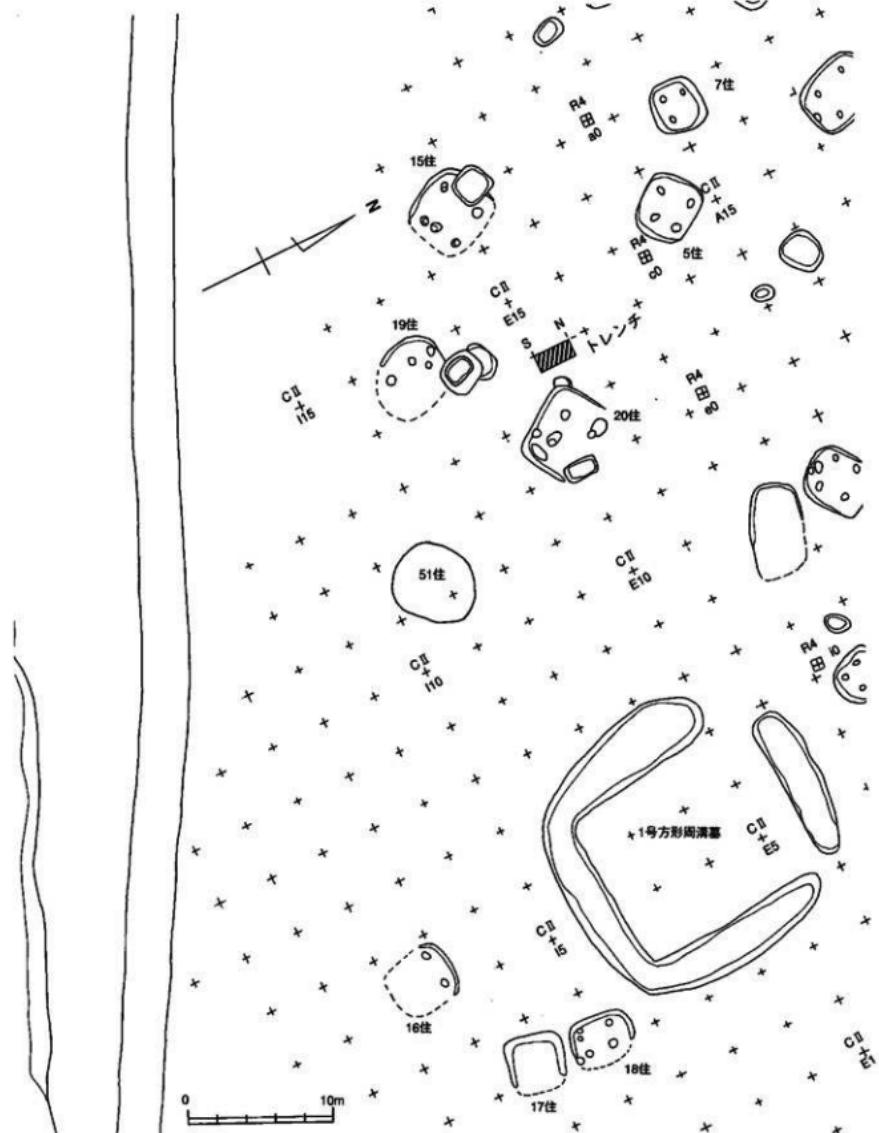
トレチ位置図を第2図に、西壁の断面図を第3図に示す。最下位には原疊層と青灰色粘土層があり、それをOn-Pmlが覆う。On-Pmlは、3部層に分かれる。下部は白色粘土、中部はにぶい褐色の粘土質軽石層、上部は橙色軽石層である。各部層の試料を洗浄して鉱物粒子を偏光顕微鏡下で観察すると、緑色角閃石・無色ジルコン・橙色黒雲母・不透明鉱物・斜長石などの新鮮な自形結晶が確認される。風化による粘土化が進んでいるため軽石を構成する火山ガラスの残存はまれだが、無色多孔質（F型）火山ガラスがわずかに認められる。

断層は、ほぼ東西方向の走向を示し、下部で 37° 北傾斜だが、地表に近い部分では $41^{\circ} \sim 53^{\circ}$ 北傾斜とやや立ち上がる正断層である。垂直変位量は、On-Pmlを鍵層として見積もると、約2mである。On-Pml中部のにぶい褐色粘土質軽石層が、断層に引きずられて細長く分布する。断層は上部において2本に分岐している。断層の付近においてのみ、On-Pml上部の黄色軽石層と同層準の暗褐色ローム層が堆積する。これらのローム層は、断層面が不明瞭ながら主要な断層に調和的な2本の小断層によって見かけ上約15cm、約28cmの北落ちの変位を示している。さらに上位には、褐色ローム層・暗色帶・褐色ソフトローム層（6層）などが堆積している。

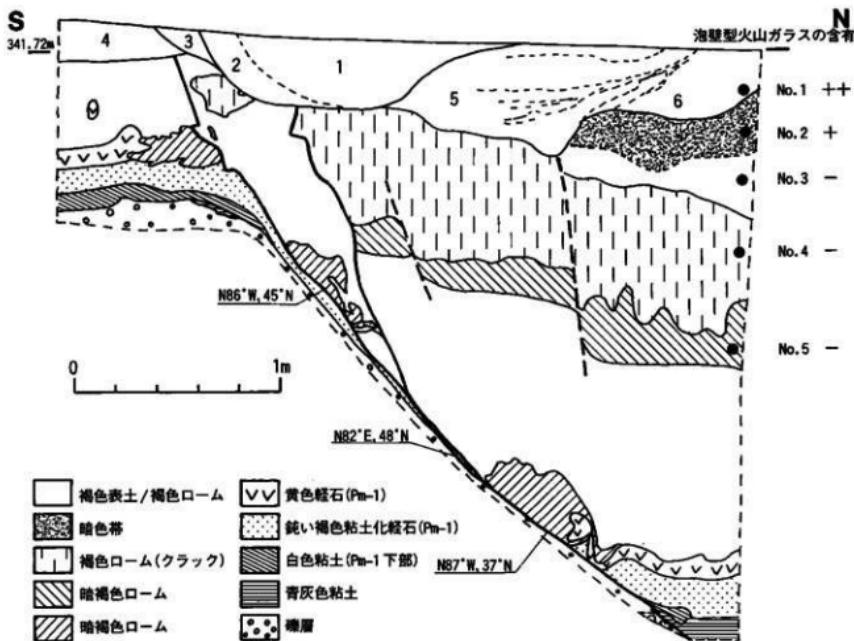


第1図 曾根丘陵の地形概観と遺跡位置（B）（平川, 1982；活断層研究会, 1991）

無色の泡壁型（バブルウォール型）火山ガラスの含有率は、暗色帶で出現し、上位のソフトローム層（6層）中において濃集する傾向が認められる。暗色帶は大部分ソフト化しているが、部分的に島状にハードローム様の暗色帶ブロックが点在することから、本来硬質であった暗色帶がその後の作用でソフト化したものと推定される。これらの遺跡での泡壁型火山ガラスは、ATに対比され、暗色帶からその上位のソフトローム層付近にAT降灰層準を推定することができる。また暗色帶は立川ローム層の第2暗



第2図 トレンチ位置図



第3図 トレンチ西壁断面図と火山ガラスの含有

色帶（BB II）に対比される。

断層の上部は1～5層の表土や擾乱層によっておおわれている。AT層準が暗色帯最上部から直上に推定されることからAT降伏（約2.5万年前）以降にこの変位活動があったと推定される。今回の断層と類似する走向をもつ正断層として東山における佐久活断層（曾根丘陵研究グループ、1991）が報告されており、これらとの関係について今後の課題としたい。

文献

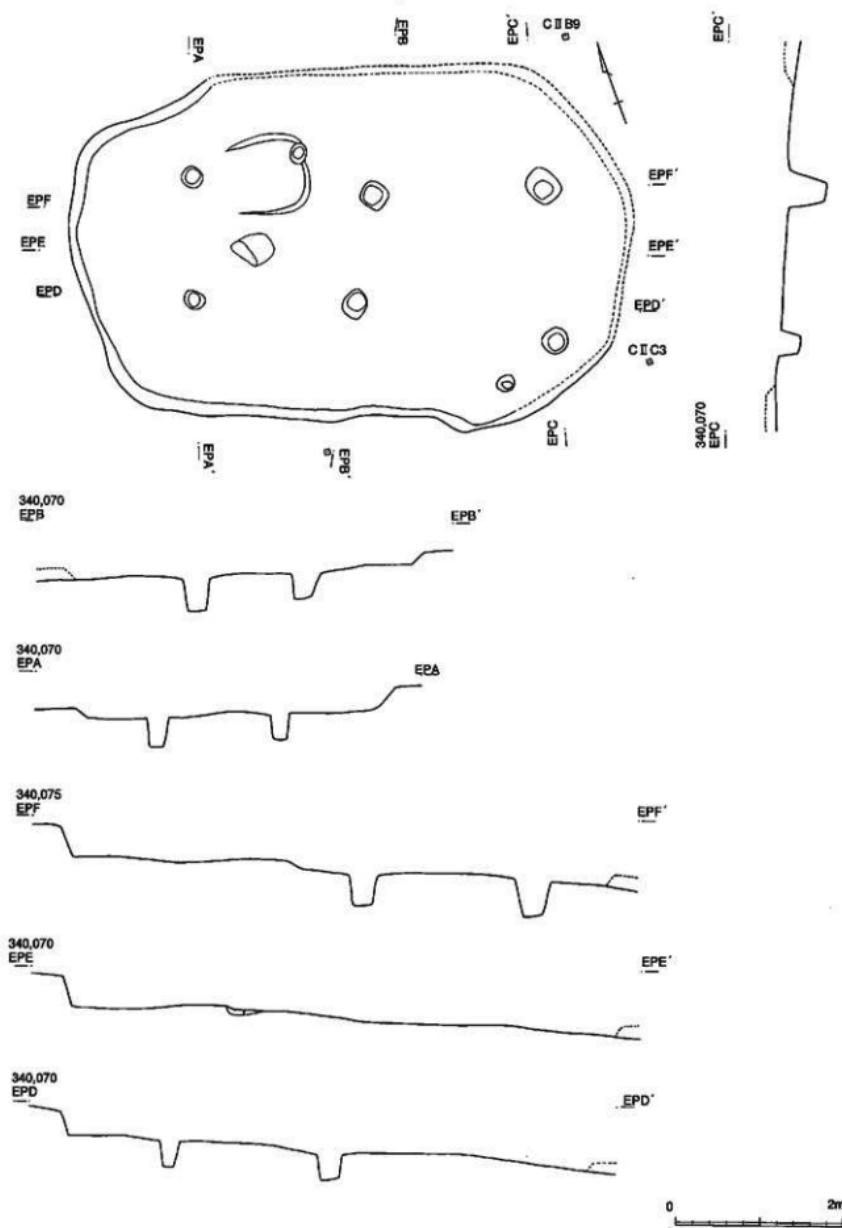
- 平川一臣（1982）山梨県の地形に関する資料（Ⅲ）曾根丘陵のテクトニック・バルジ。山梨大学教育学部研究報告、33、93-101。
- 河西 学（1987）上の平遺跡のテフラ。「上の平遺跡」、山梨県埋蔵文化財センター調査報告、第29集、121-124。
- 河西 学（1990）立石遺跡での先土器遺物を包含する地層。山梨県考古学博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要、6、47-58。
- 活断層研究会（1991）『新編日本の活断層——分布図と資料』、東京大学出版会。
- 澤 祥（1981）甲府盆地西縁・南縁の活断層。地理学評論、54、473-492。
- 曾根丘陵研究グループ（1991）甲府盆地に見られる活断層に関する新事実。地球科学、45、217-221。

おわりに

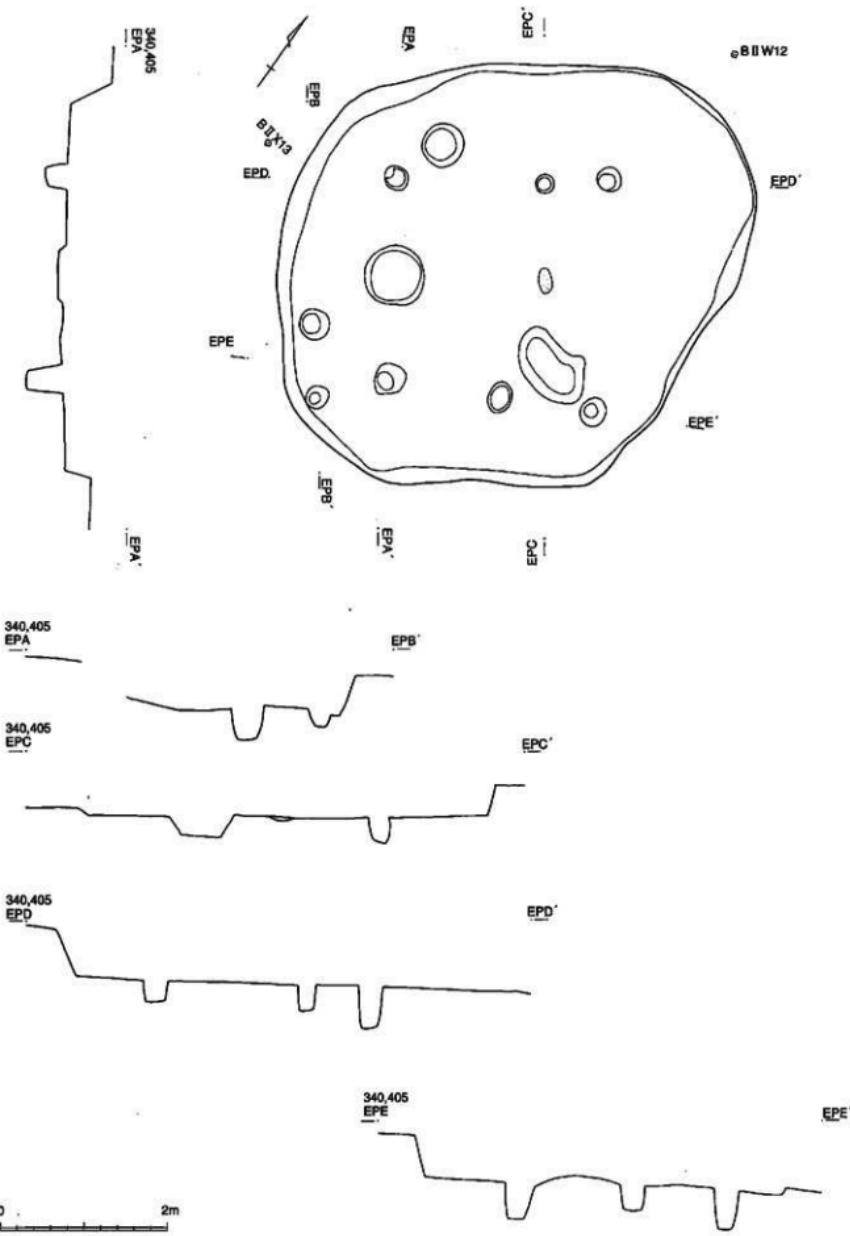
本遺跡は、当初住居跡を主体とする遺跡と考えていたが、住居跡の想定された農道北側の地域で実に200基を越える近世墓壙が確認された。住居跡に欠番が多いのは、このためである。また、旧石器時代、縄文時代、弥生古墳時代、それに近世の江戸時代までと、遺構としては住居跡、土坑、方形周墓壙、古墳、溝、近世墓と多種多様な遺跡であって、遺物も同様であった。この様な中でそれぞれに適した調査方法が取れたのか否か、不安な面もある。また、適切な整理ができたのか否か不安であるが、ここに報告書の刊行にこぎつけることができた。不十分とは思われますが、より多くの方々によって研究資料としてご利用いただければ幸いと考えております。

最後に、ご協力を賜った中道町役場を始めとする多くの関係機関、ご教示をたまわった多くの方々、また、発掘調査、整理作業に従事した多くの方々に厚くお礼申し上げます。

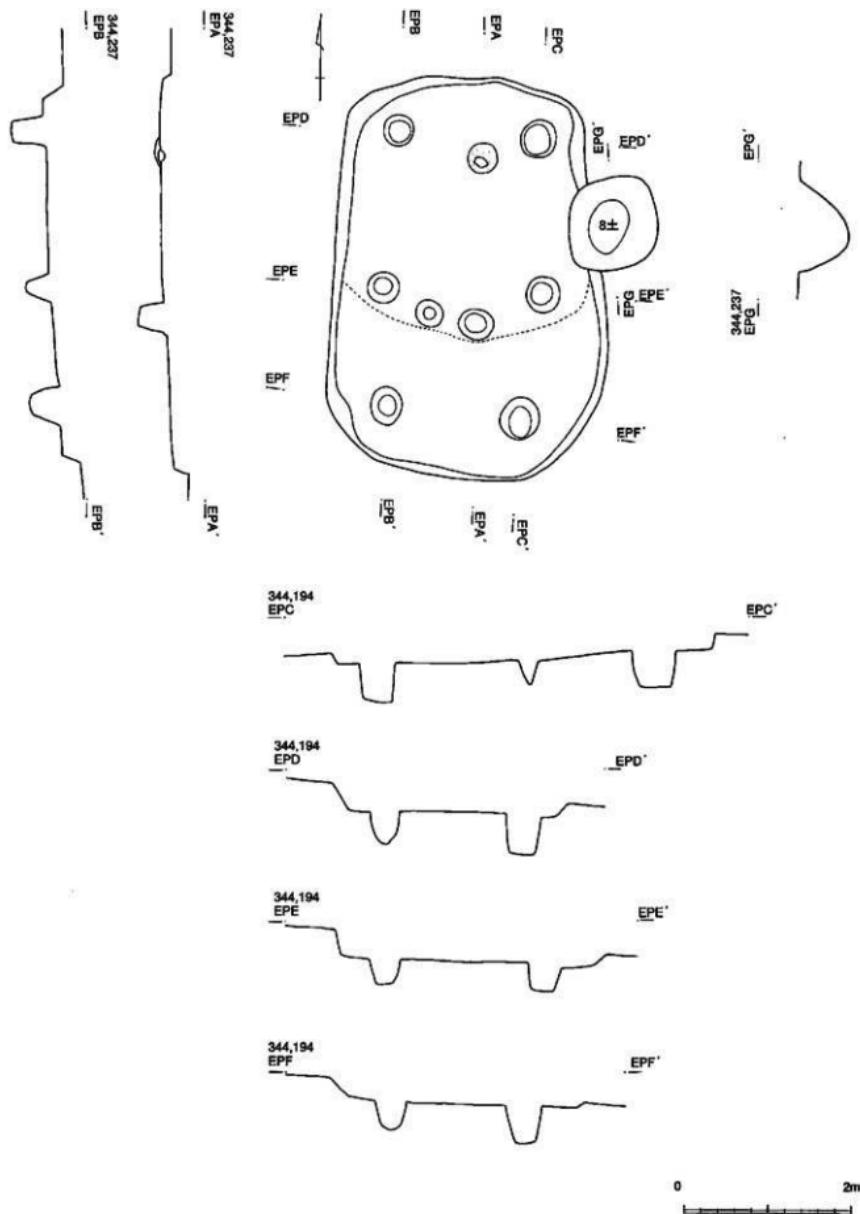
図 版



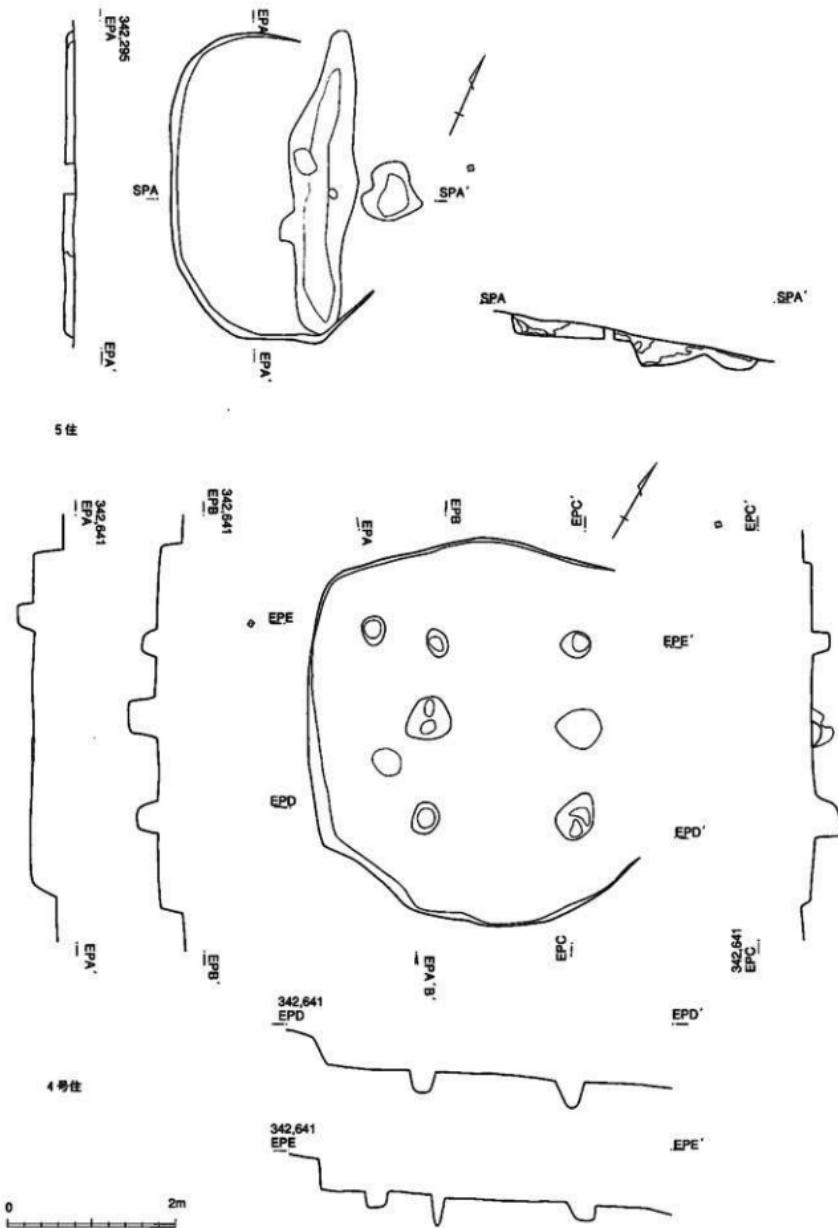
1号住居跡平・断面図



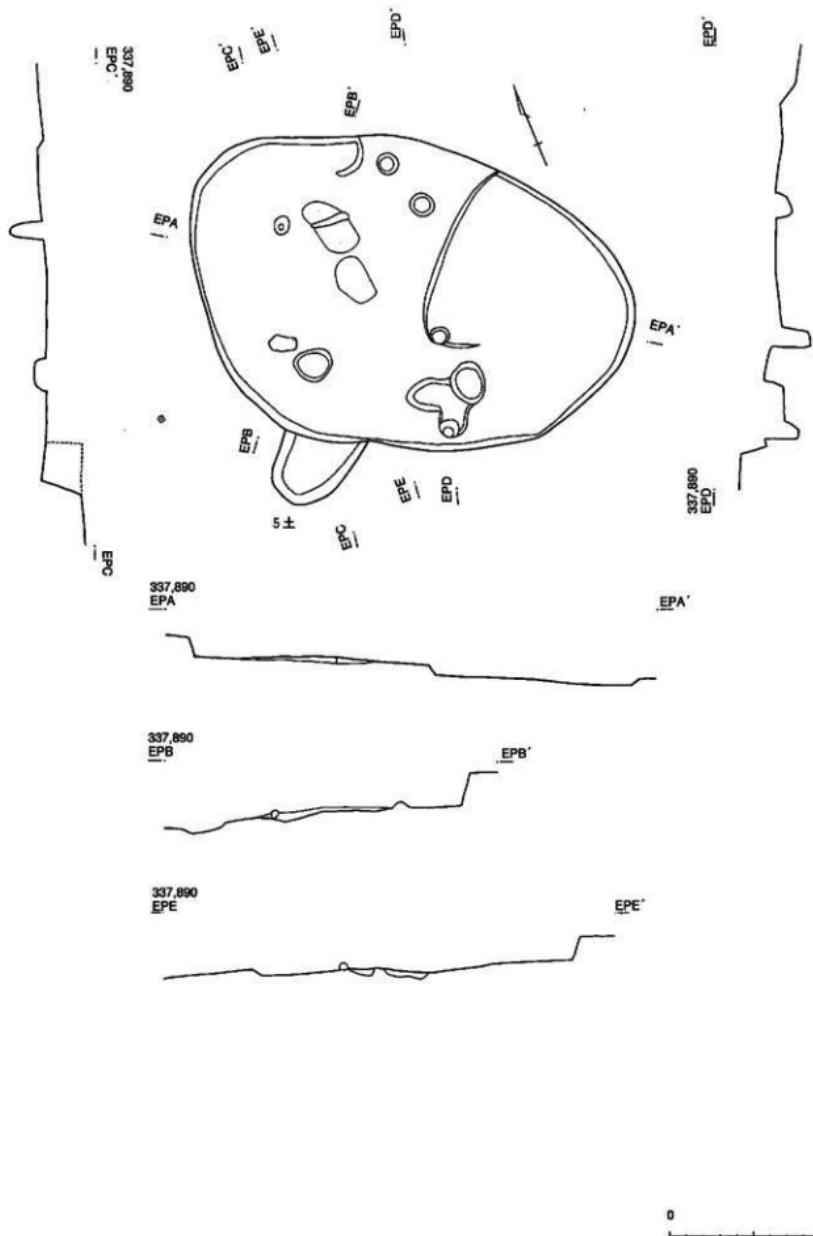
2号住居跡平・断面図



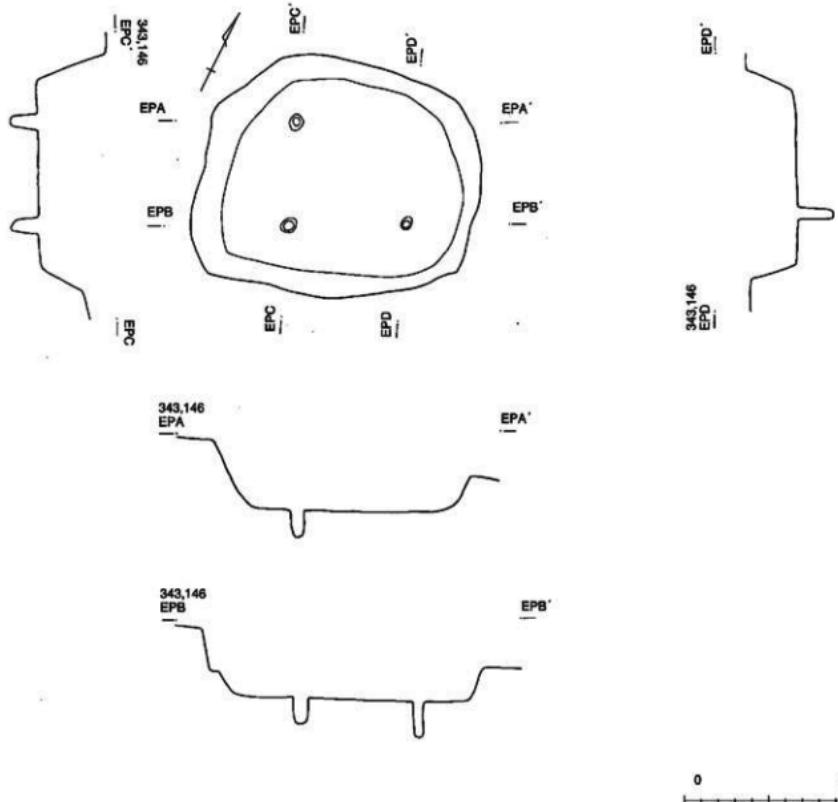
3号住居跡・8号土坑平・断面図



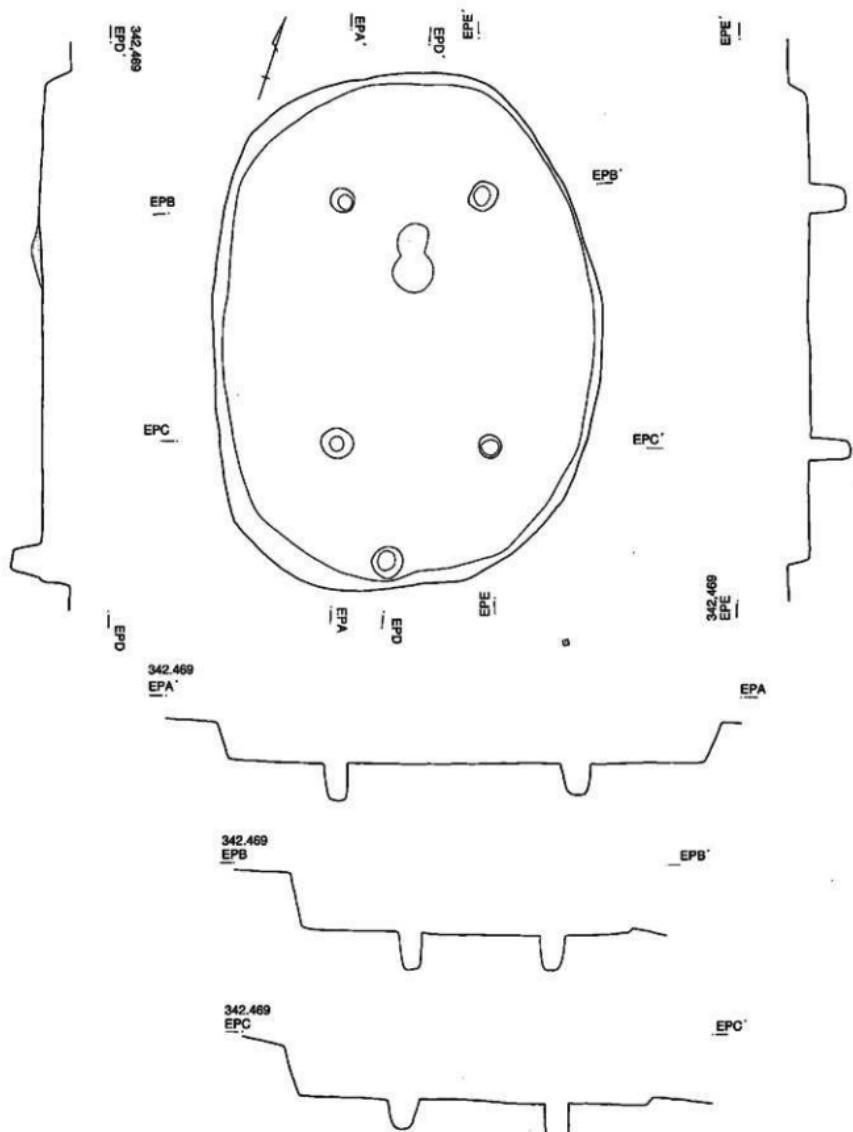
4・5号住居跡平・断面図



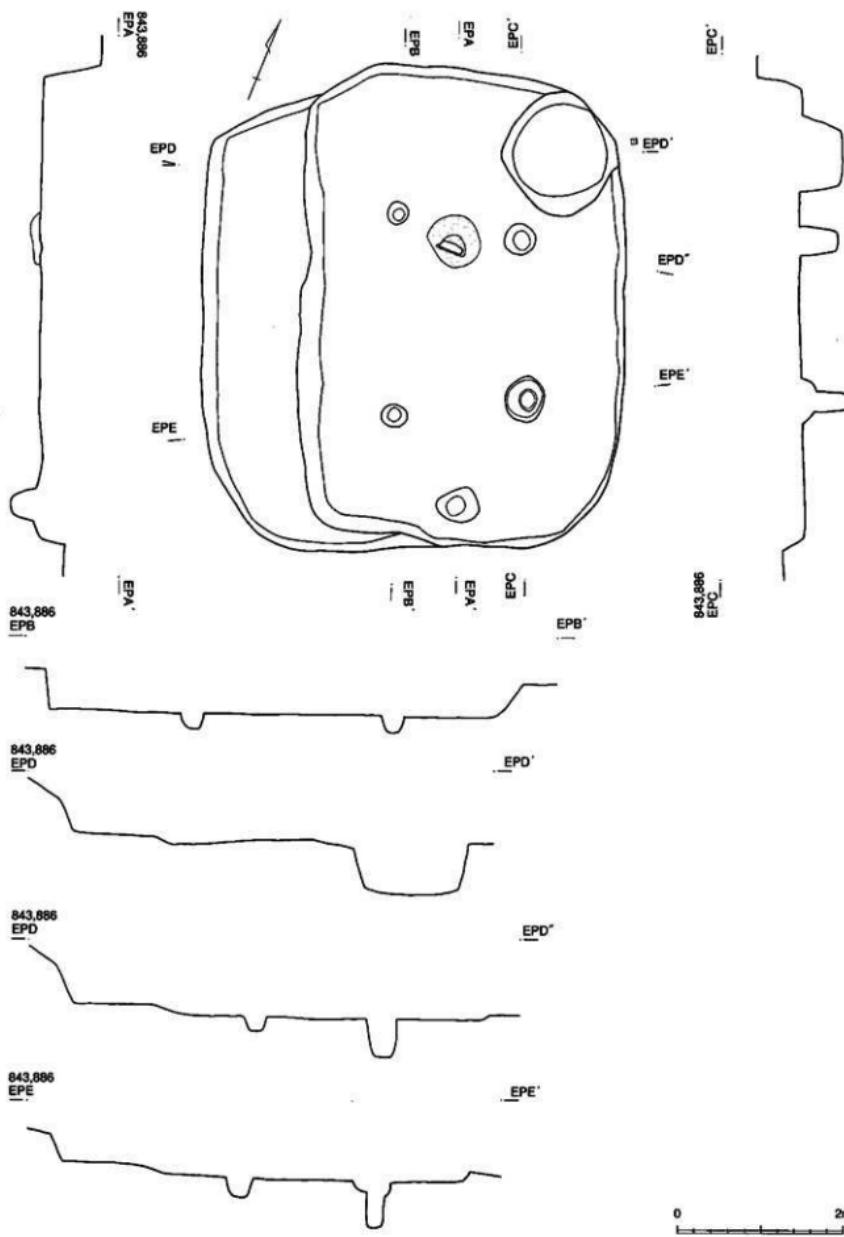
6号住居跡・5号土坑平・断面図



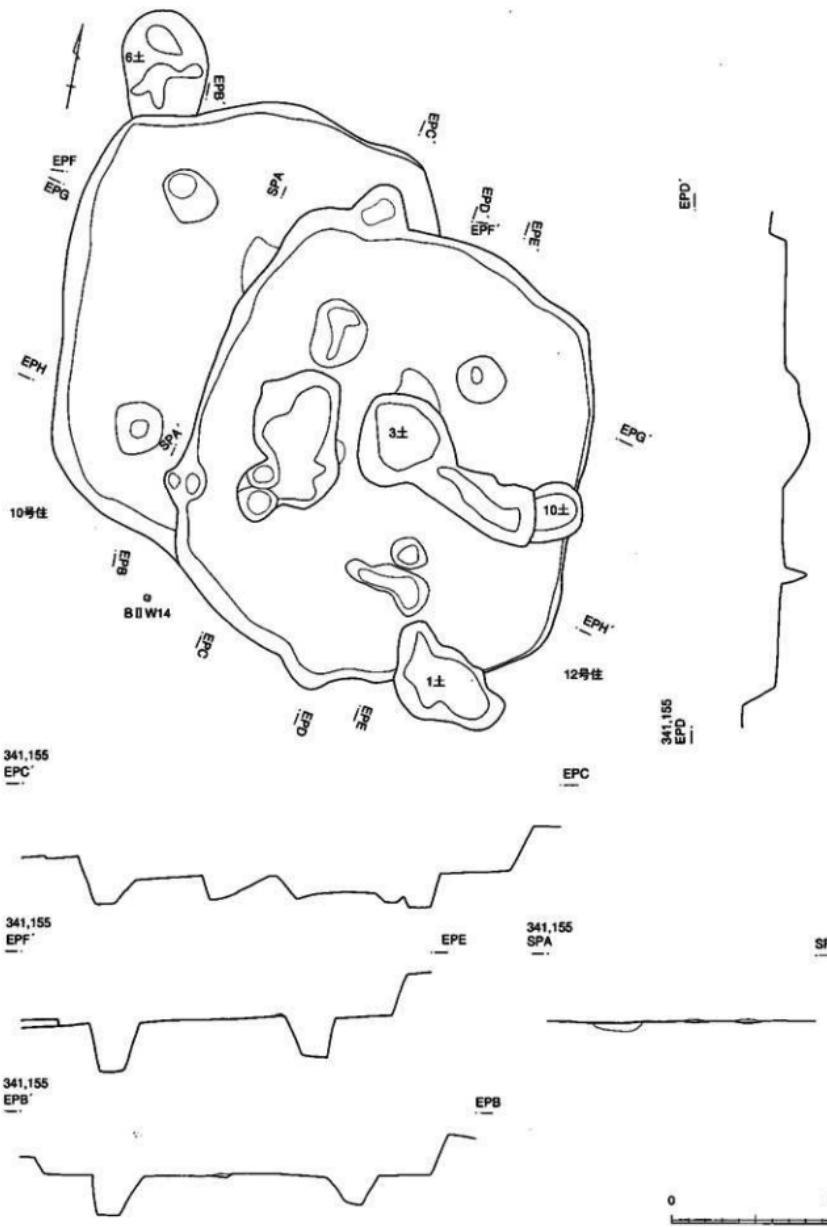
7号住居跡平・断面図



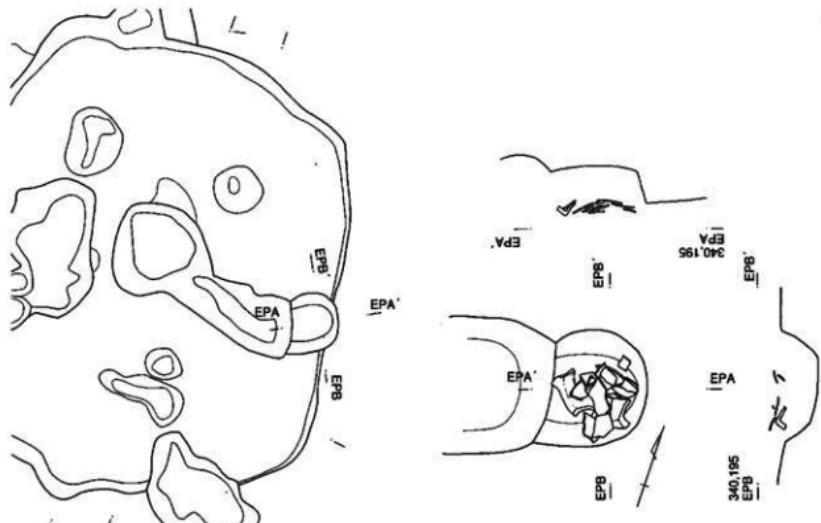
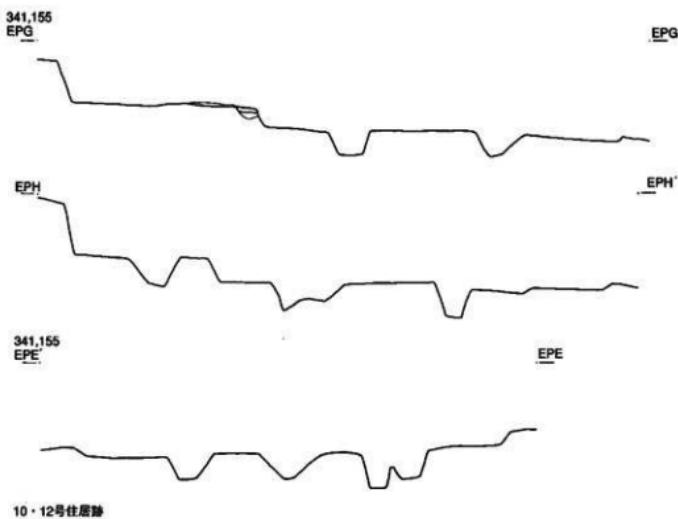
8号住居跡平・断面図

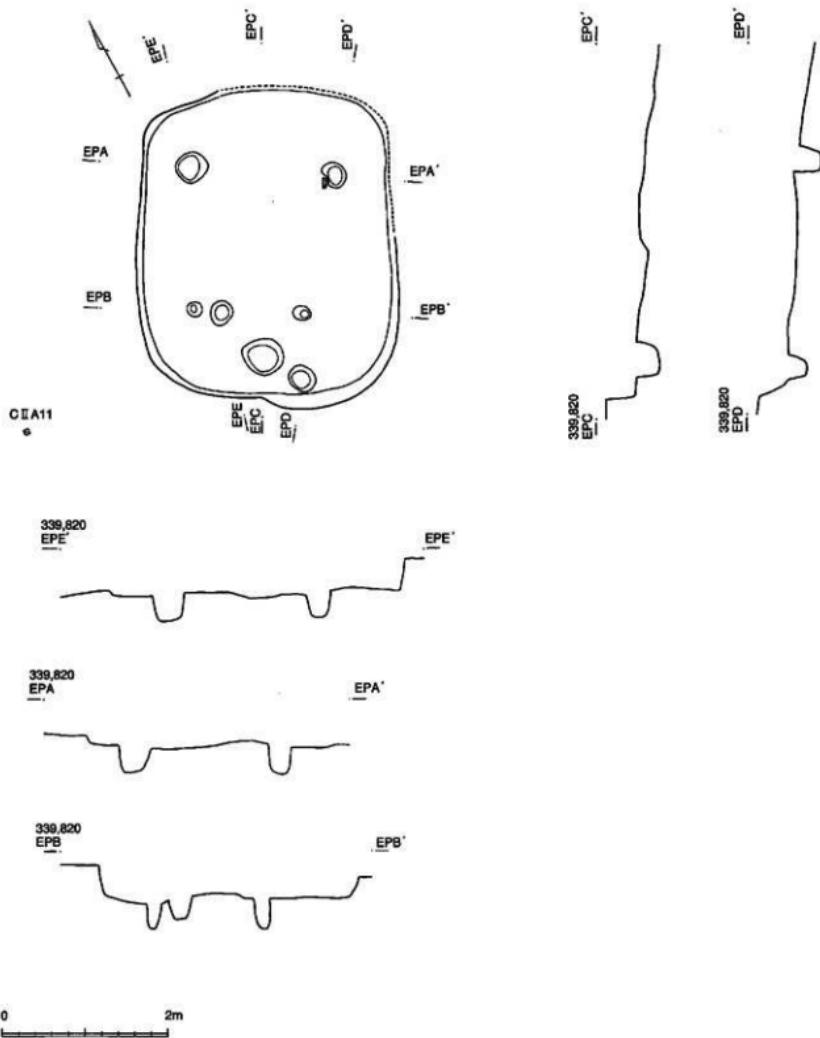


9号住居跡平・断面図

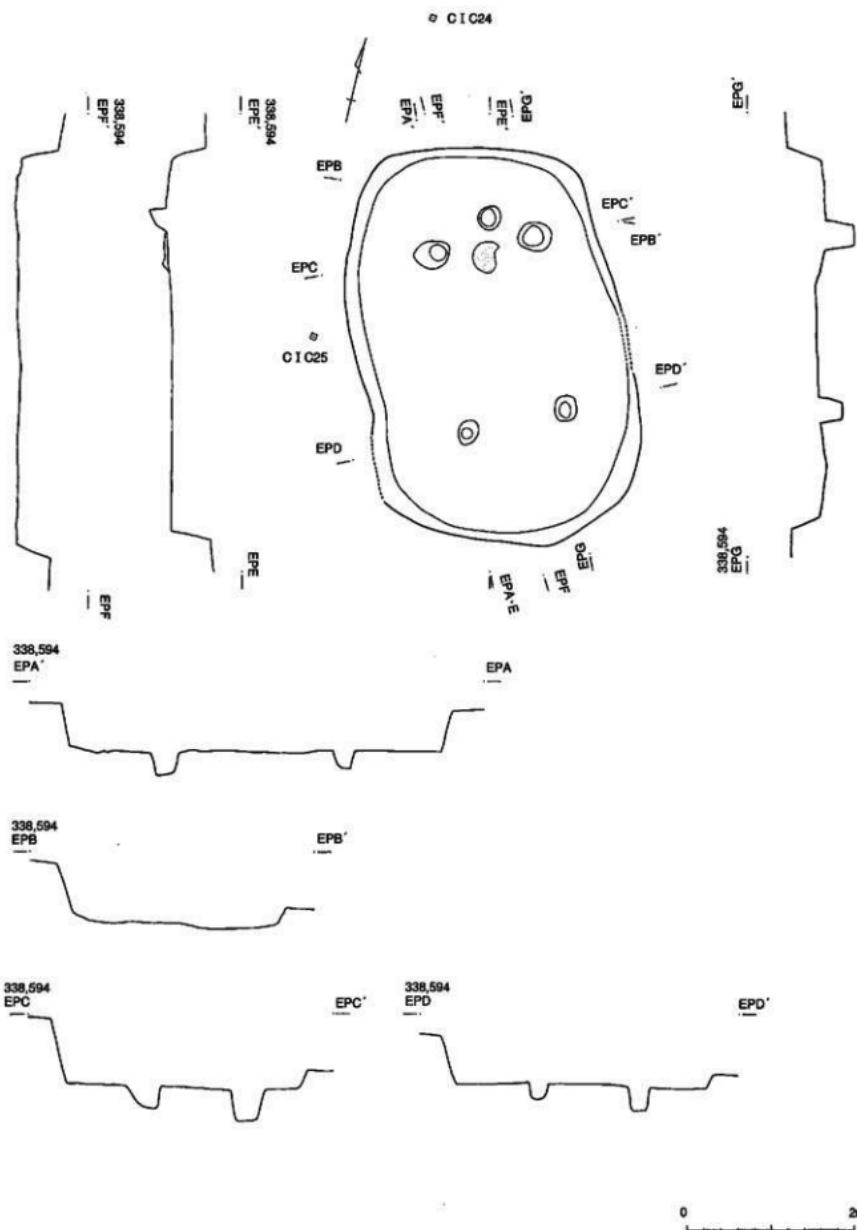


10・12号住居跡及び1・3・6・10号土壤平・断面図

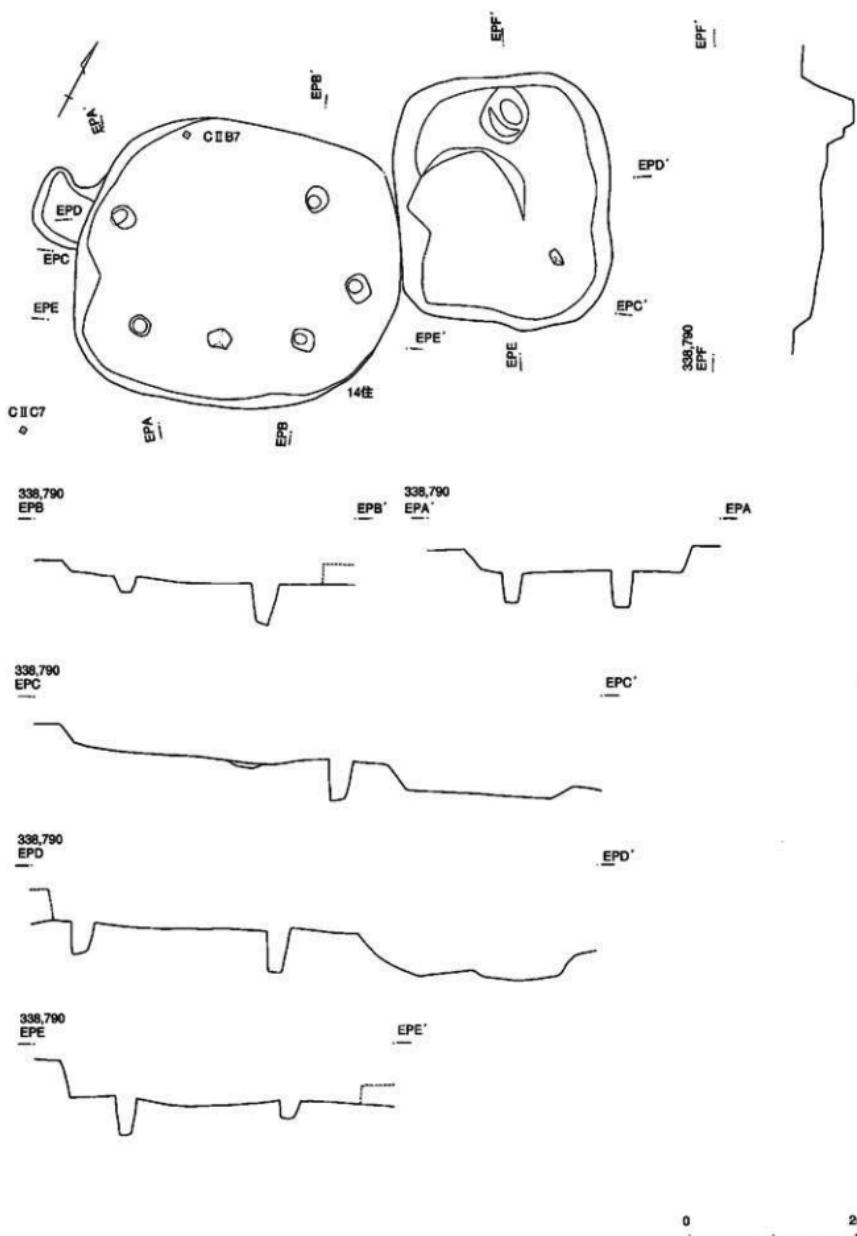




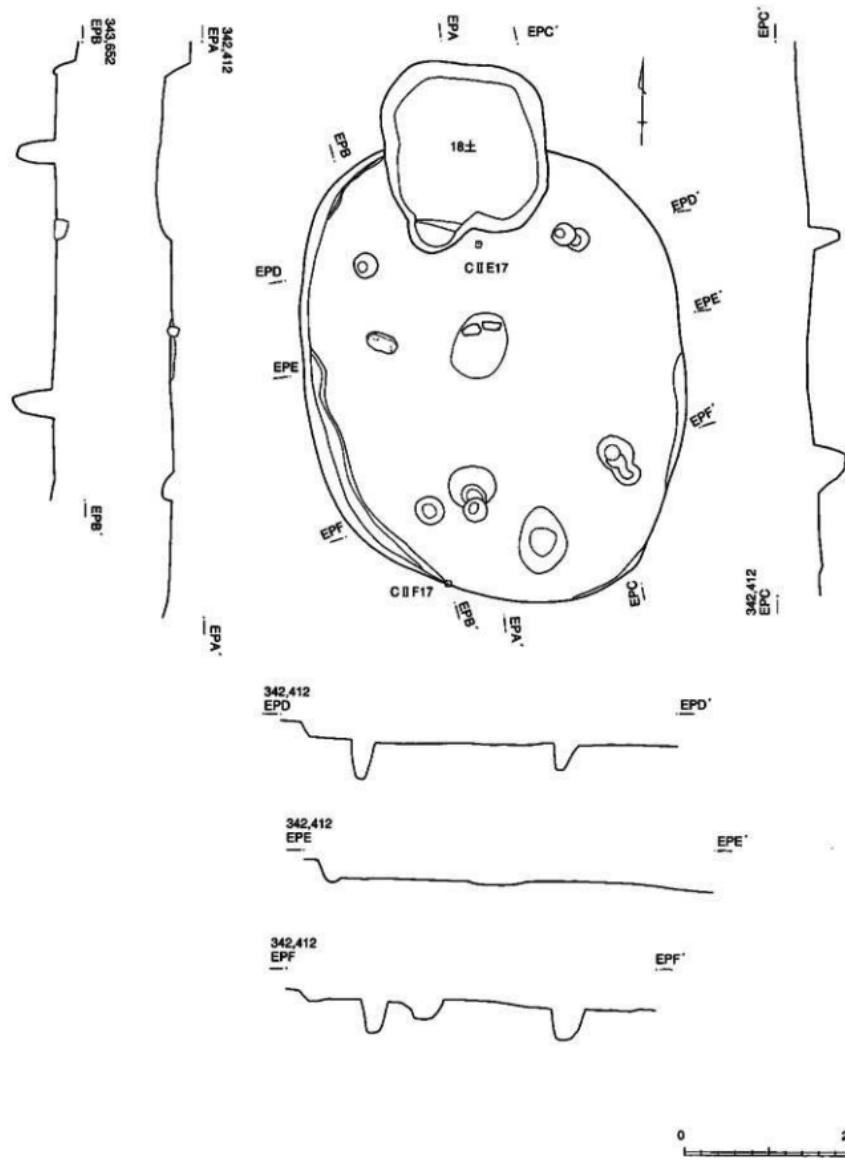
11号住居跡平・断面図



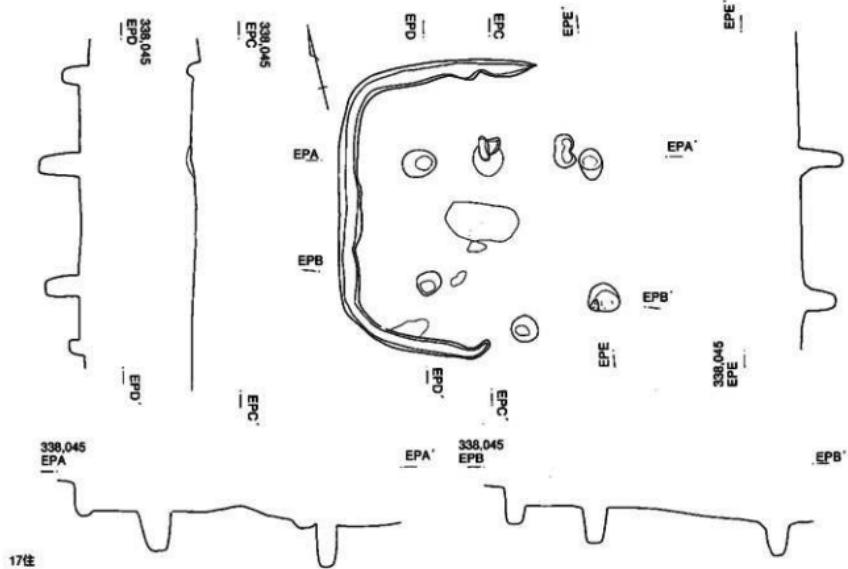
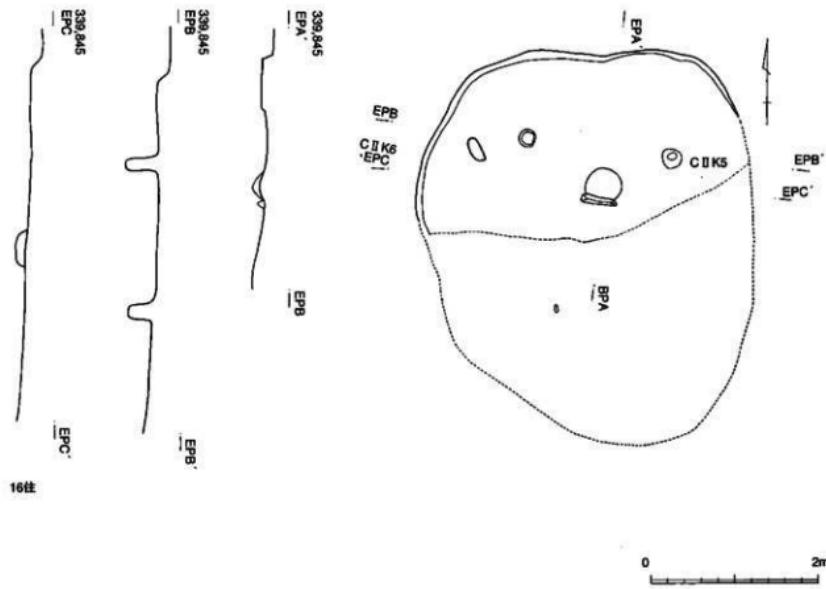
13号住居跡平・断面図



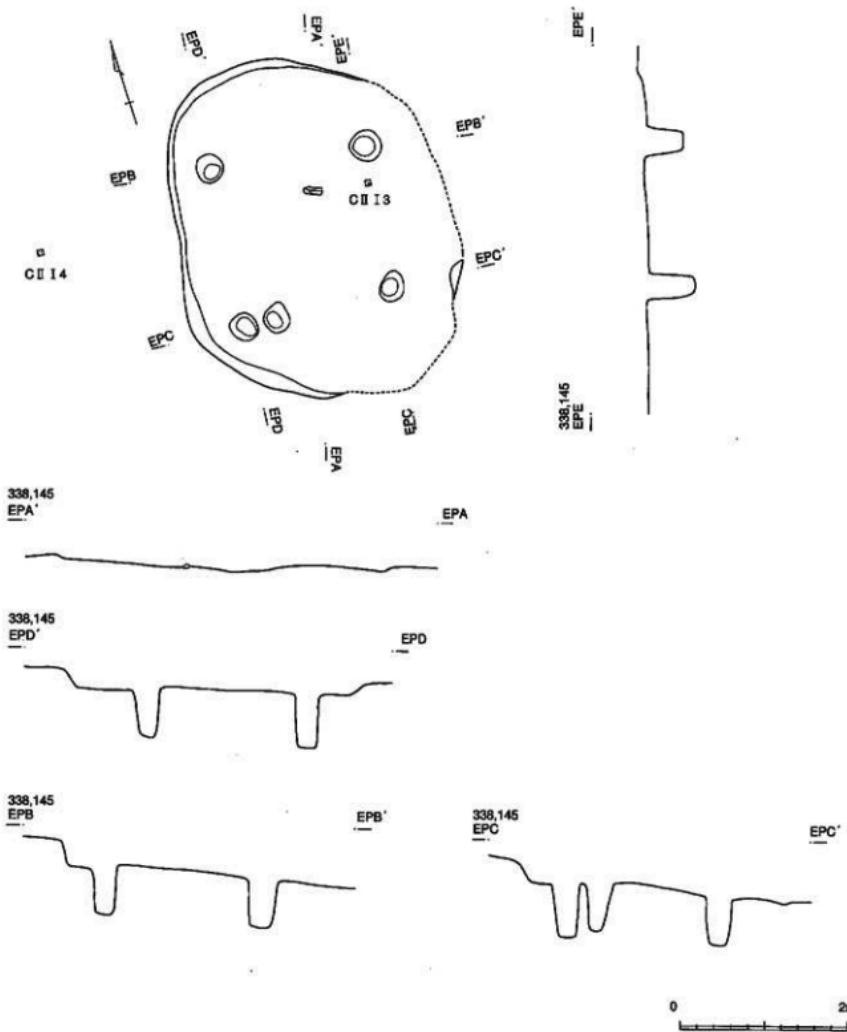
14号住居跡・2号竪穴平・断面図



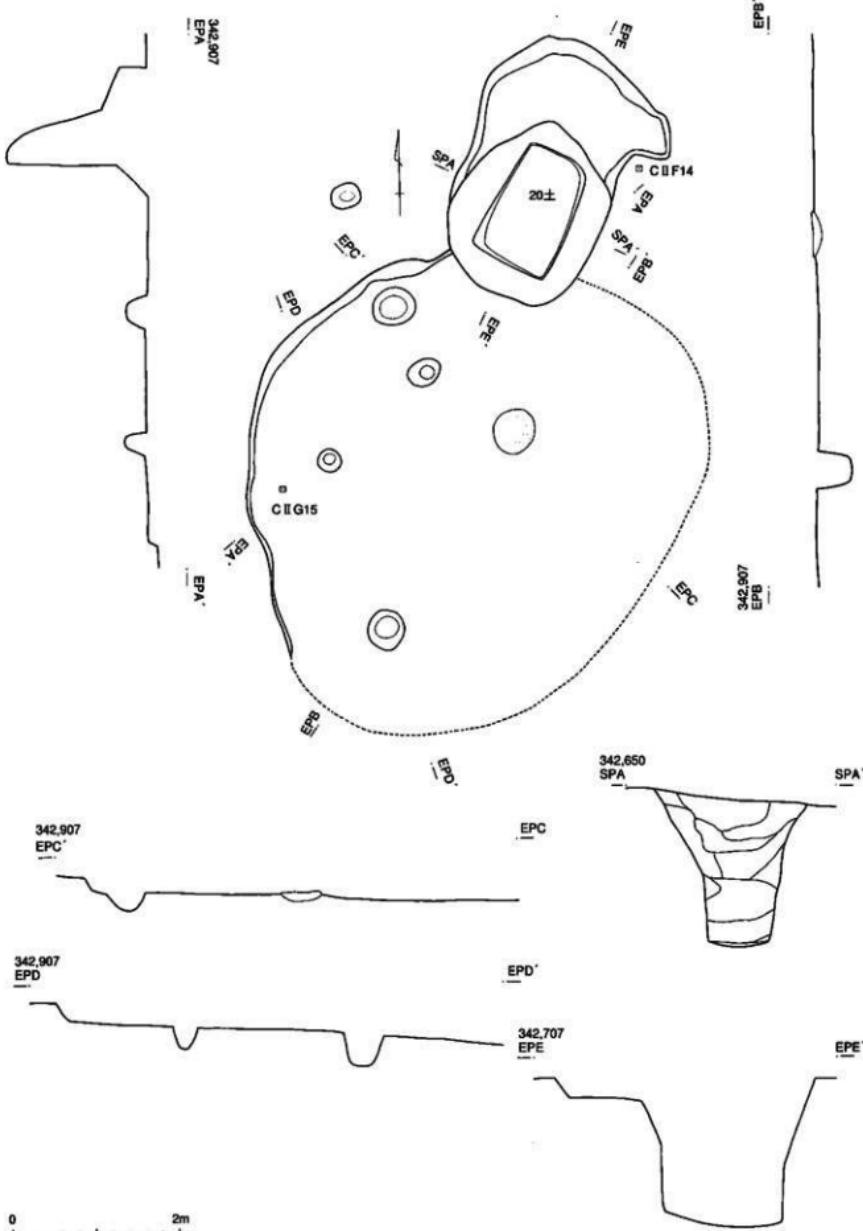
15号住居跡・18号土壤平・断面図



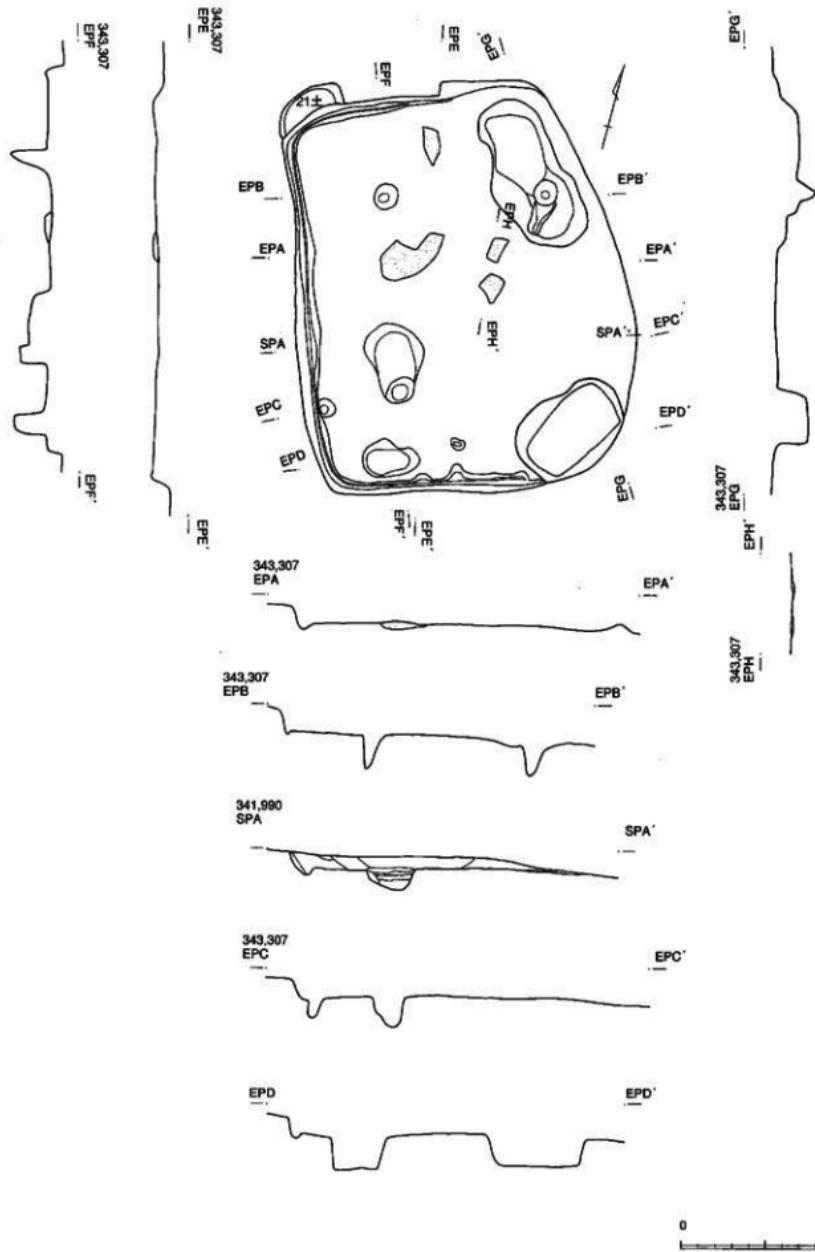
16・17号住居跡平・断面図



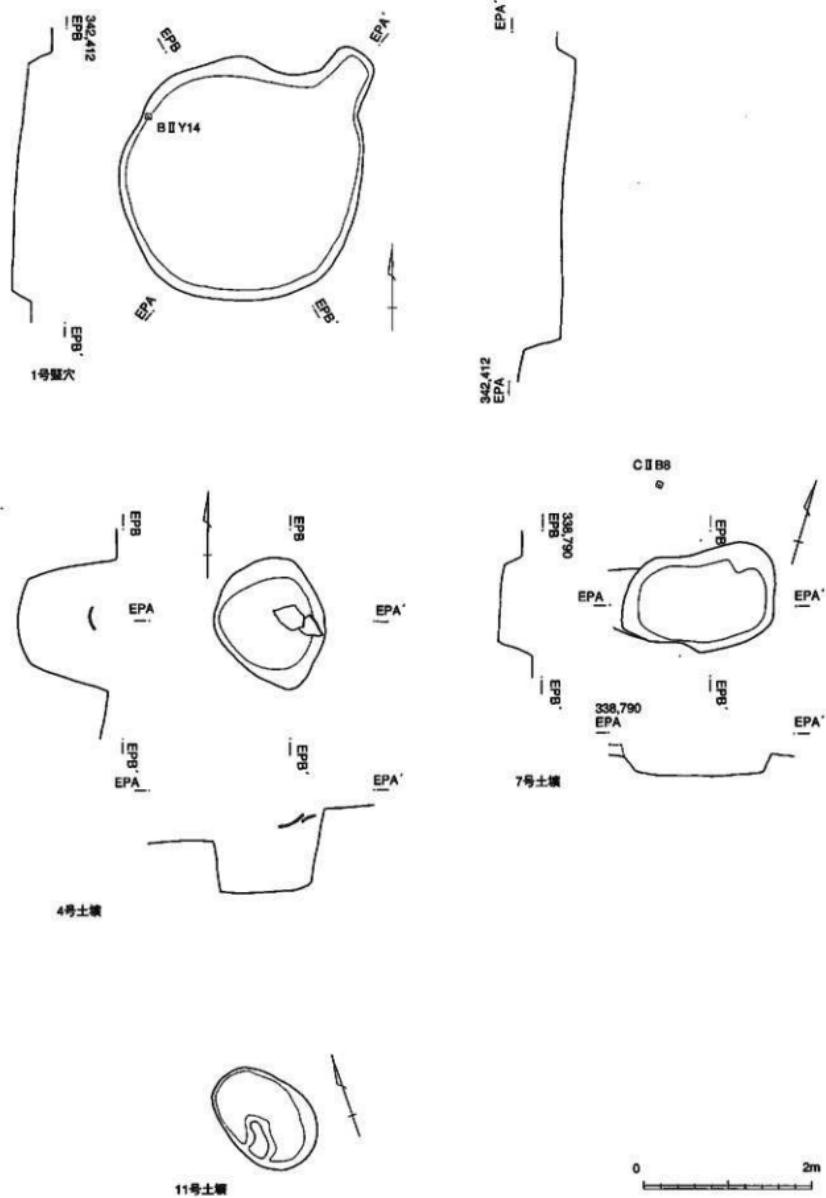
18号住居跡平・断面図



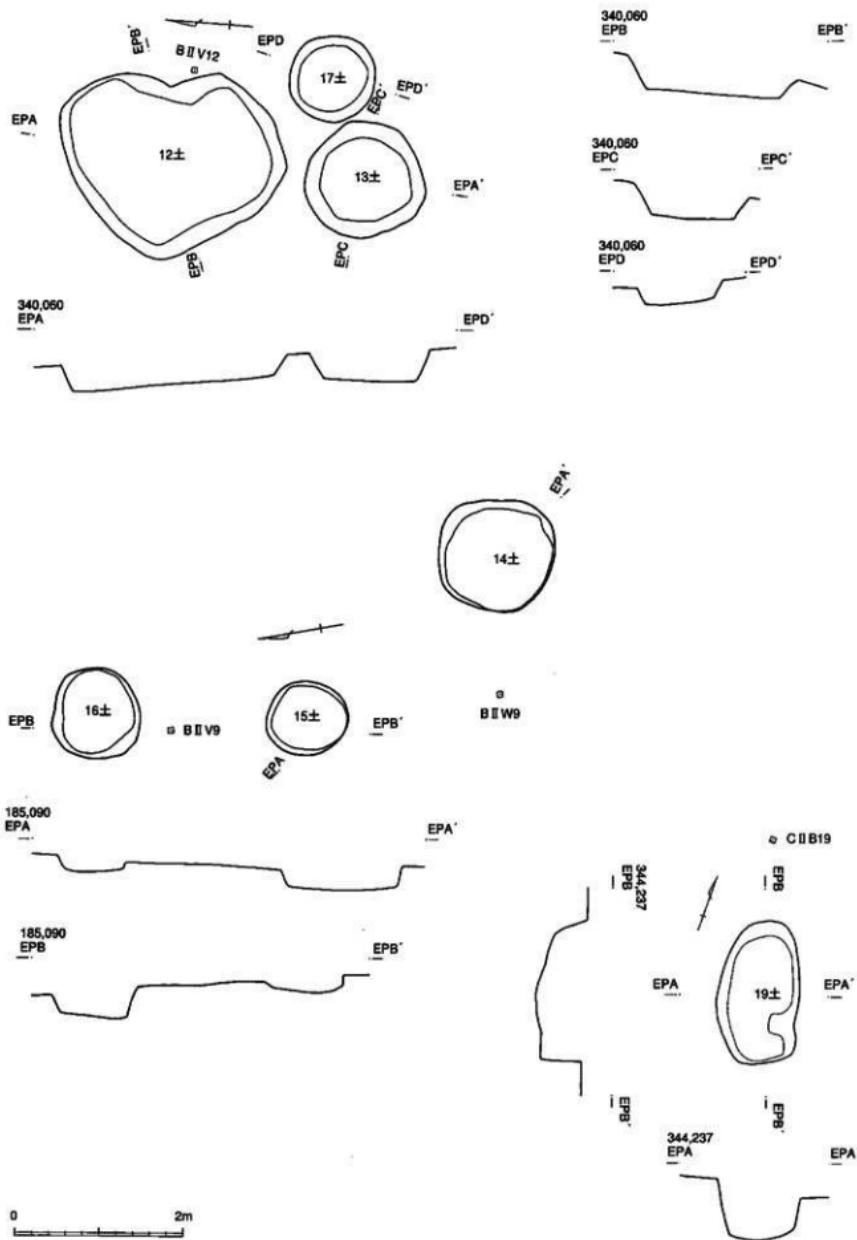
19号居住跡・20号土壤平・断面図



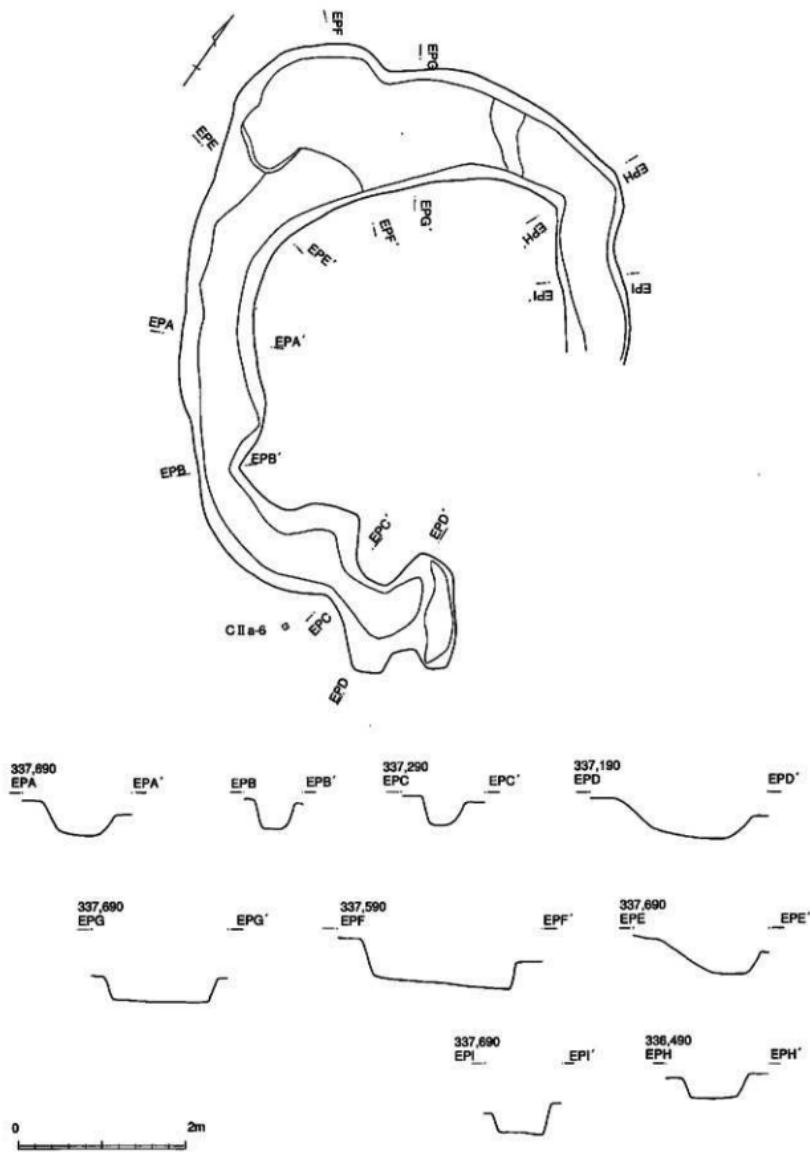
20号住居・21号土壠跡平・断面図



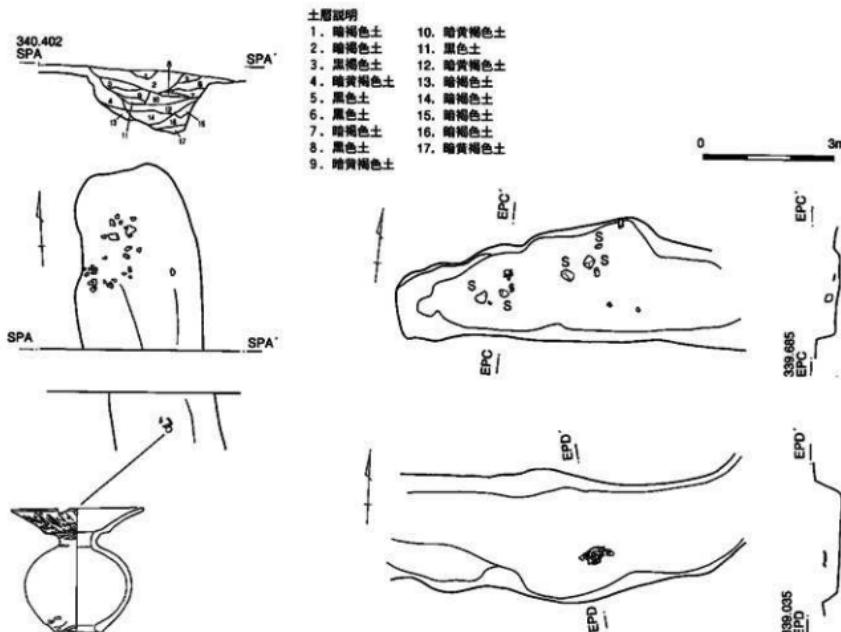
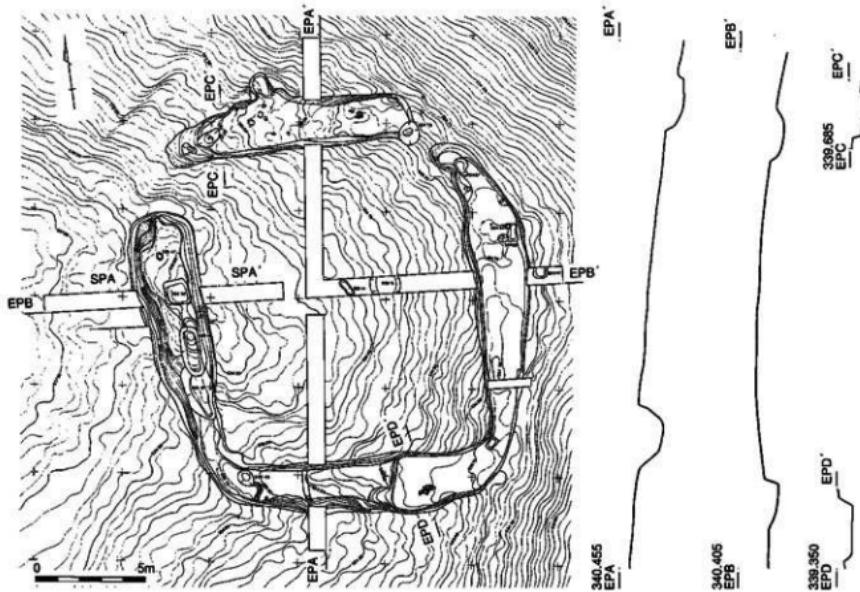
1号竖穴及び4・7・11号土壤平・断面図



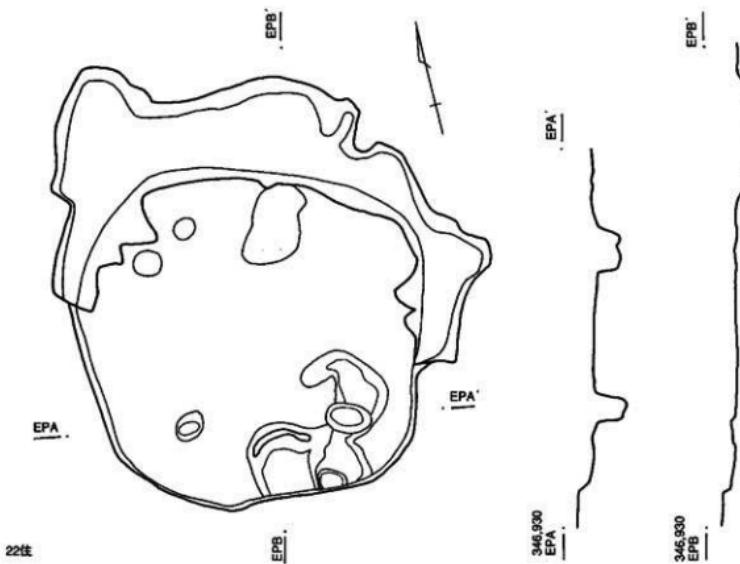
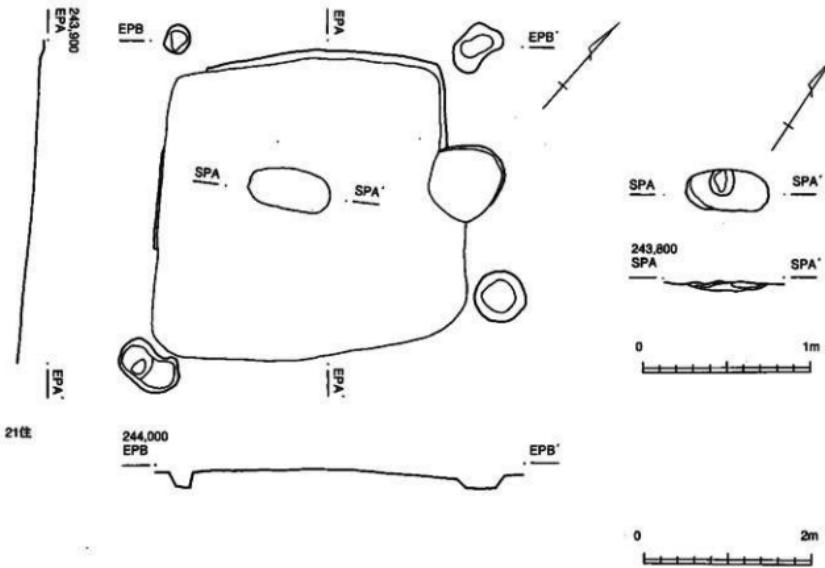
12~17・19号土壤平・断面図



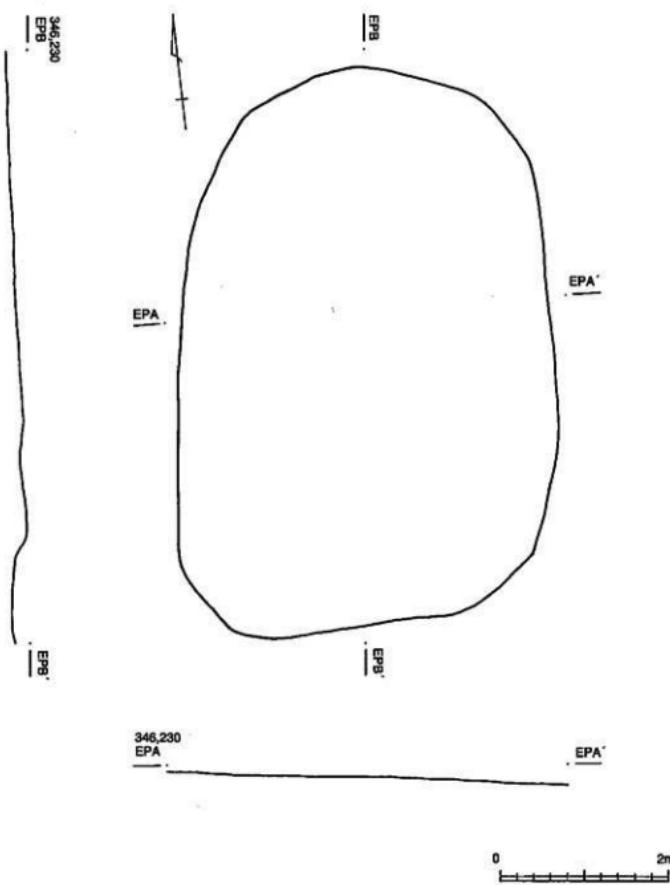
1号方形清平・断面図



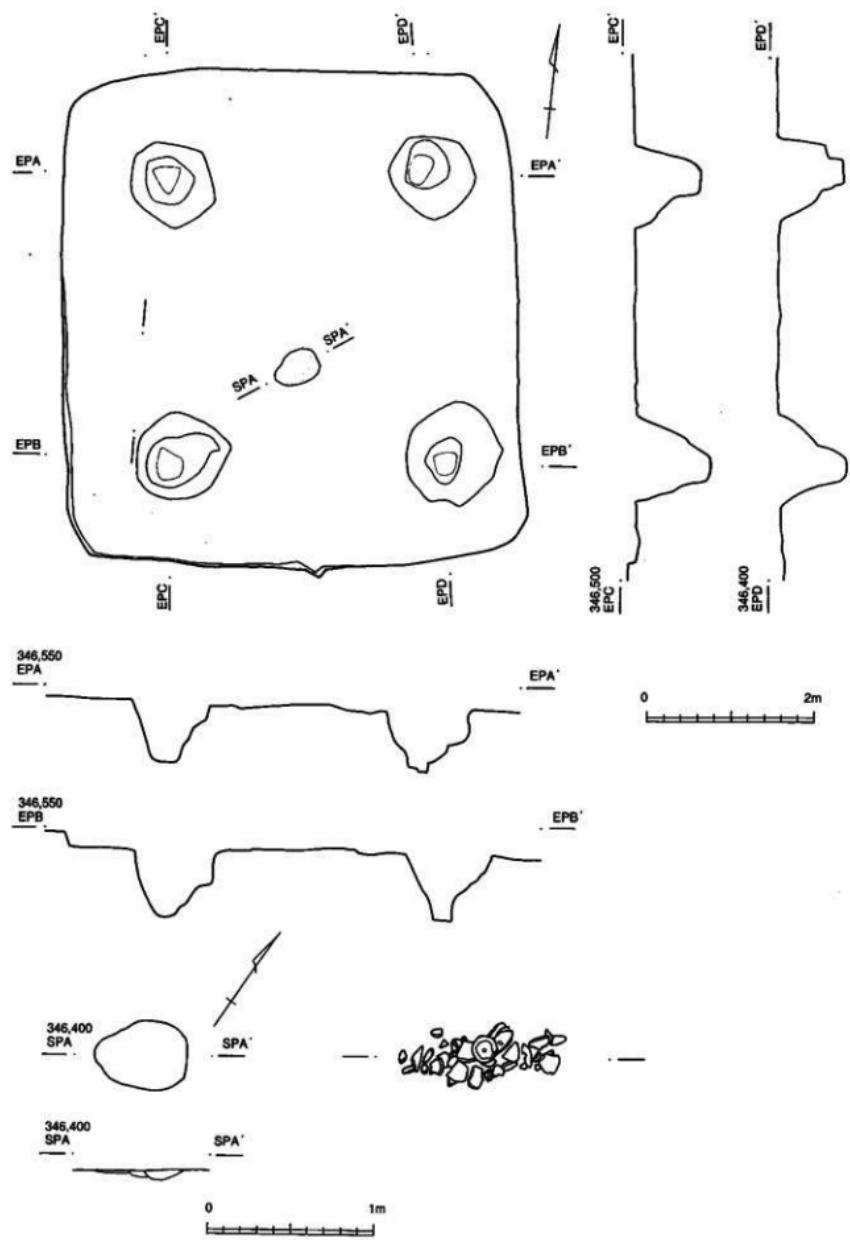
1号周清基平・断面図及び遺物出土状況



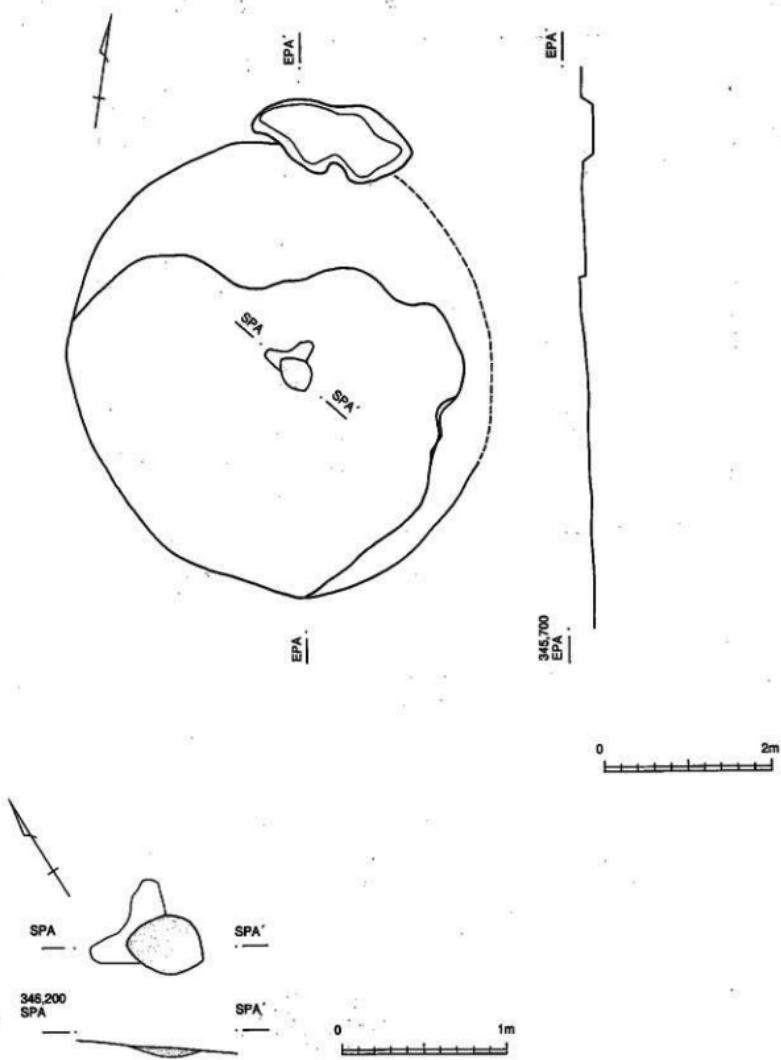
21・22号住居跡・炉平・断面図



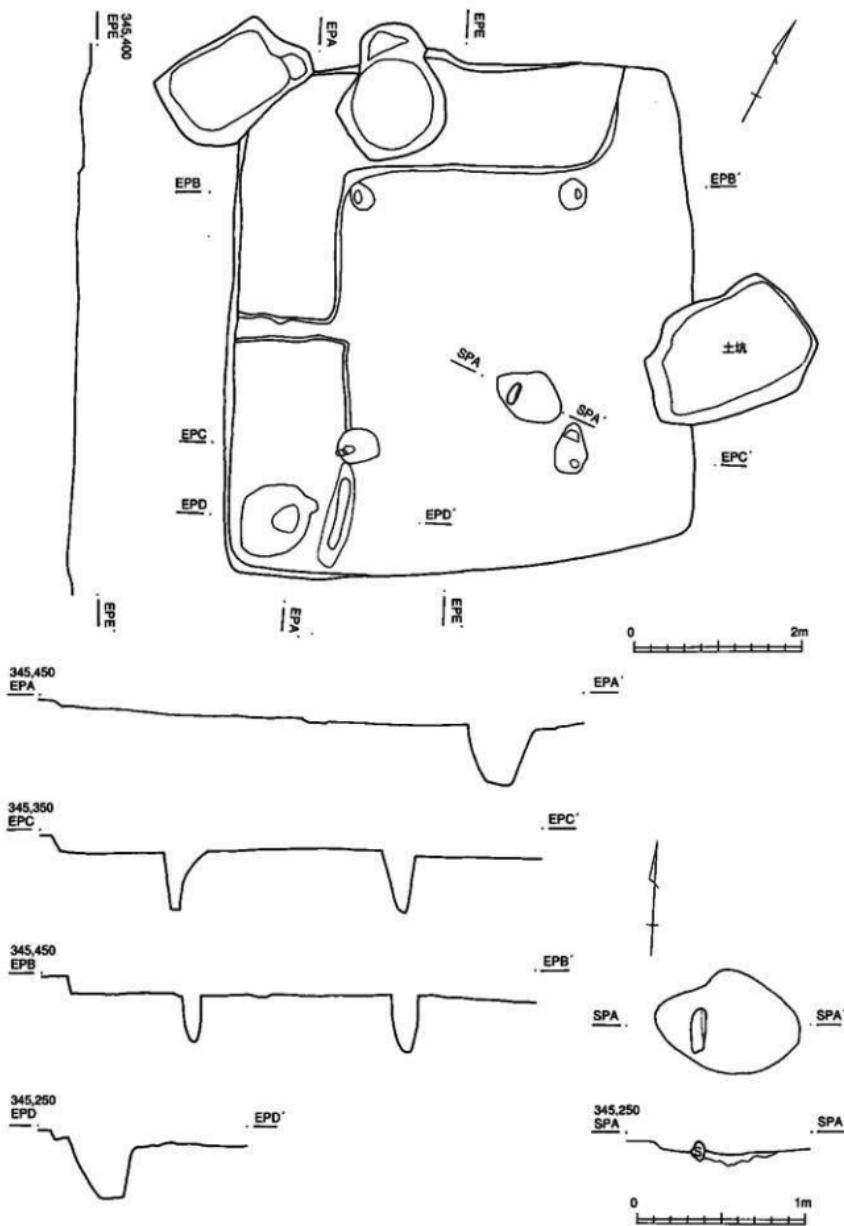
23号住居跡平・断面図



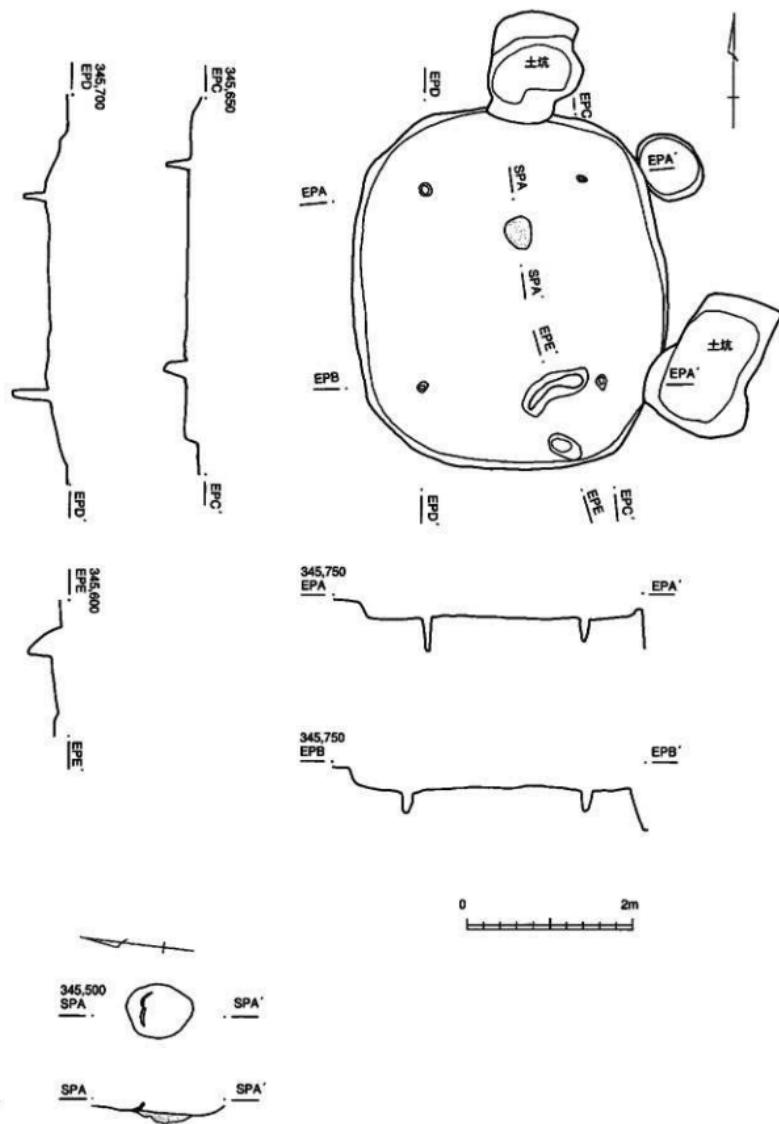
24号住居跡・炉平面図



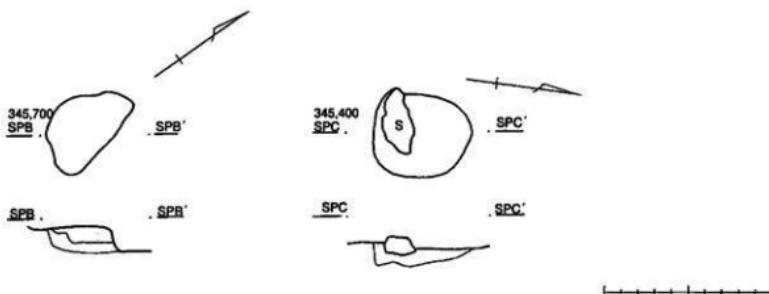
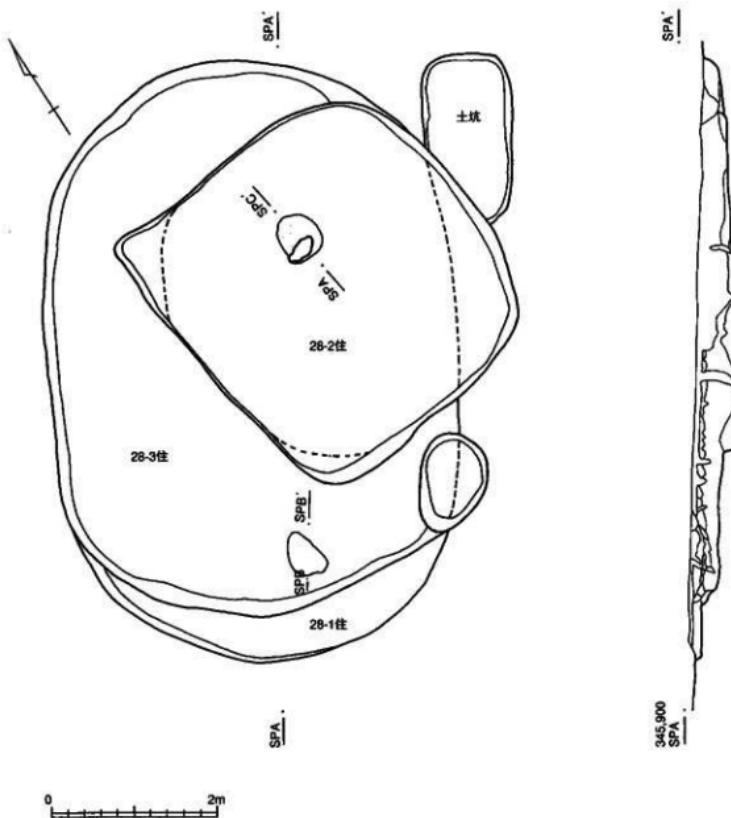
25号住居跡・炉平・断面図



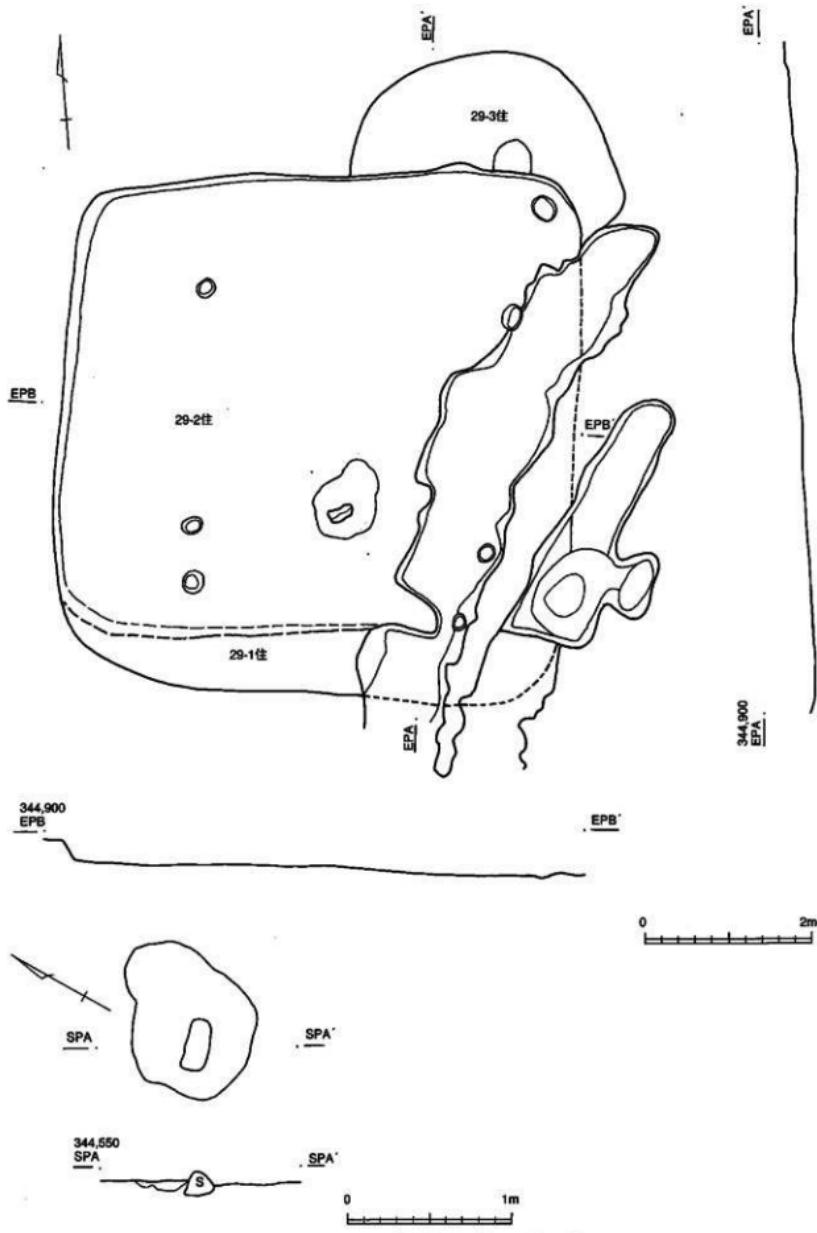
26号住居跡・炉平・断面図



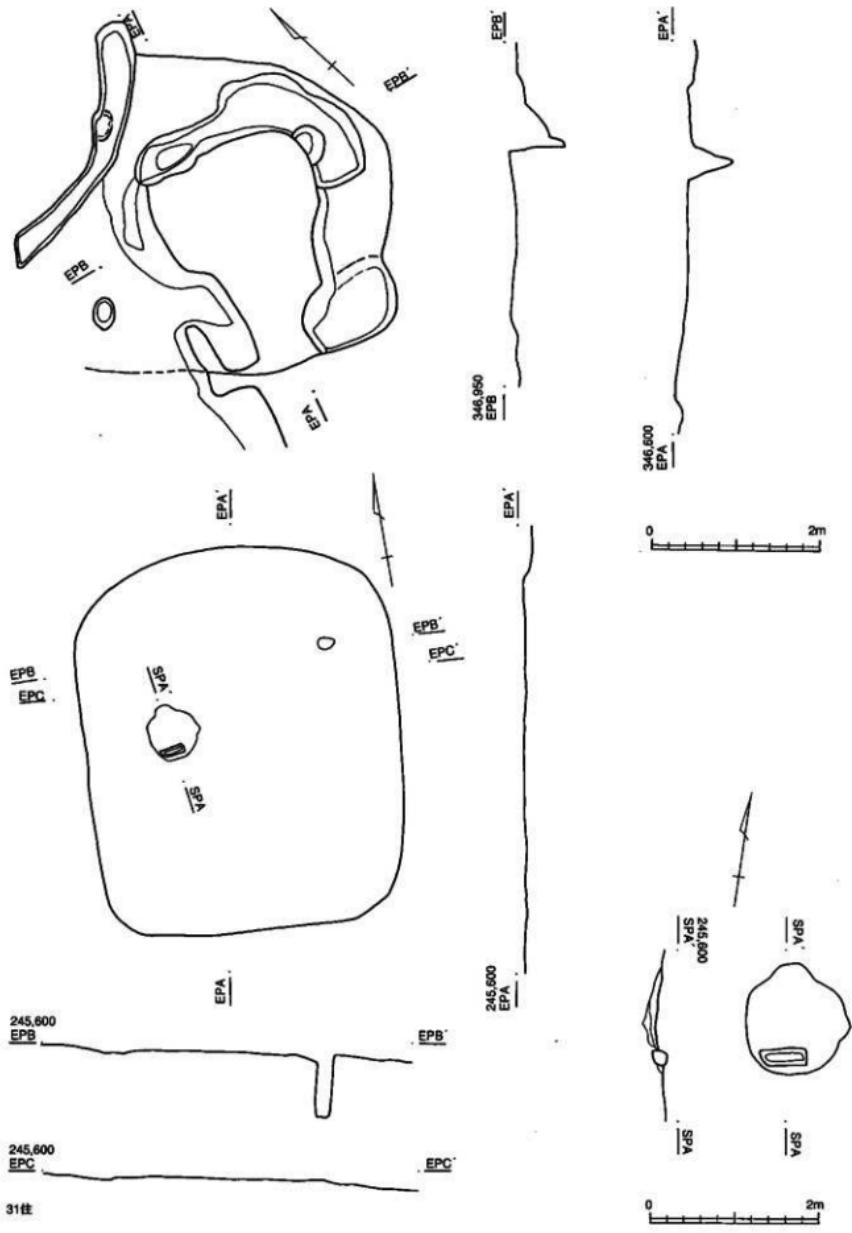
27号住居跡・炉平・断面図



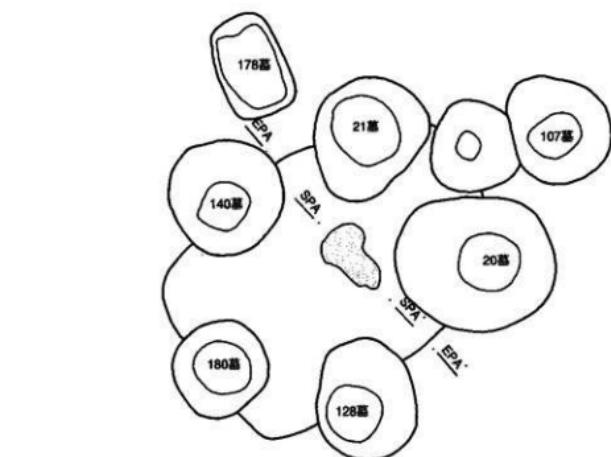
28-1・28-2・28-3号住居跡・炉平・断面図



29-1・29-2・29-3号住居跡・炉平・断面図



30・31号住居跡・炉平・断面図



344,800
EPA SPA SPA' EPA'

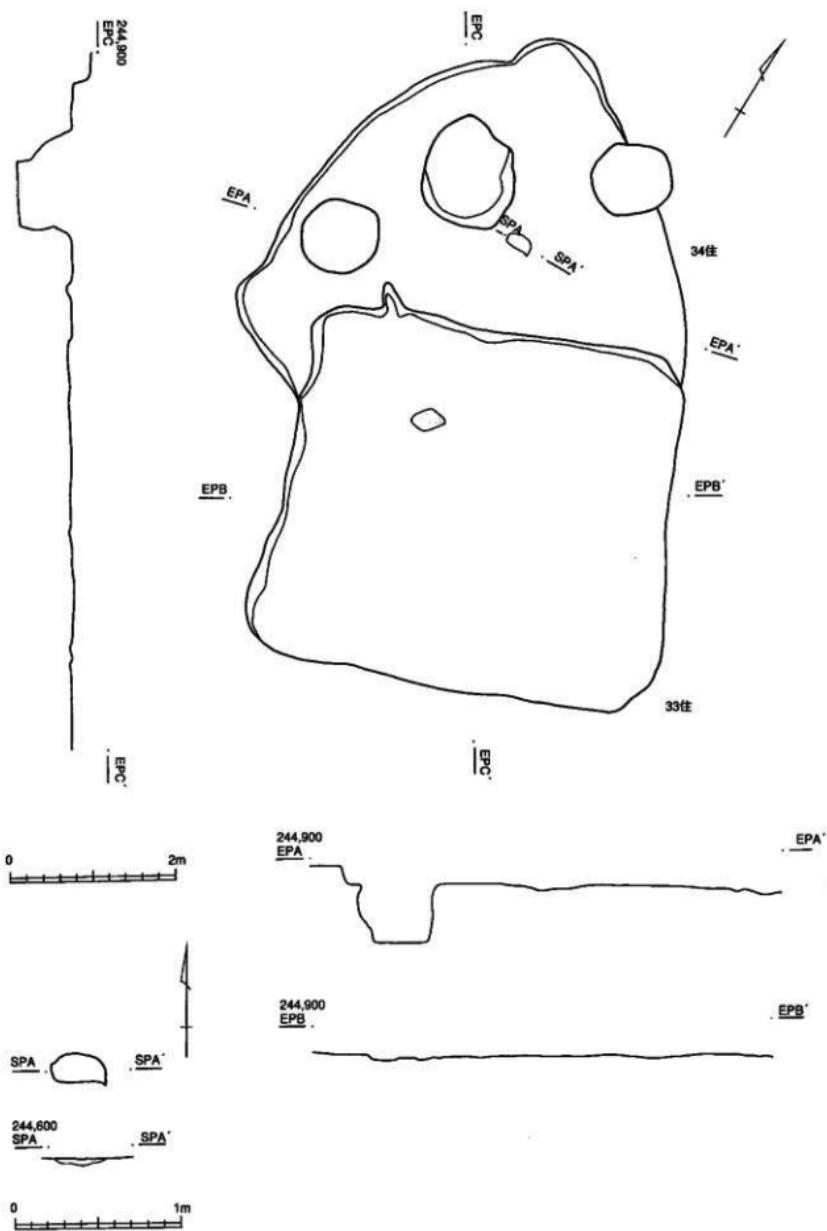
0 2m



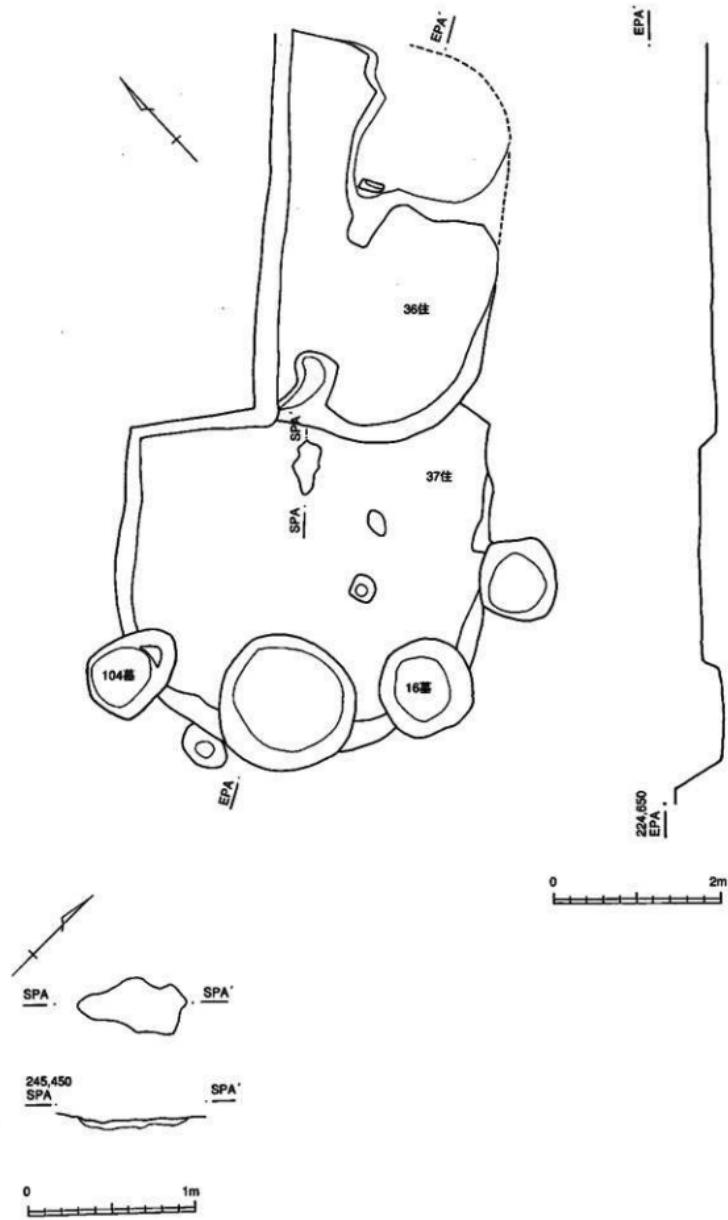
SPA SPA'

0 1m

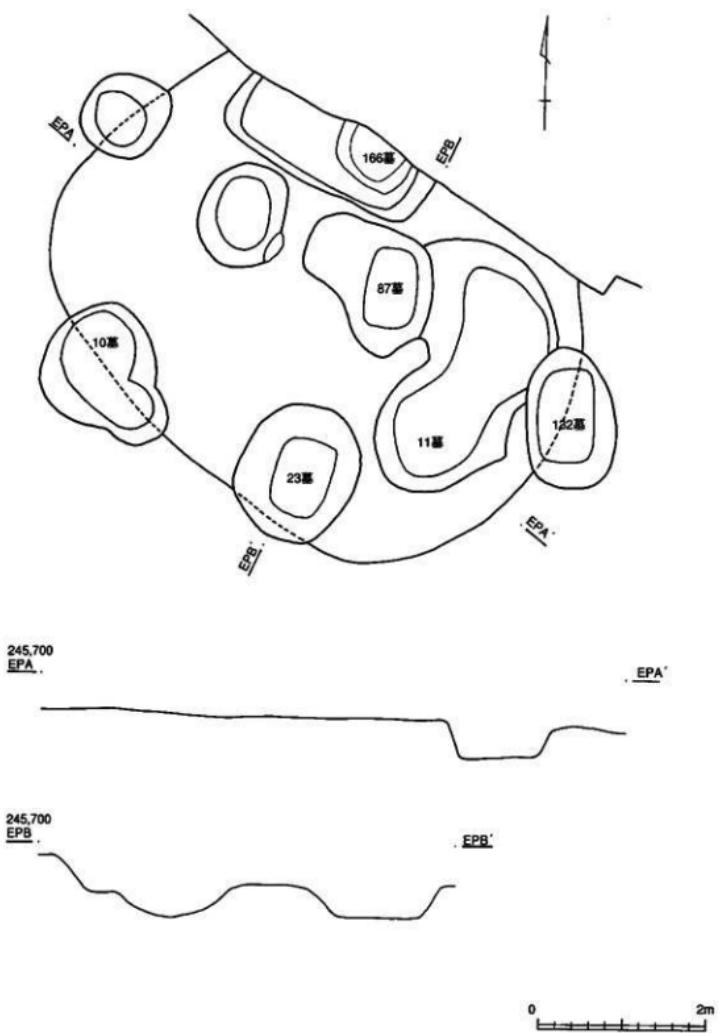
32号住居跡・炉平・断面図



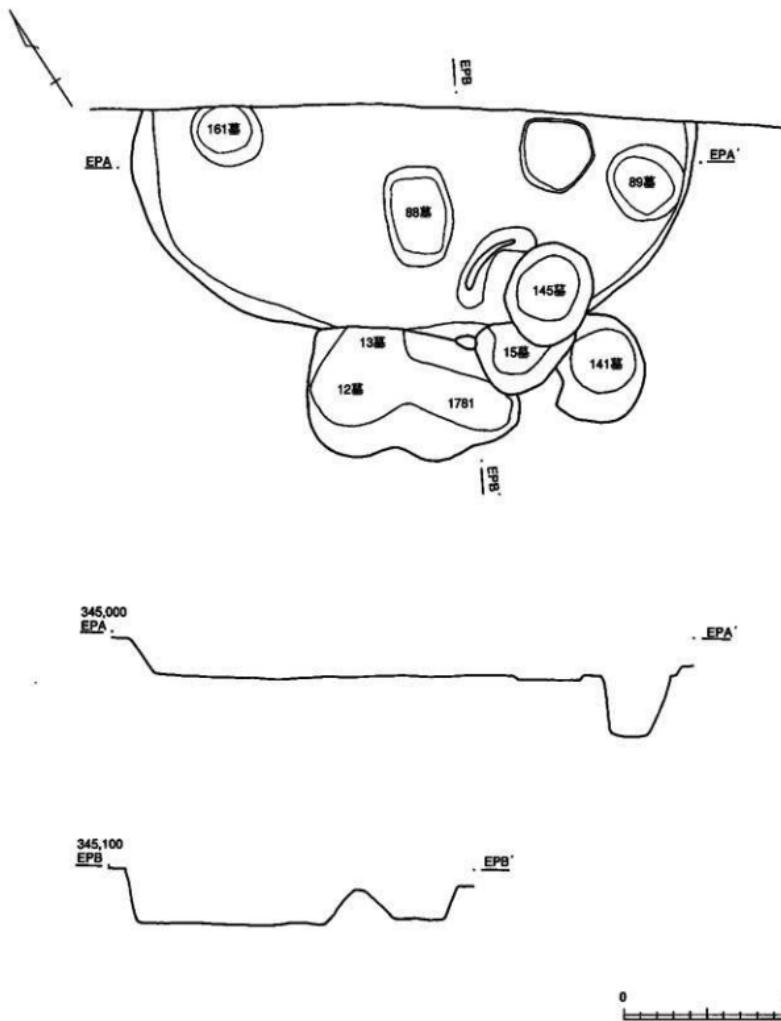
33・34号住居跡・炉平・断面図



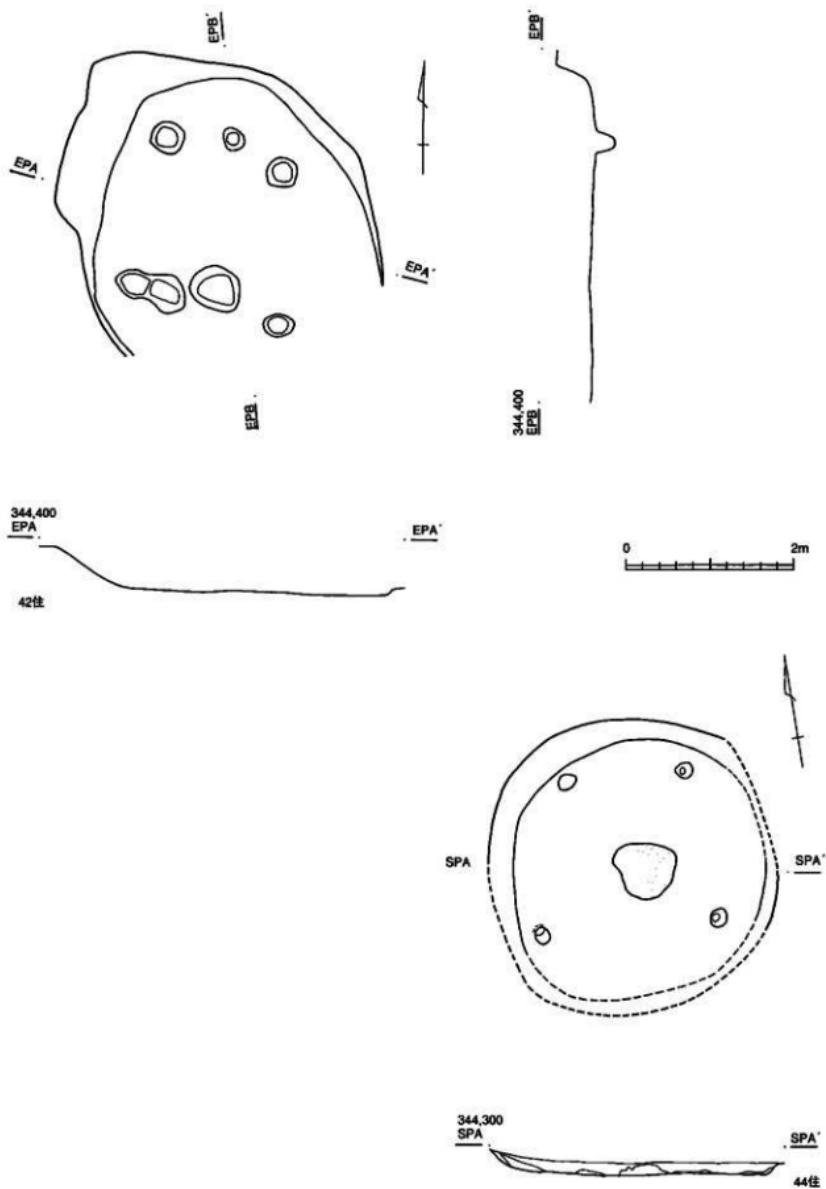
36・37号住居跡・炉平・断面図



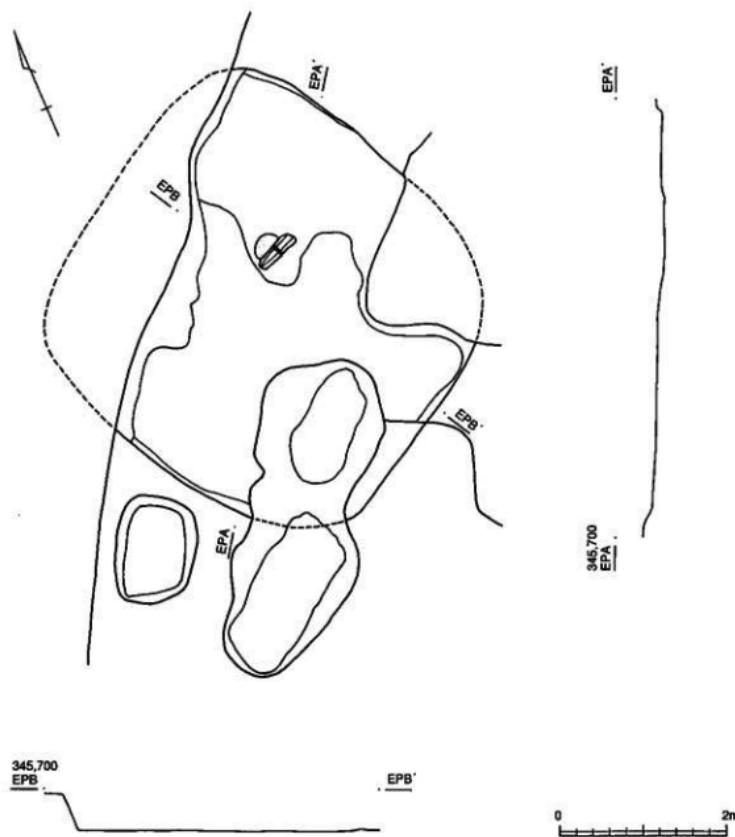
38号住居跡・炉平・断面図



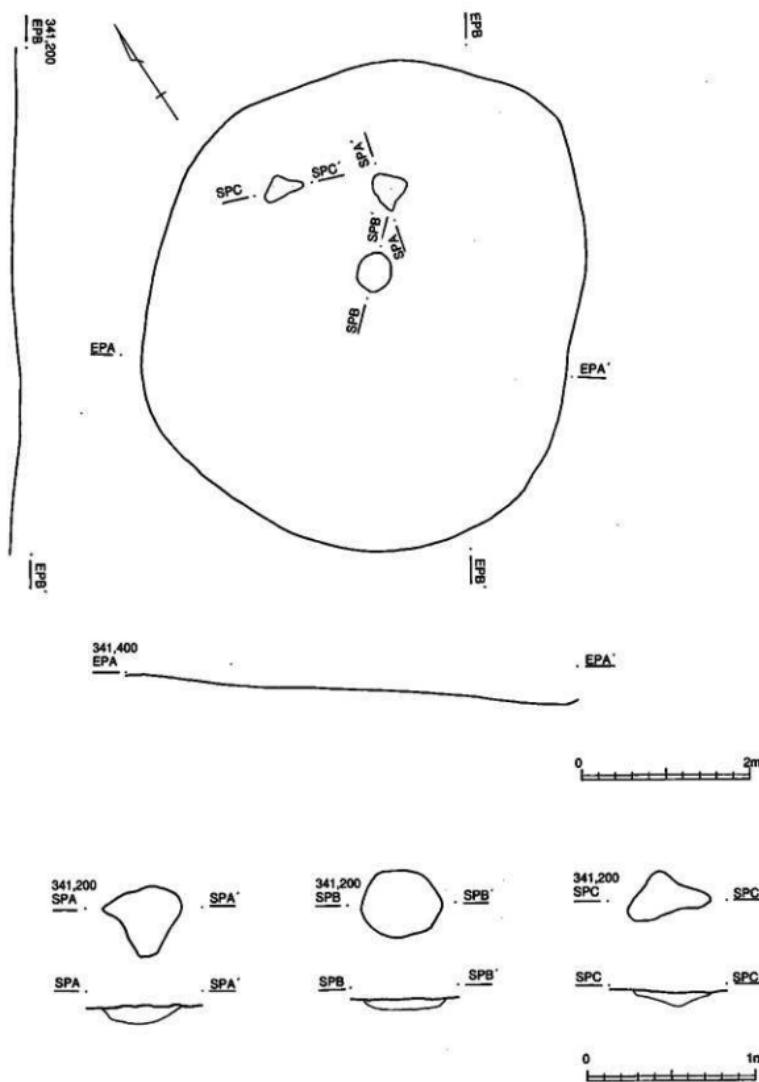
40号住居跡平・断面図



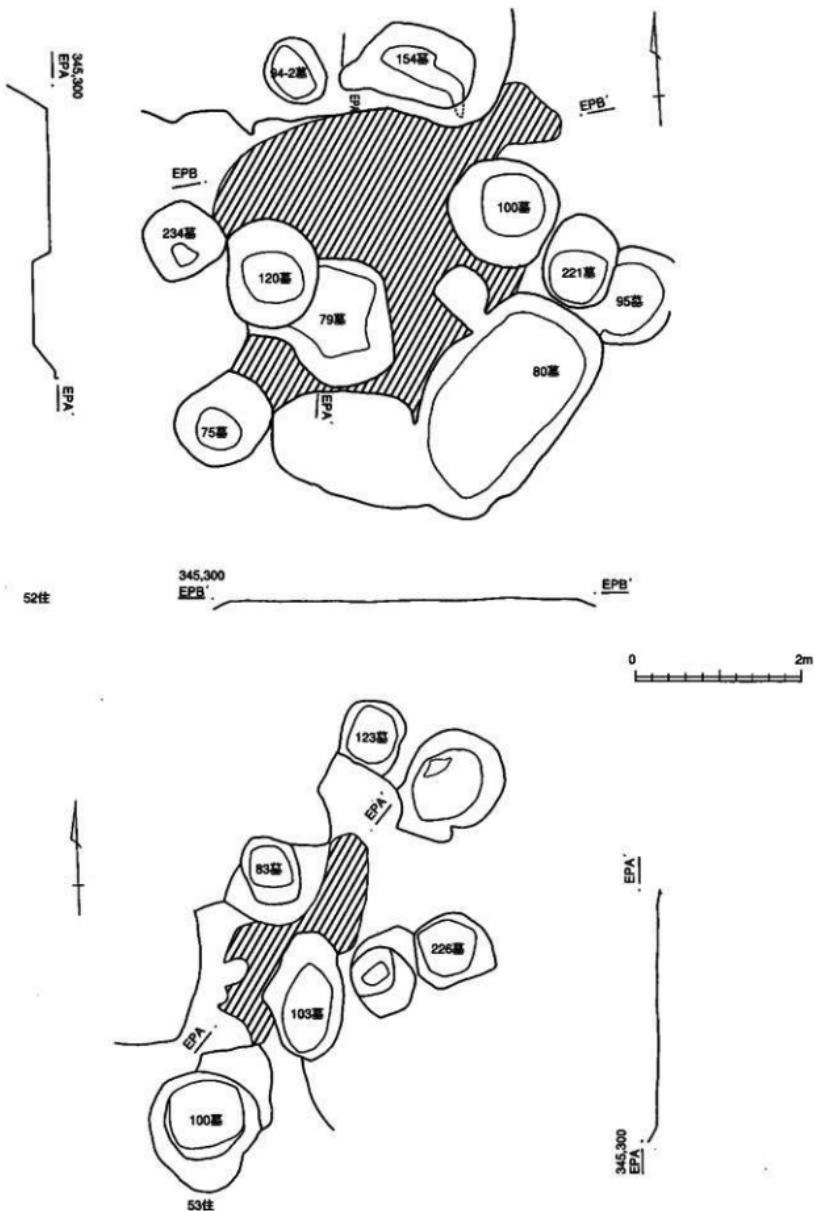
42・44号住居跡平・断面図



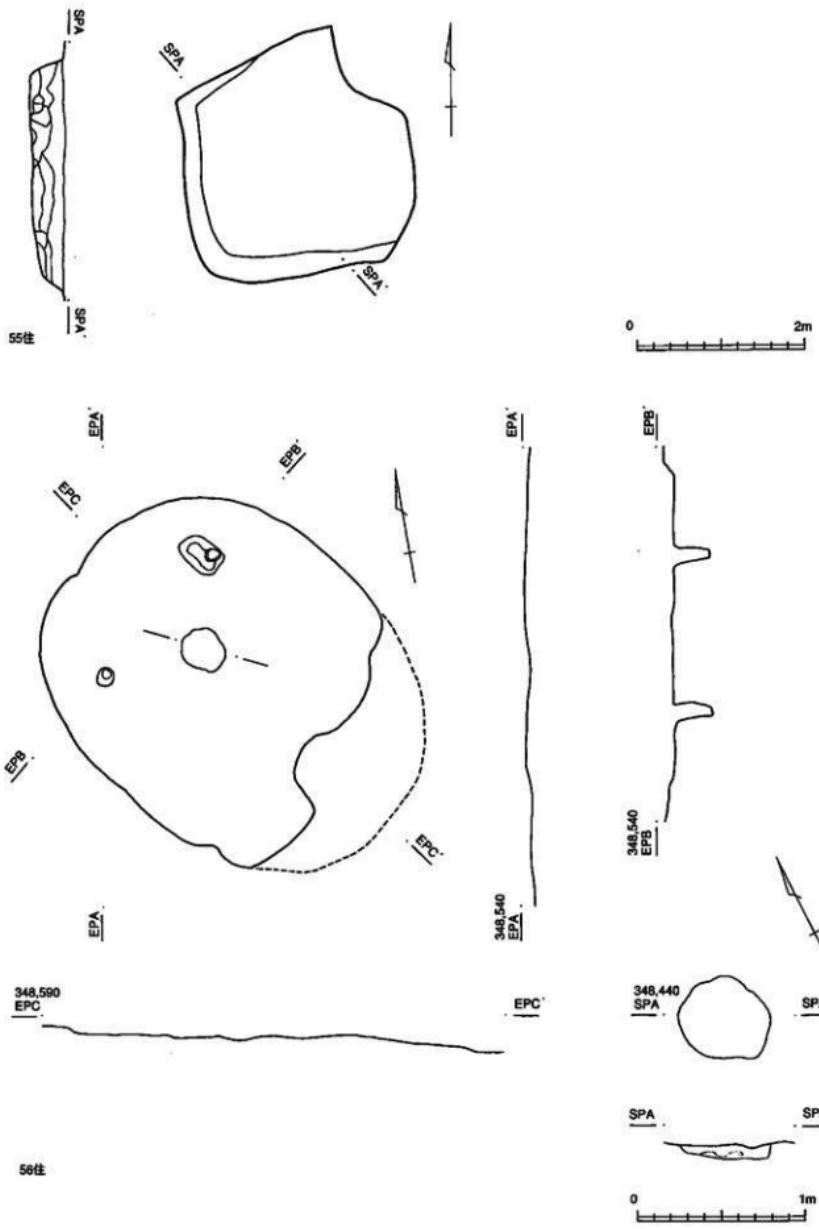
46号住居跡平・断面図



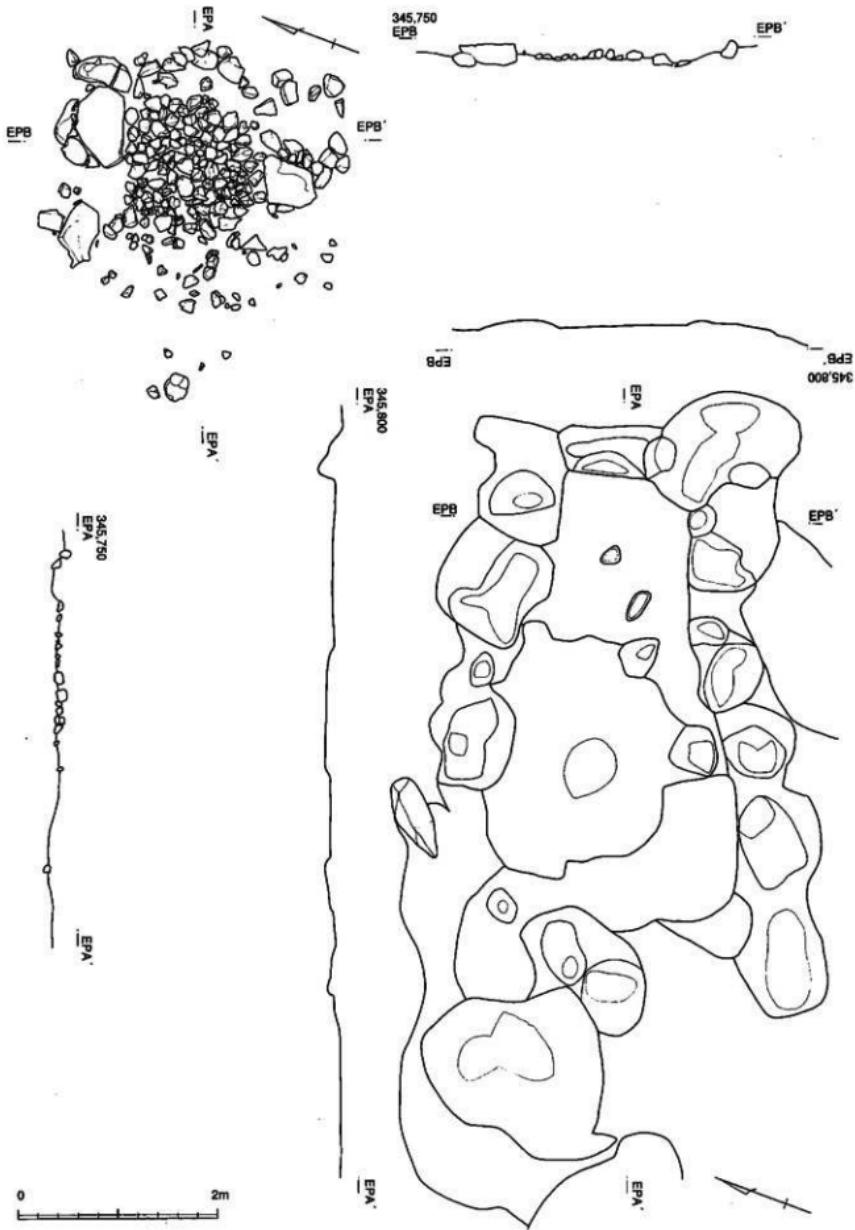
51号住居跡・炉平・断面図



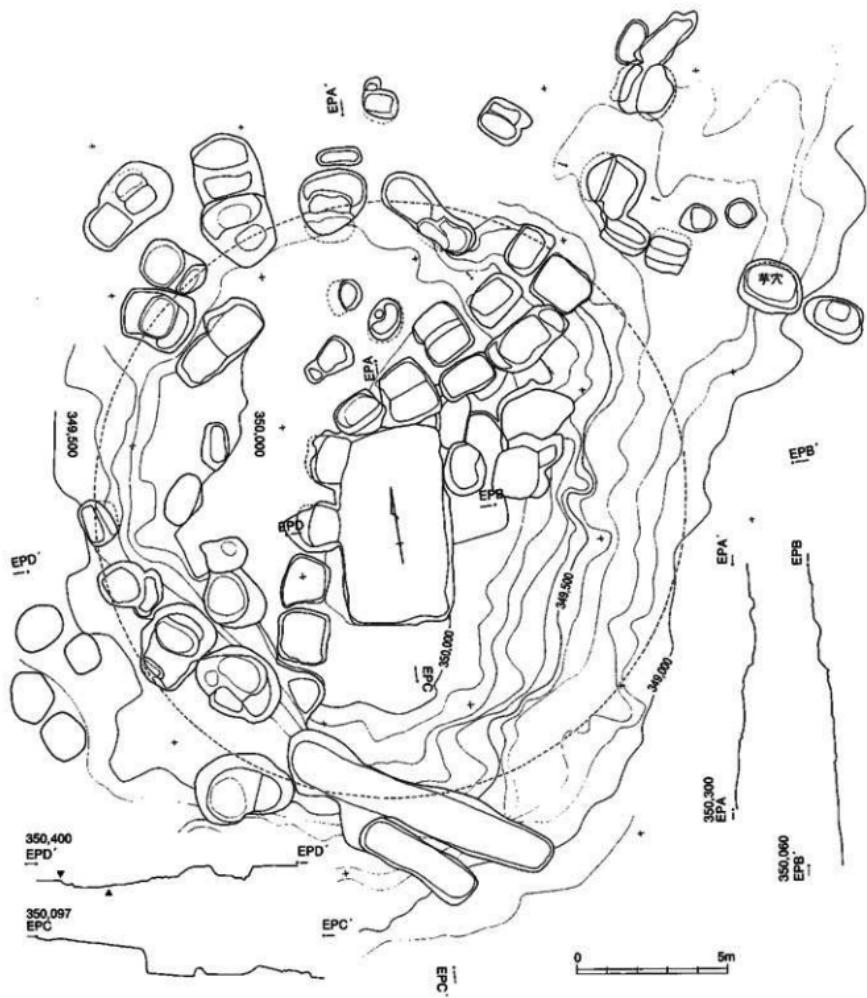
52・53号住居跡平・断面図(////床残存部)



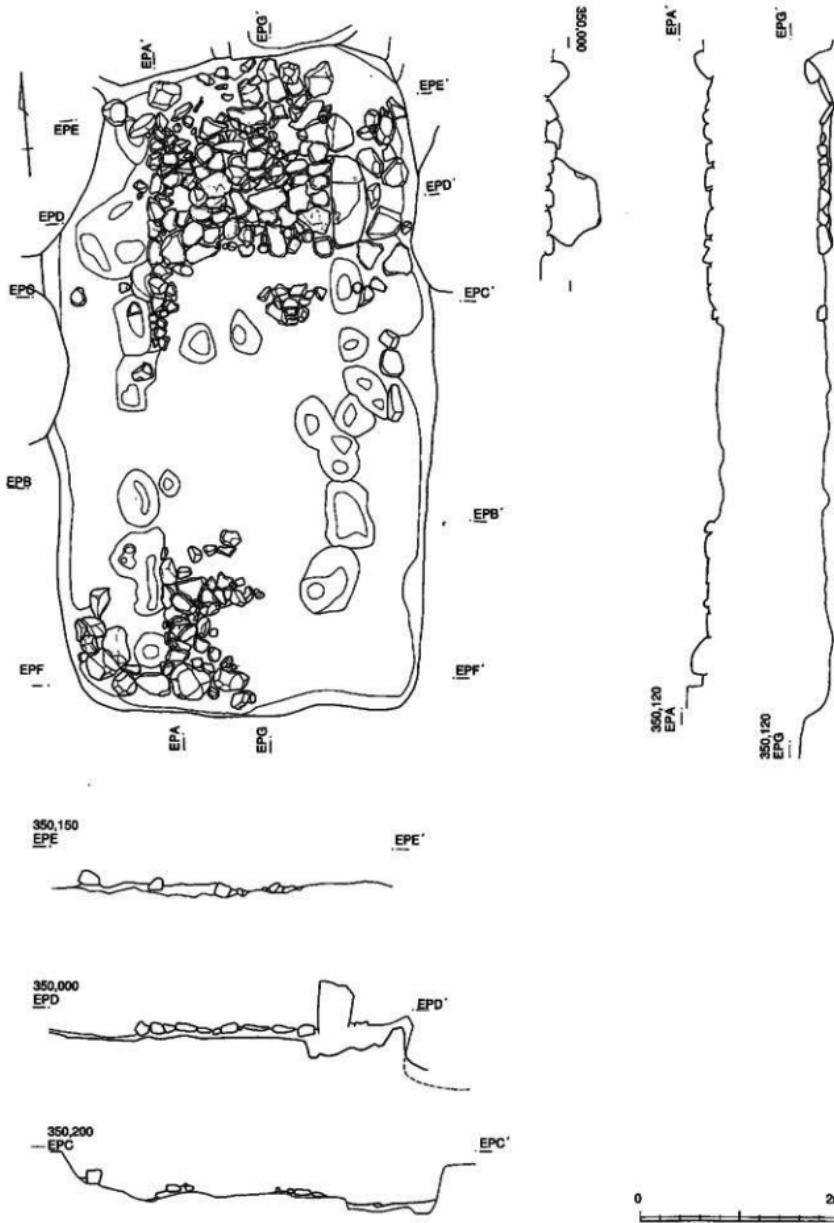
55・56号住居跡・炉平・断面図



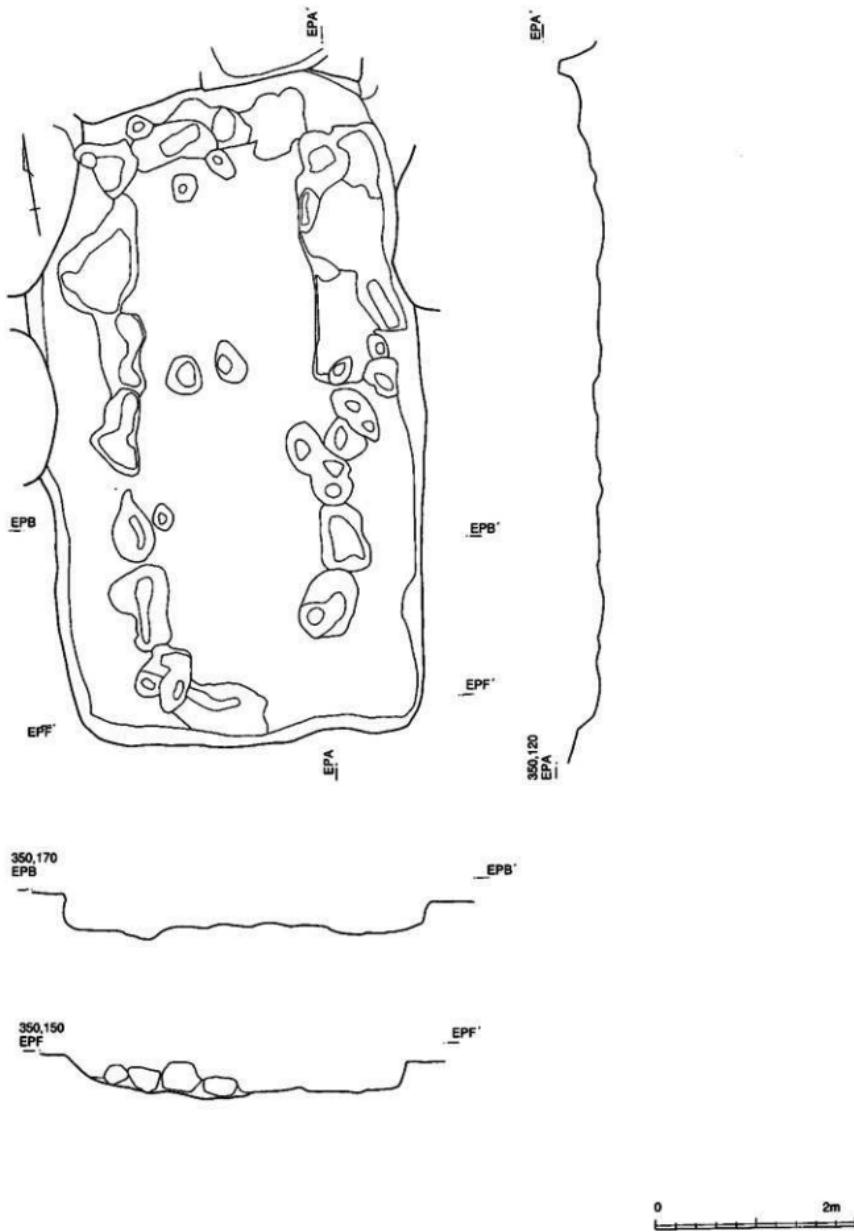
米倉山B-1号墳石室平面図及び掘方平・断面図



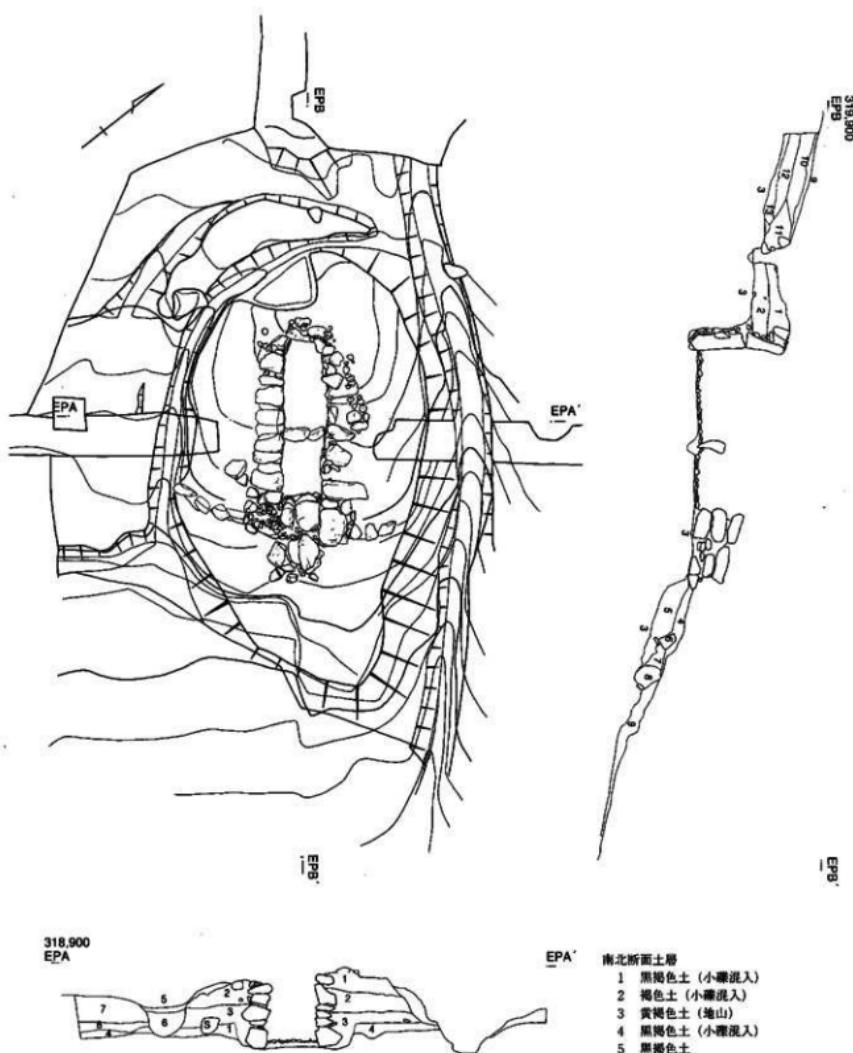
米倉山B-2号墳埴丘平・断面図及び芋貯藏穴平面図



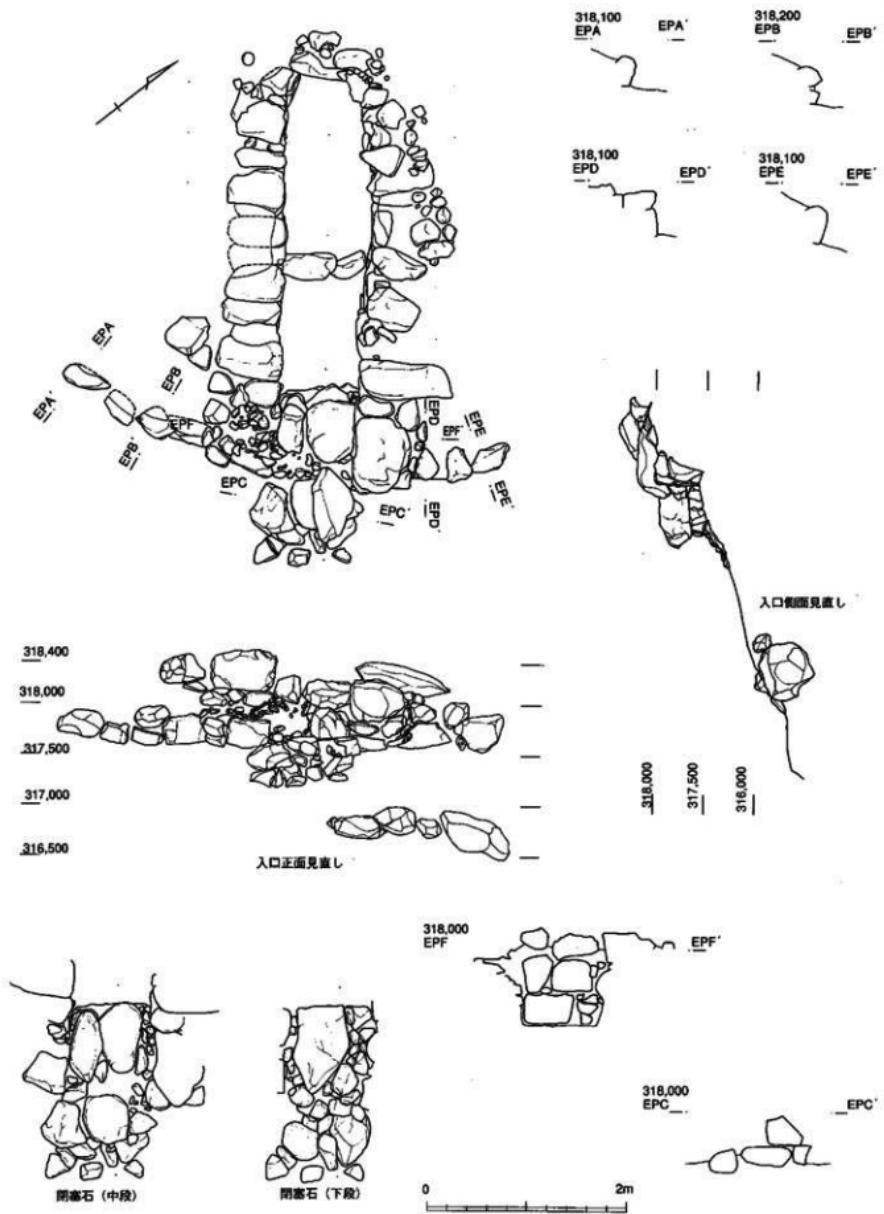
米倉山B-3号墳石室平・断面図



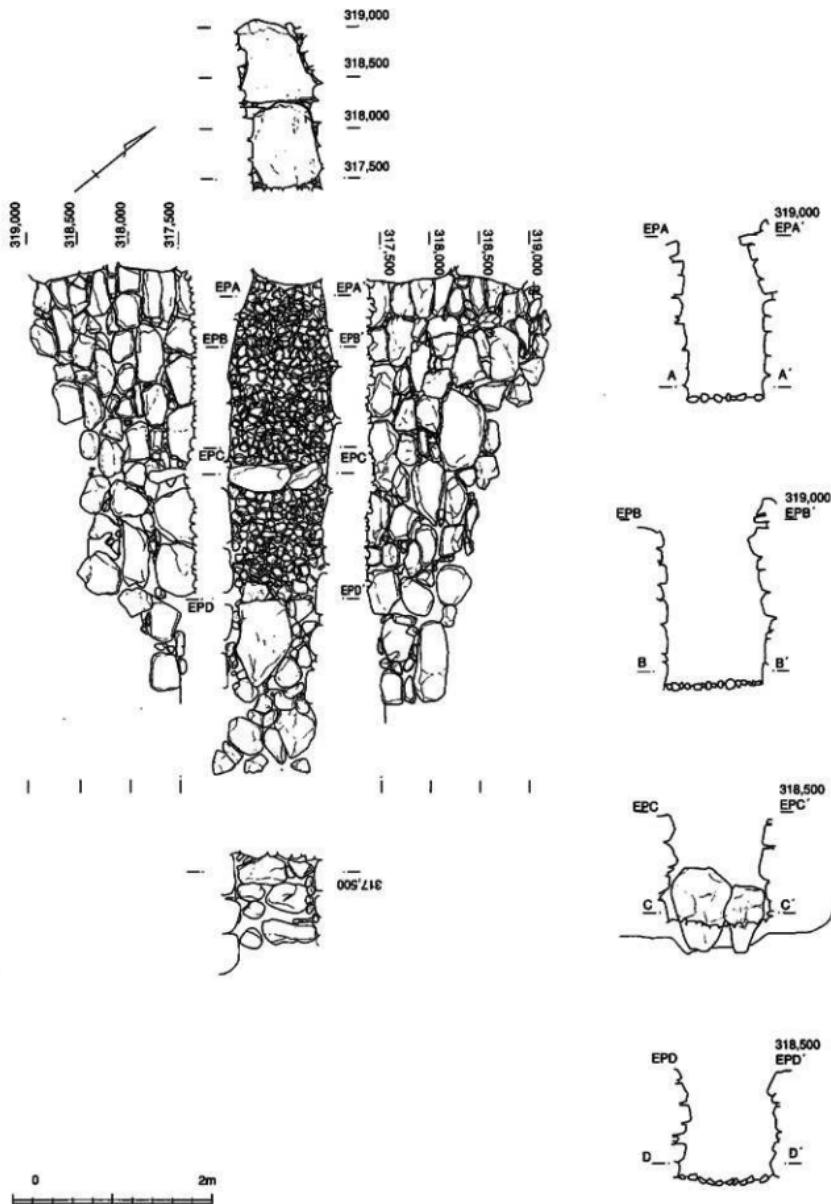
米倉山 B-2号墳石室掘方平・断面図



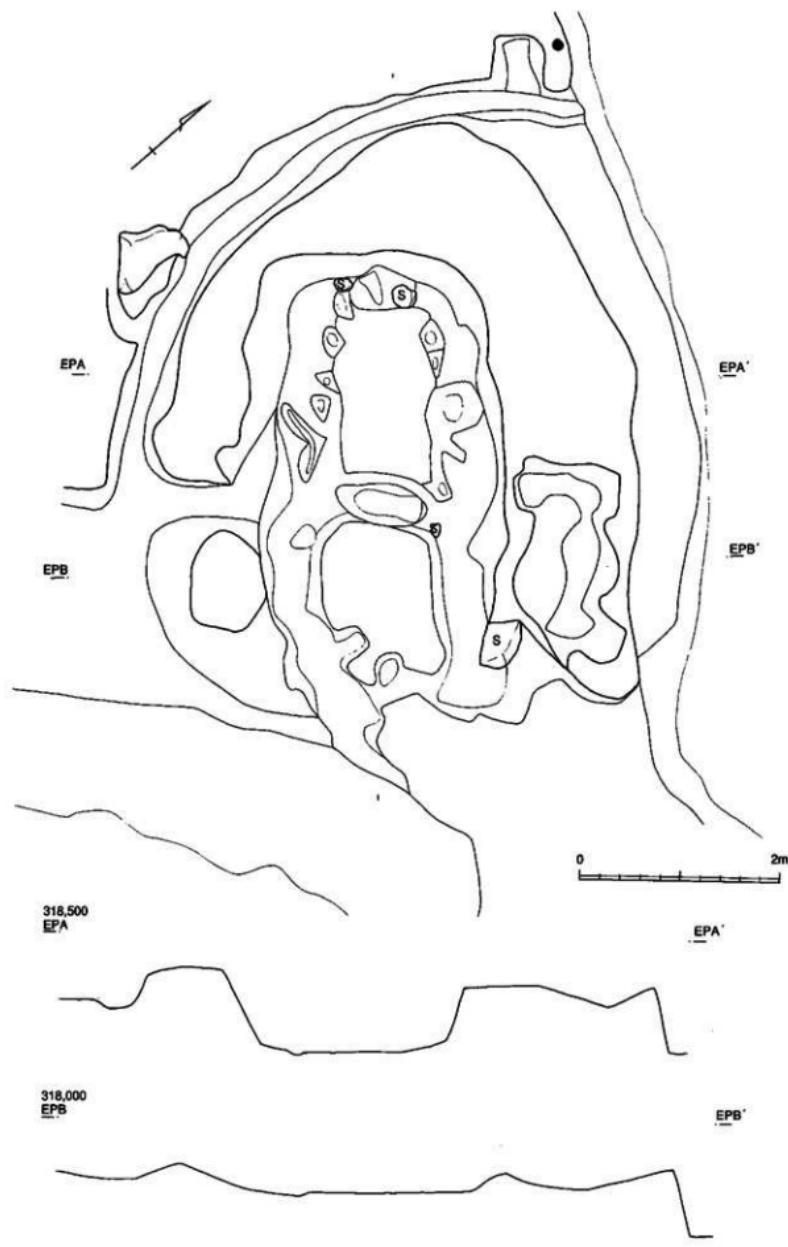
くちやあ塚古墳墳丘平面図及び断面図



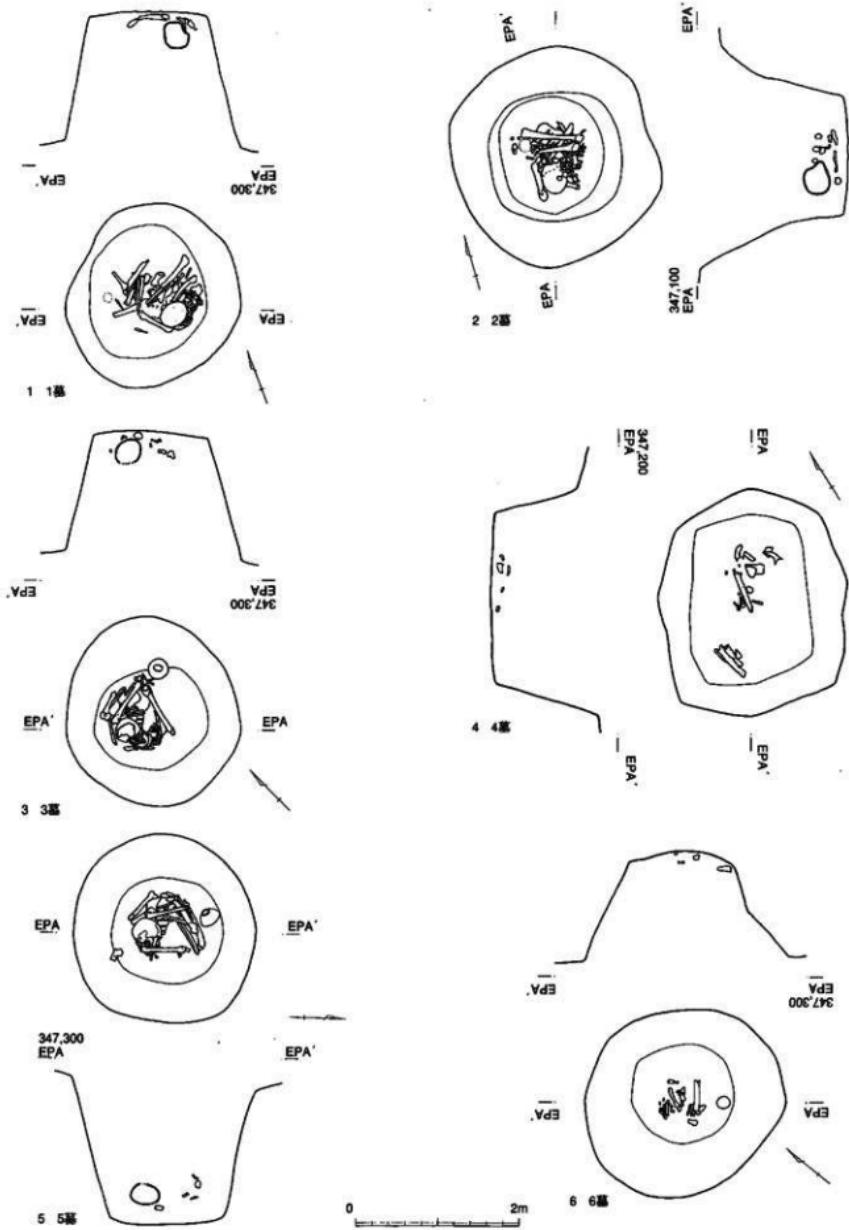
くちやあ塚古墳石室平面図、正面見直し図

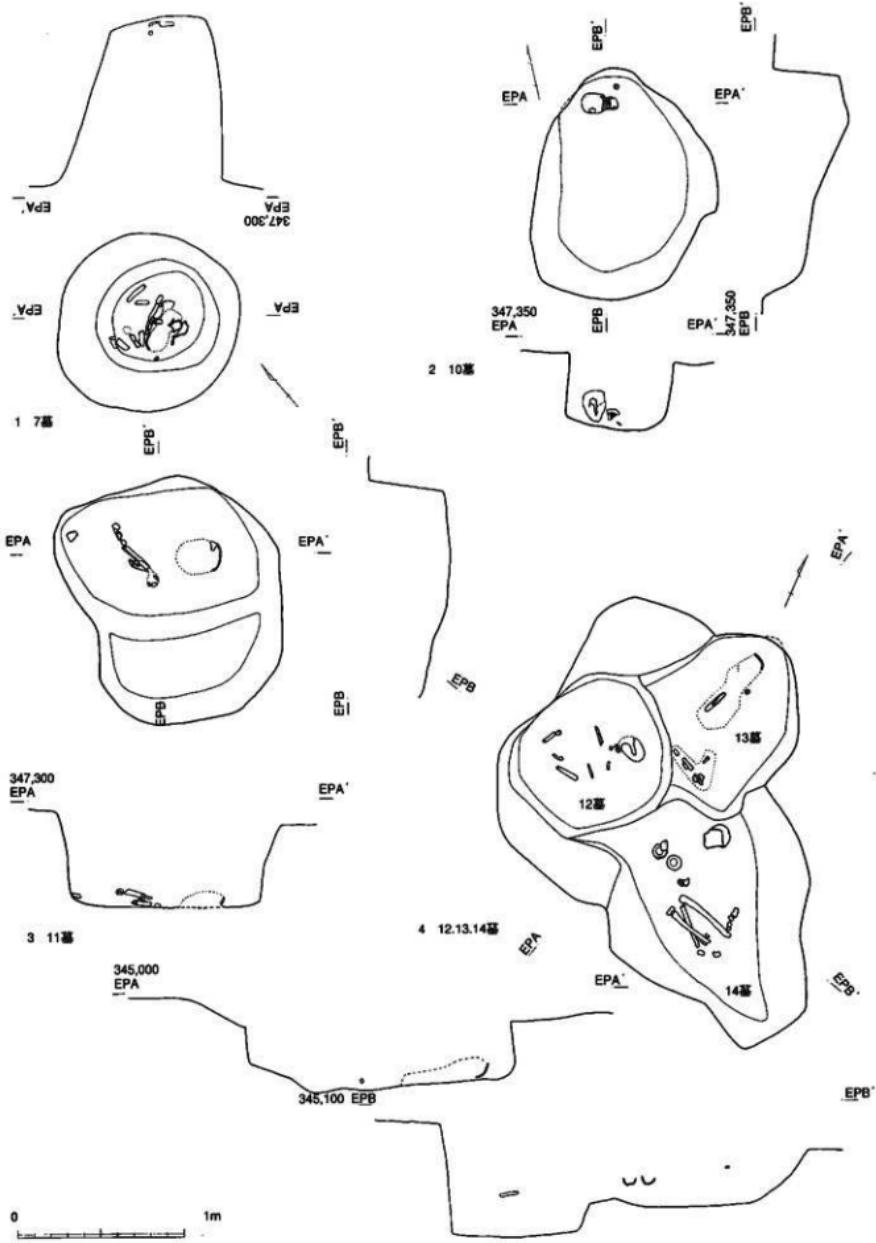


くちやあ塚古墳石室展開図

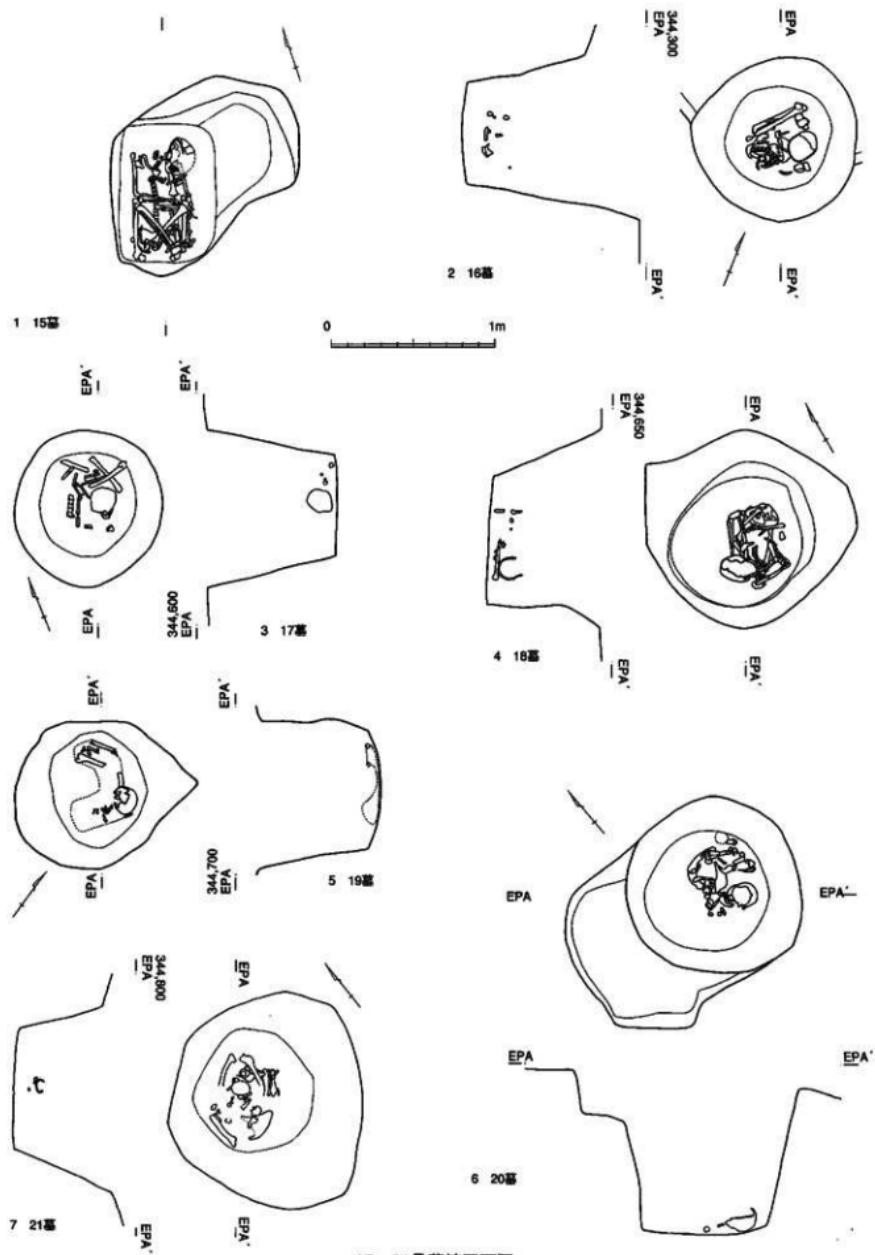


くちやあ塚古墳石室掘方平・断面図

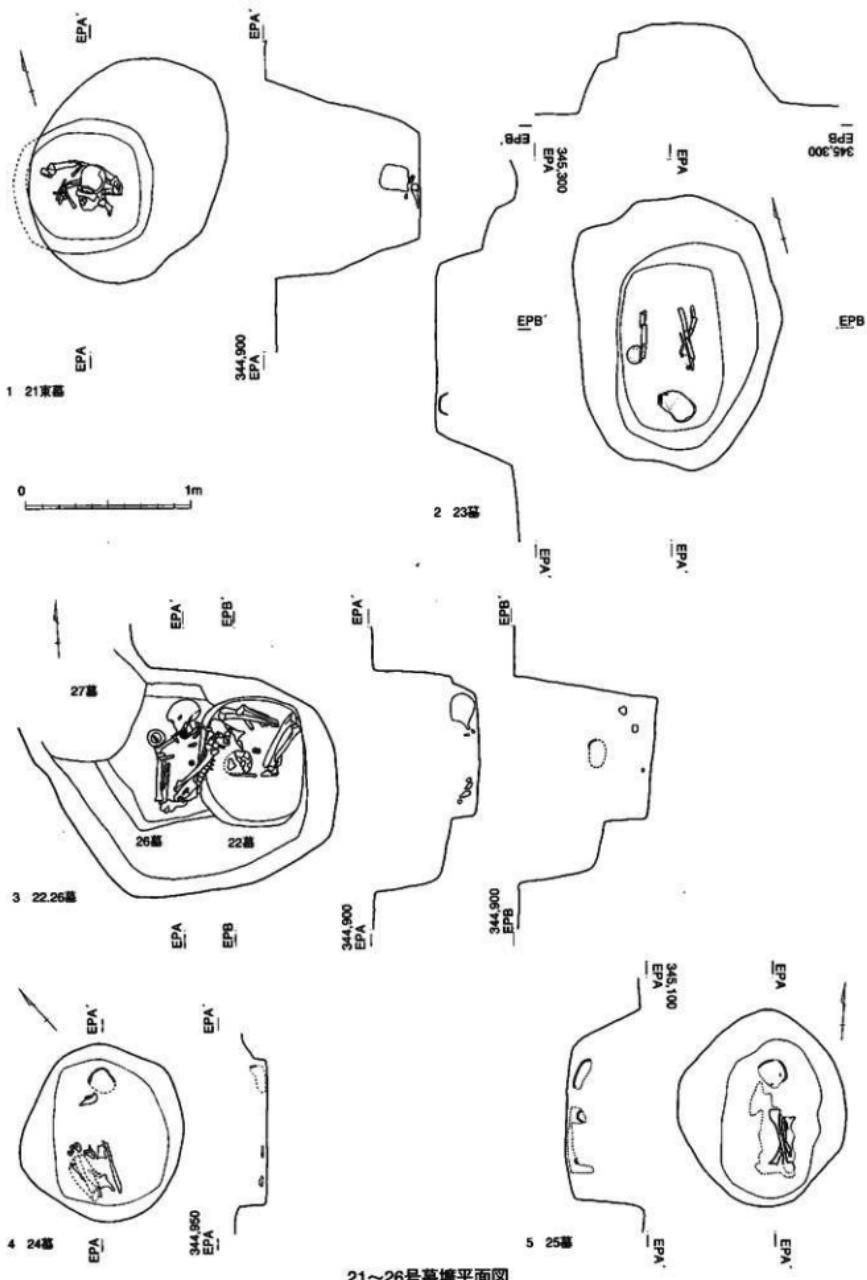




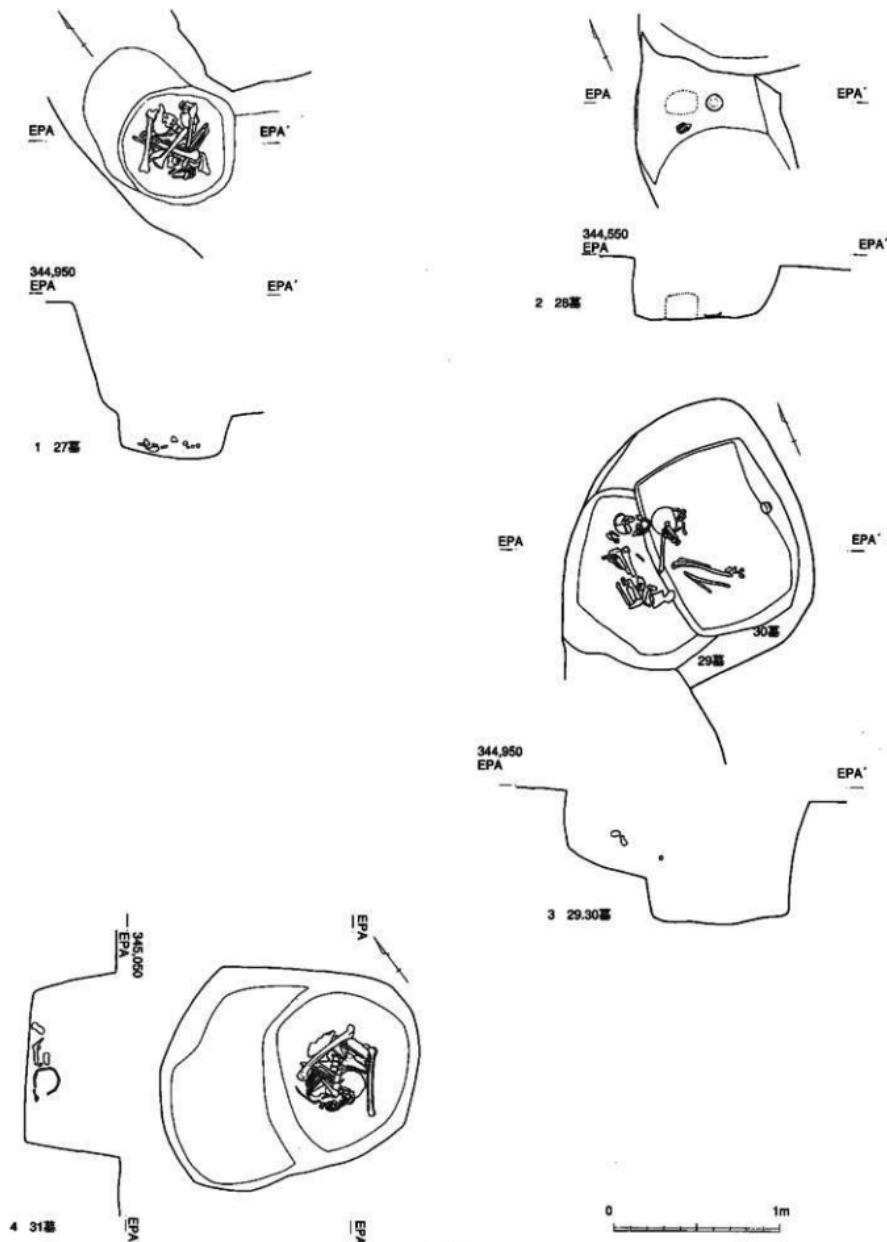
7、10~14号墓墳平面図



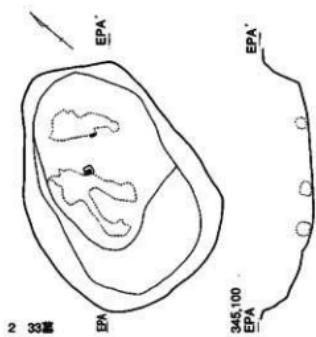
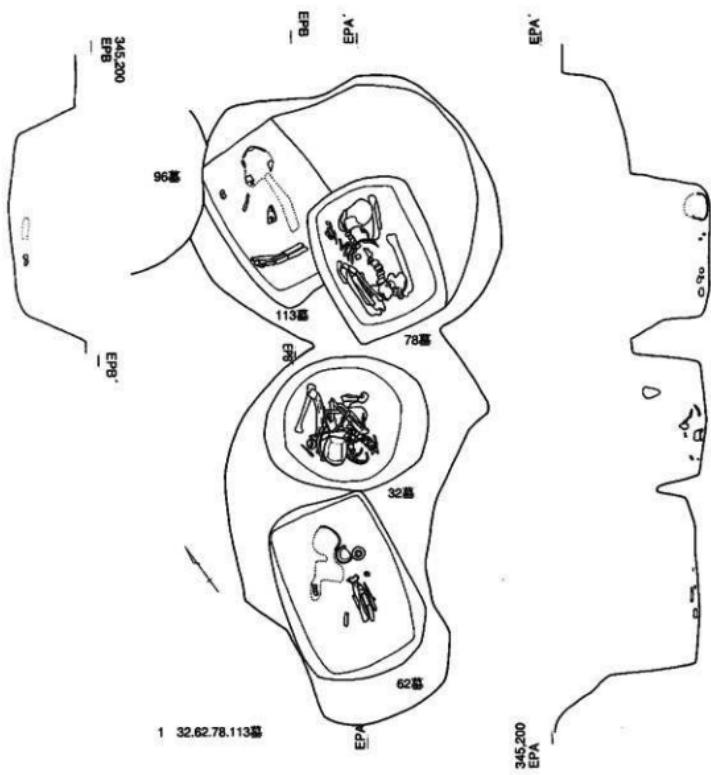
15~21号墓墳平面図



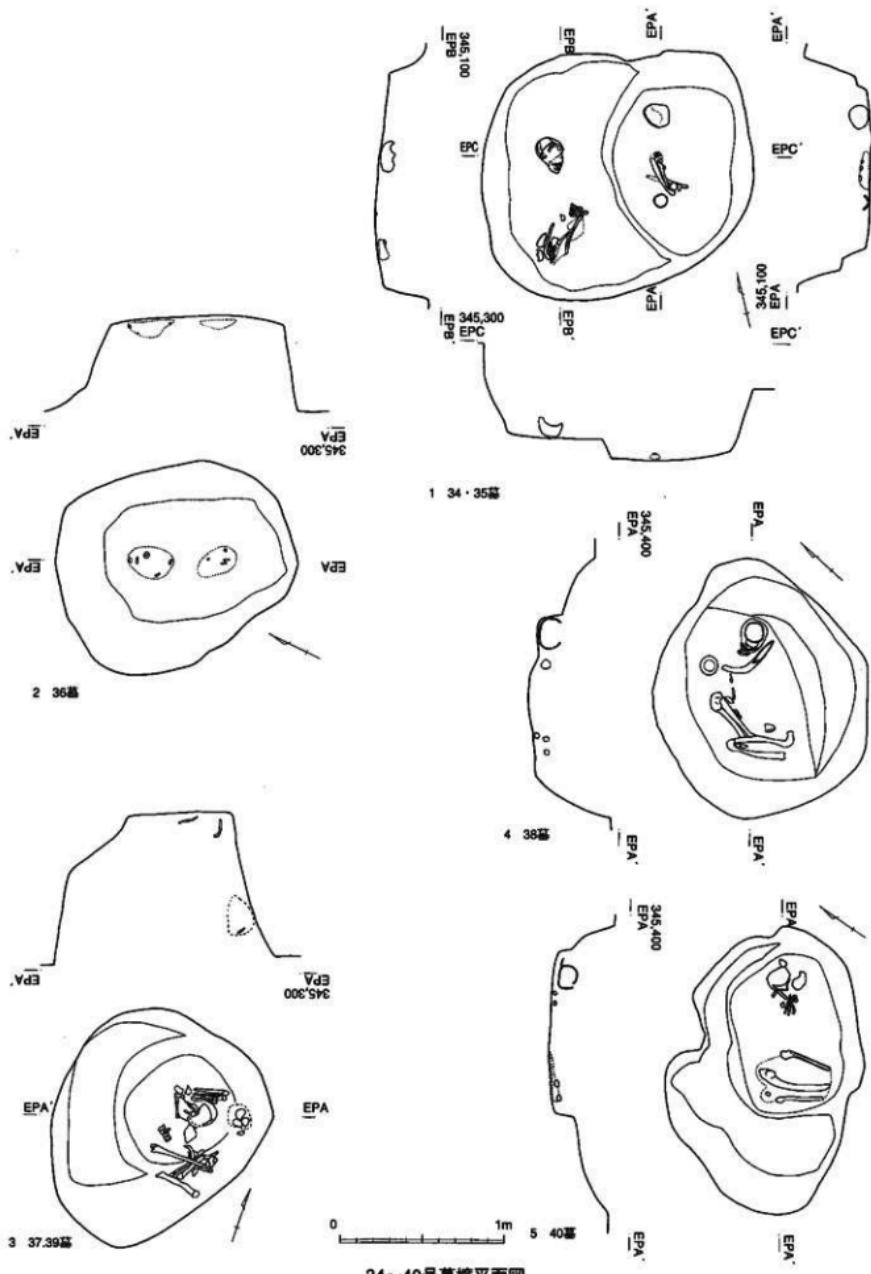
21~26号墓墳平面図



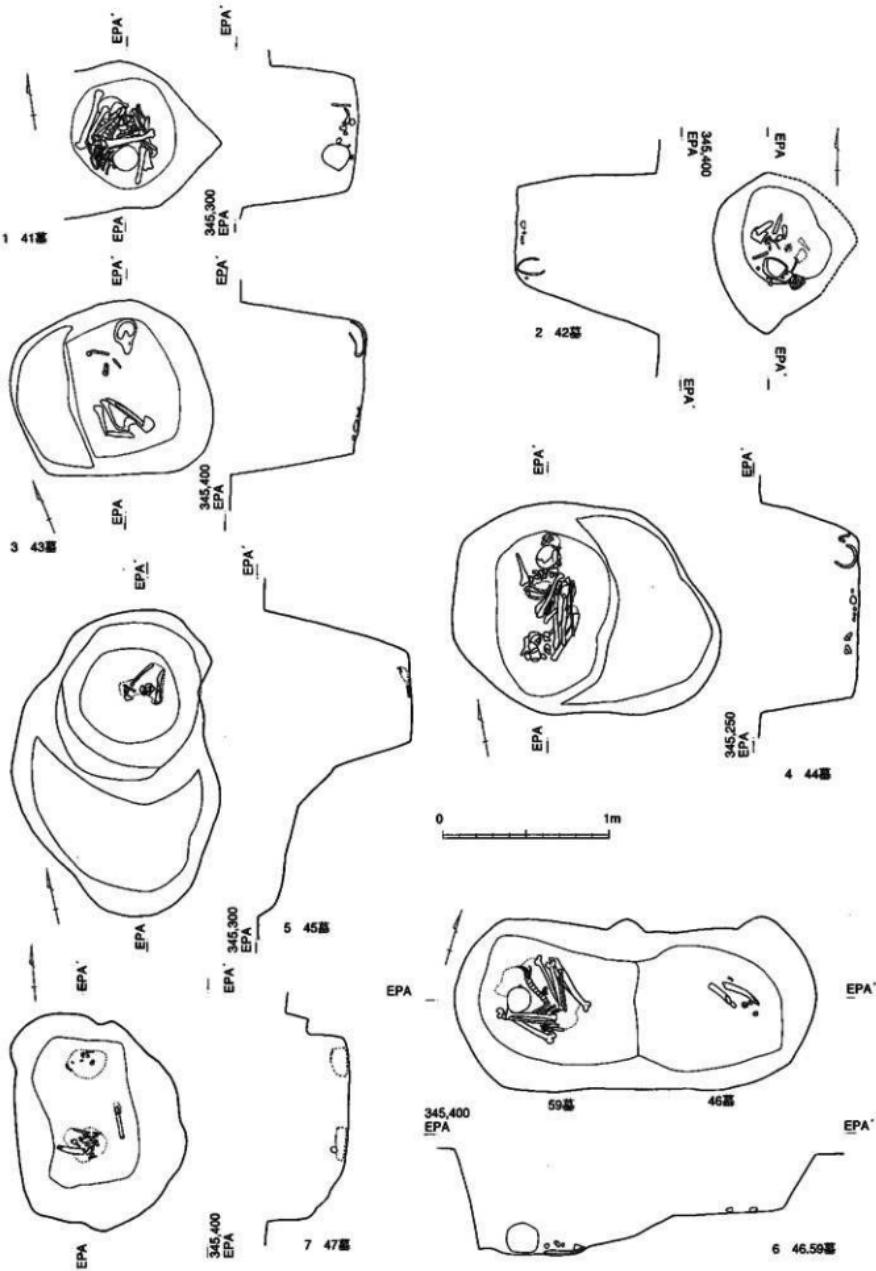
27~31号墓塚平面図



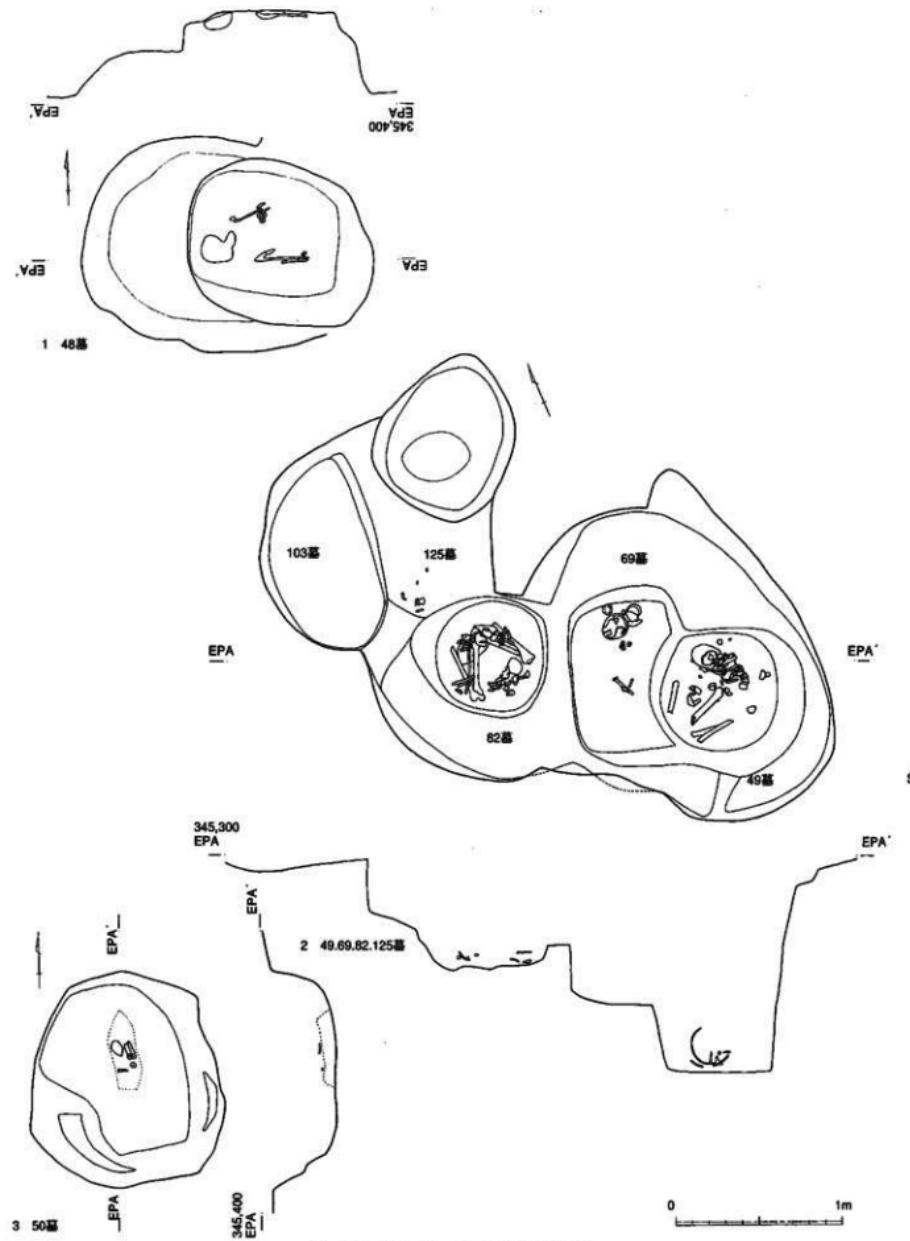
32・33・62・78・113号墓墳平面図



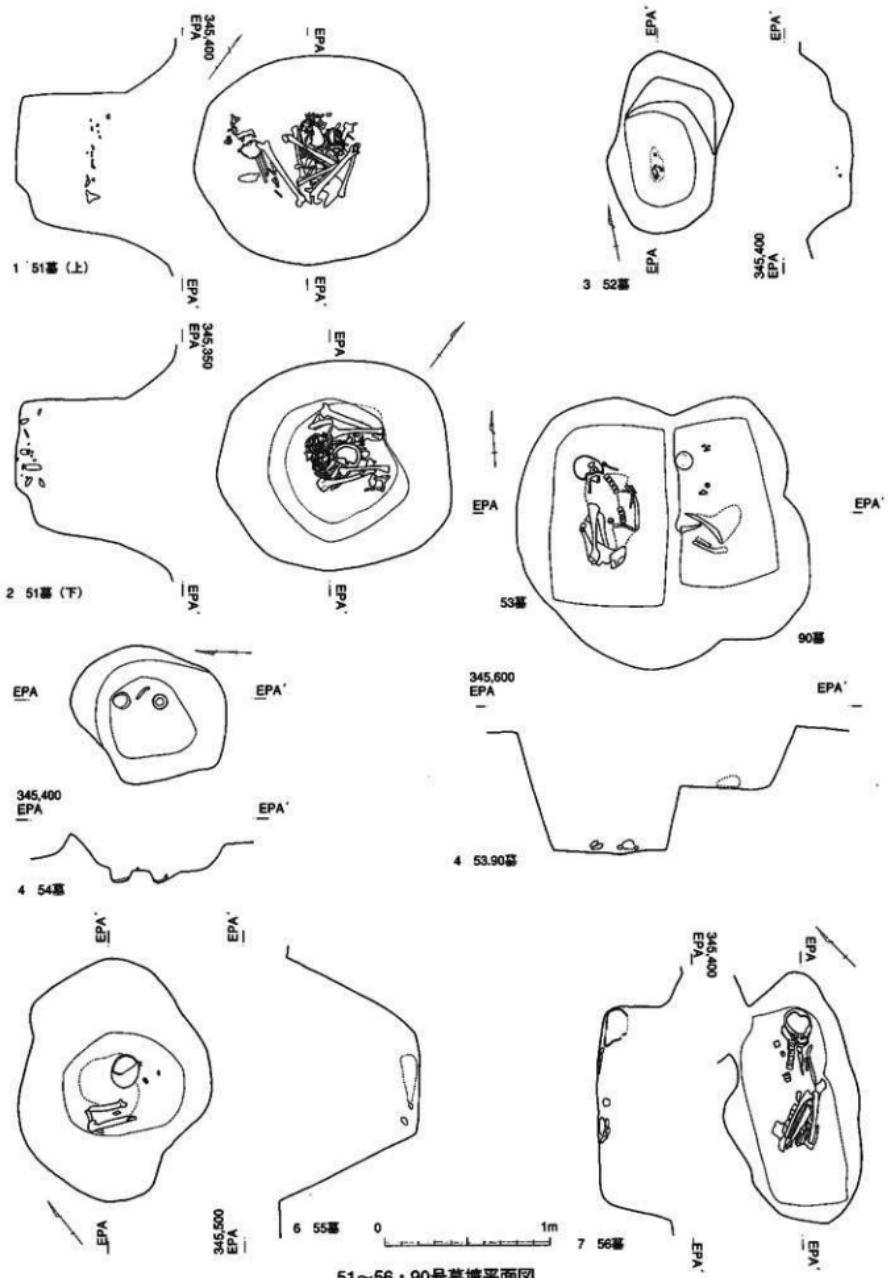
34~40号墓墳平面図



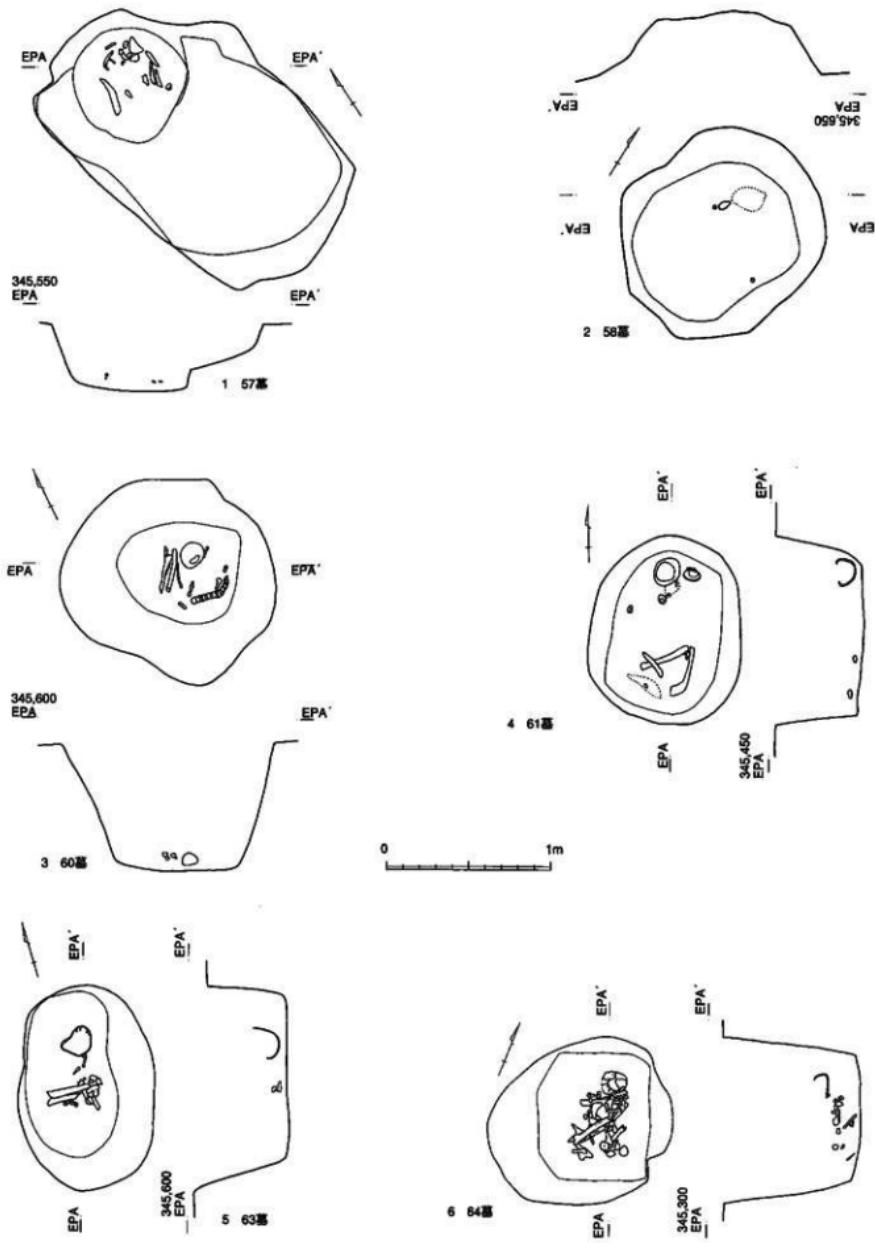
41~47・59号墓塚平面図



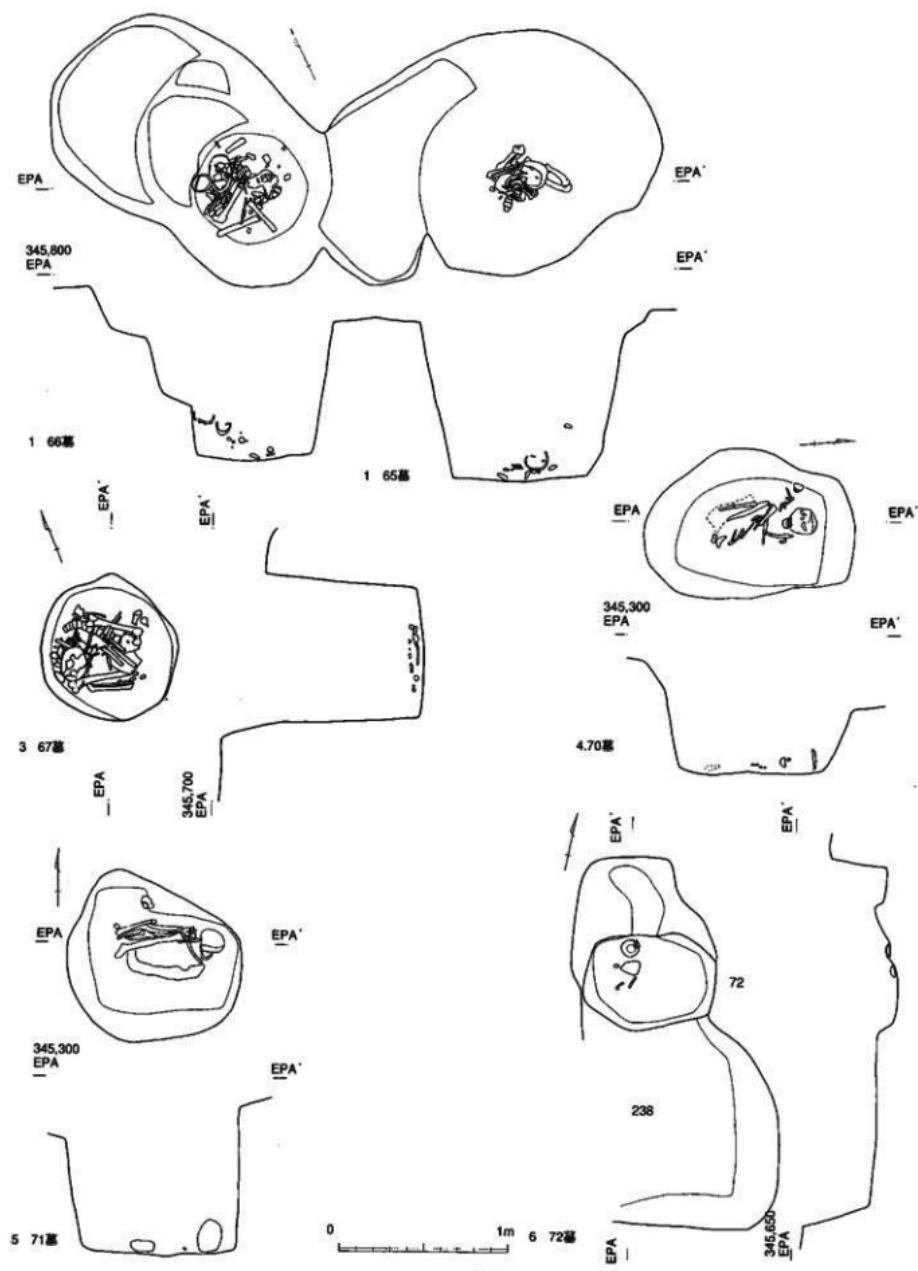
48~50·69·82·125号墓牆平面圖



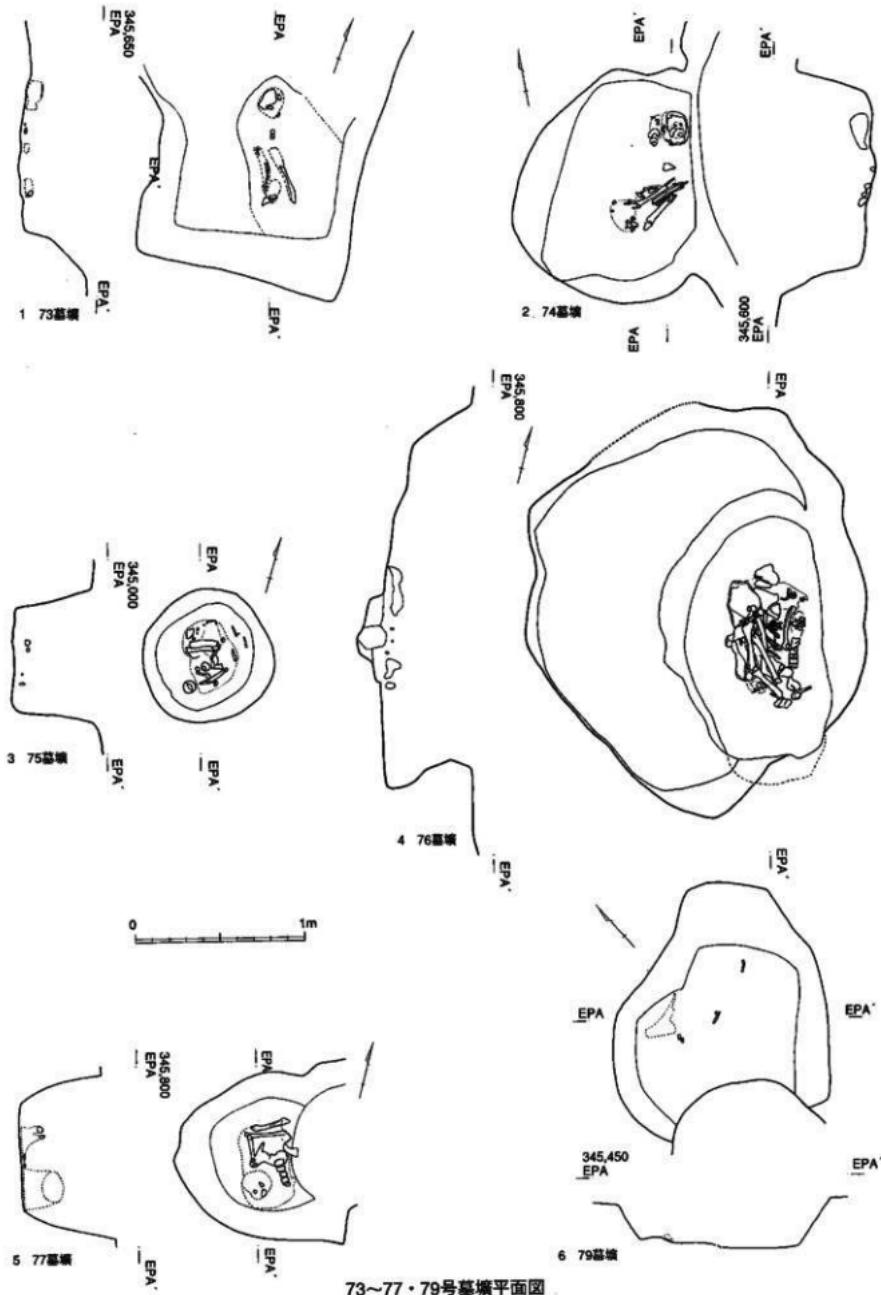
51~56 · 90号墓群平面図



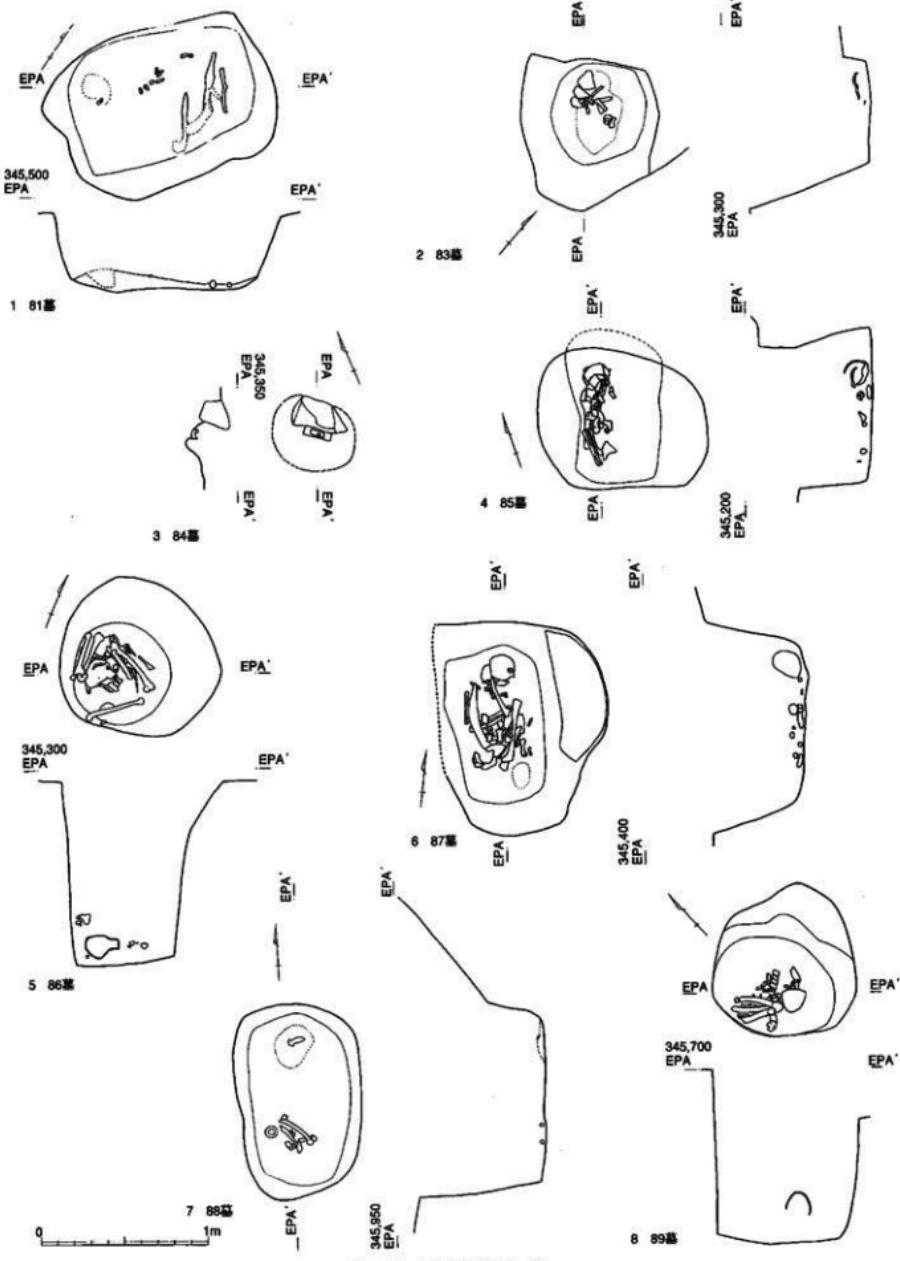
57~64号墓墳平面図



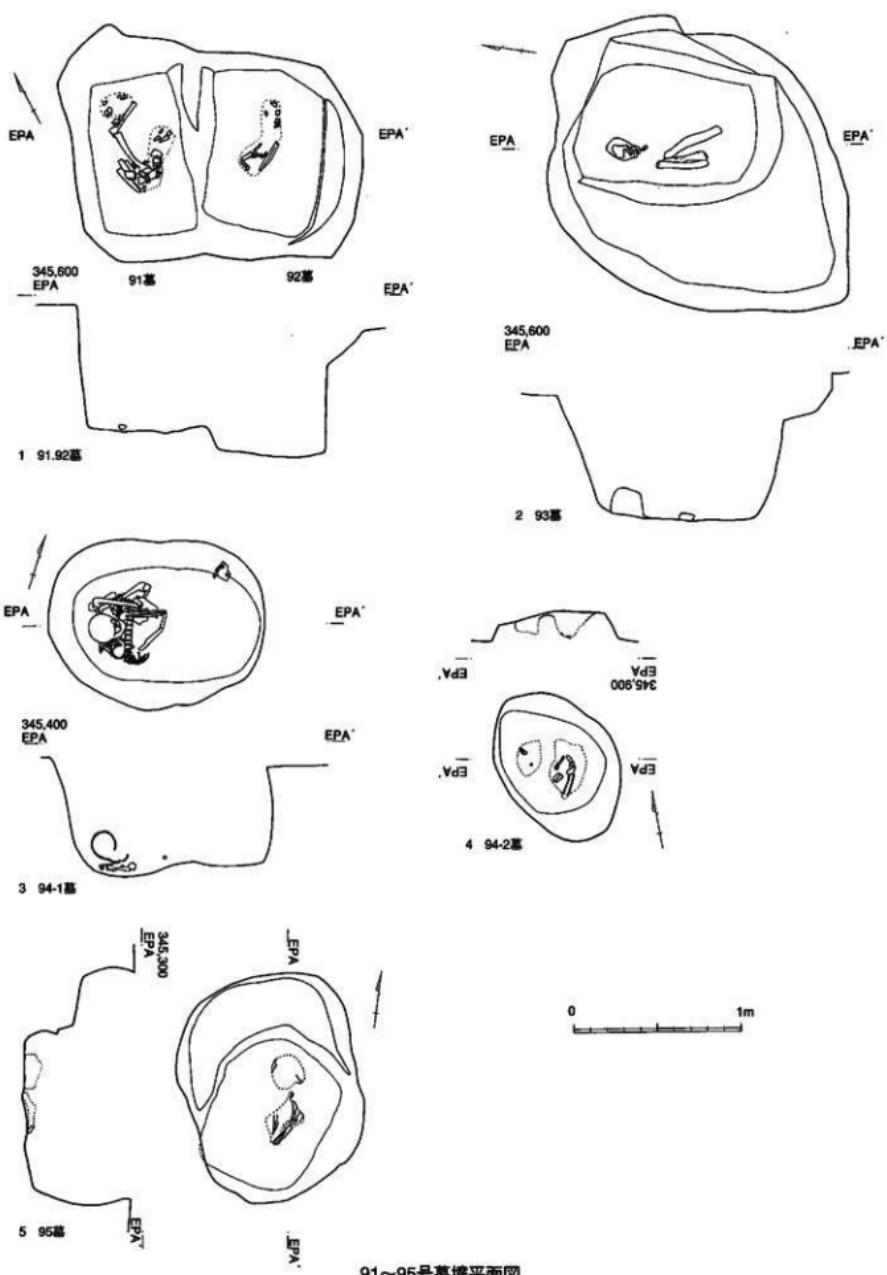
65~67・70~72号墓塚平面図



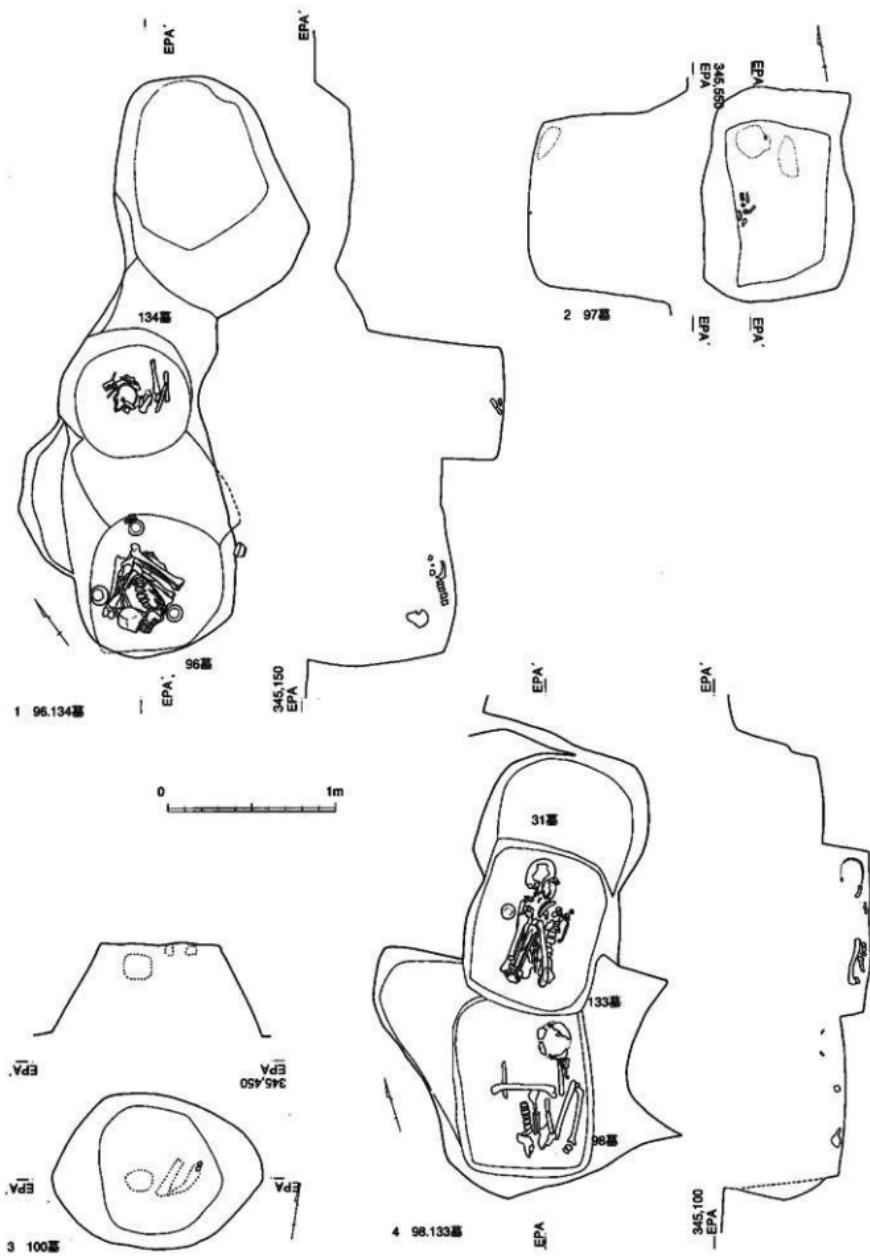
73~77・79号基塚平面図



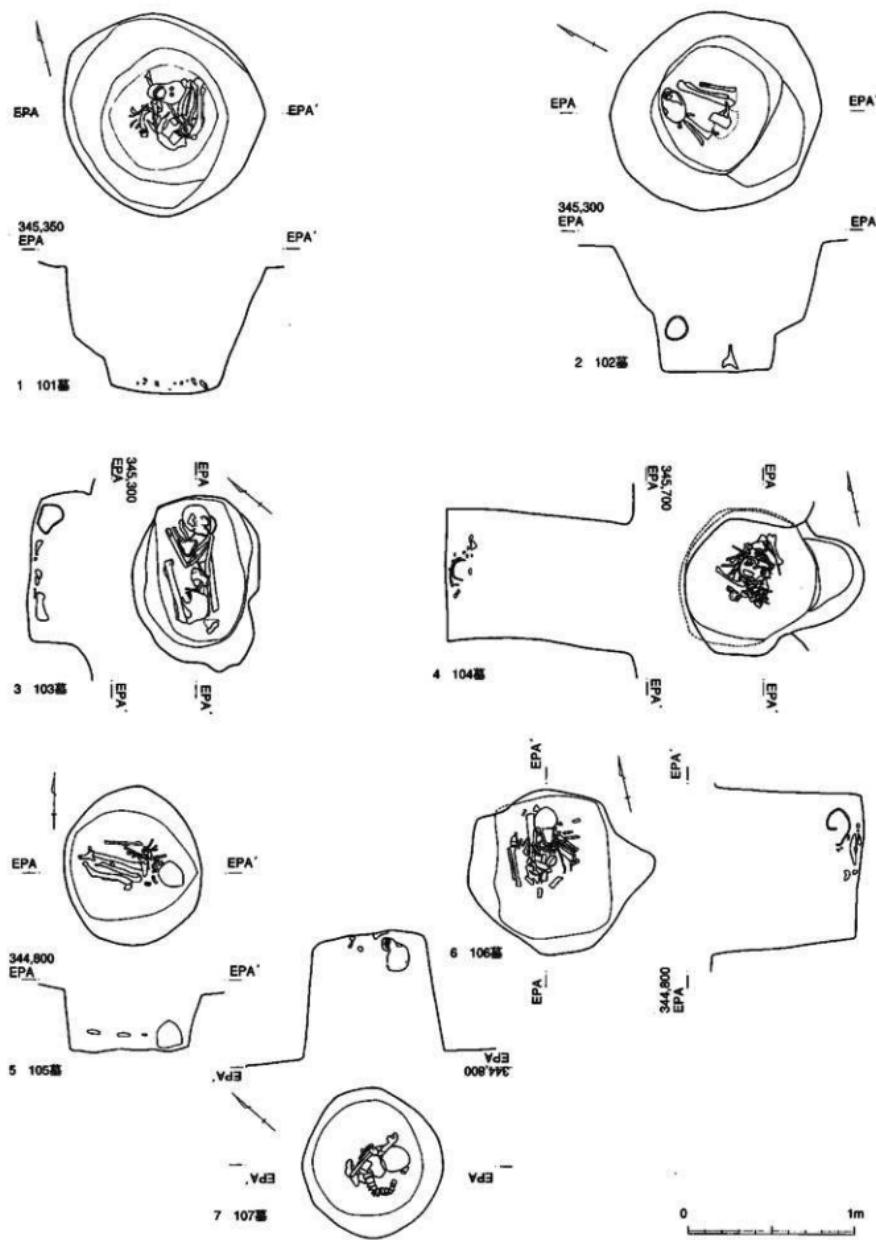
81・83～89号墓塚平面図



91~95号墓塚平面図

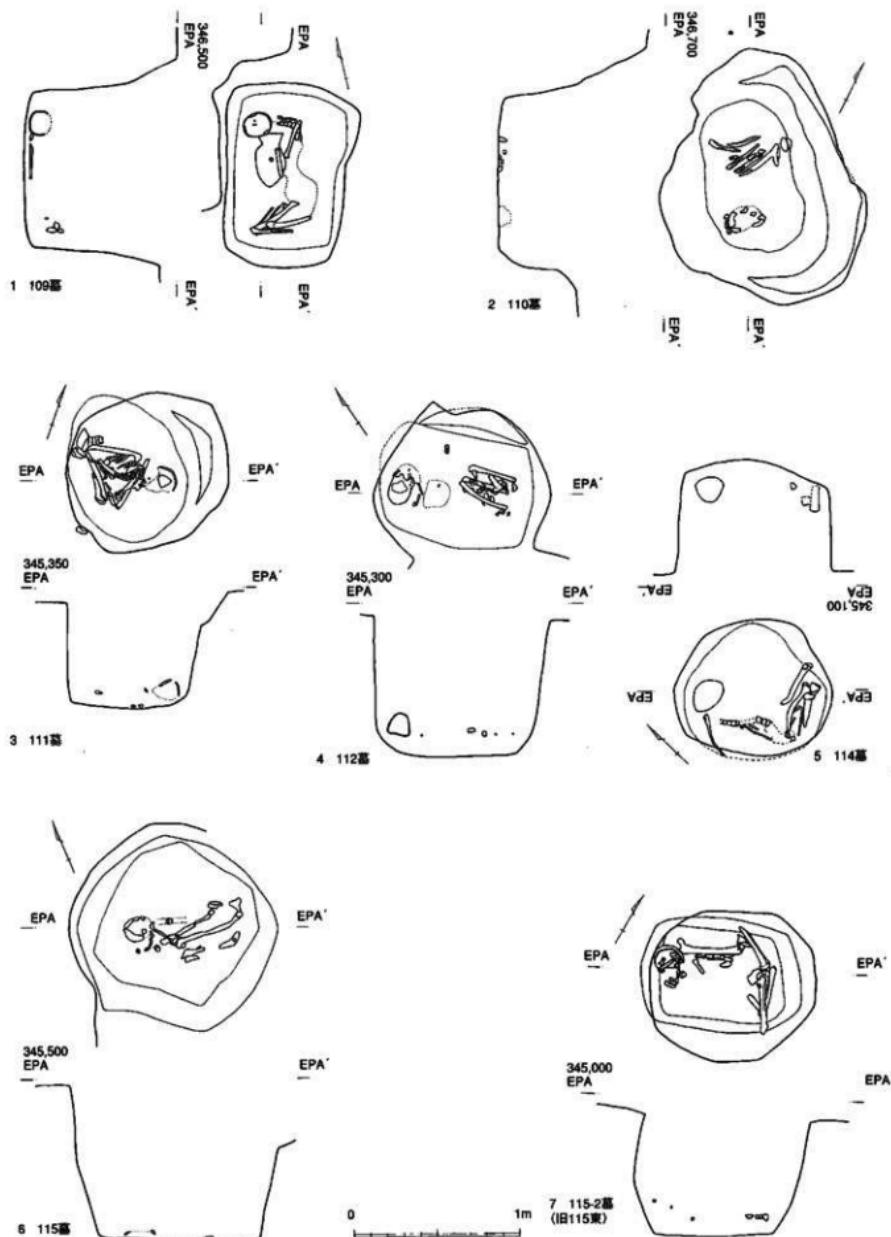


96~98·200·133·134号墓平面图

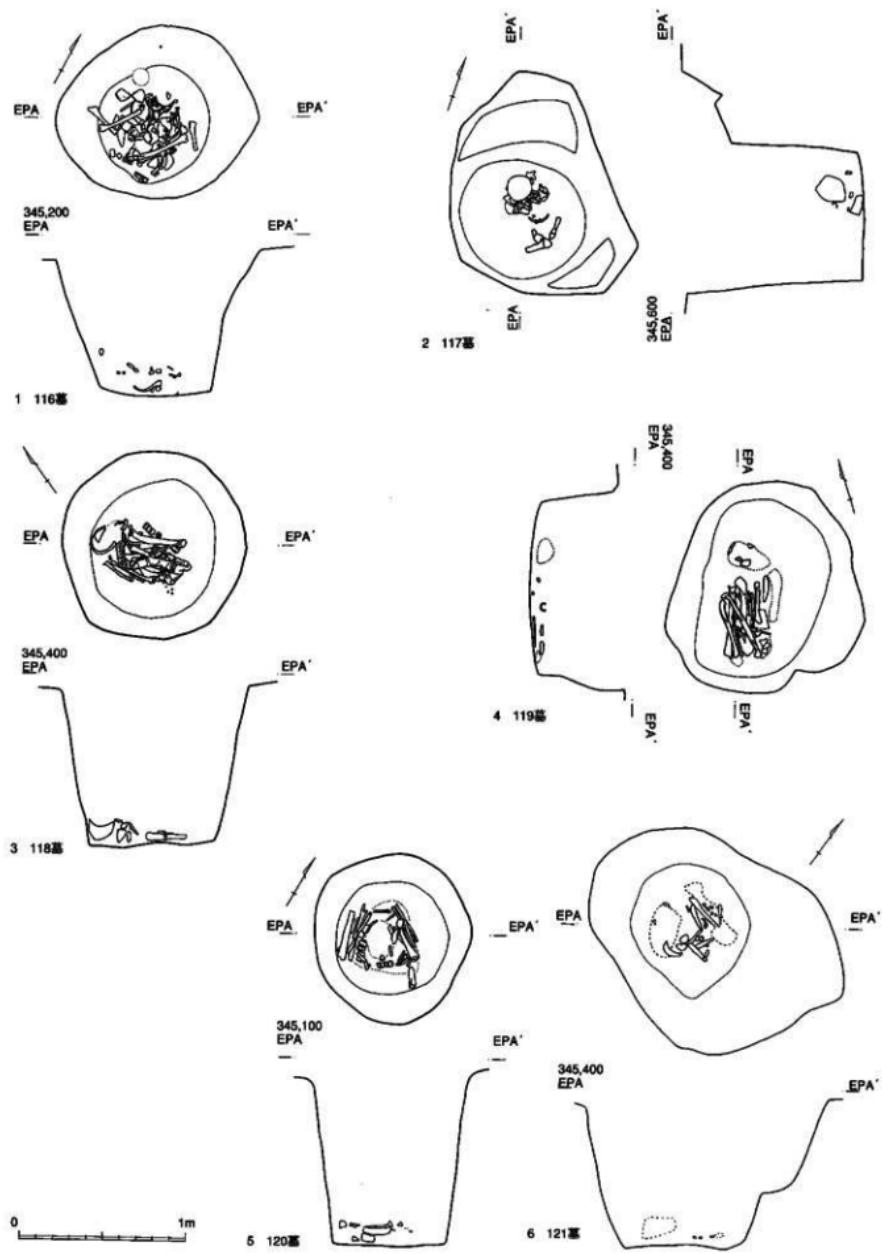


101~107号墓塋平面図

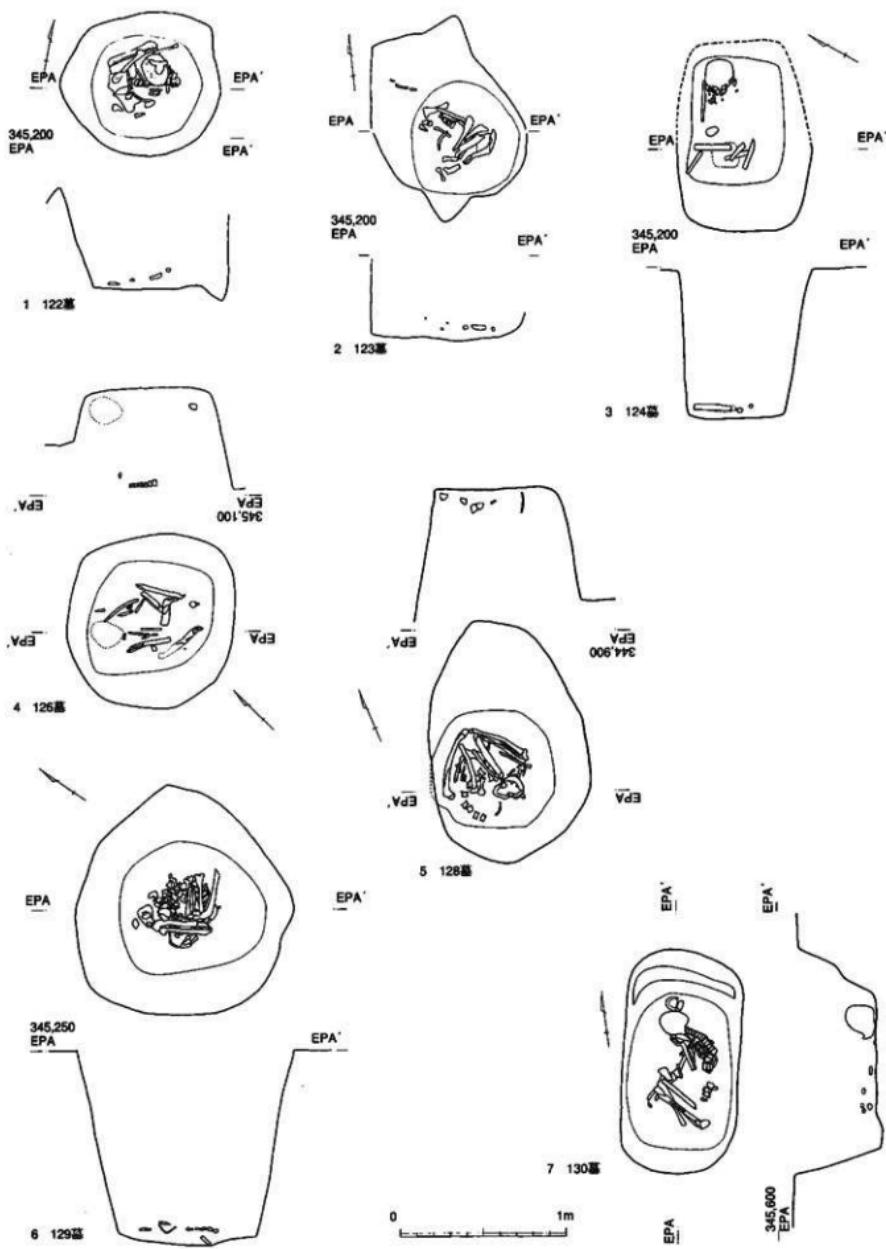
0 1m



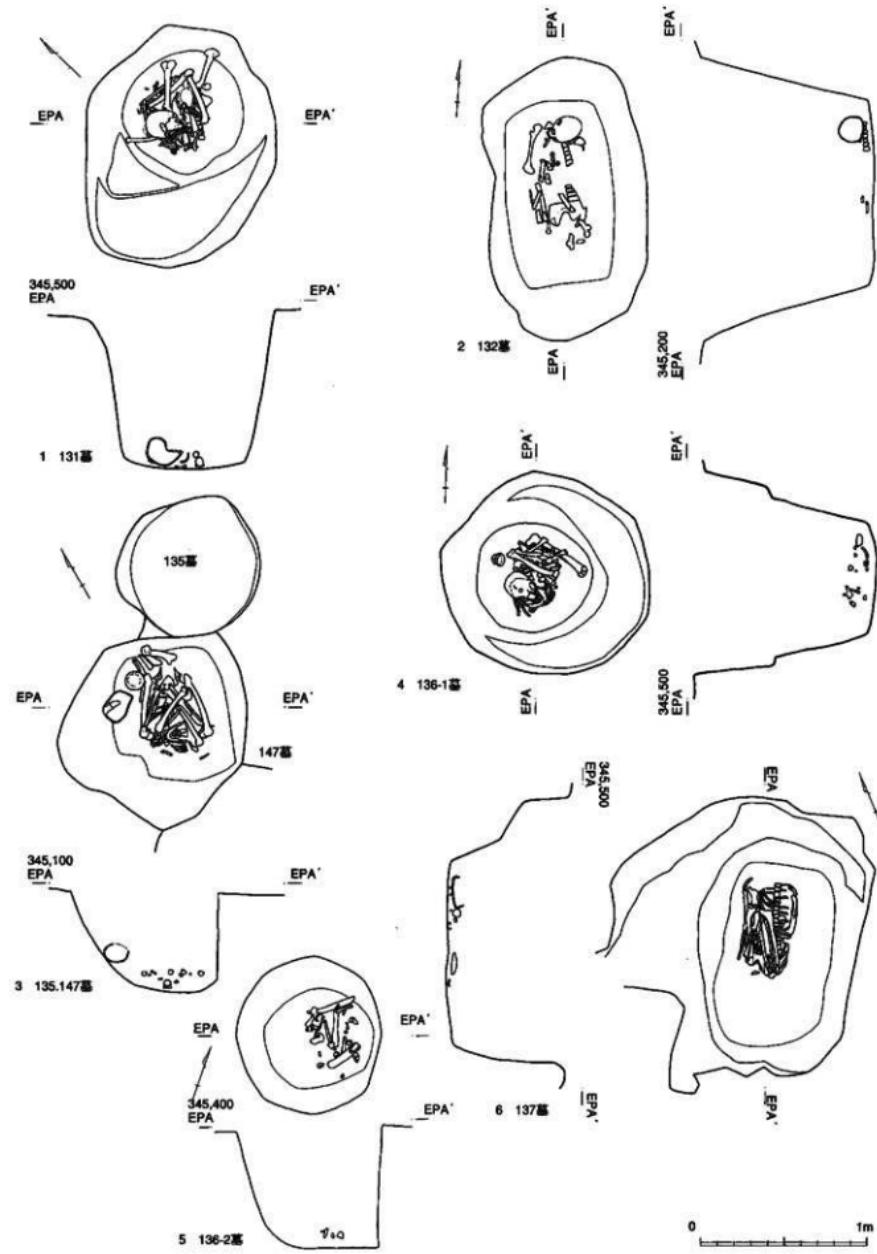
109~112・114・115・115-2号墓塚平面図



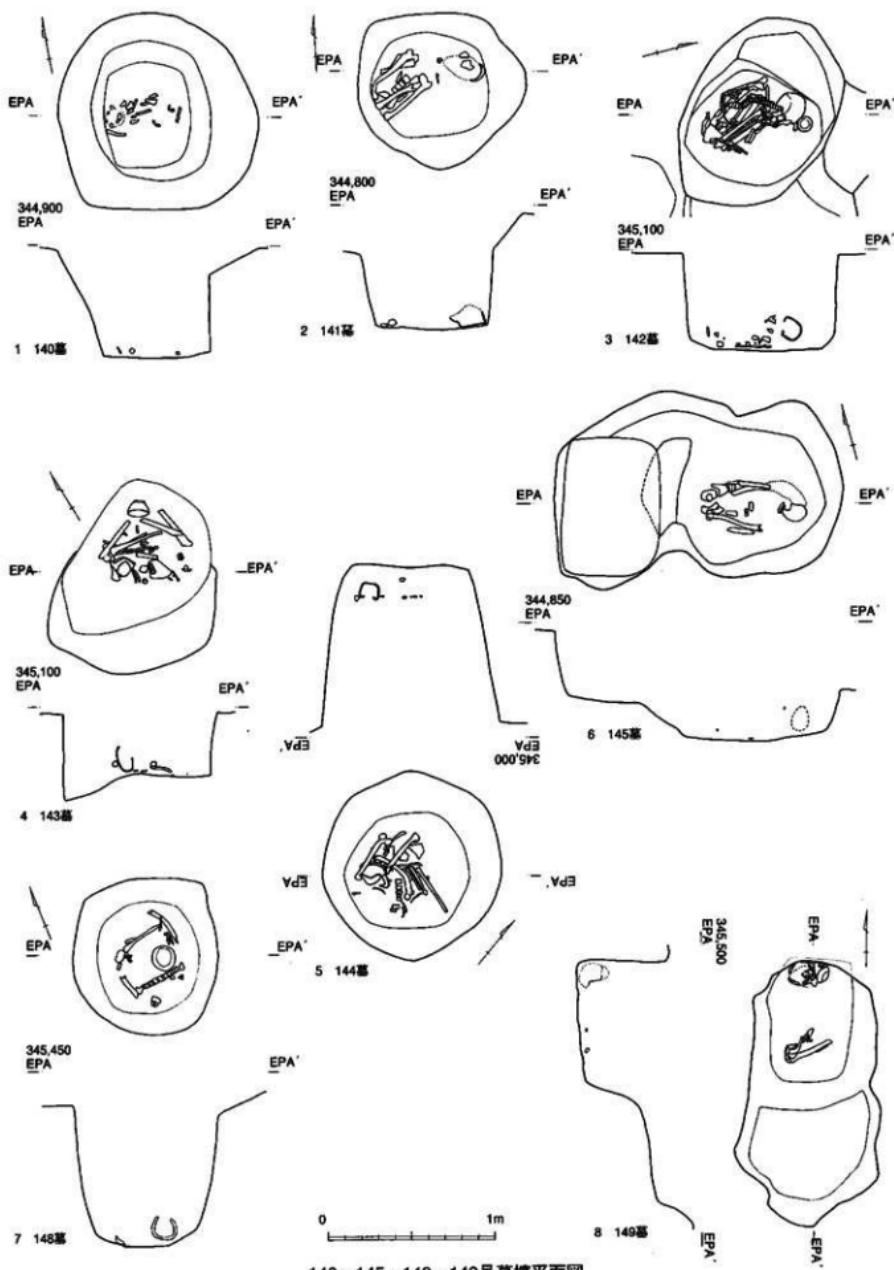
116~121号墓墳平面図



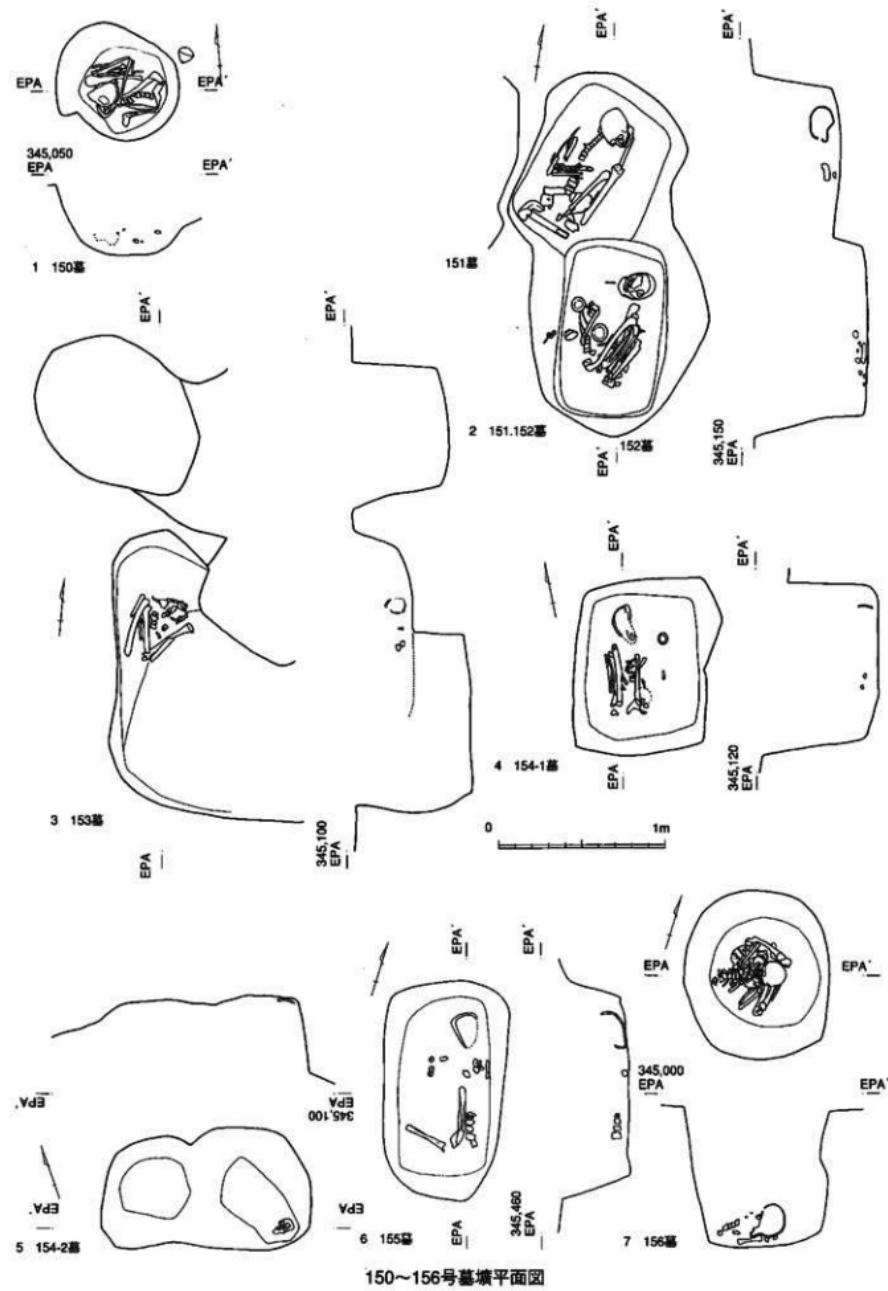
122~124・126・128~130号墓塚平面図



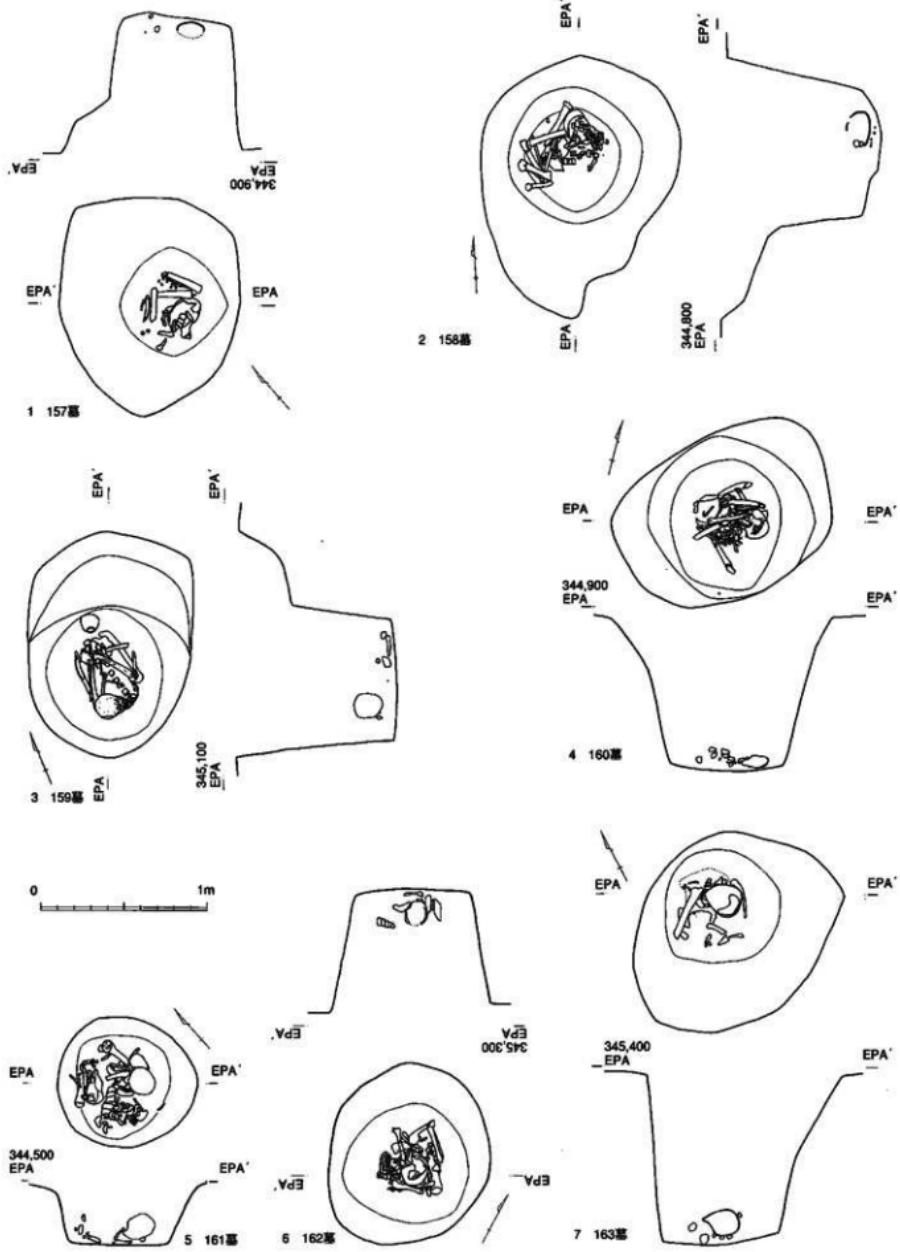
131~132・135~137・140号墓墳平面図



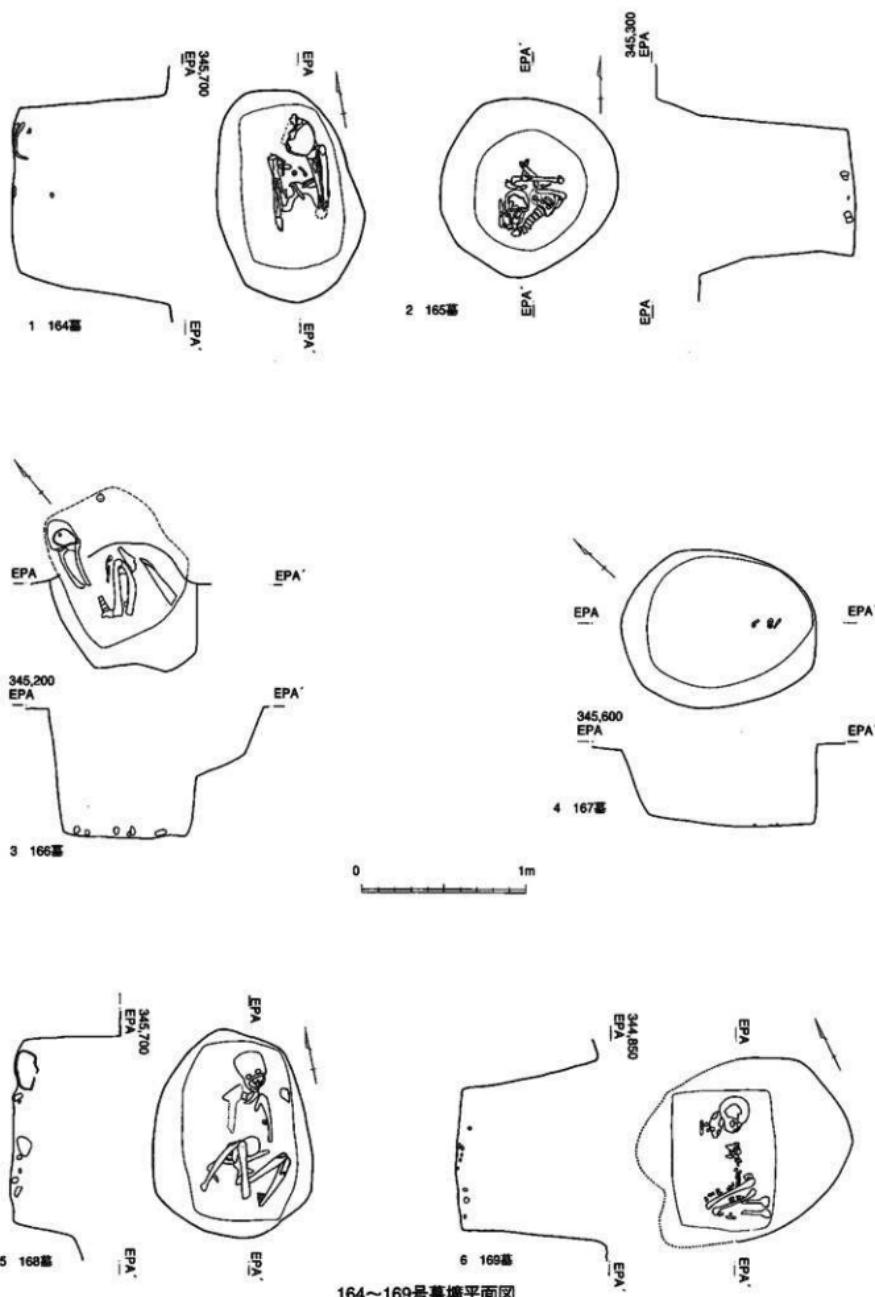
140~145・148~149号墓塚平面図



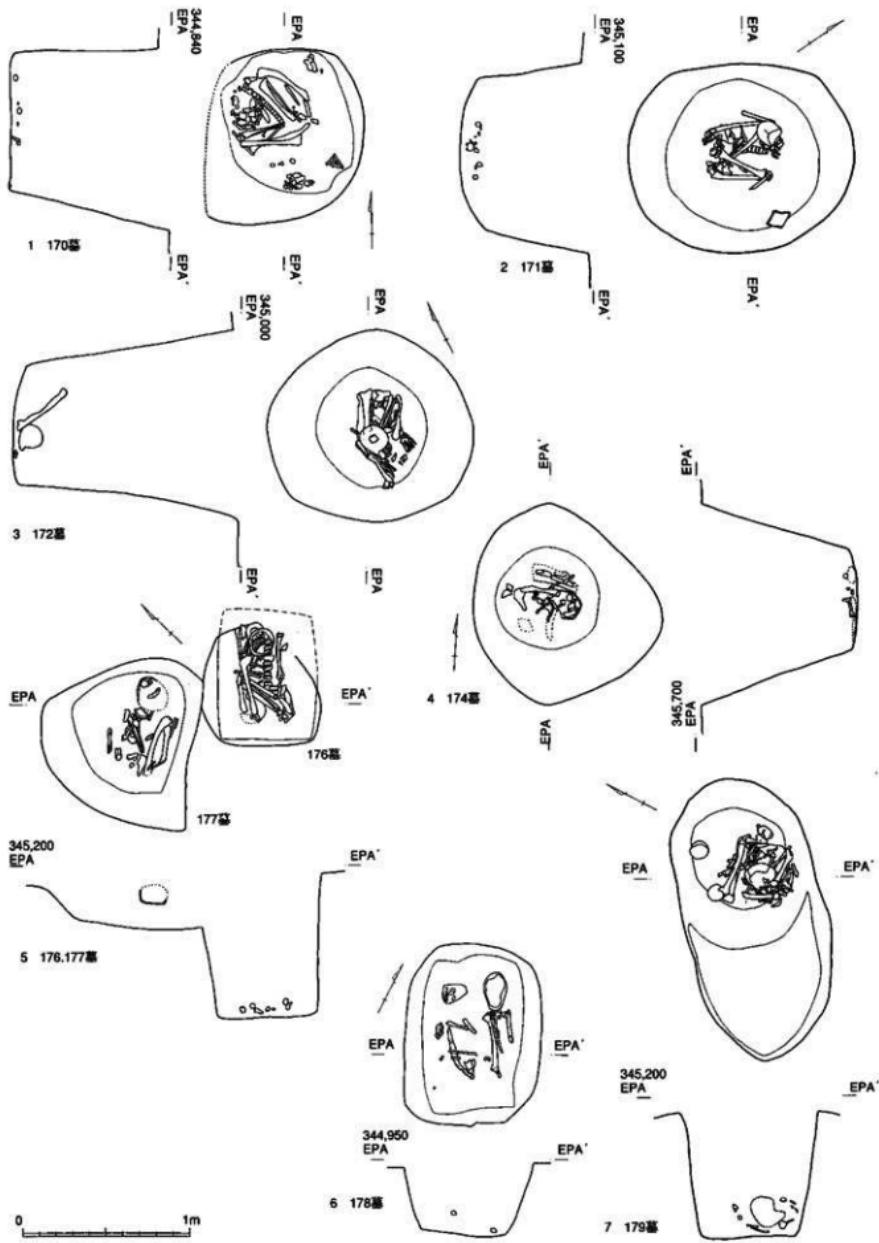
150~156号墓塙平面圖



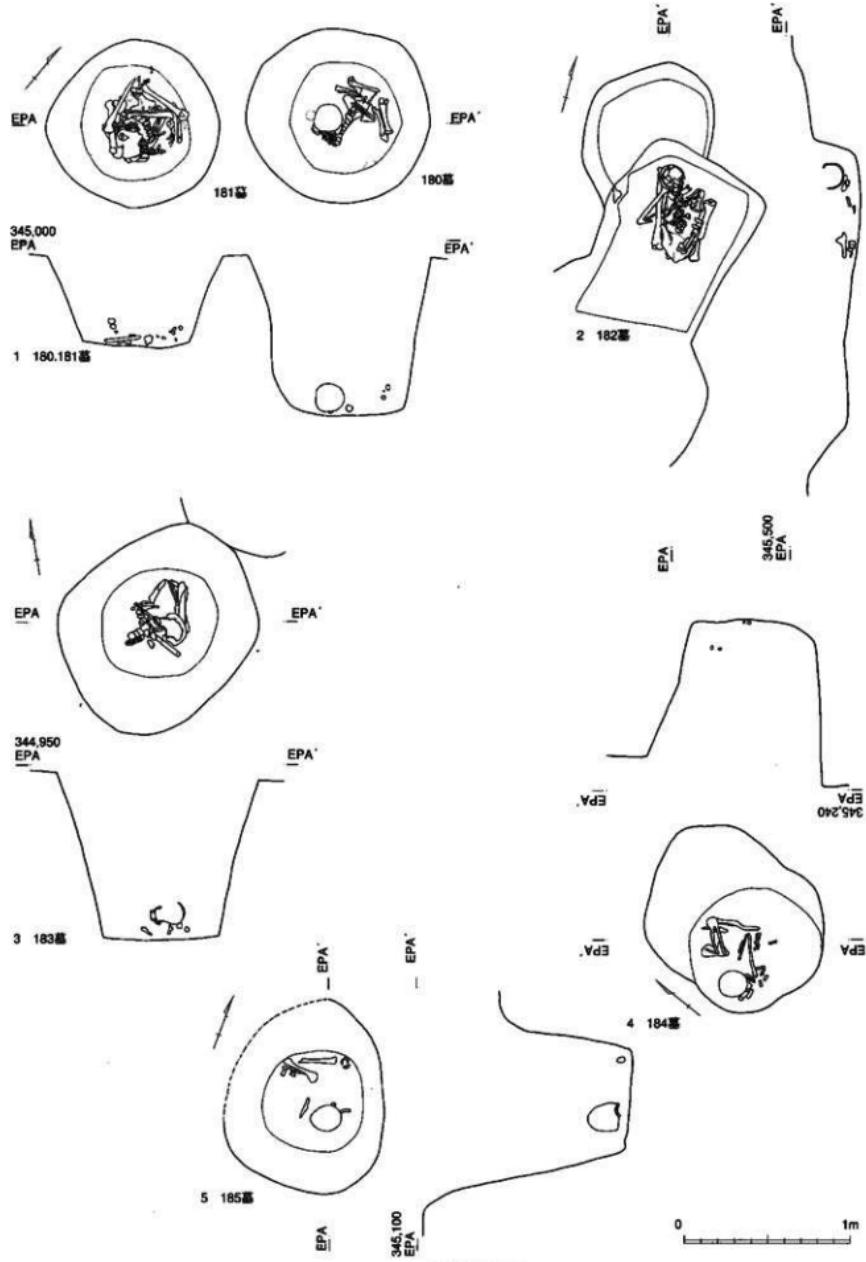
157~163号墓墳平面図



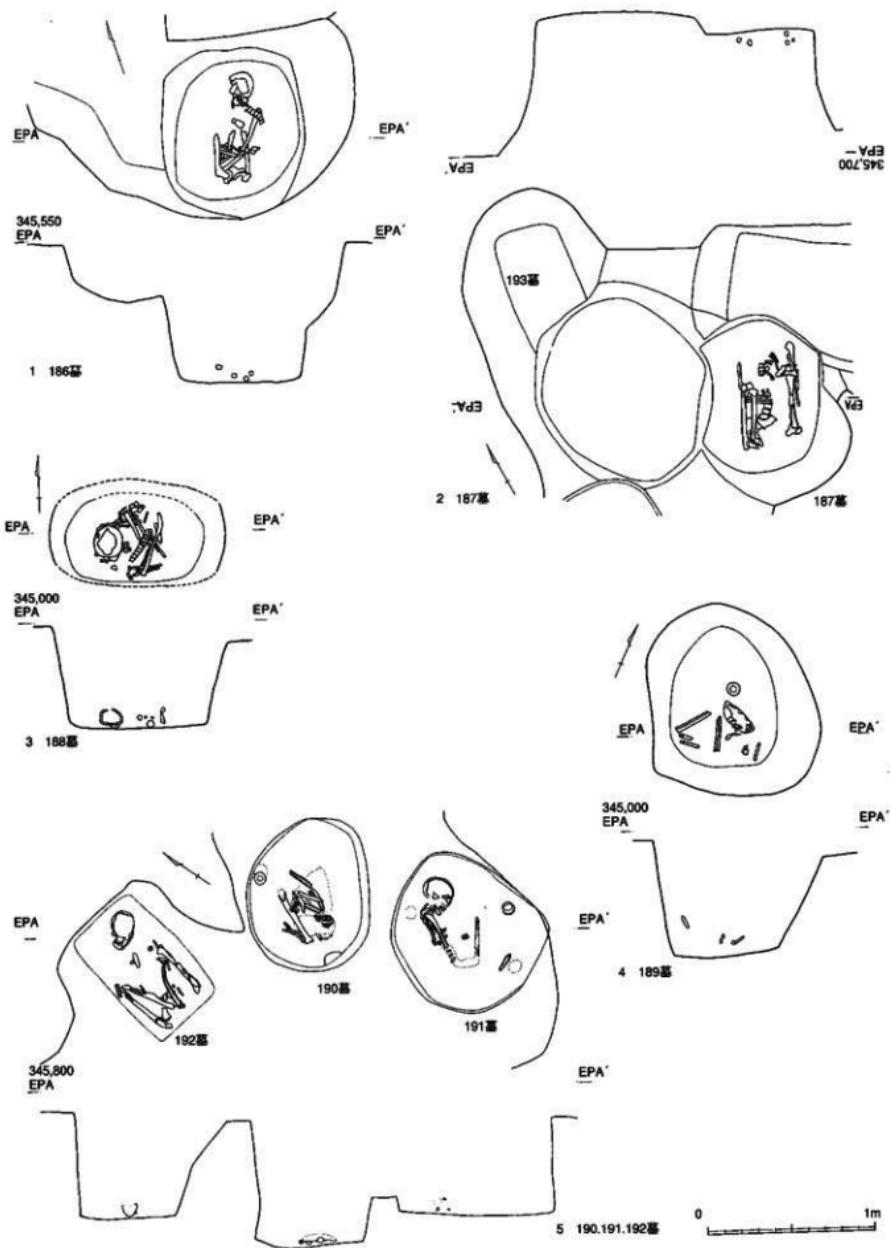
164~169号墓壇平面図



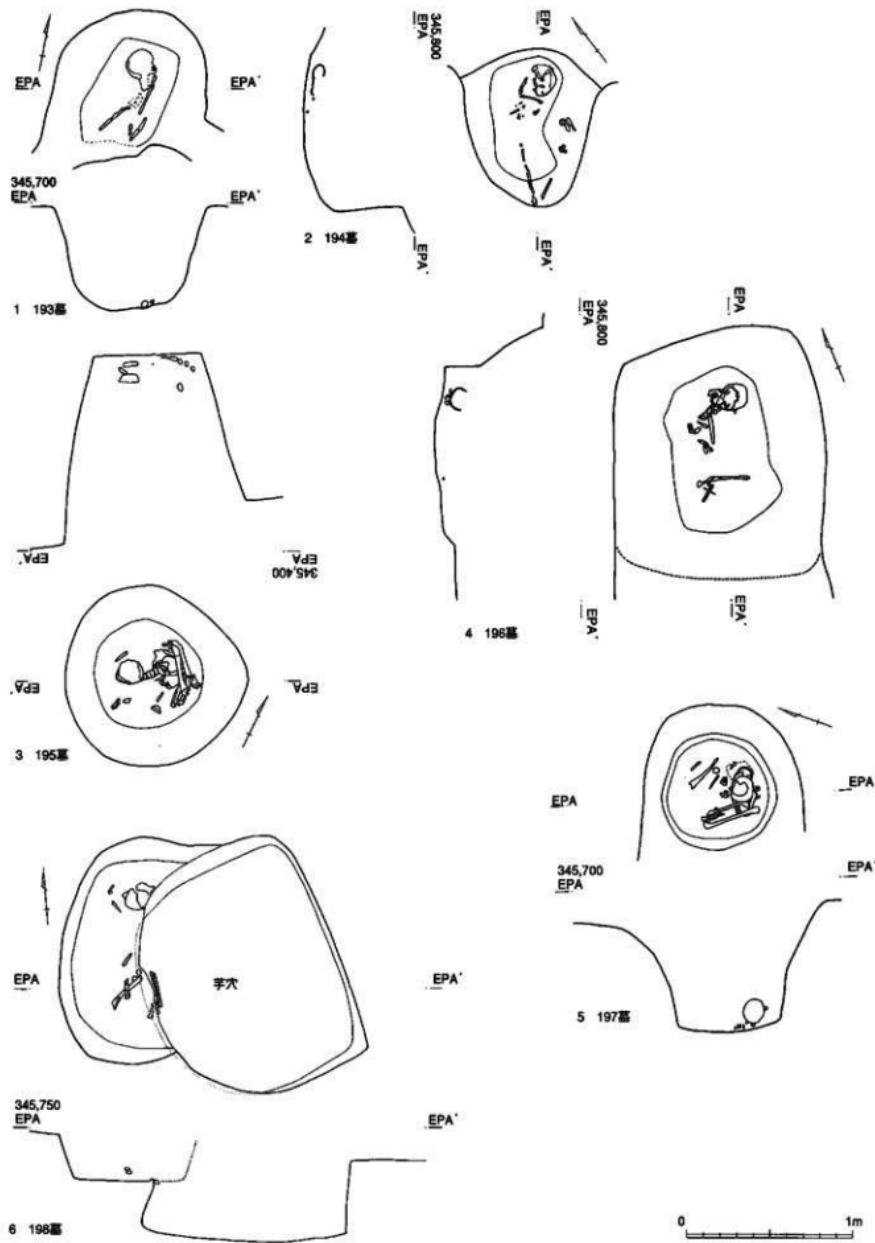
170~172・174・176~179号墓墳平面図



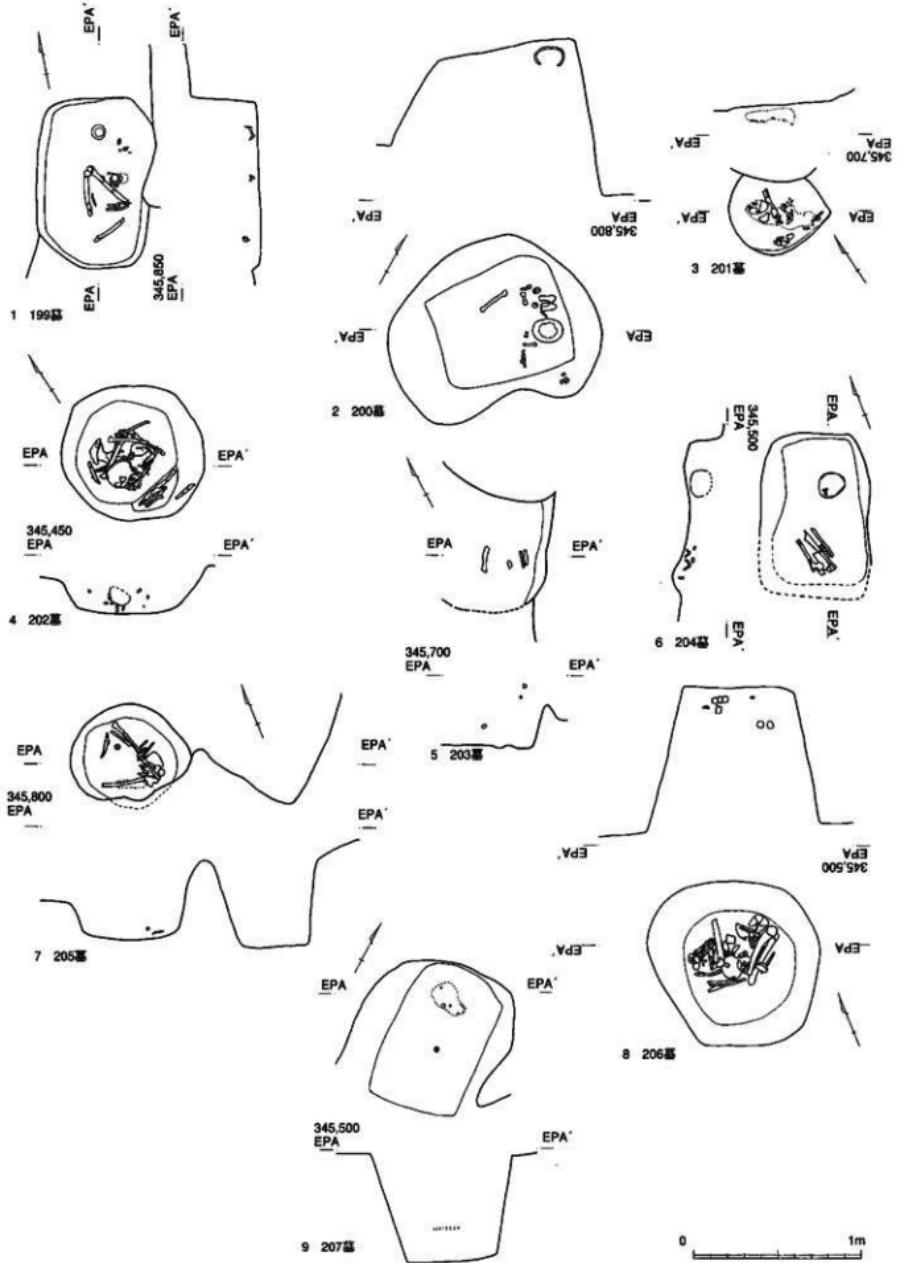
180~185号墓墳平面図



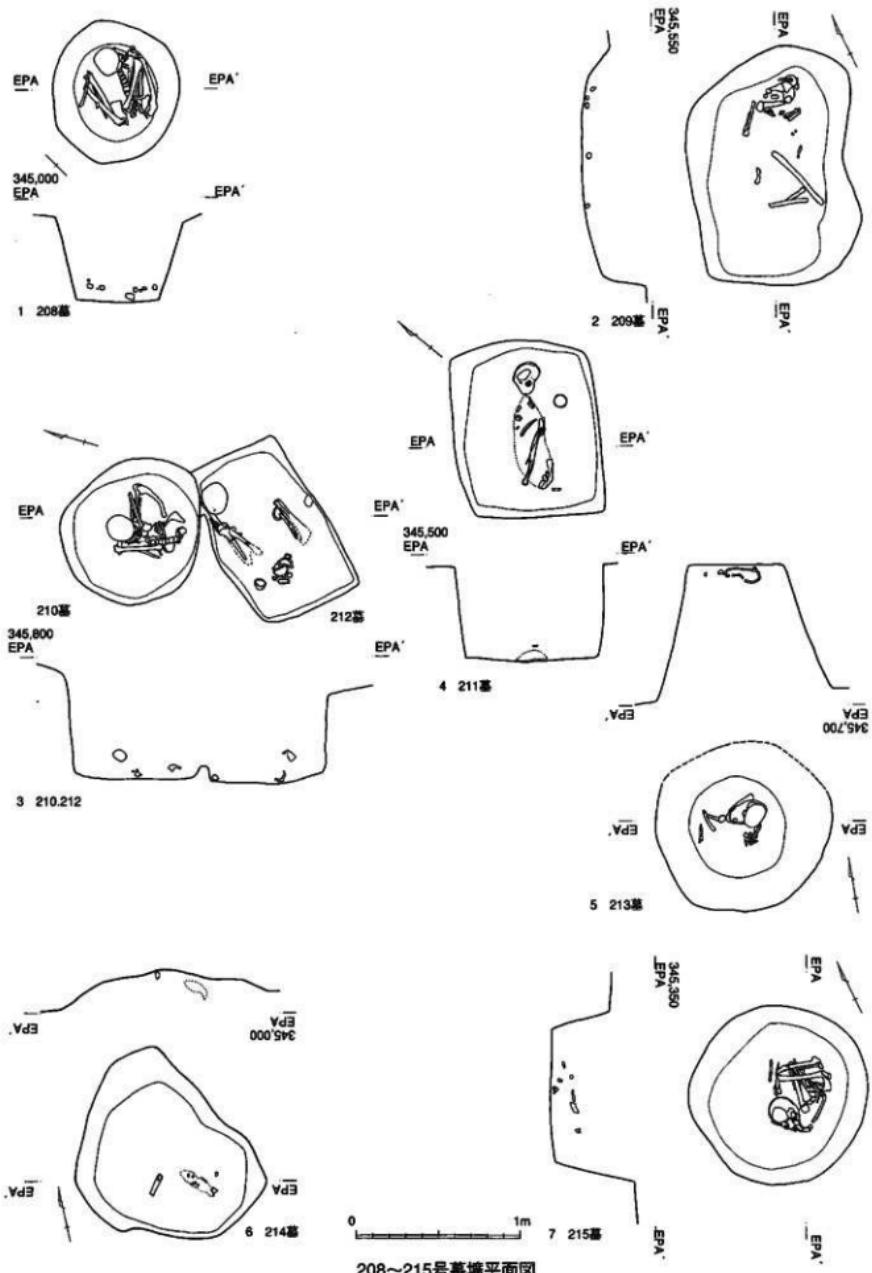
186~192号墓墳平面図



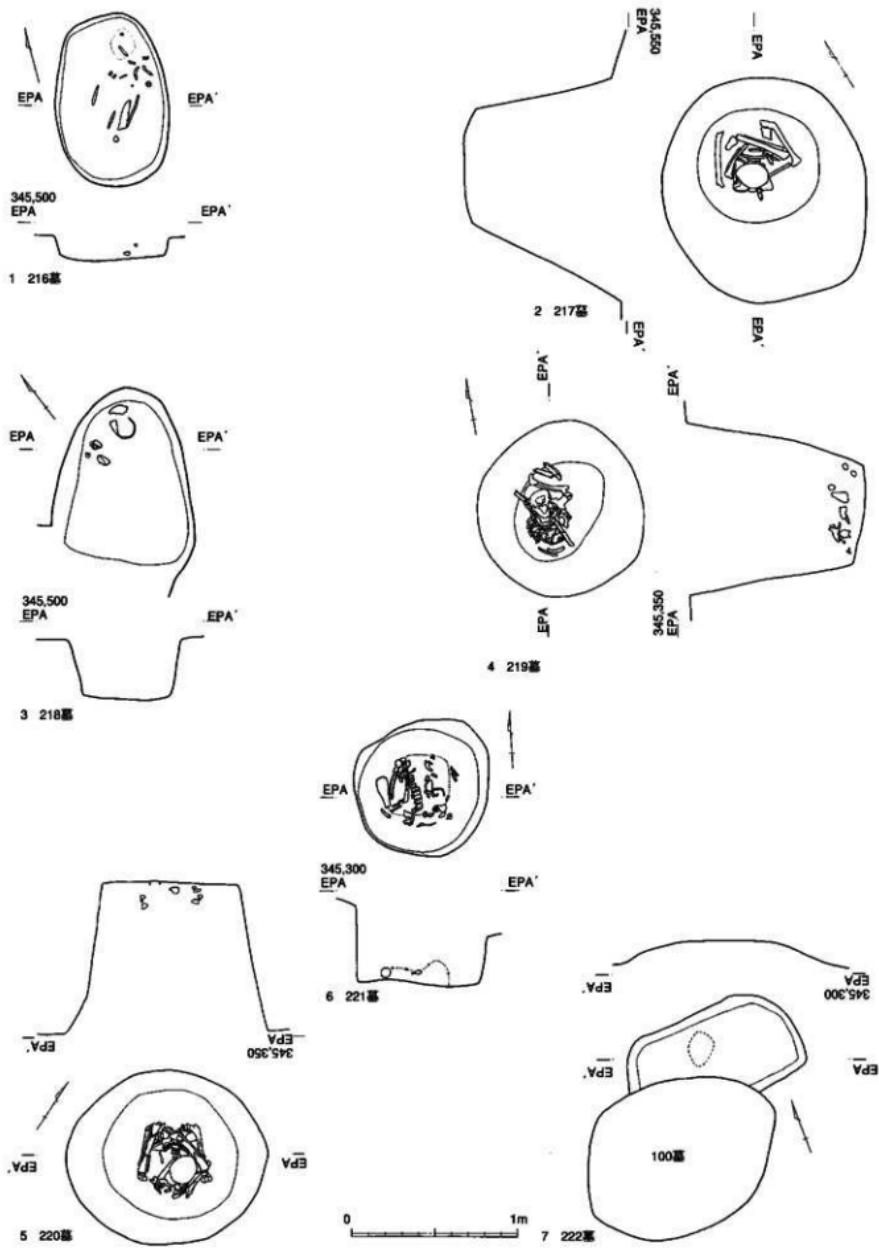
193~198号墓塚平面図



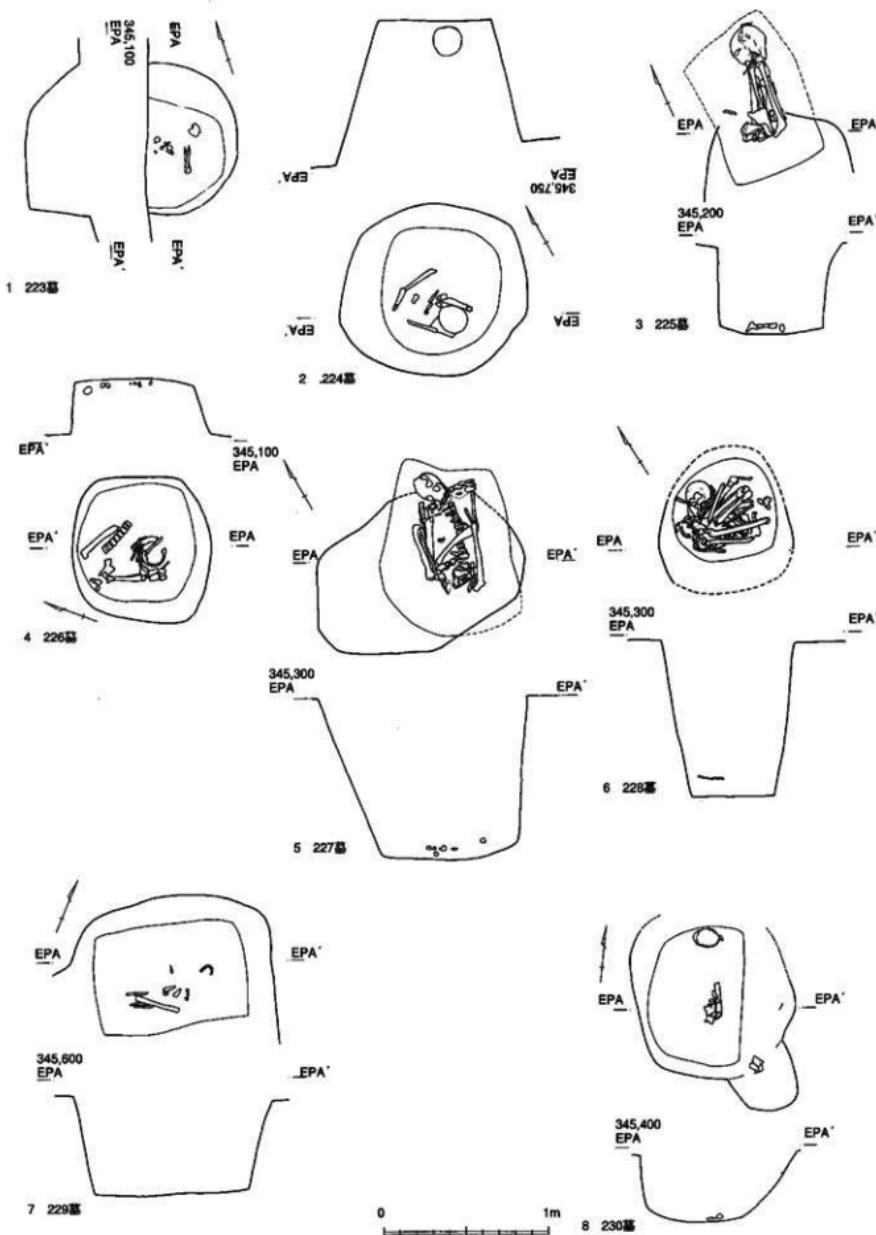
199~207号墓墳平面図



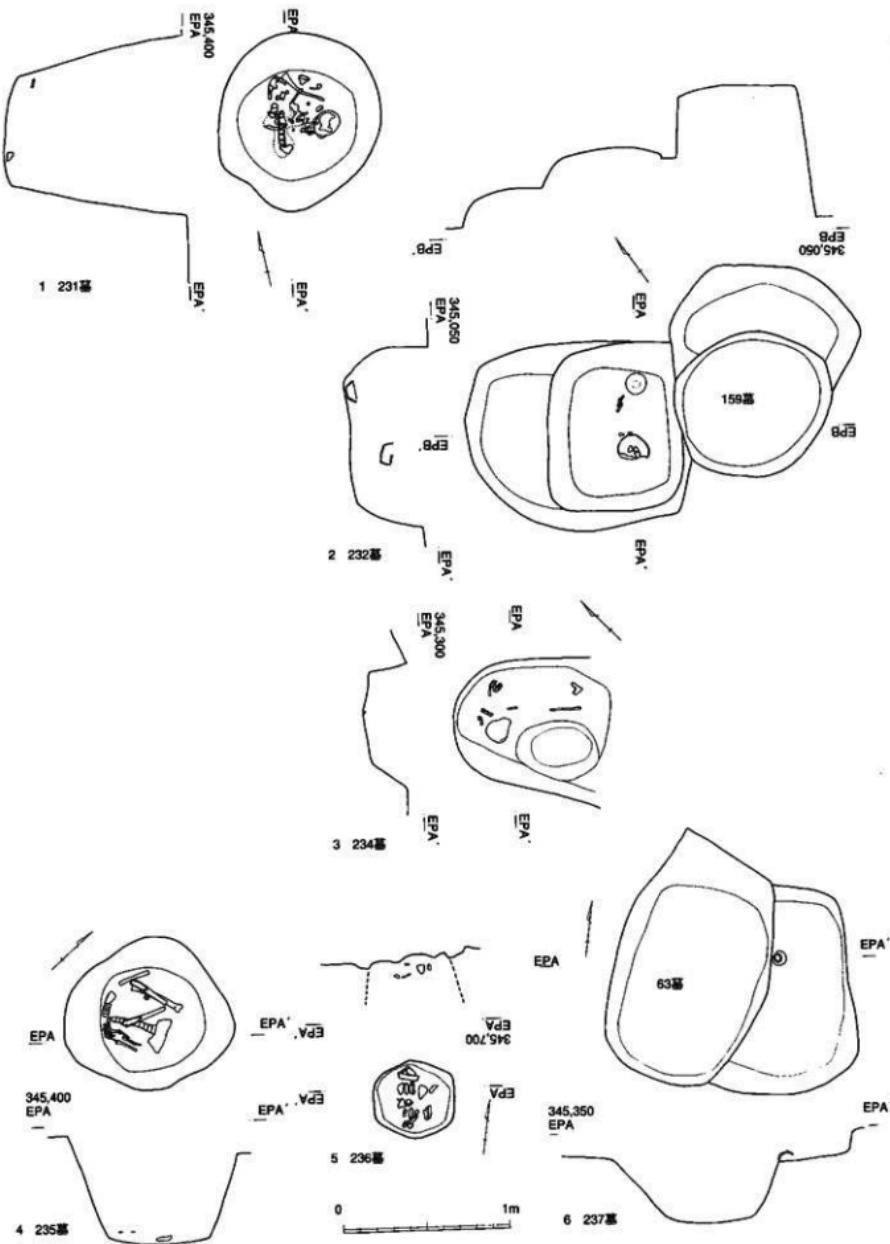
208~215号墓墳平面図



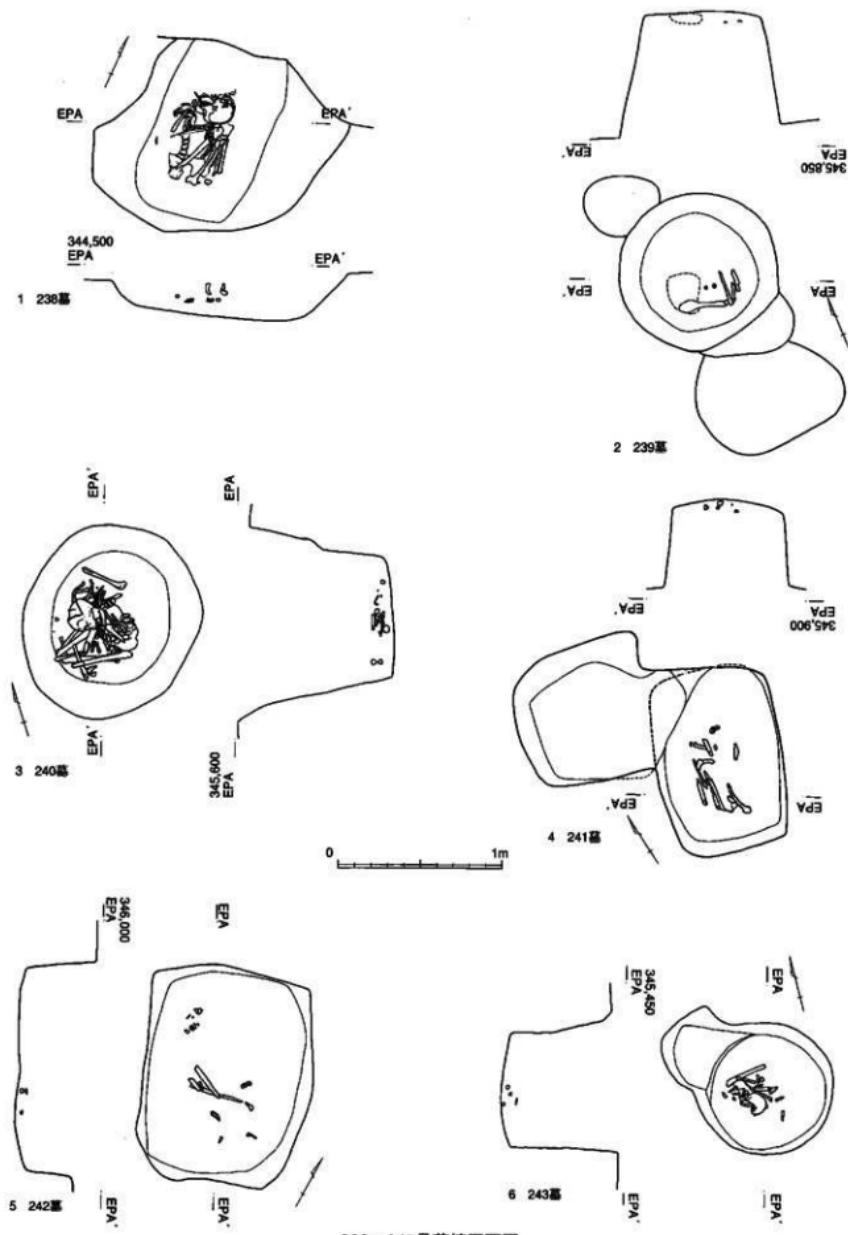
216~222号墓墳平面図



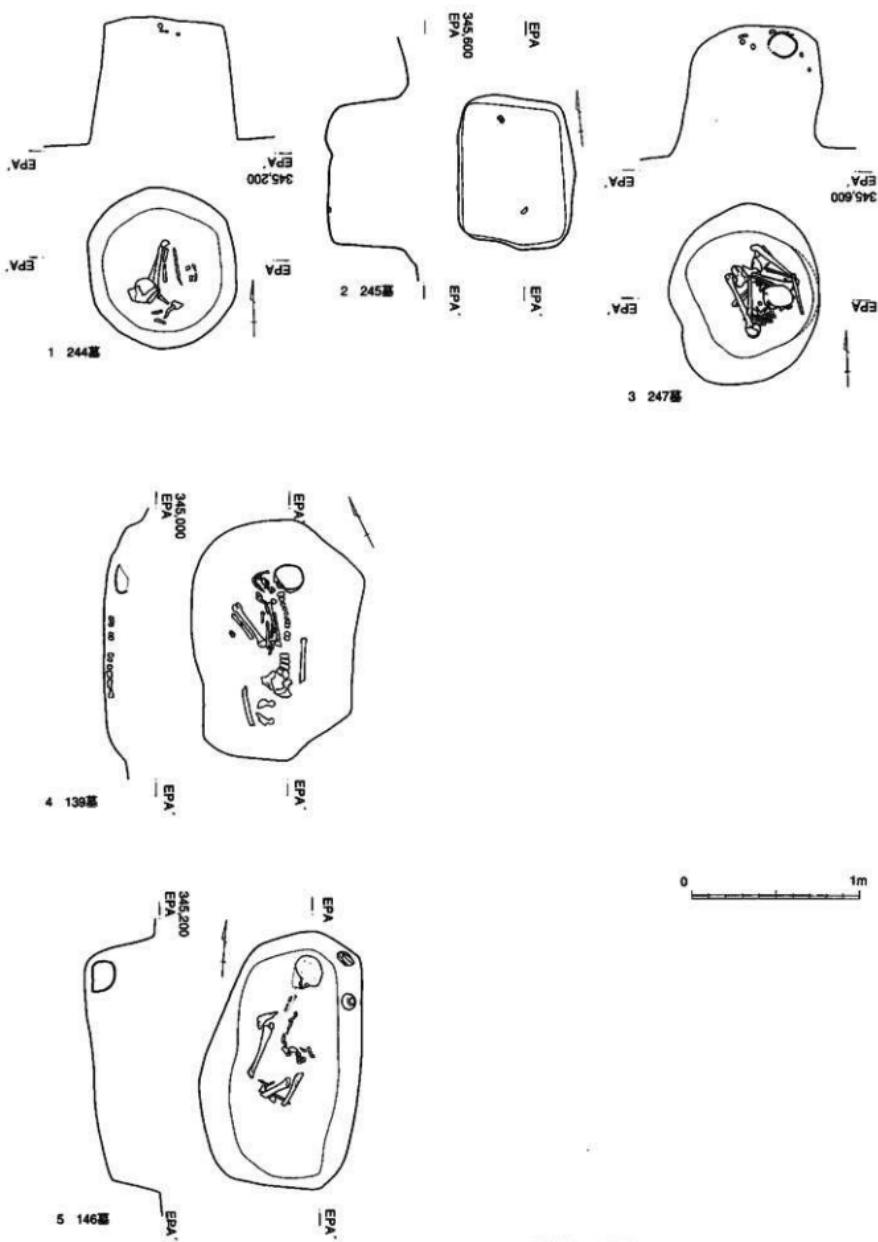
223~230号墓擴平面圖



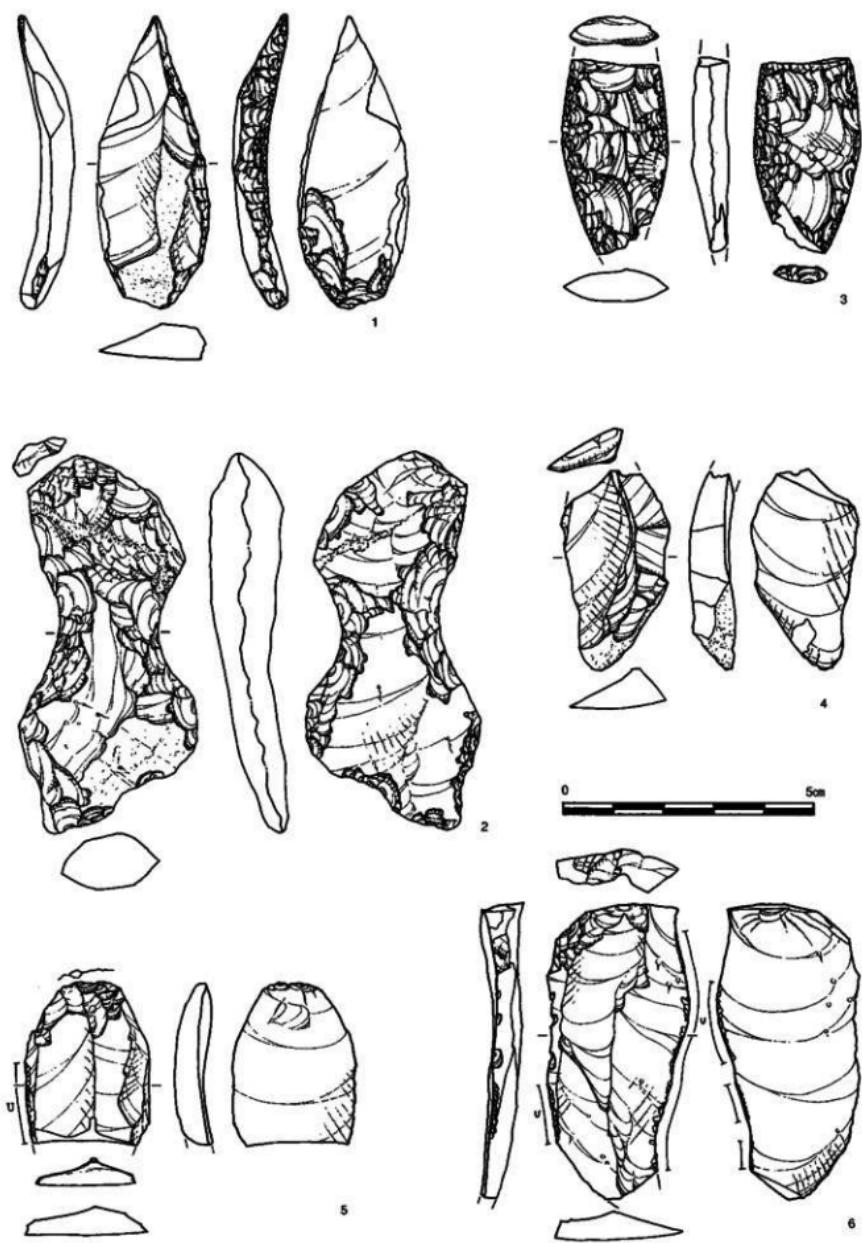
231~232・234~237号墓墳平面図



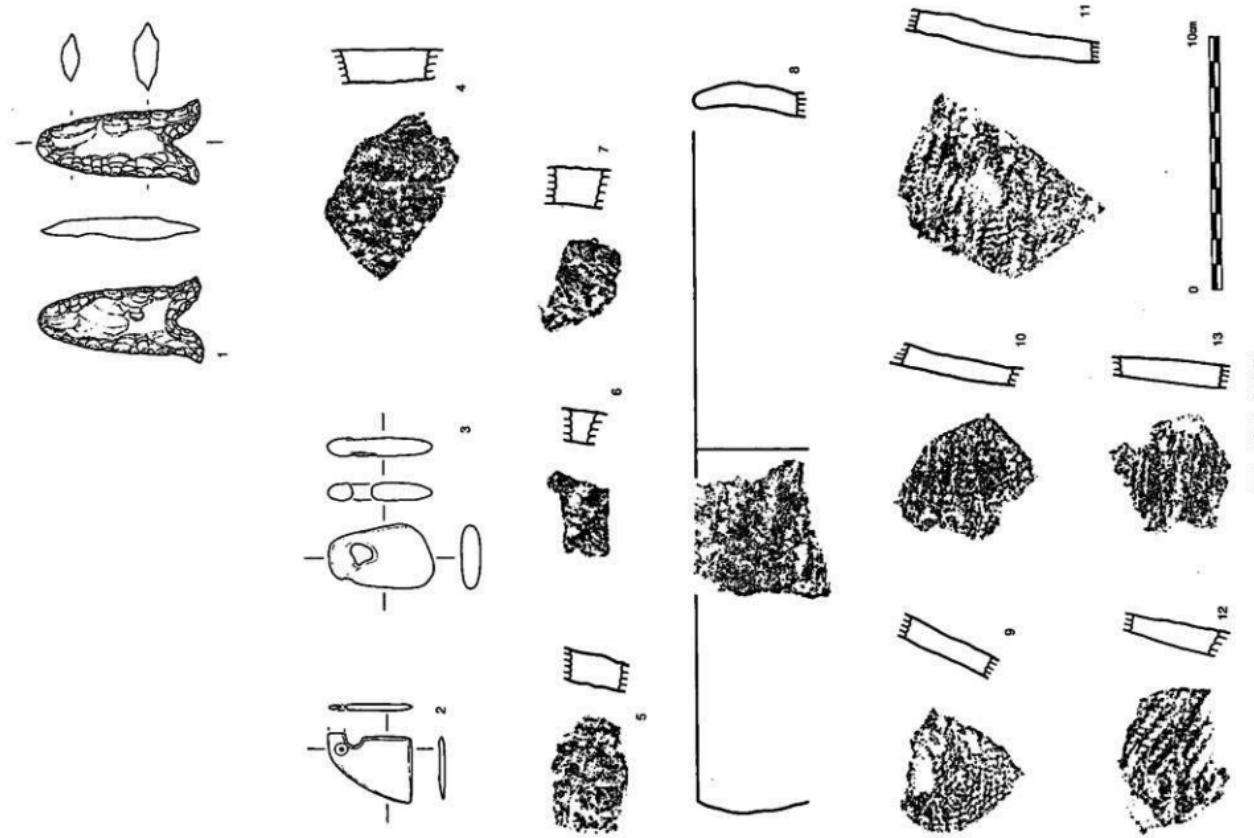
238~243号墓填平面图



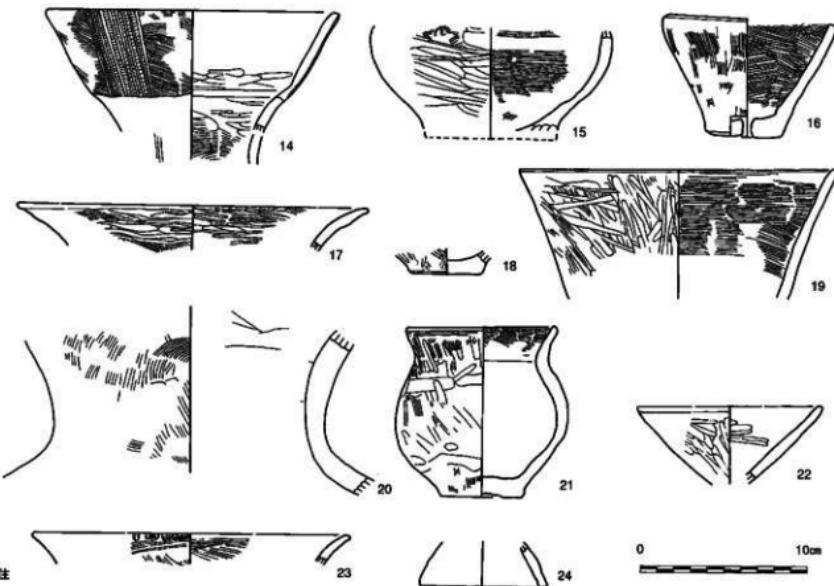
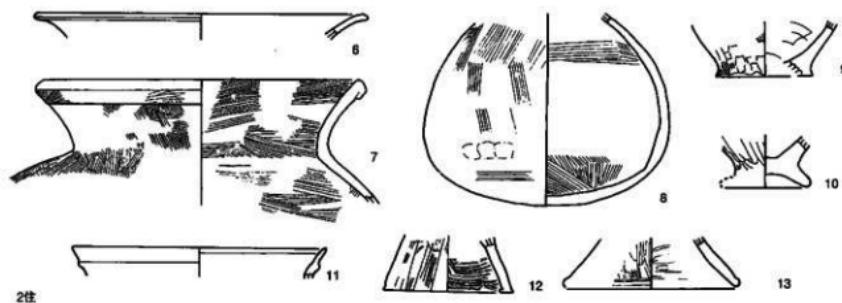
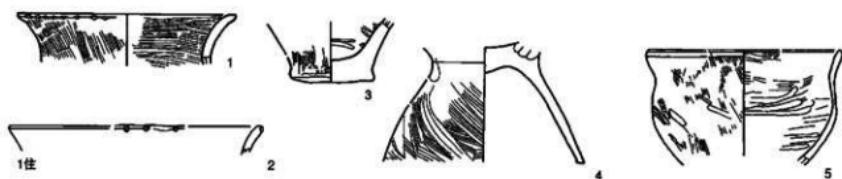
244・245・247・139・146号墓塚平面図



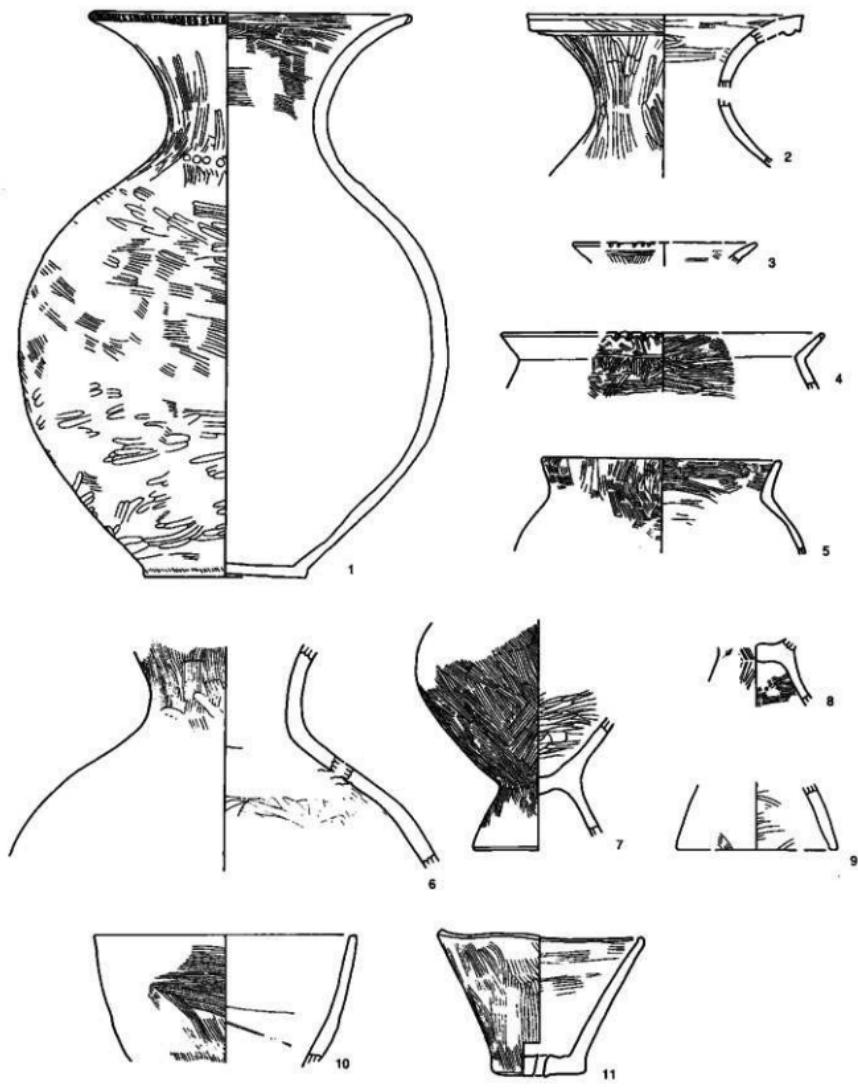
旧石器～縄文時代出土遺物



商文時代出土遺物



1 ~ 3号住居跡出土遺物

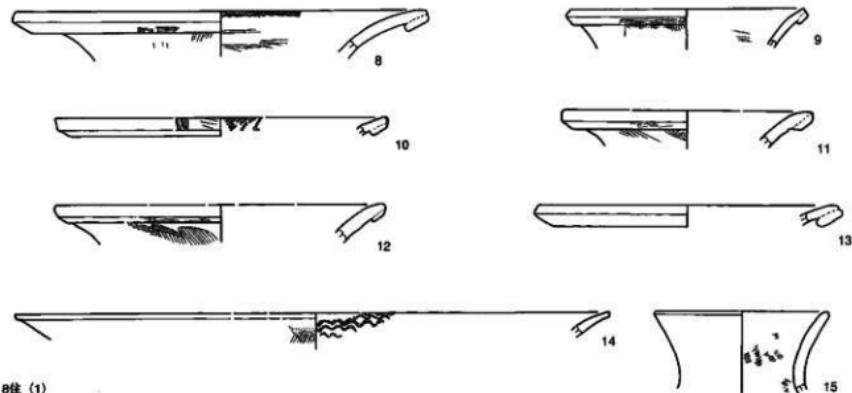


0 10cm

5号住居跡出土遺物

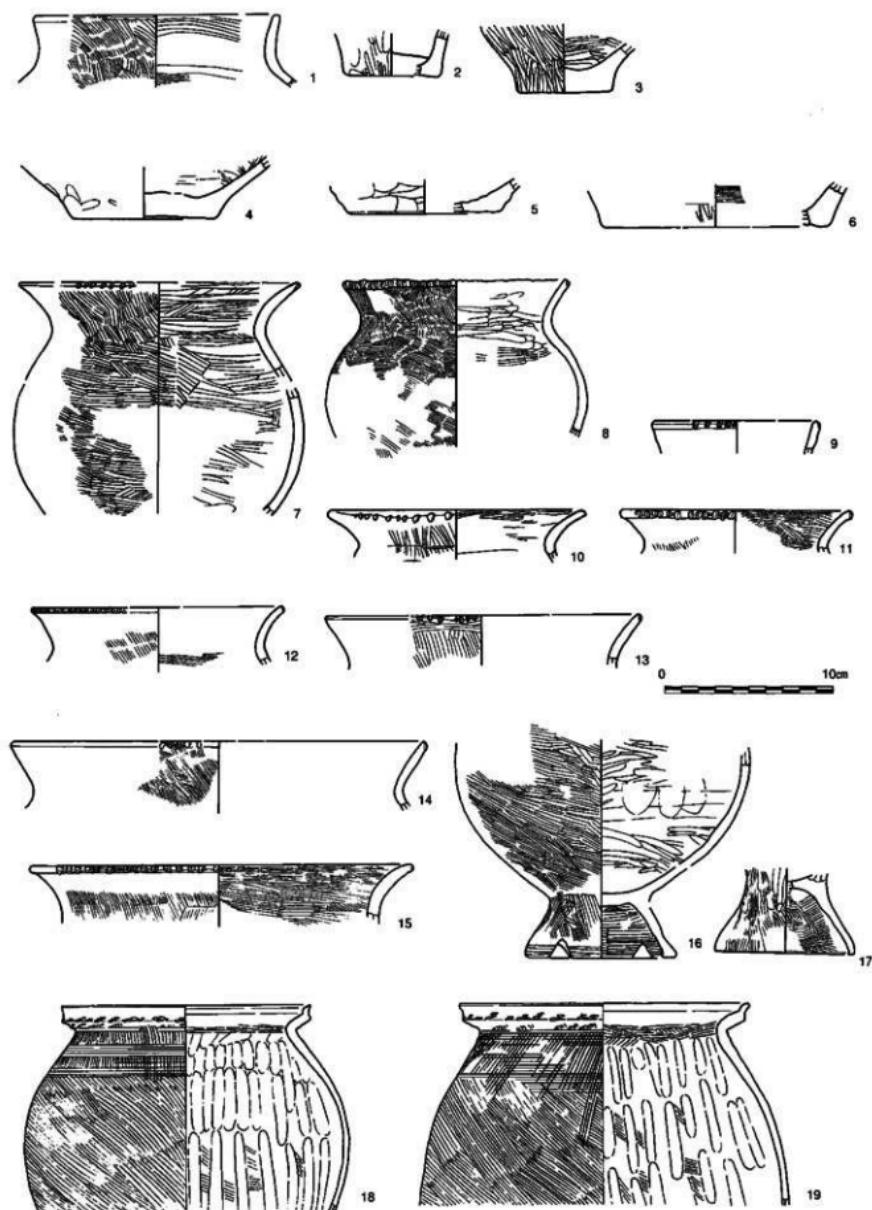


7住

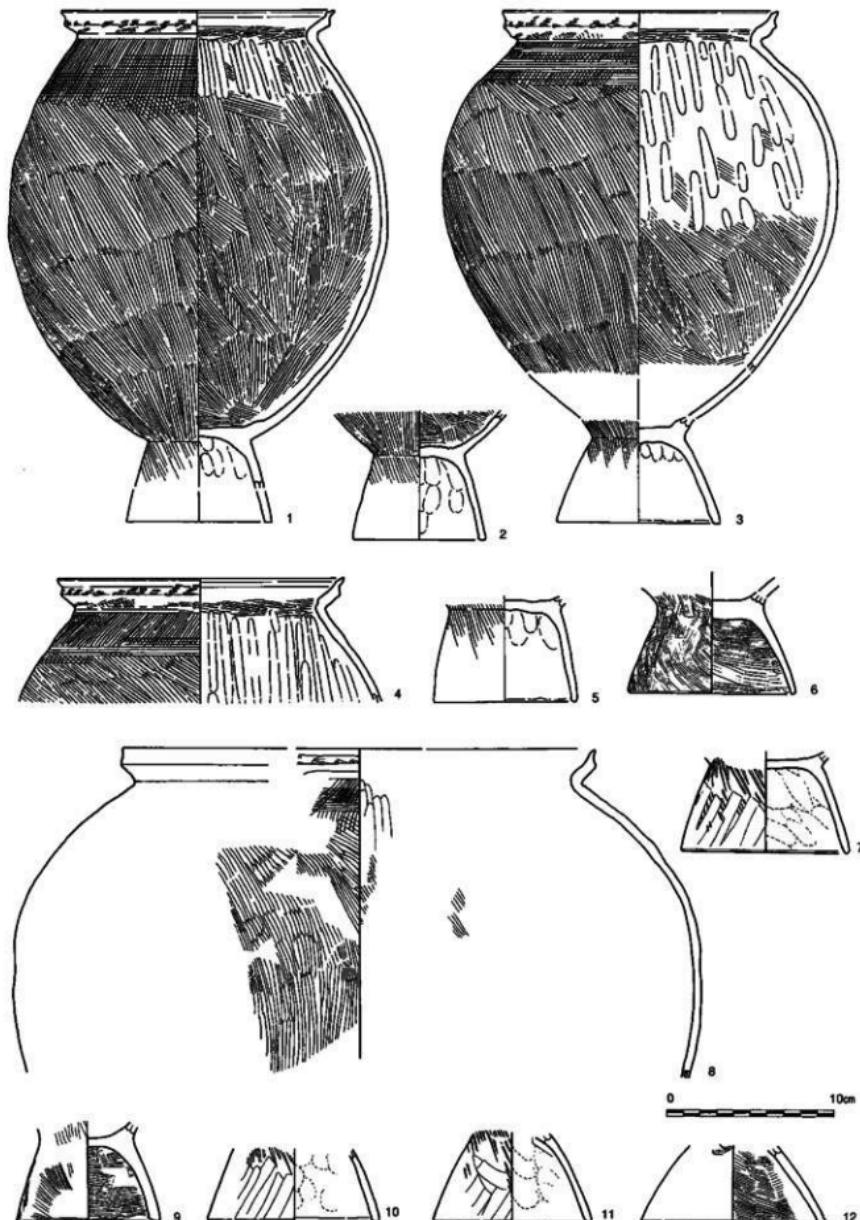


8住 (1)

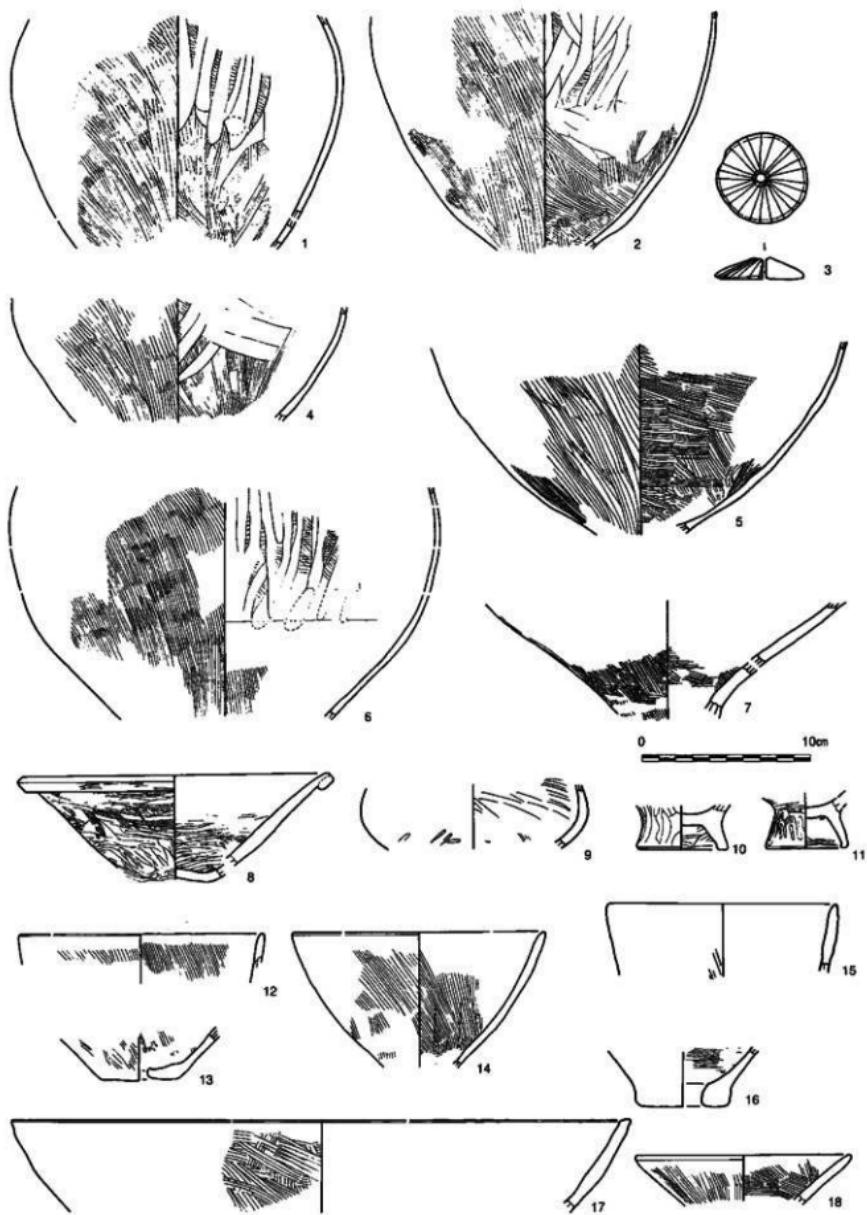
6～8号住居跡出土遺物



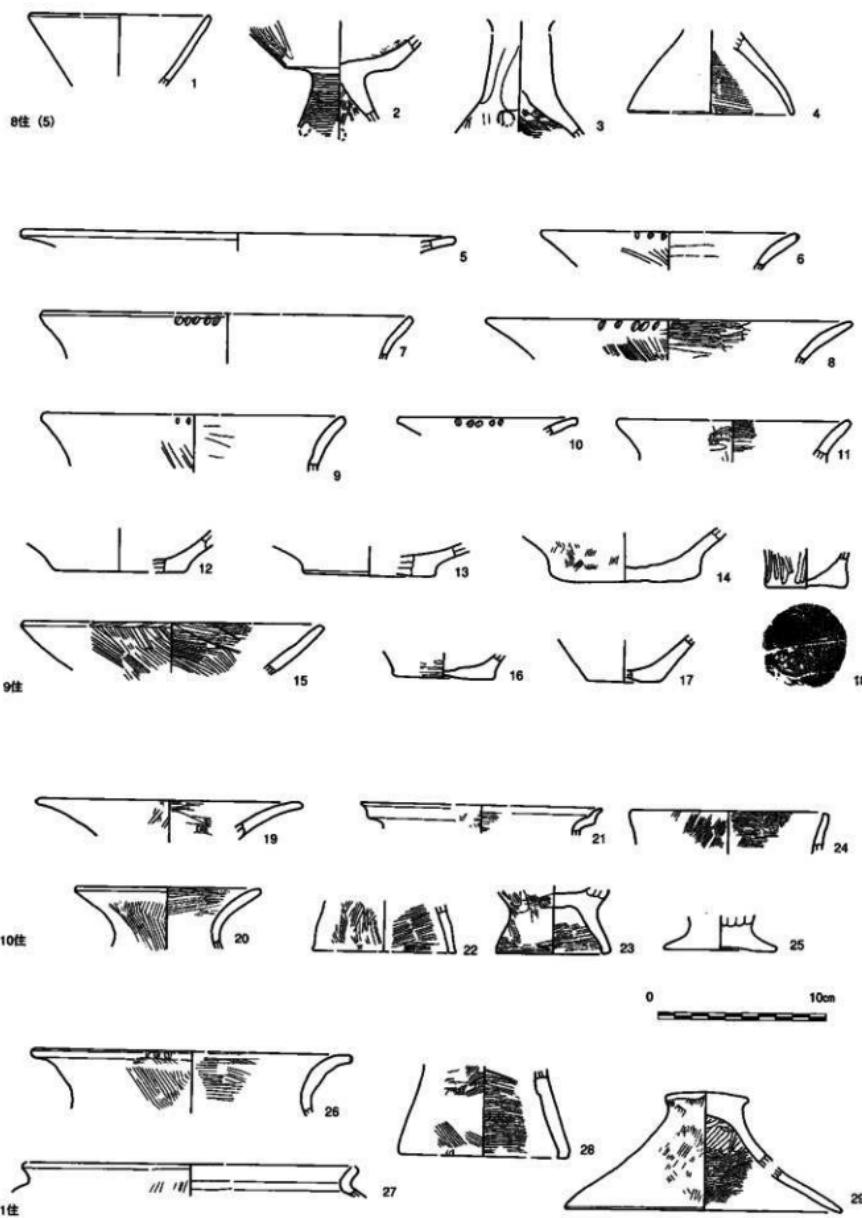
8号居跡出土遺物（2）



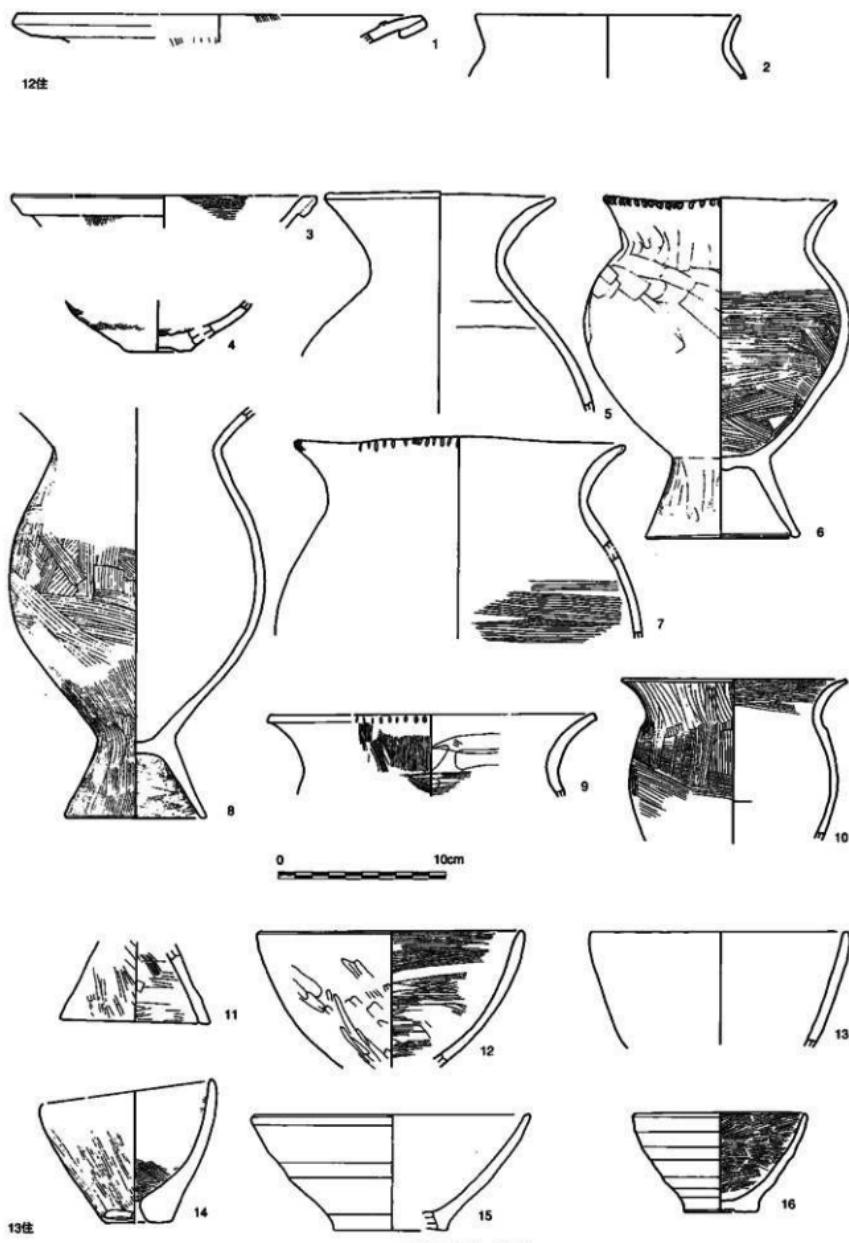
8号住居跡出土遺物（3）



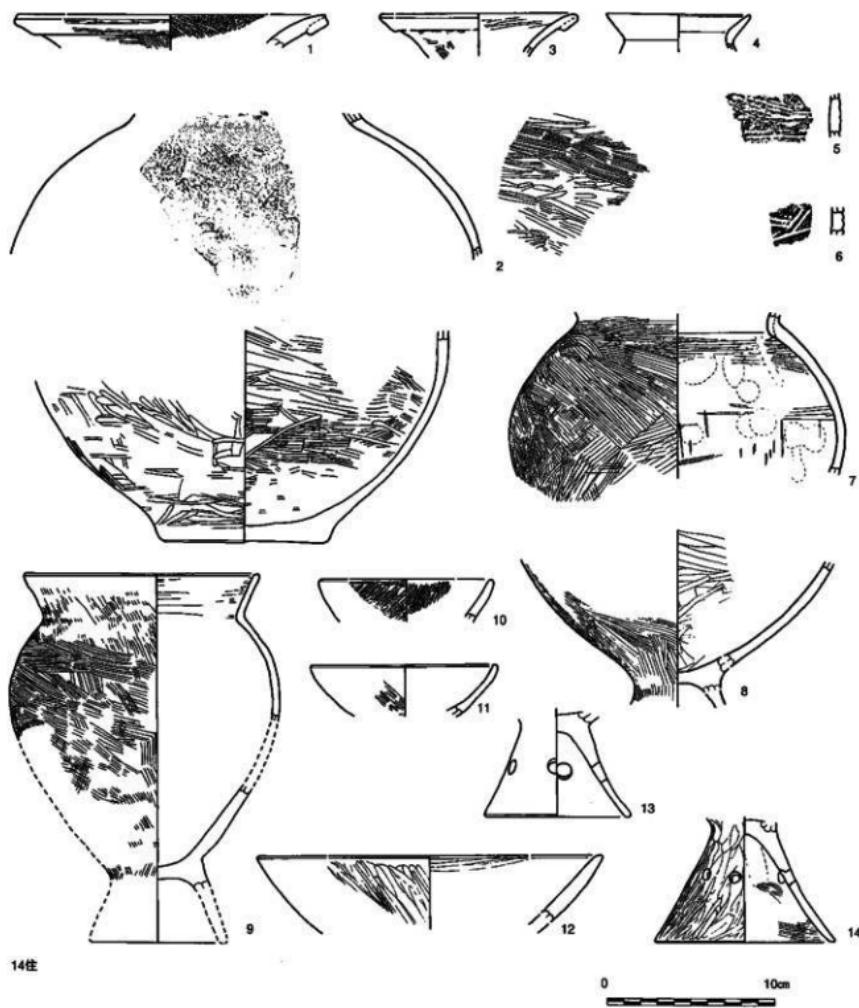
8号住居跡出土遺物 (4)



8~11号住居跡出土遺物



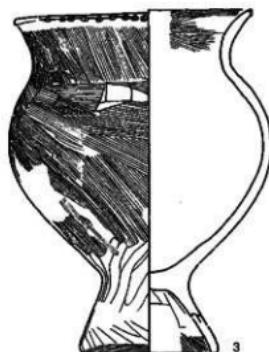
12・13号住居跡出土遺物



14·15号住居跡出土遺物



16住

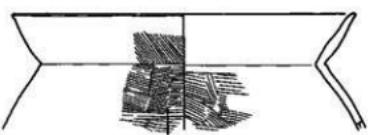


17住



18住

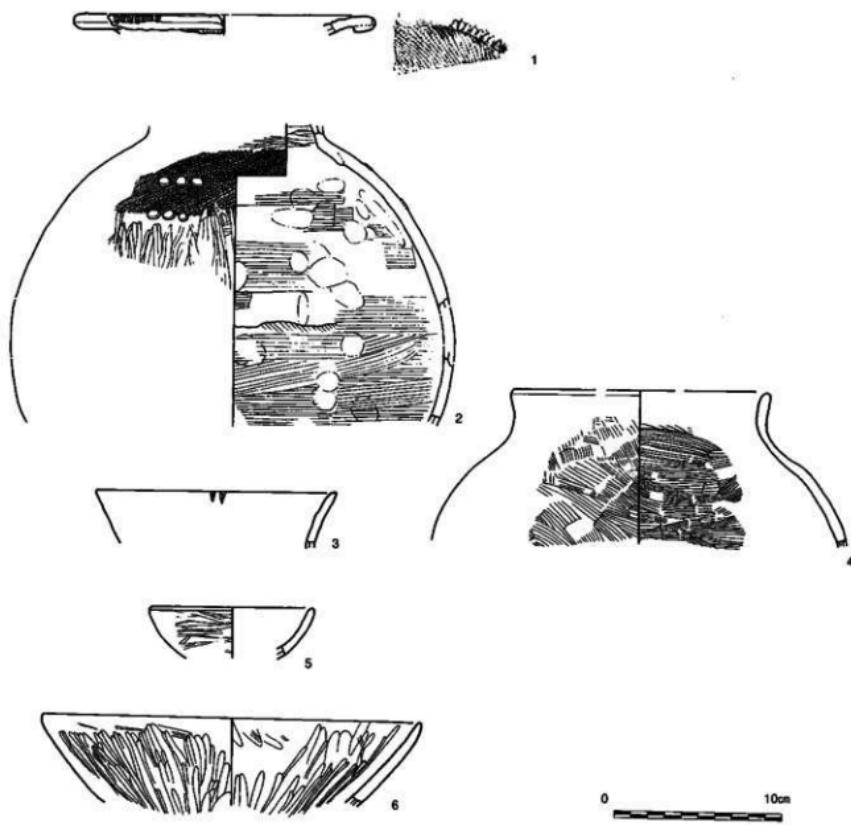
0 10cm



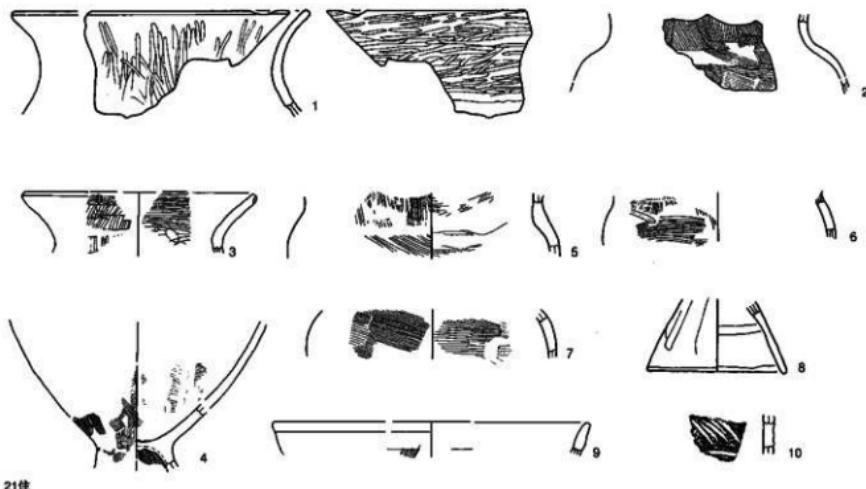
19住



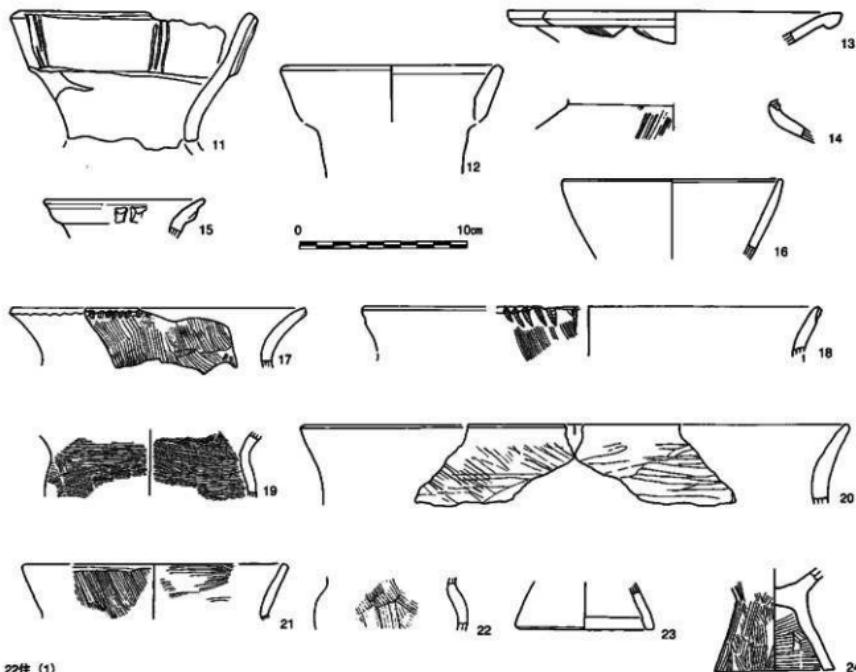
16~19号住居跡出土遺物



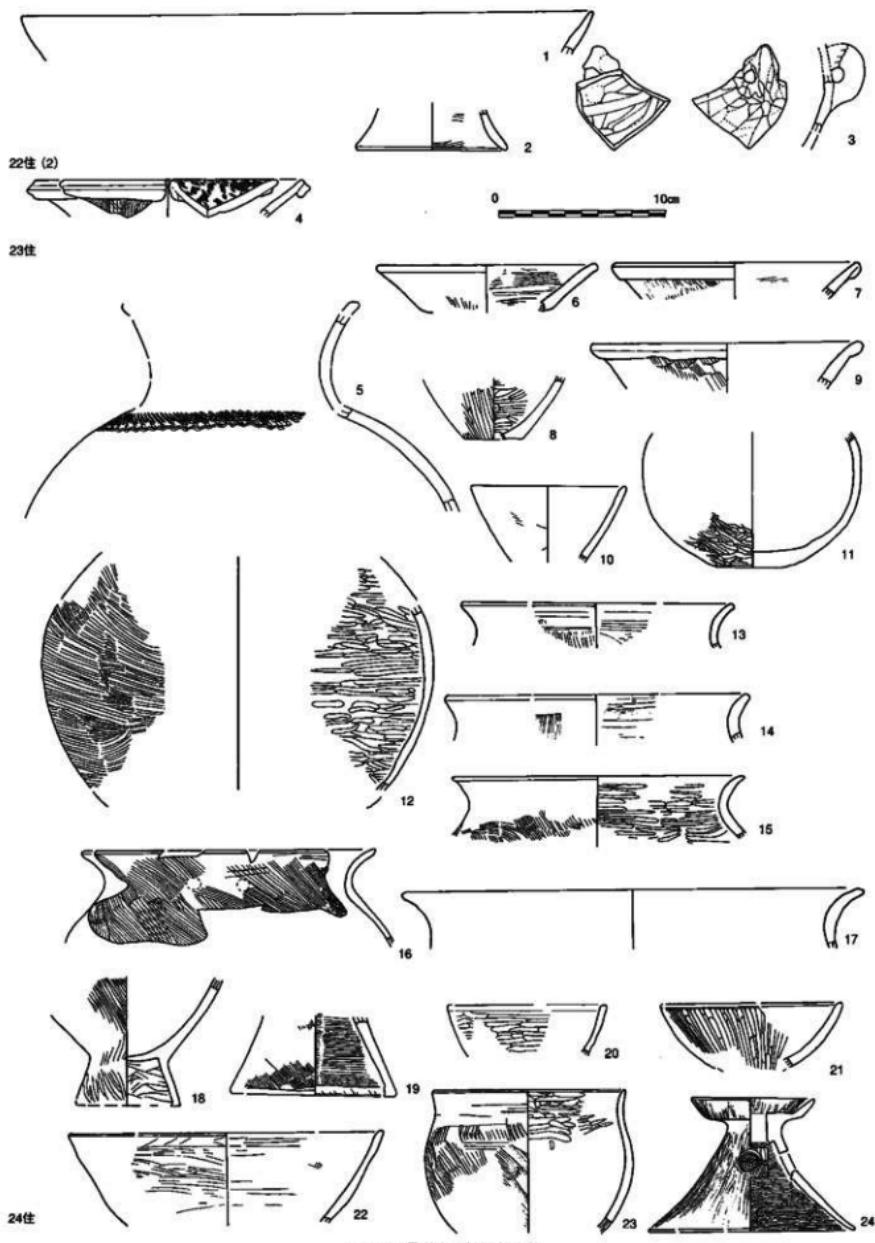
20号住居跡出土遺物



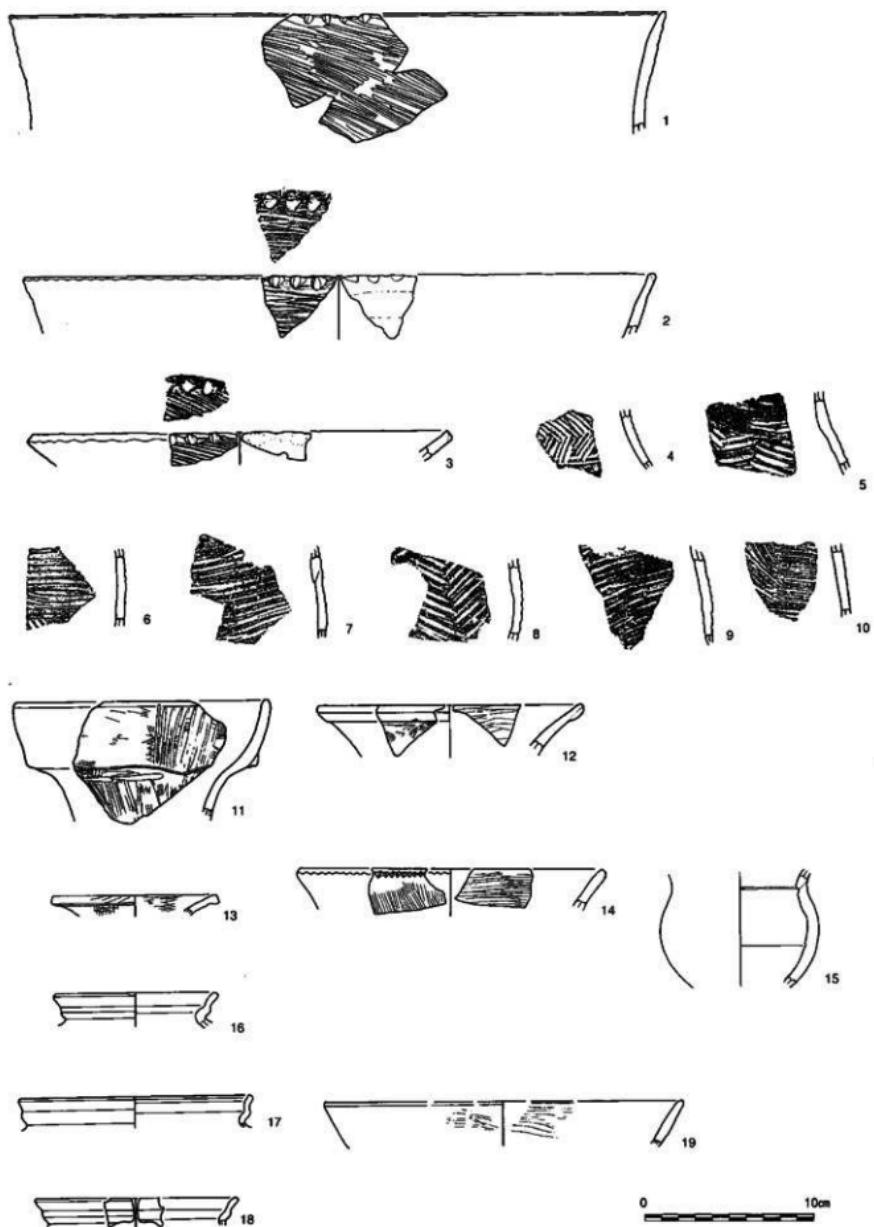
21住



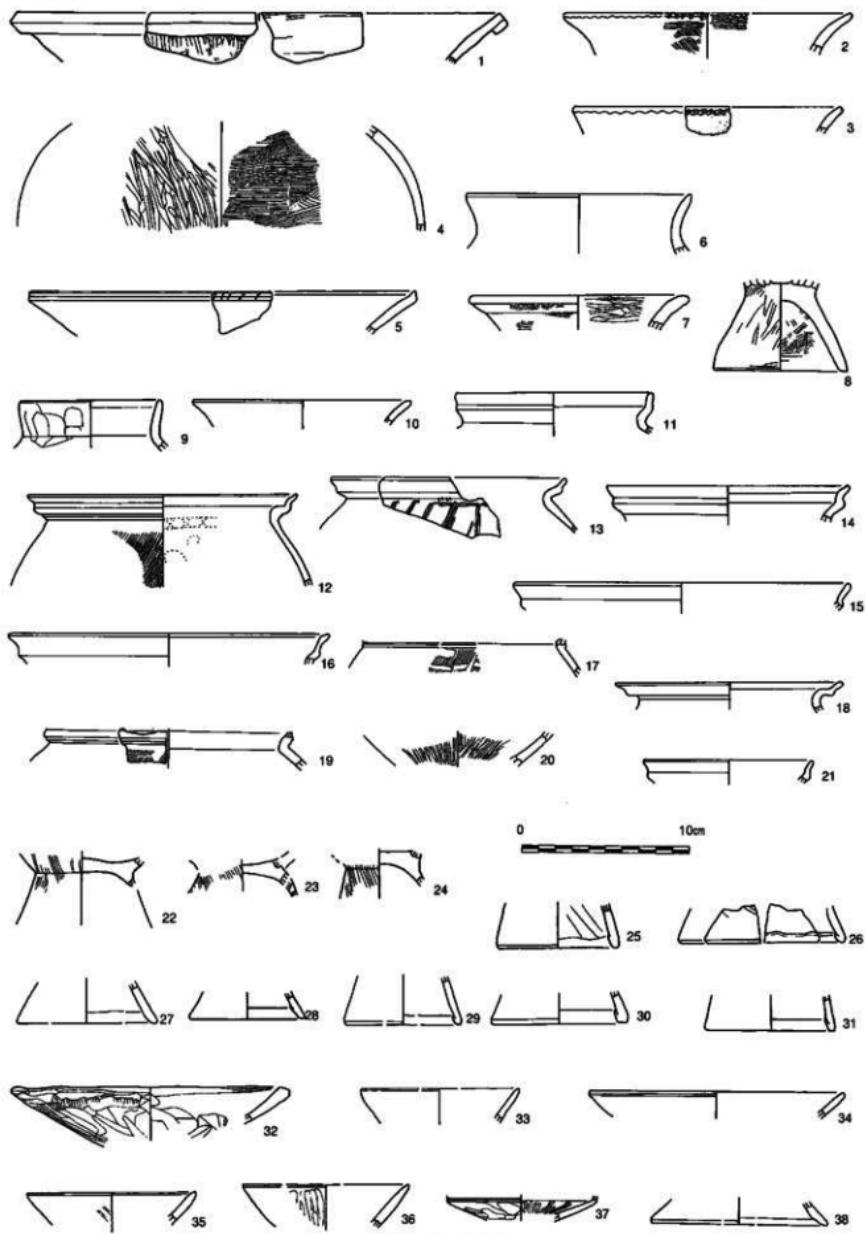
22住 (1)



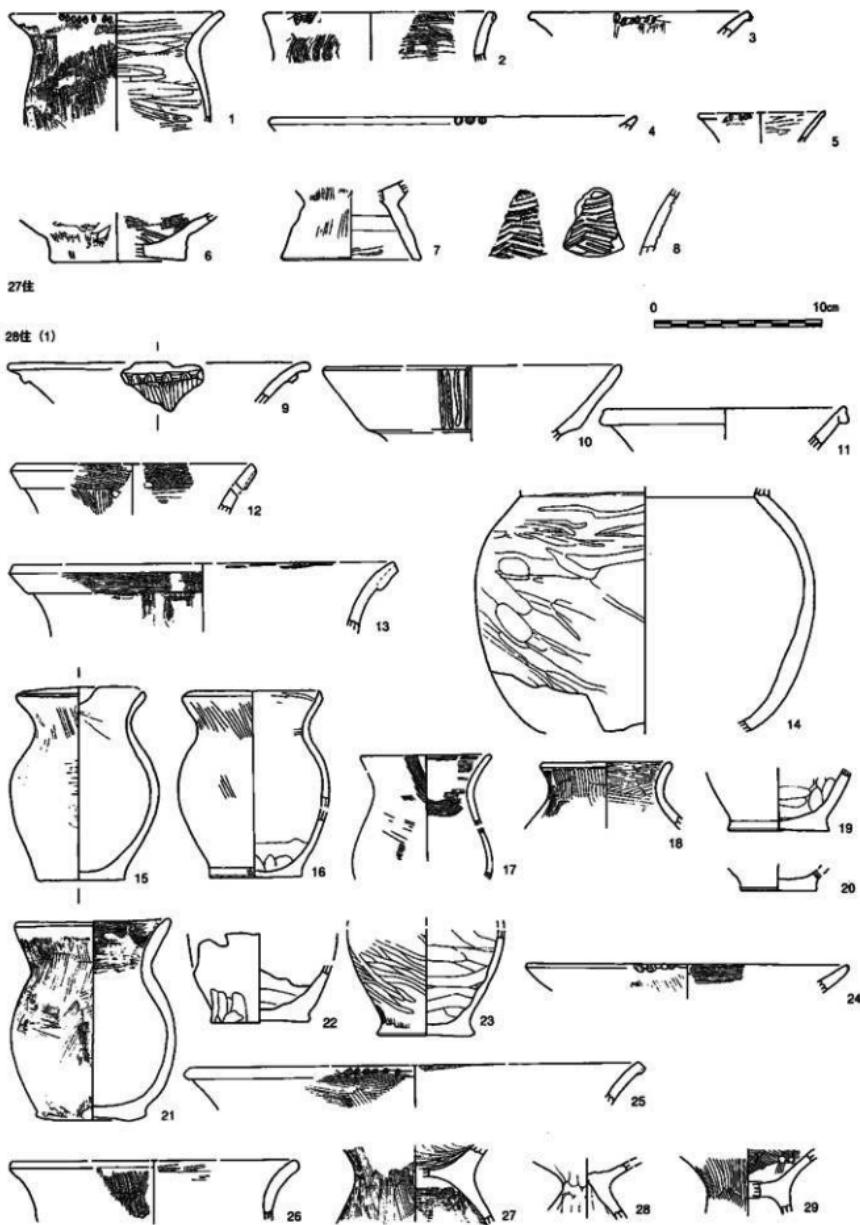
22~24号住居跡出土遺物



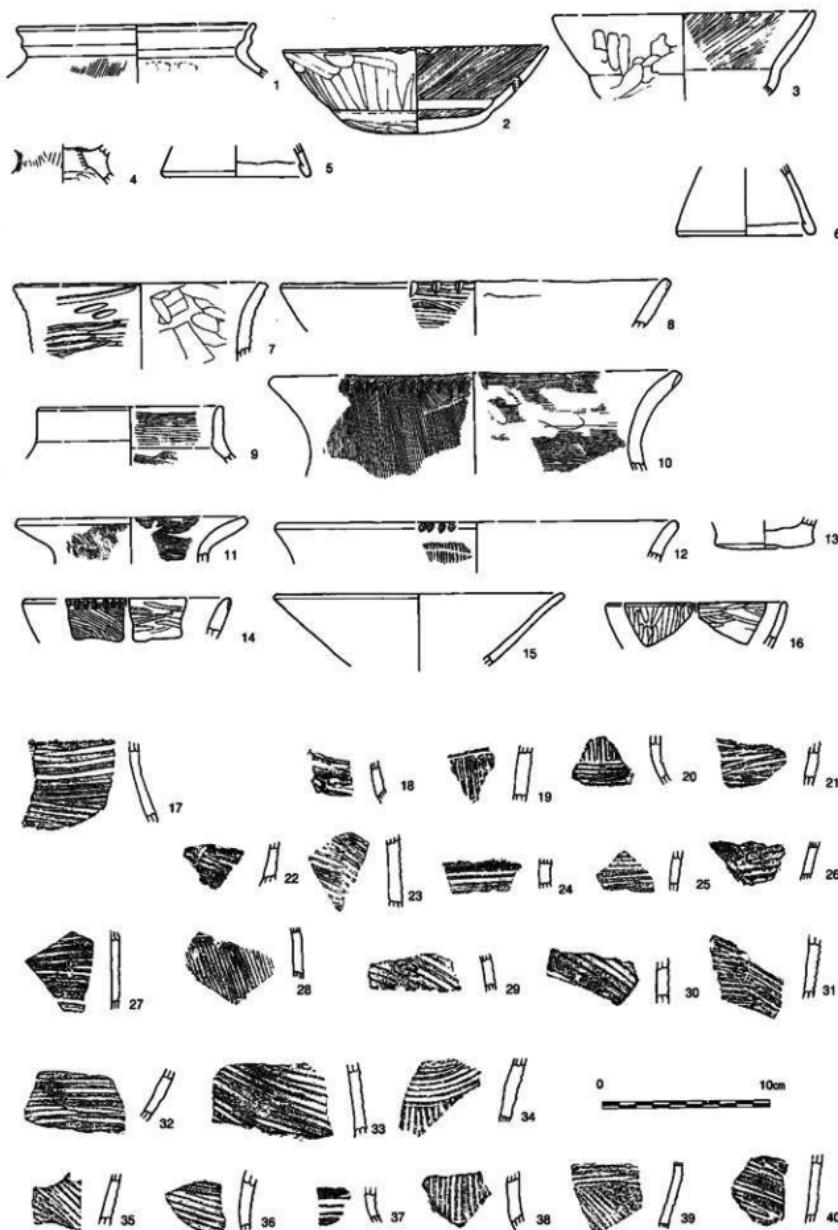
25号住居跡出土遺物



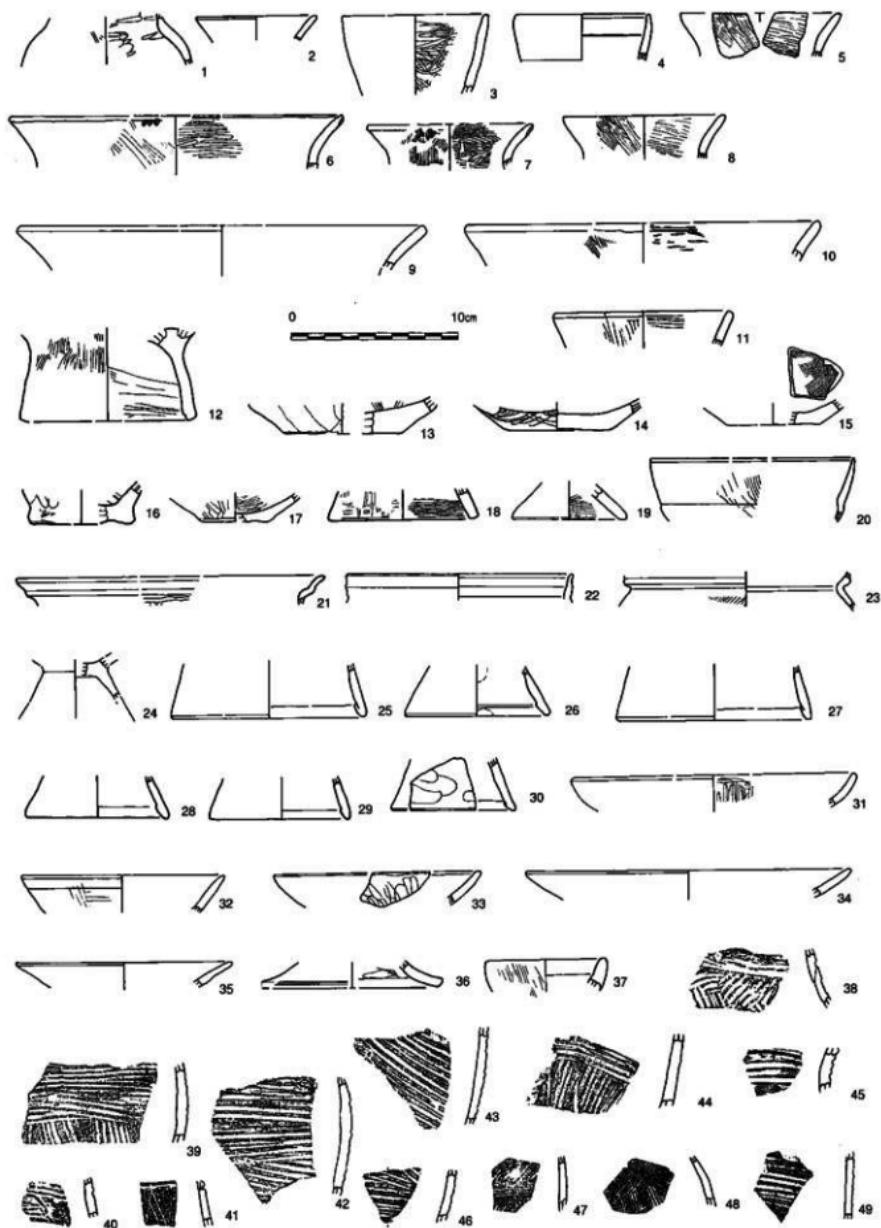
26号住居跡出土遺物



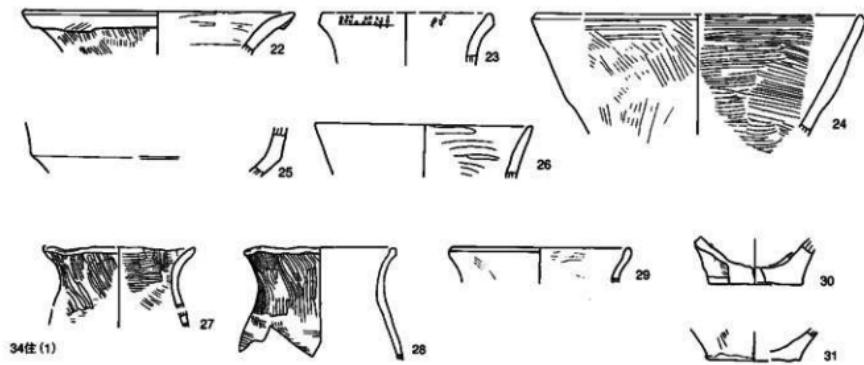
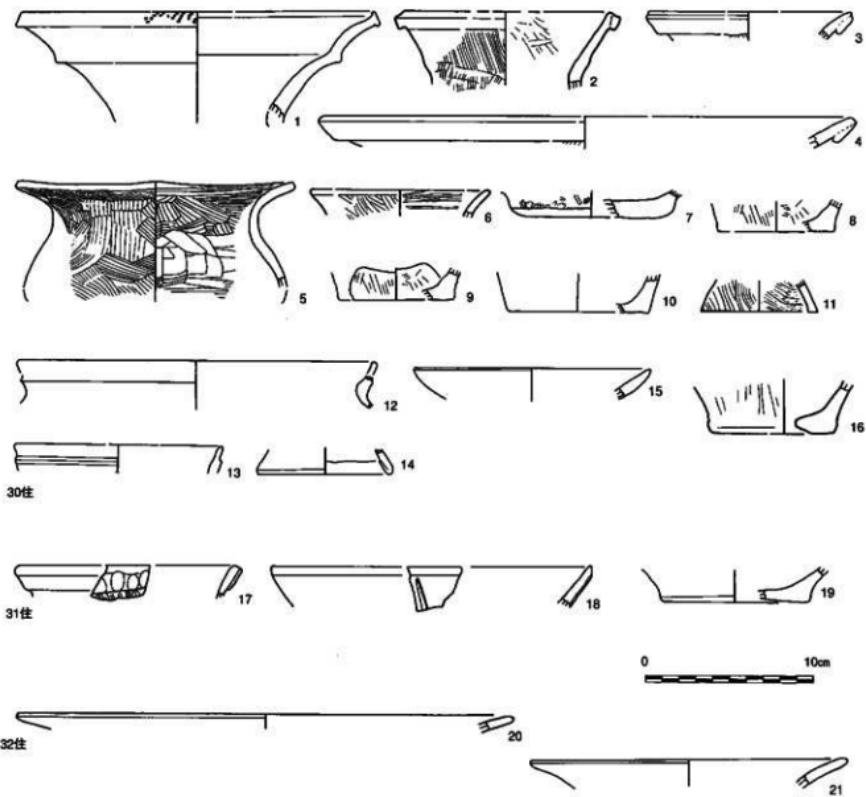
27・28号住居跡出土遺物



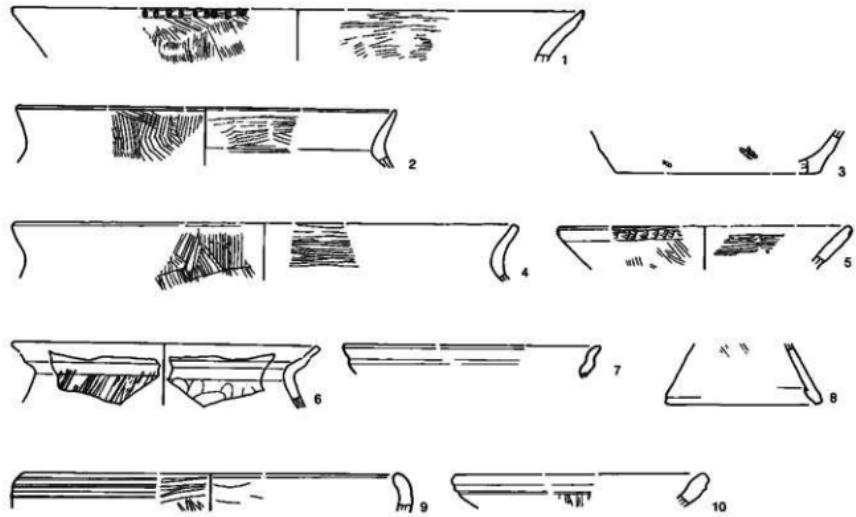
28号住居跡出土遺物 (2)



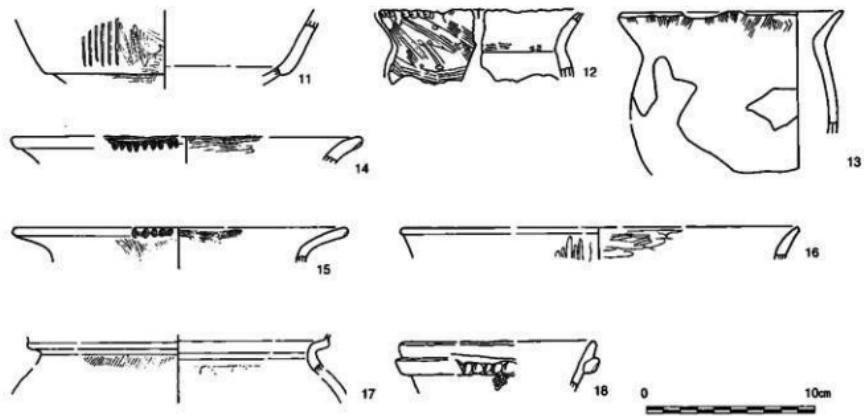
29号住居跡出土遺物



30~32・34号住居跡出土遺物



34住(2)



36住



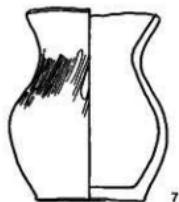
38住(1)



38住(2)



40住



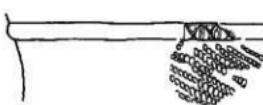
42住



8



9



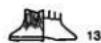
10



56住



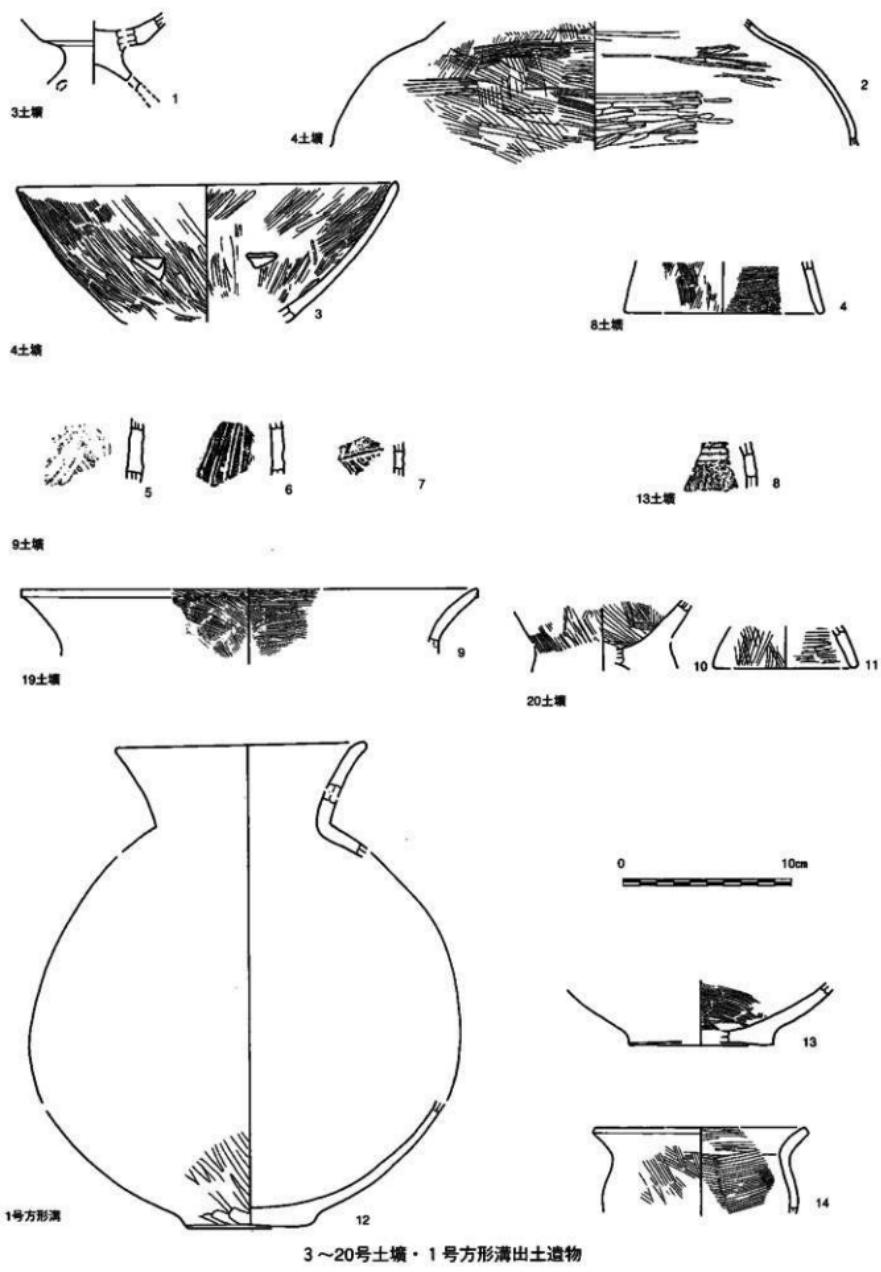
12

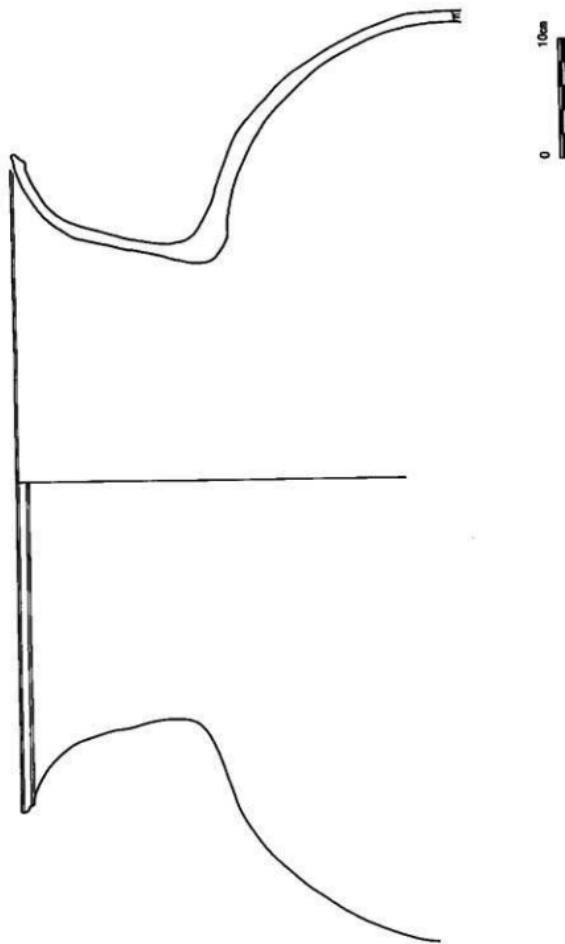


13



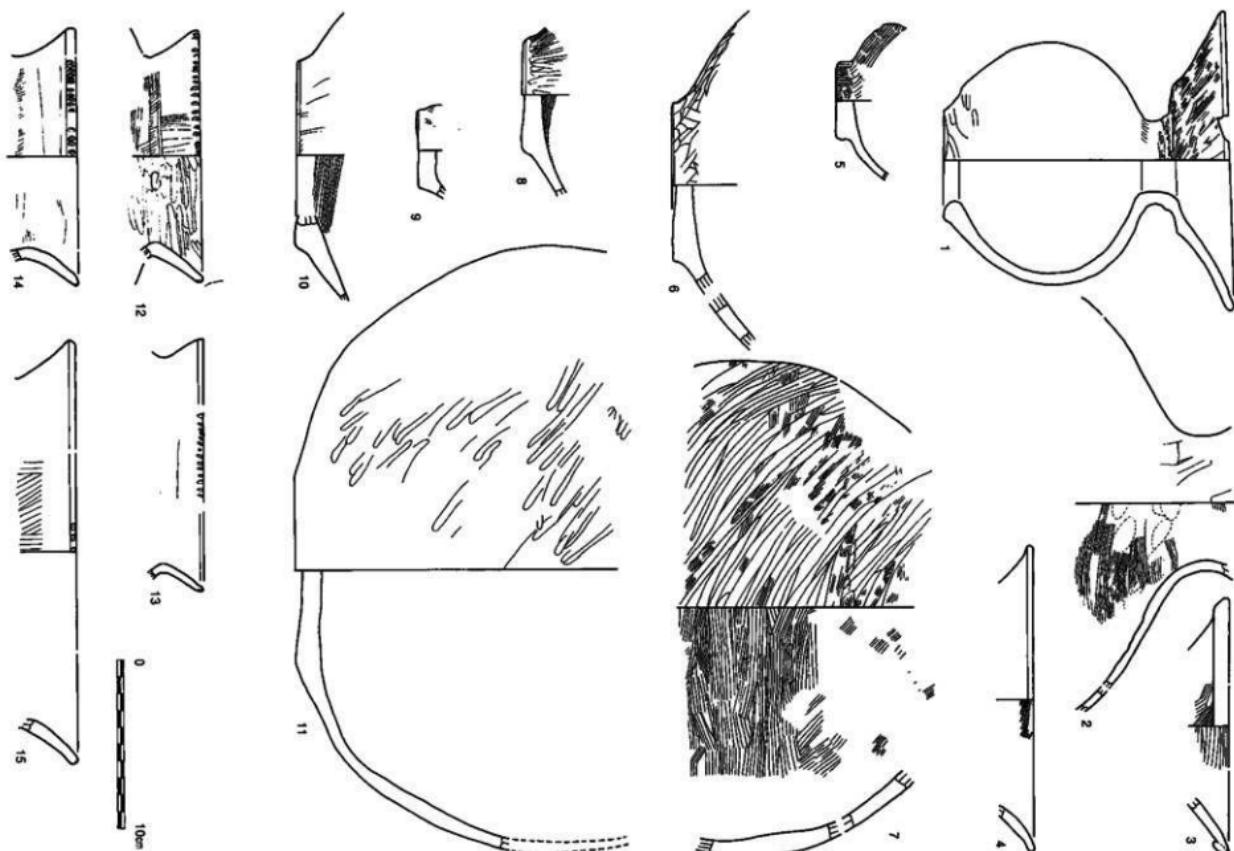
38・40・42・56号住居跡出土遺物

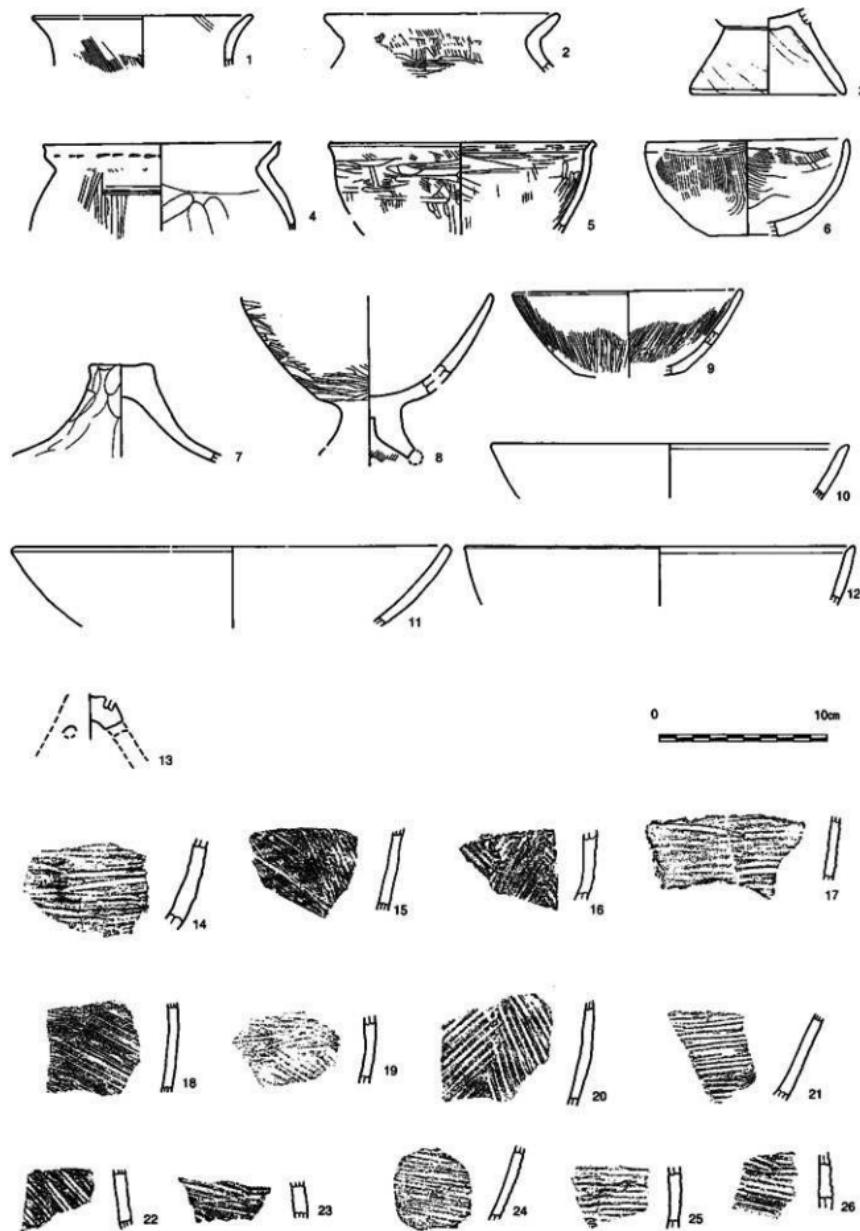




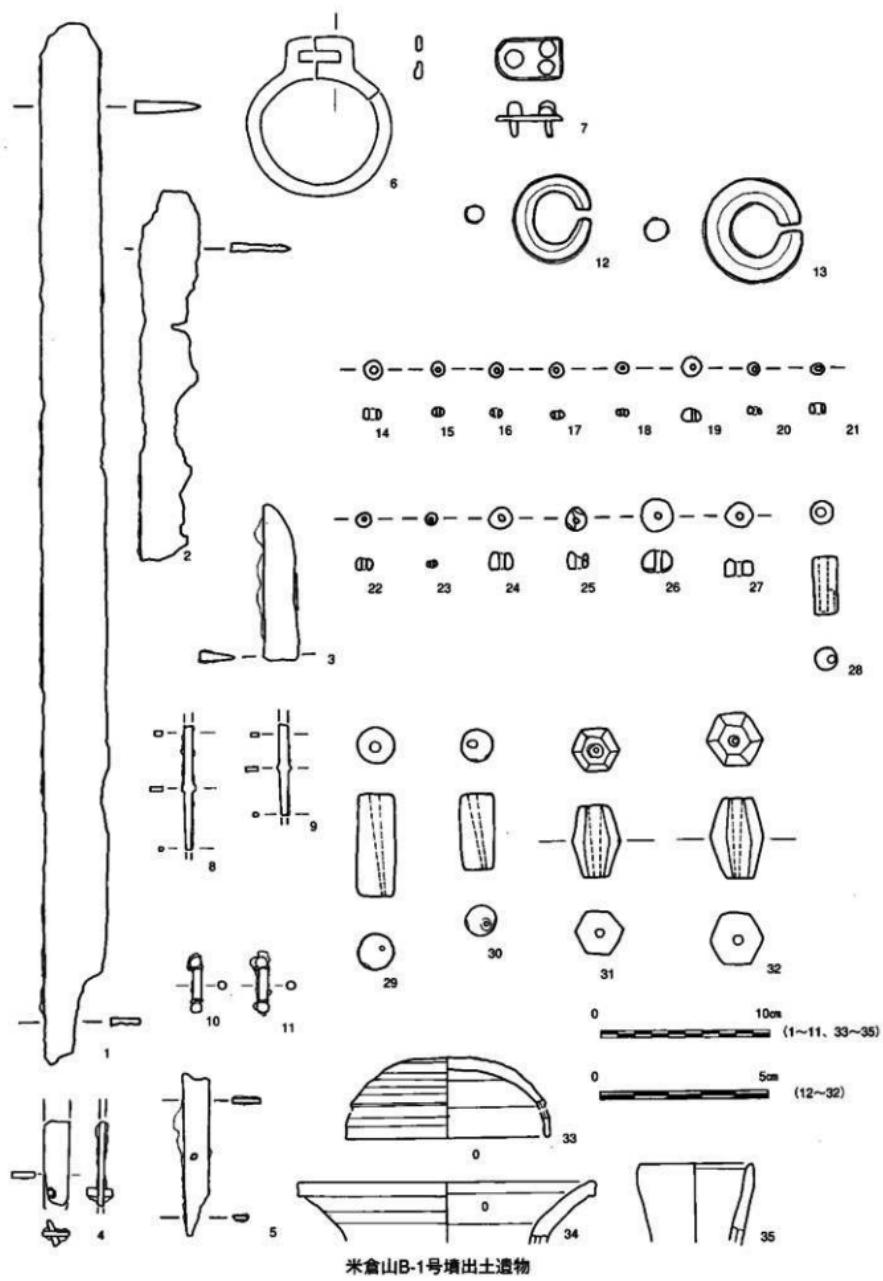
10号土壙出土遺物

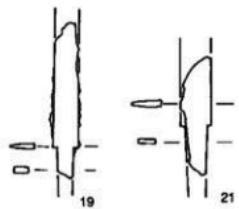
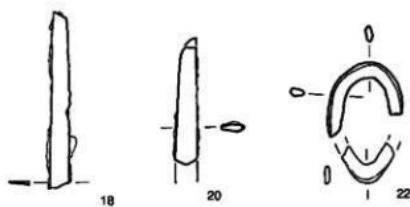
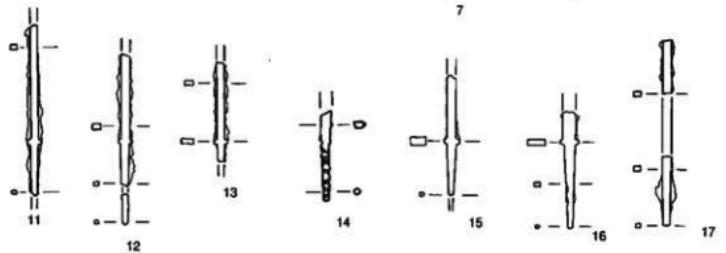
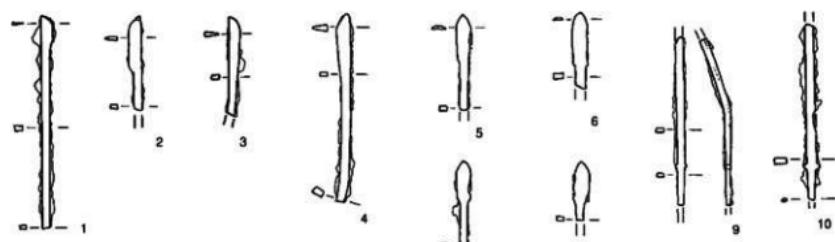
1号方形周溝墓出土遺物 (1)



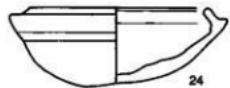
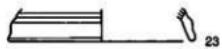


1号方形周溝墓出土遺物（2）

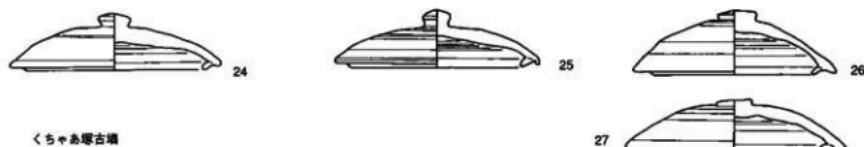
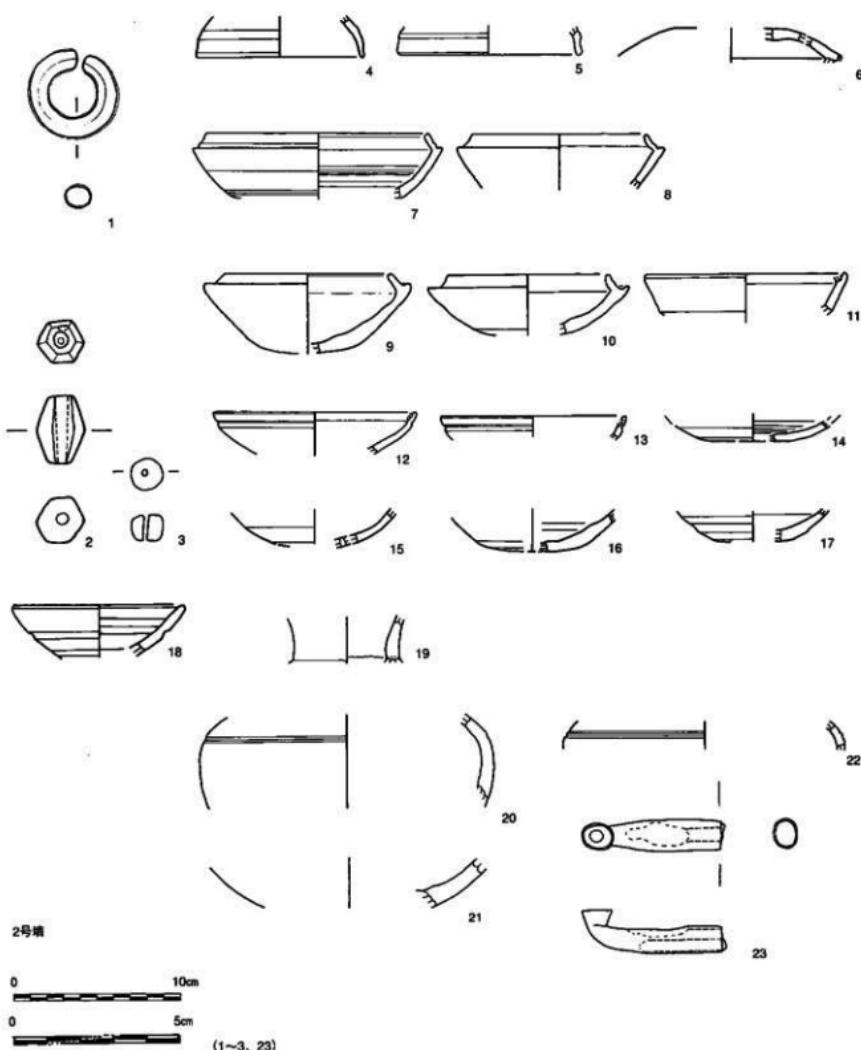




0 10cm

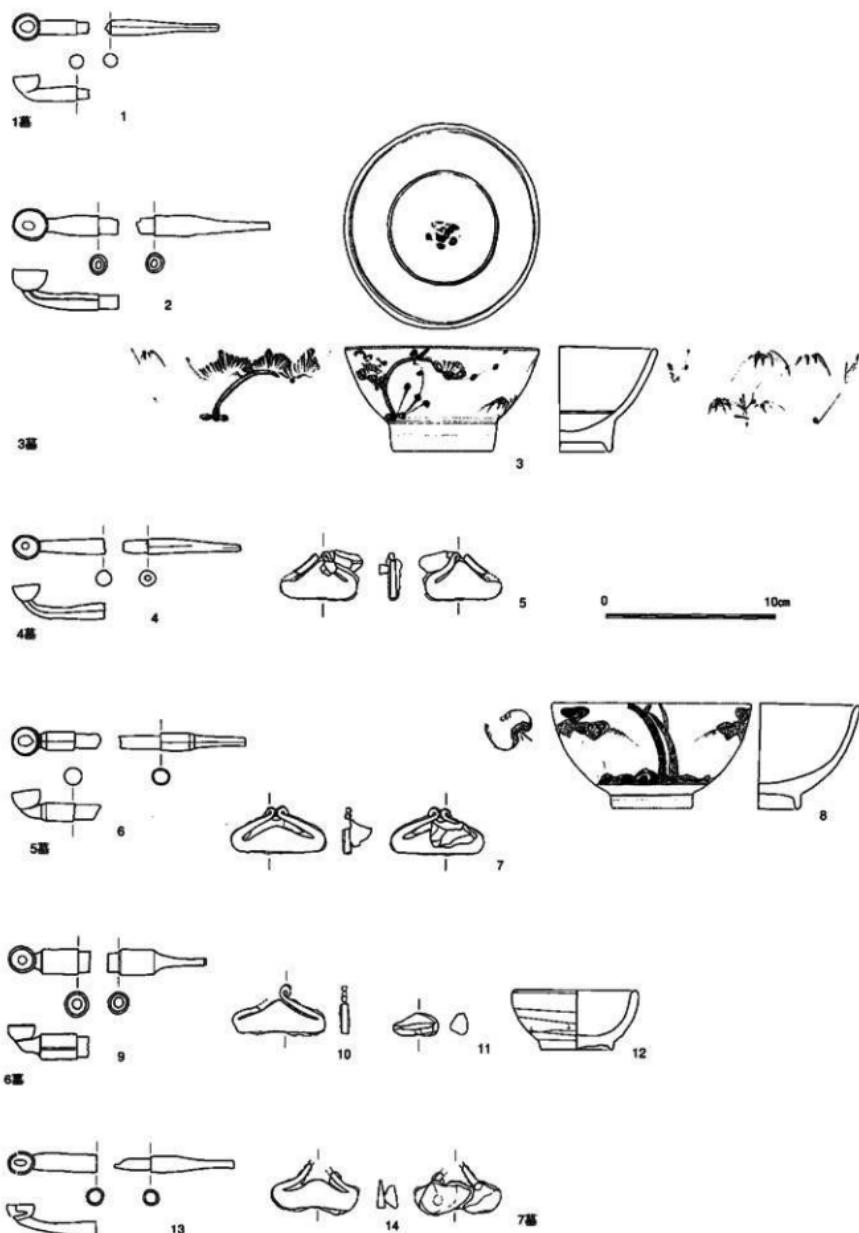


米倉山B-2号墳出土遺物

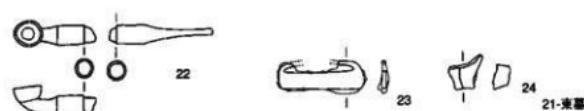
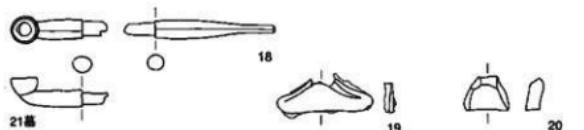
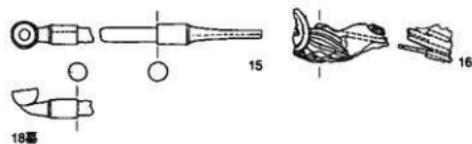
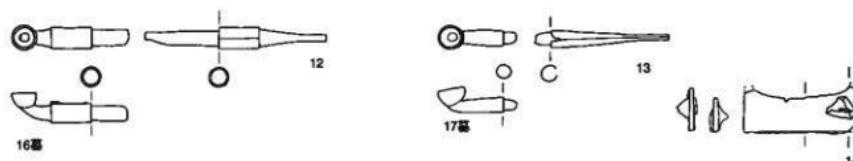
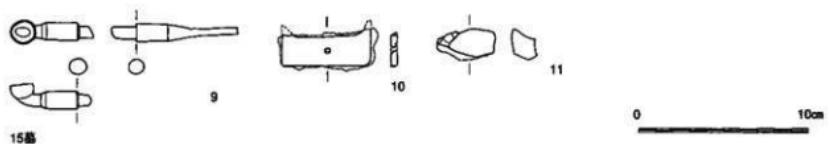
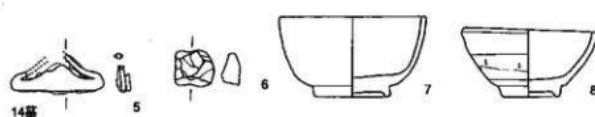
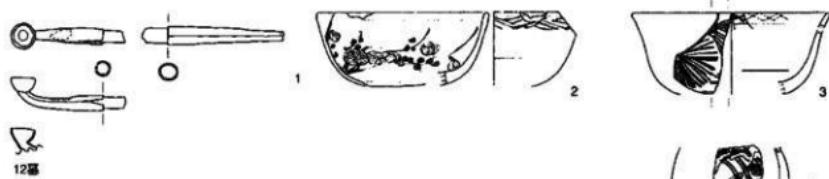


くちゃあ塚古墳

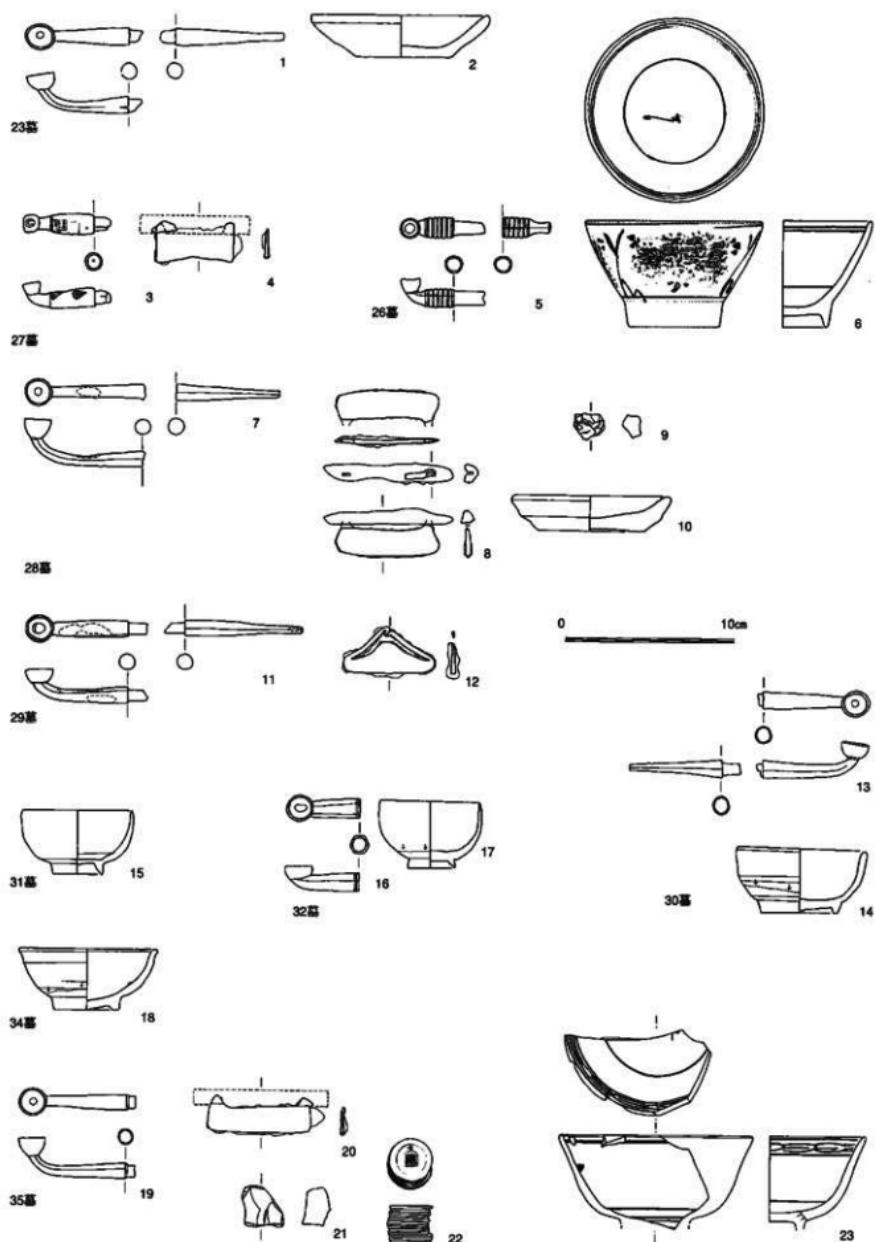
米倉山B-2号墳・くちゃあ塚古墳出土遺物



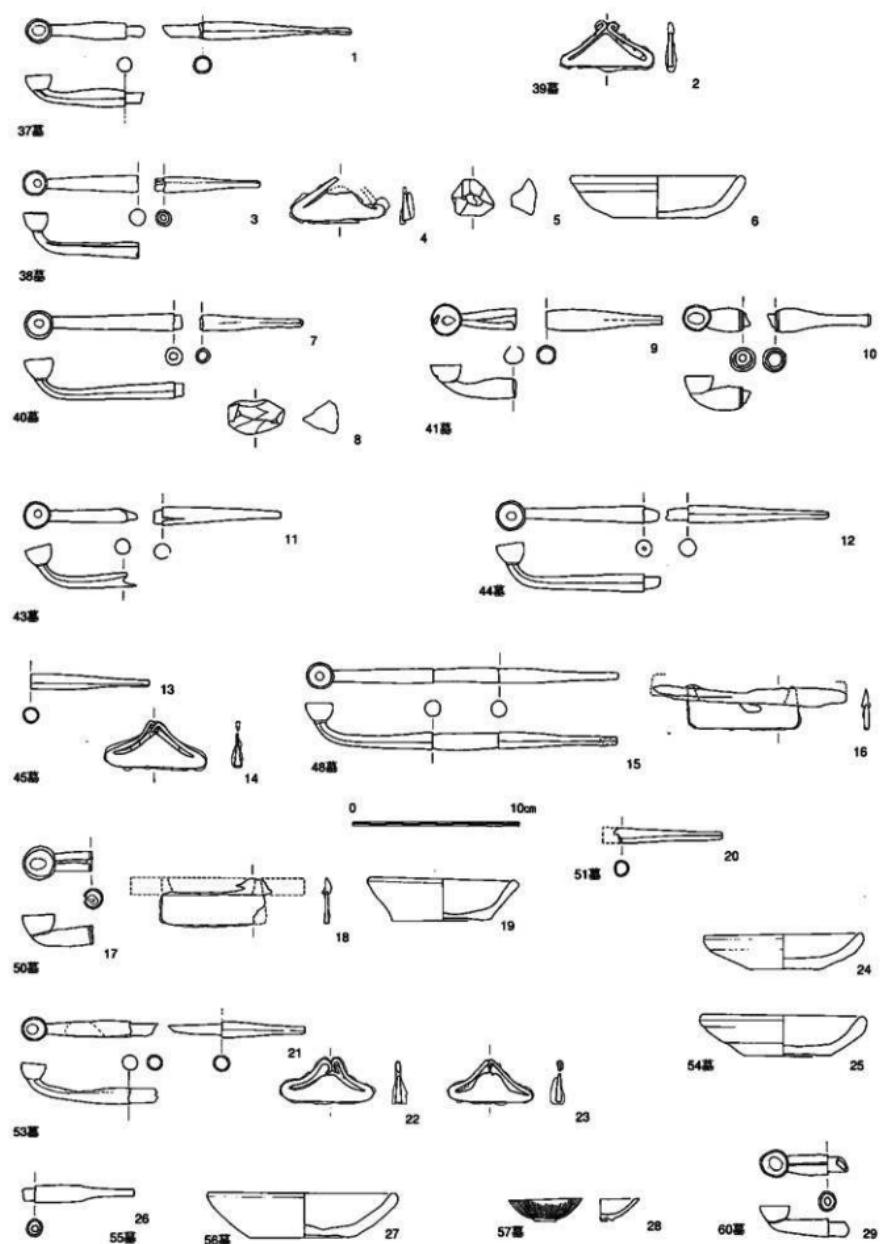
1~11号墓出土遺物



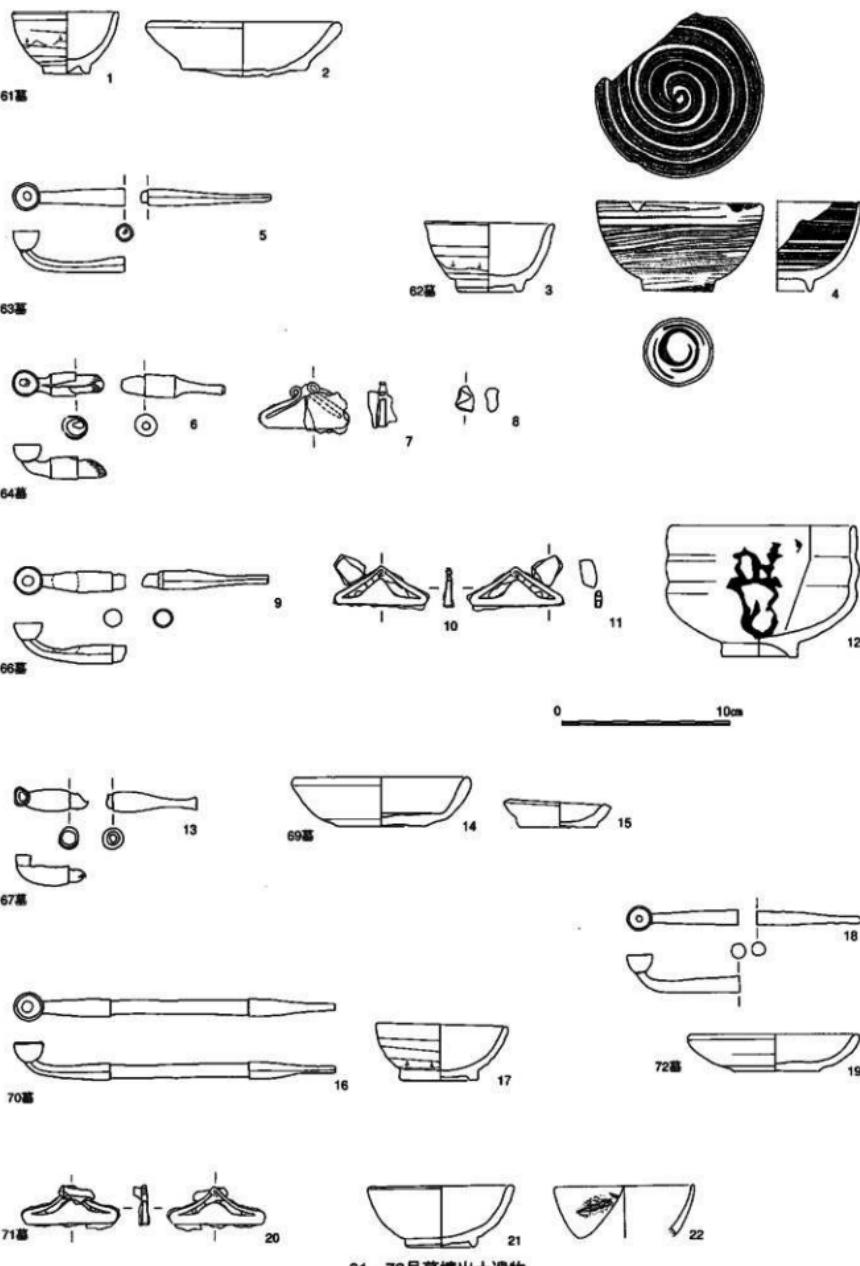
12~21-東号墓塚出土遺物



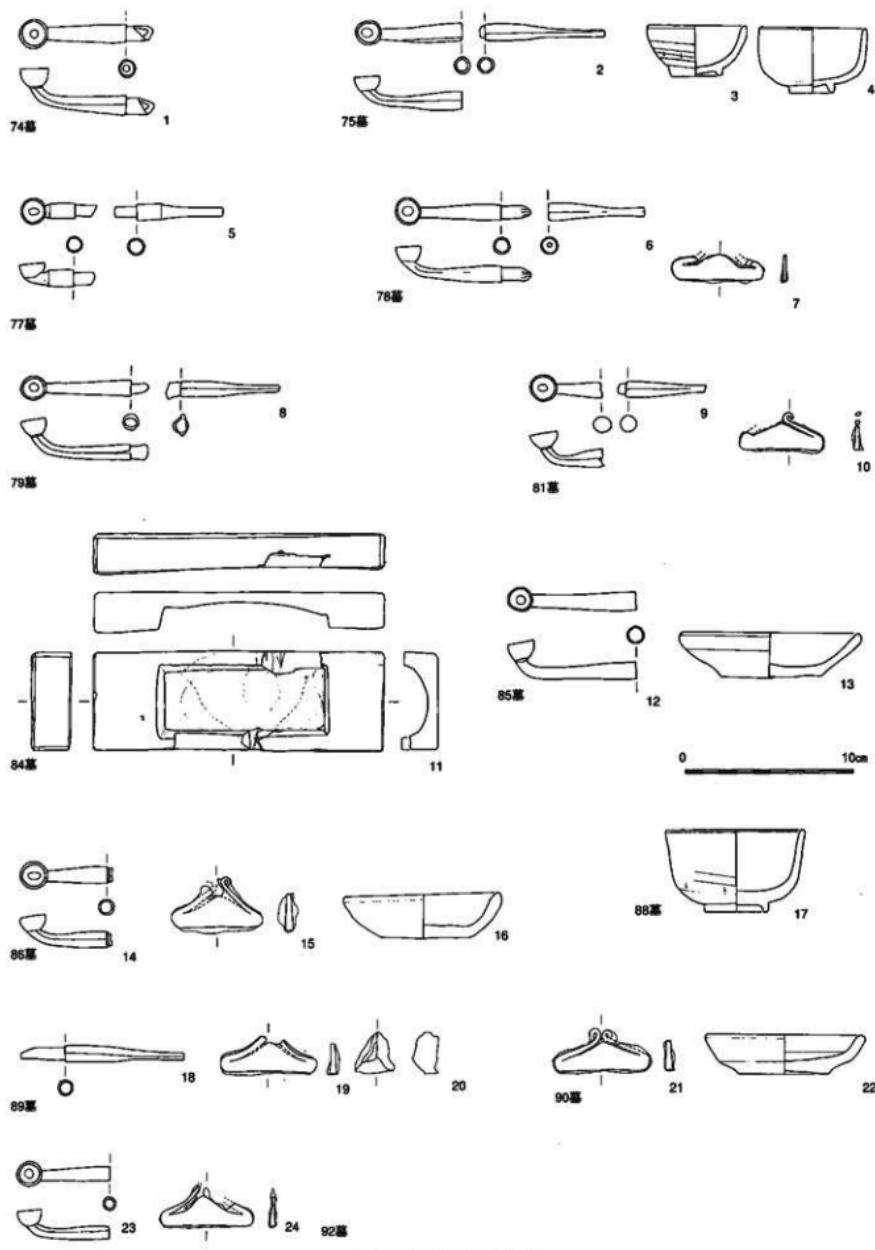
23~35号墓塋出土遺物



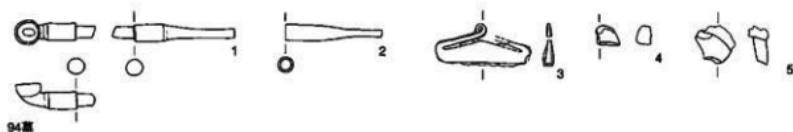
37~60号墓出土遺物



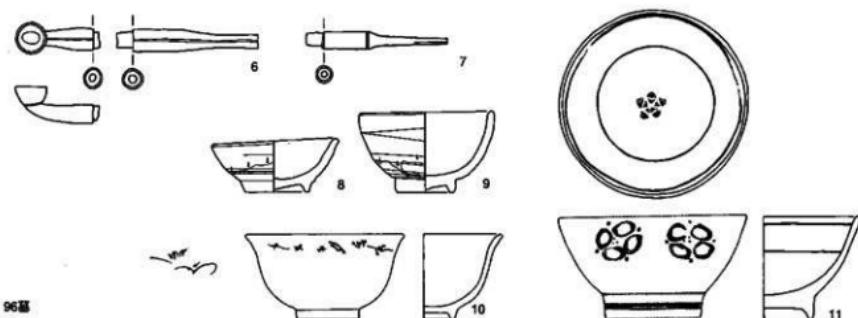
61~72号墓出土遺物



74~92号墓填出土遺物



94墓

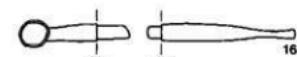


96墓

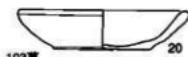


97墓

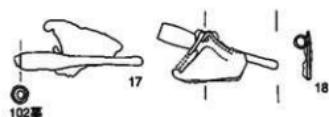
98墓

0
10cm

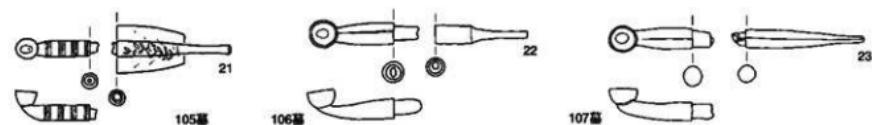
101墓



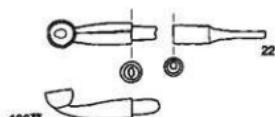
103墓



102墓



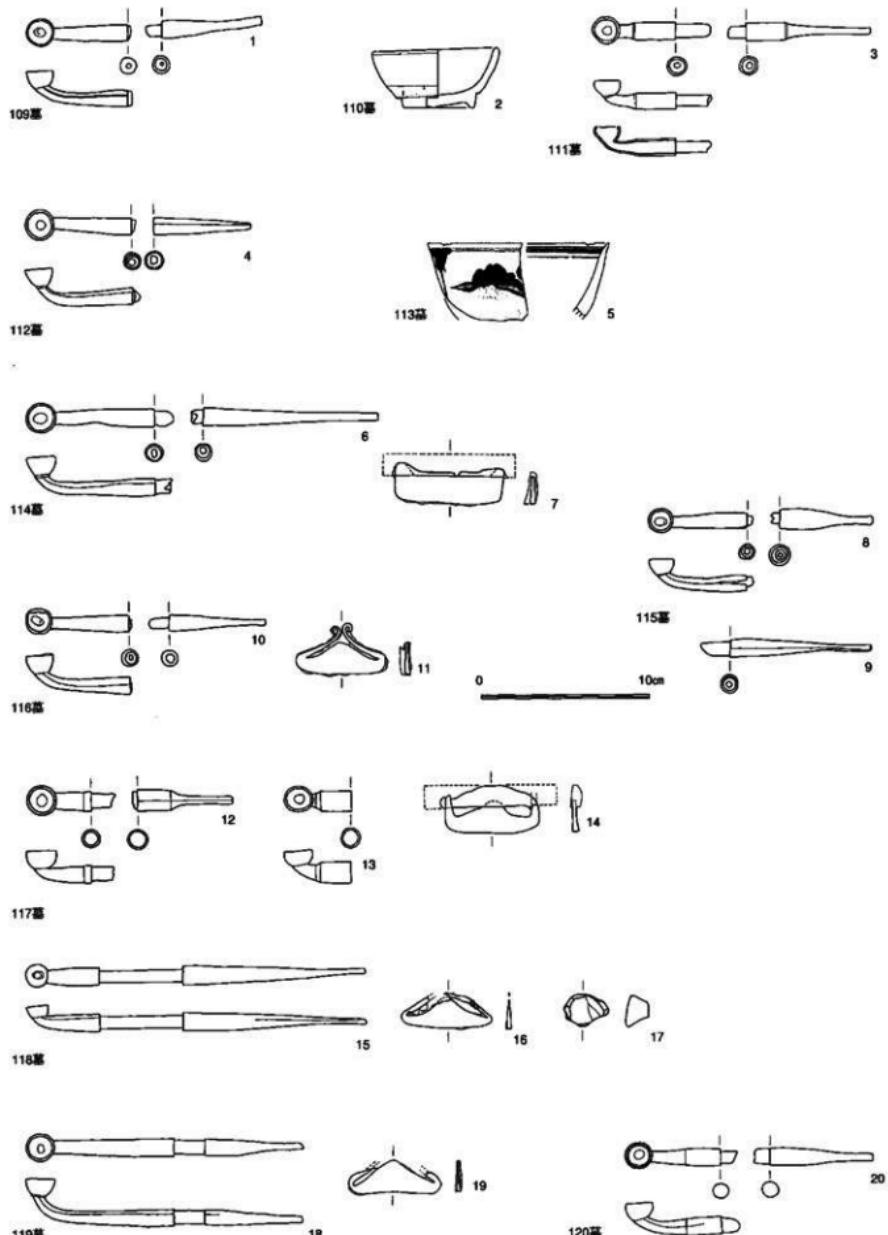
105墓



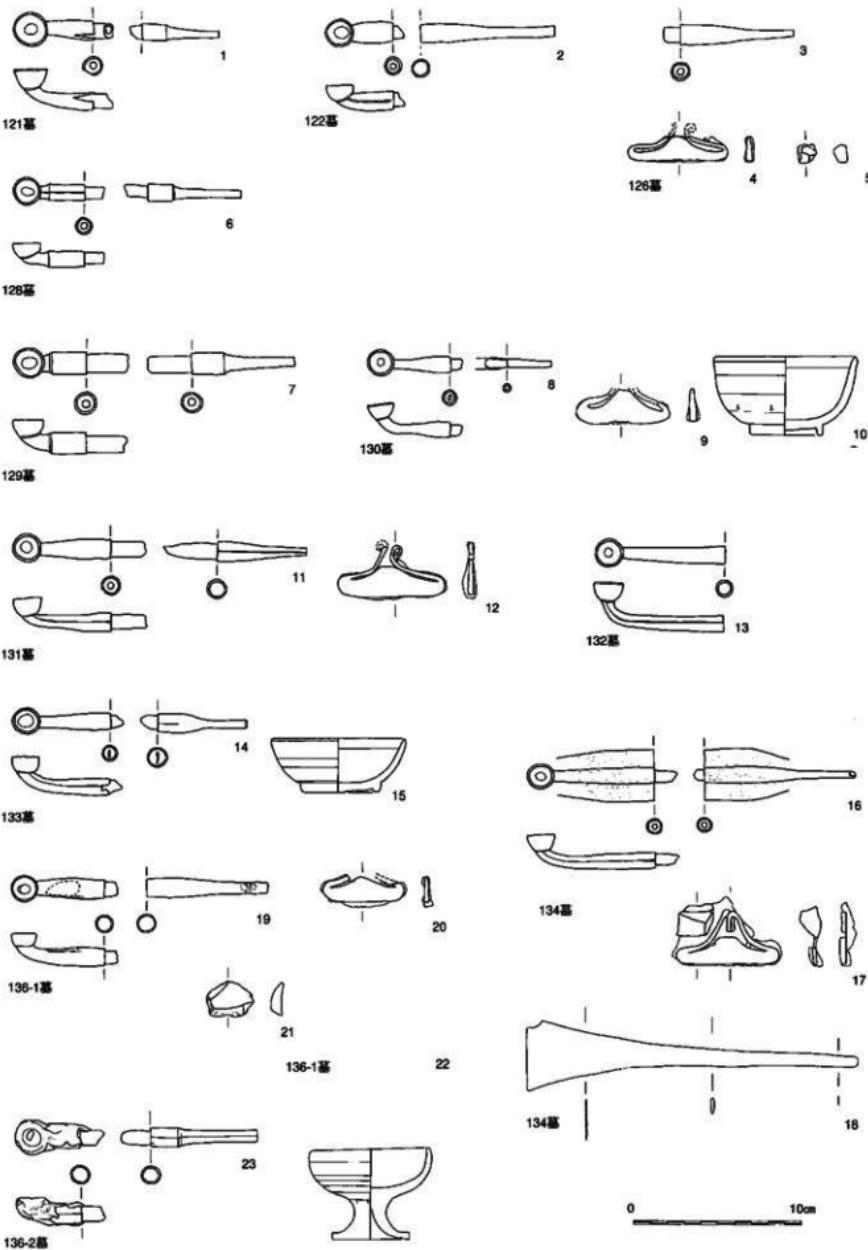
106墓

107墓

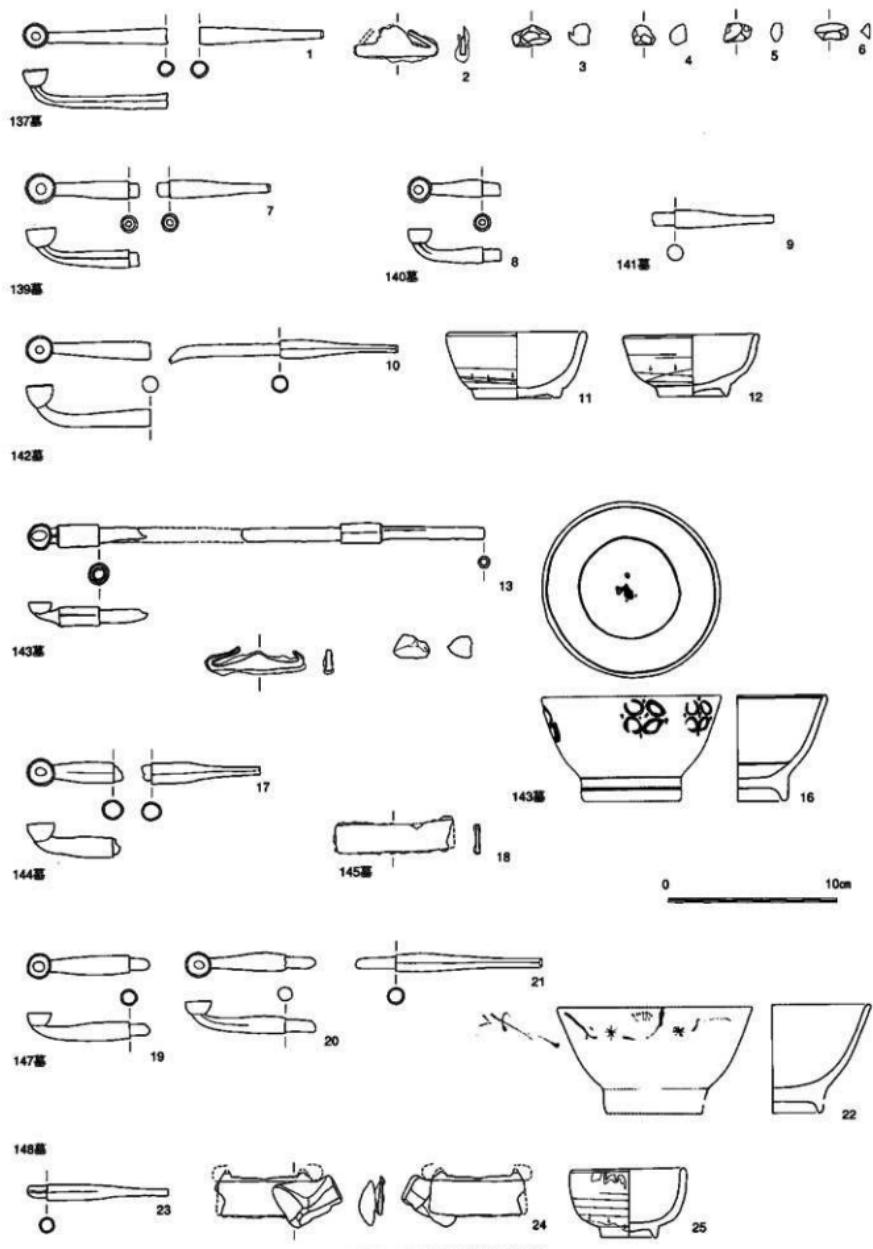
94~107号墓出土遺物



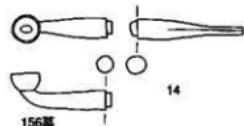
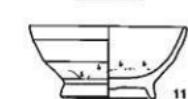
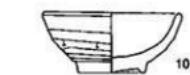
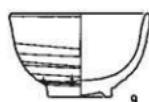
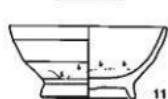
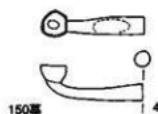
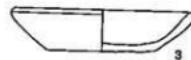
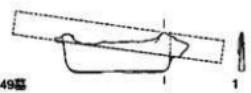
109～120号墓出土遺物



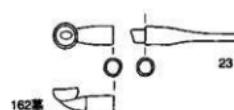
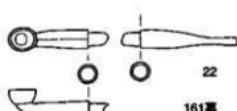
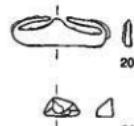
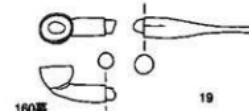
121~136号墓出土遺物



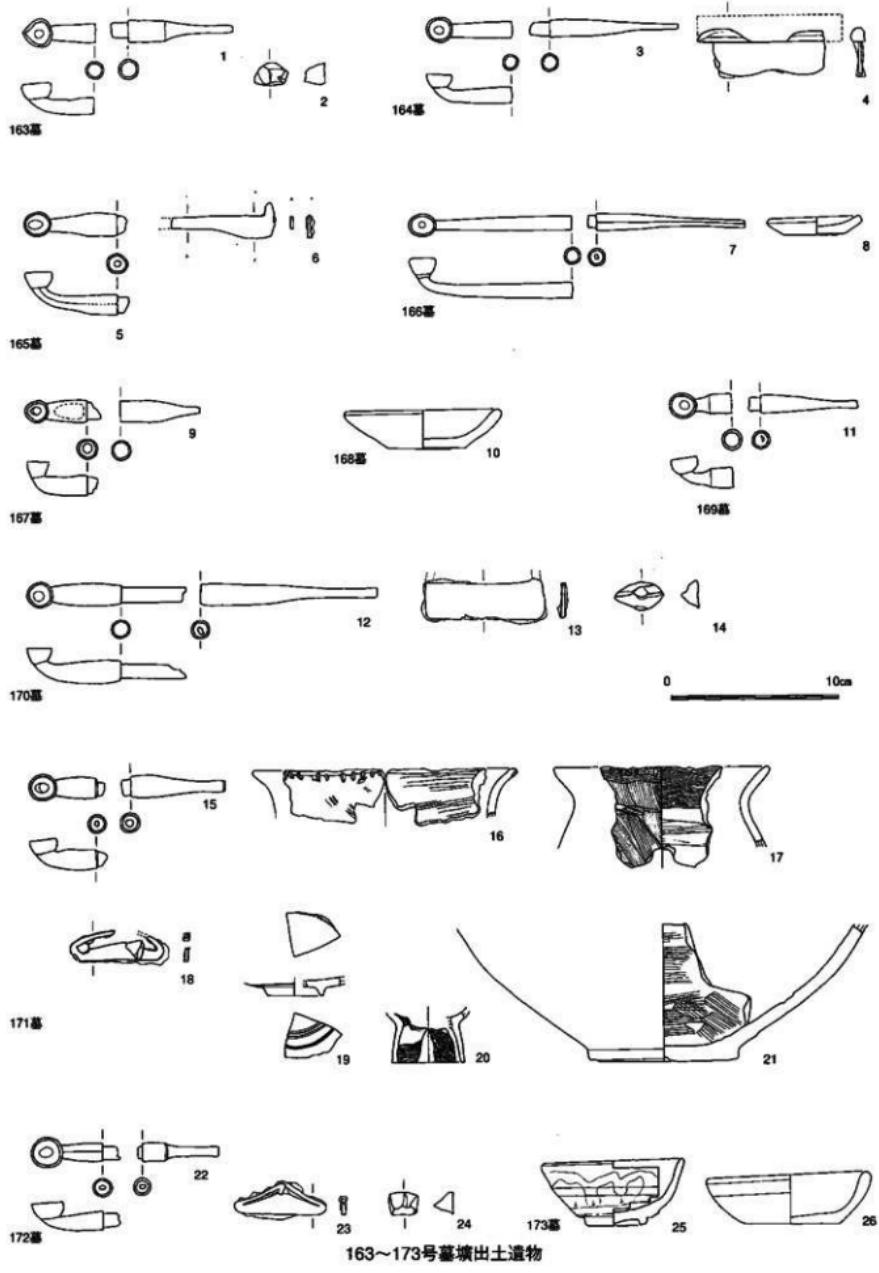
137~148号墓出土遺物

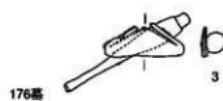
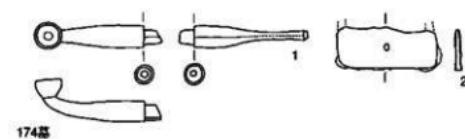


0 10cm

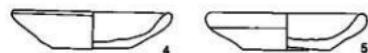


149~162号墓出土遺物

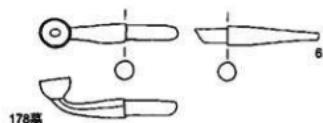




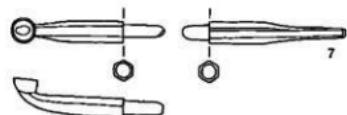
174墓



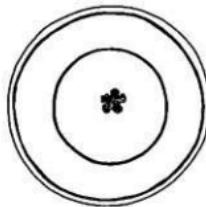
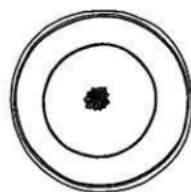
177墓



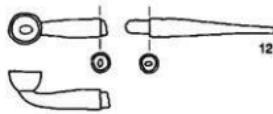
178墓



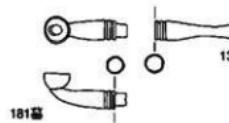
179墓



0 10cm



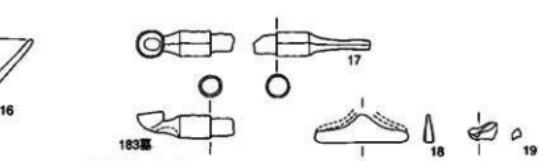
180墓



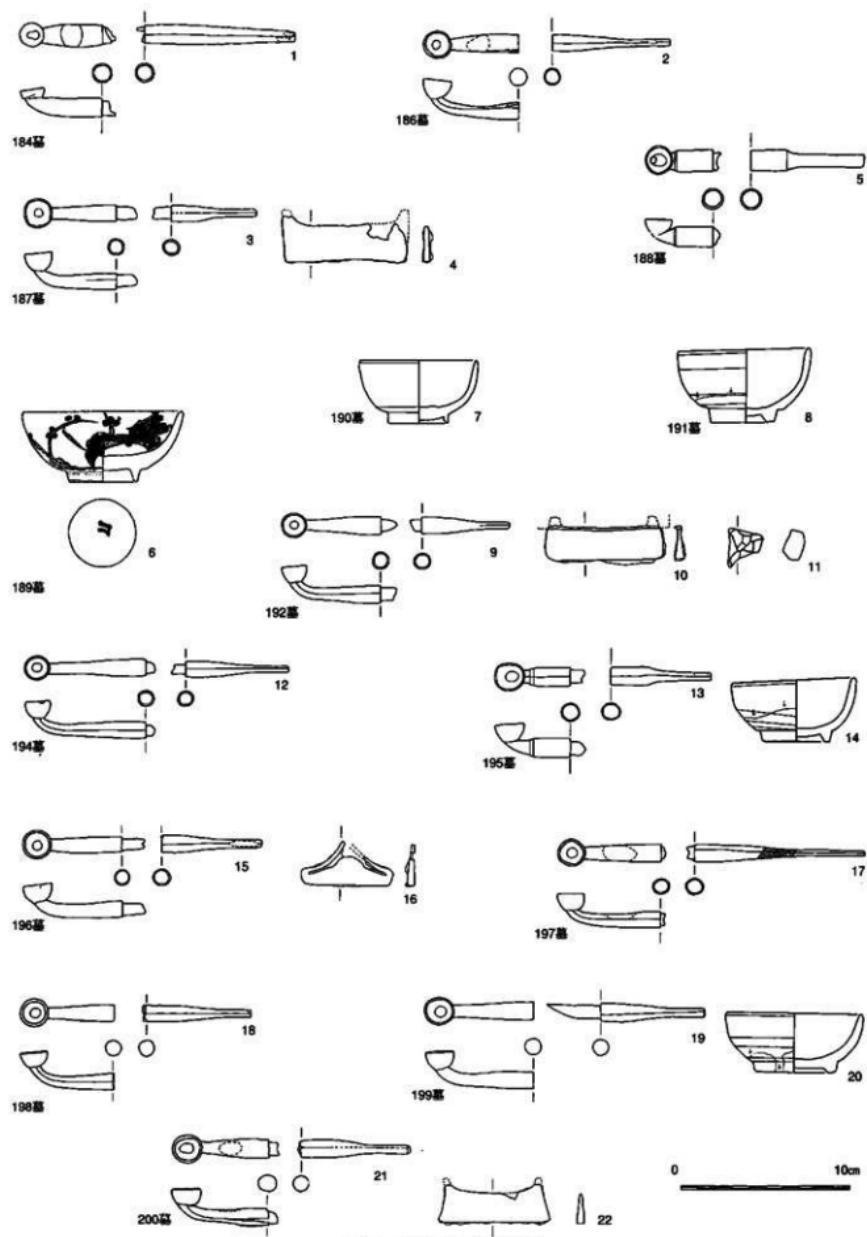
181墓



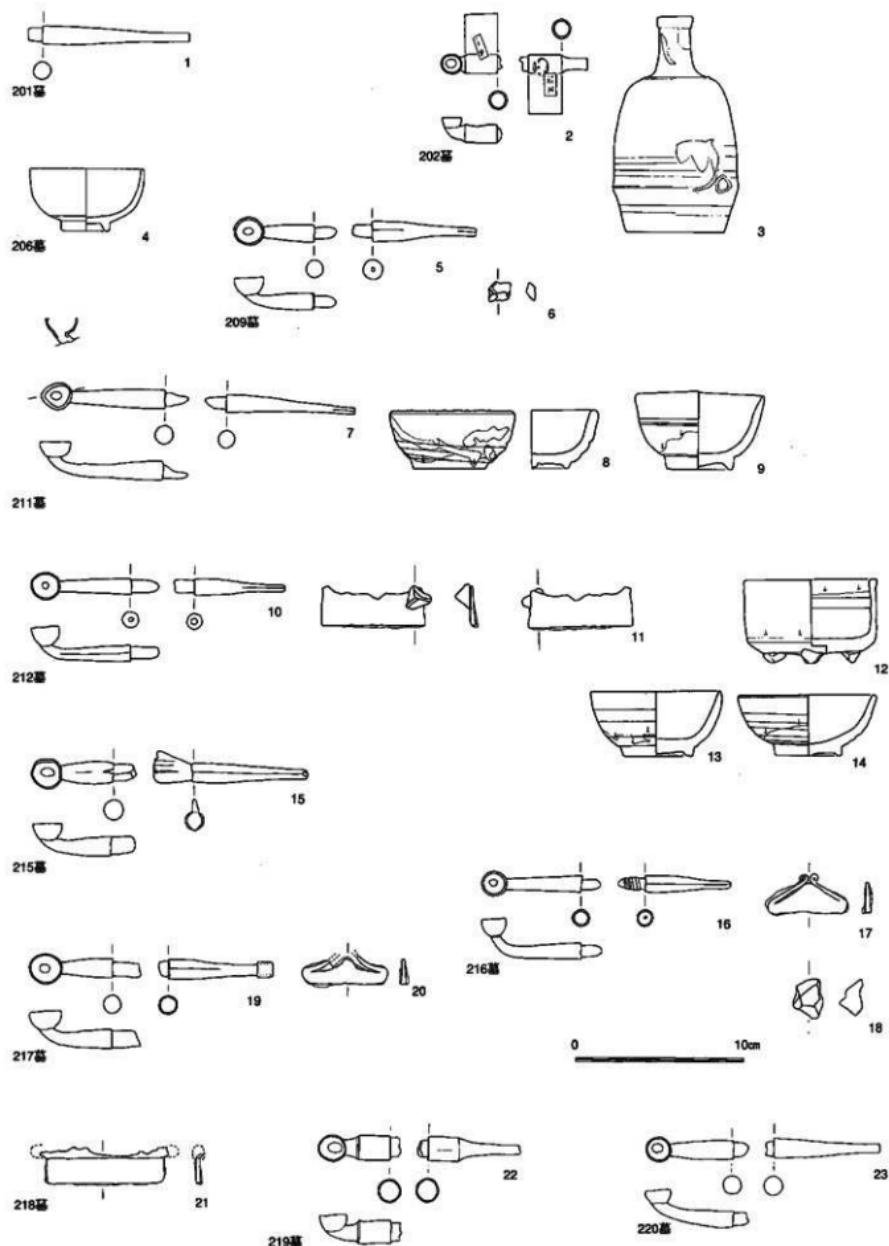
182墓



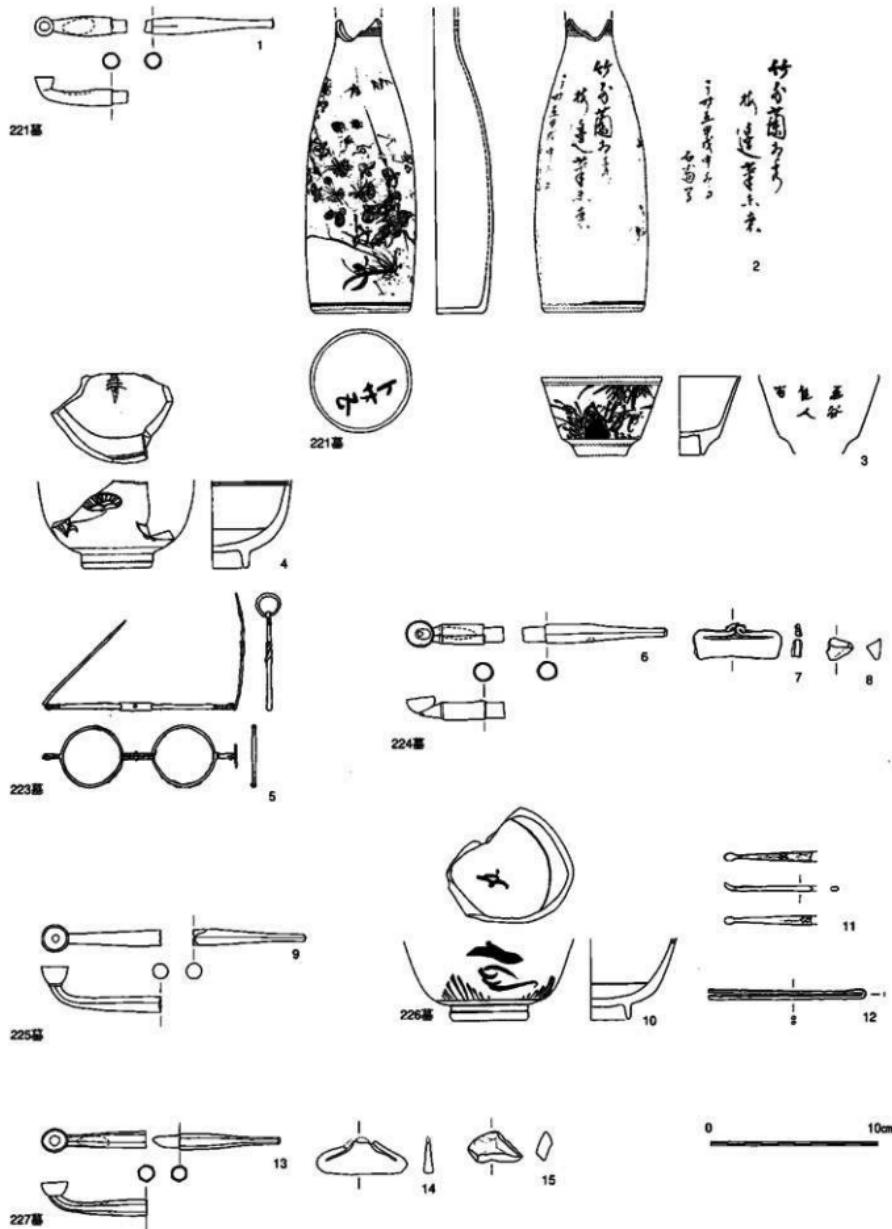
174～183号墓出土遺物



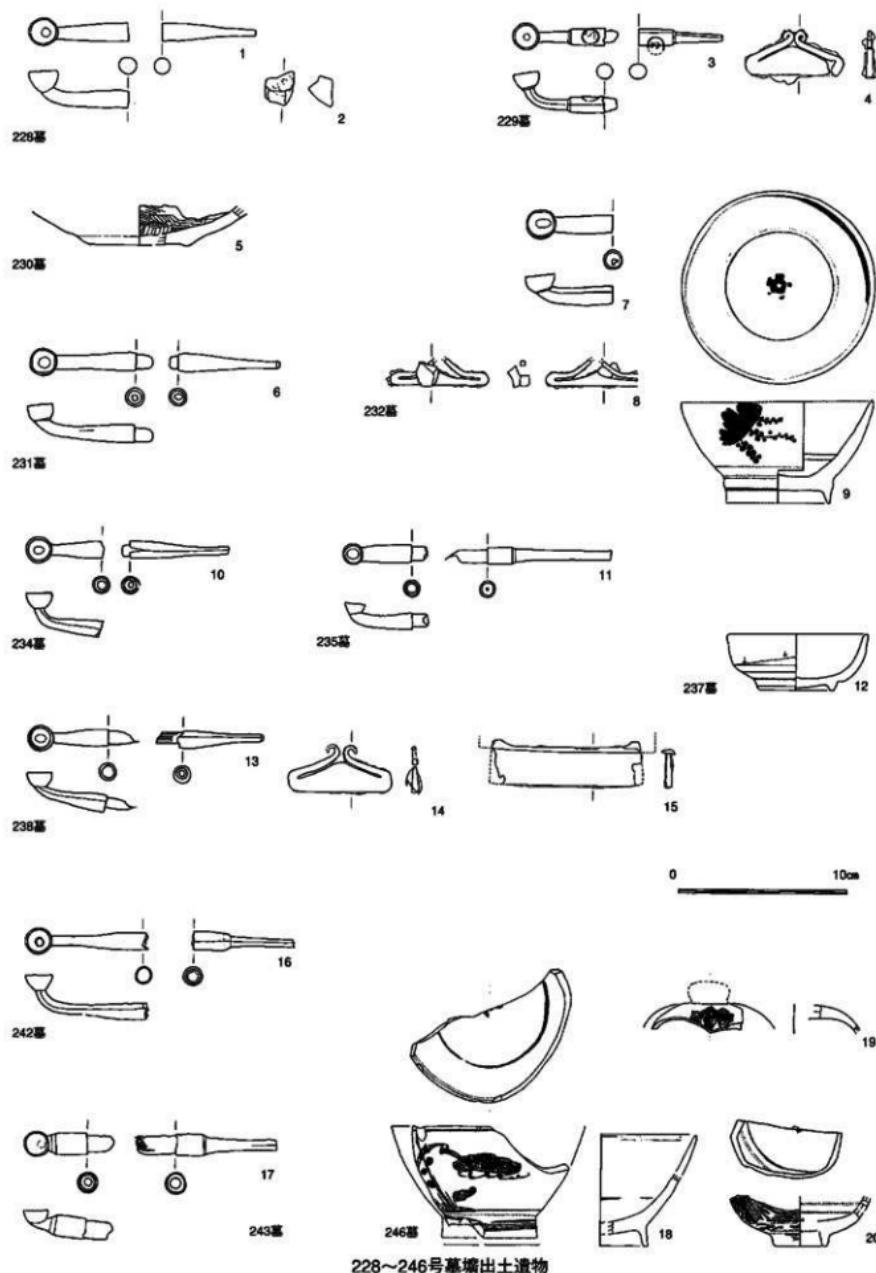
184~200号墓出土遺物



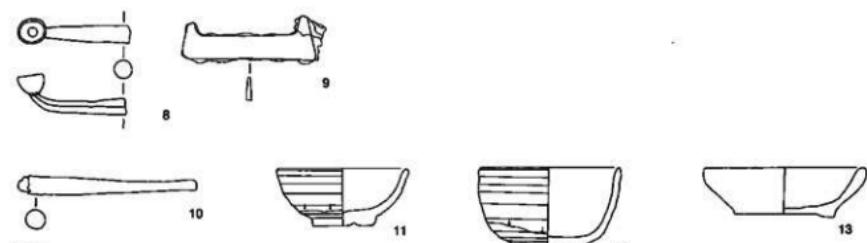
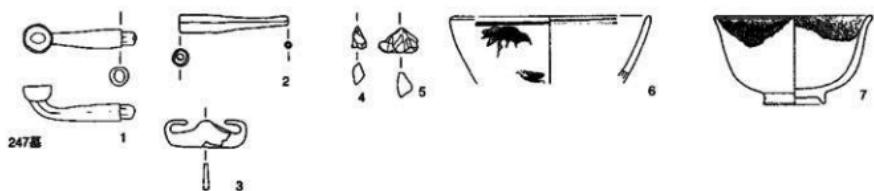
201~220号墓出土遺物



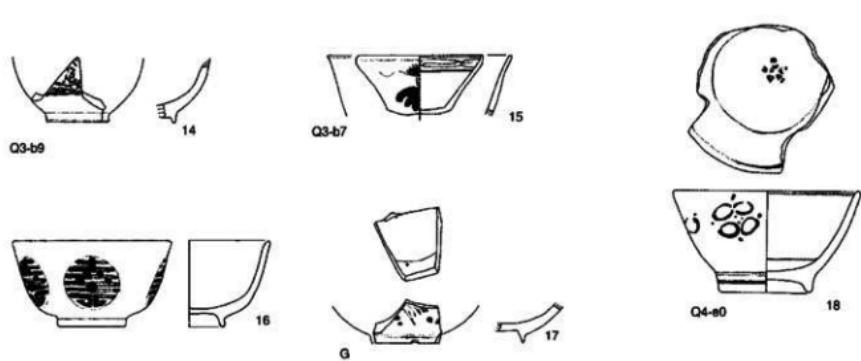
221~227号墓出土遗物



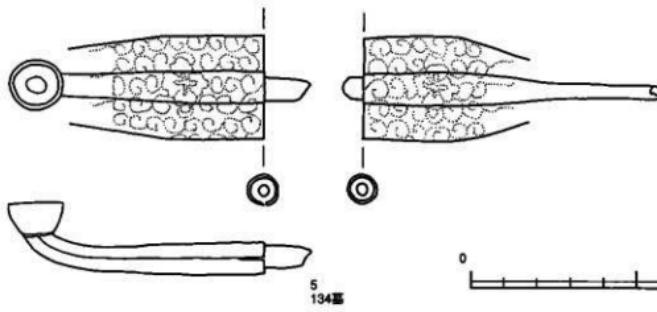
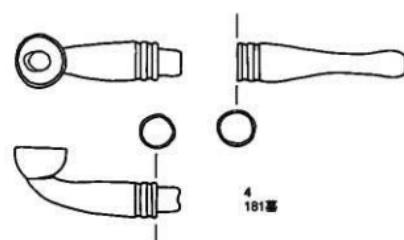
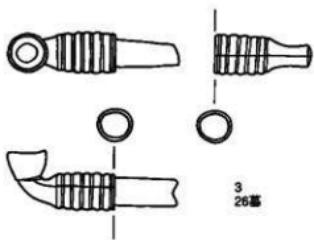
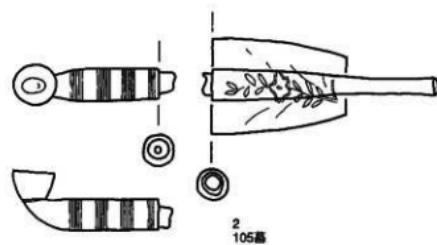
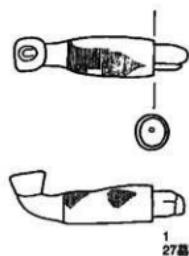
228~246号墓出土遺物



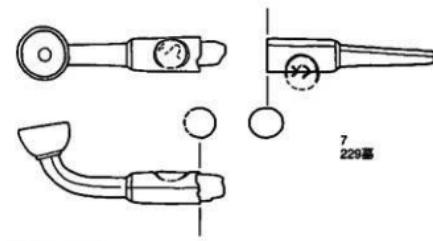
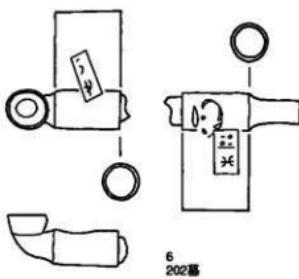
0 10cm



146・247号墓壙及びグリッド出土遺物



0 10cm



墓塚出土裝飾煙管類

-○--○--○--○--○-

OD₁ OD₂ OD₃ OD₄ OD₅

2基

-○--○--○--○--○--○--○--○--○--○--○-

OD₆ OD₇ OD₈ OD₉ OD₁₀ OD₁₁ OD₁₂ OD₁₃ OD₁₄ OD₁₅

-○--○--○--○--○--○--○--○--○--○-

OD₁₆ OD₁₇ OD₁₈ OD₁₉ OD₂₀ OD₂₁ OD₂₂ OD₂₃ OD₂₄

11基

-○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○-

OD₂₅ OD₂₆ OD₂₇ OD₂₈ OD₂₉ OD₃₀ OD₃₁ OD₃₂ OD₃₃ OD₃₄ OD₃₅

-○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○-

OD₃₆ OD₃₇ OD₃₈ OD₃₉ OD₄₀ OD₄₁ OD₄₂ OD₄₃ OD₄₄ OD₄₅ OD₄₆

-○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○- -○-

OD₄₇ OD₄₈ OD₄₉ OD₅₀ OD₅₁ OD₅₂ OD₅₃ OD₅₄ OD₅₅ OD₅₆ OD₅₇

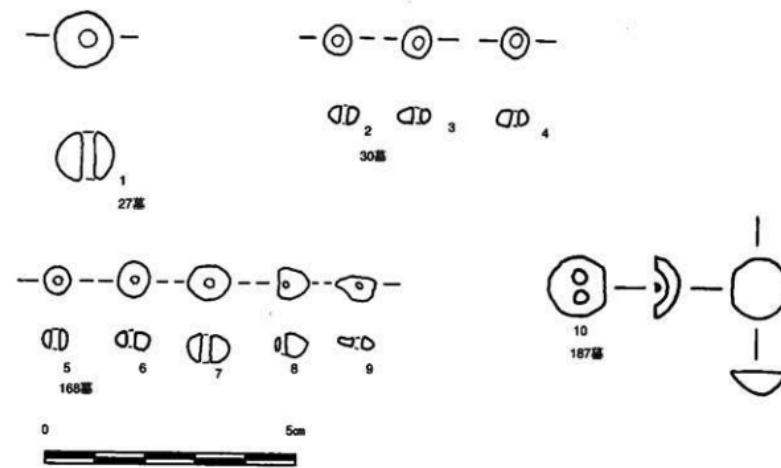
-○- -○- -○- -○- -○- -○-

OD₅₈ OD₅₉ OD₆₀ OD₆₁ OD₆₂ OD₆₃

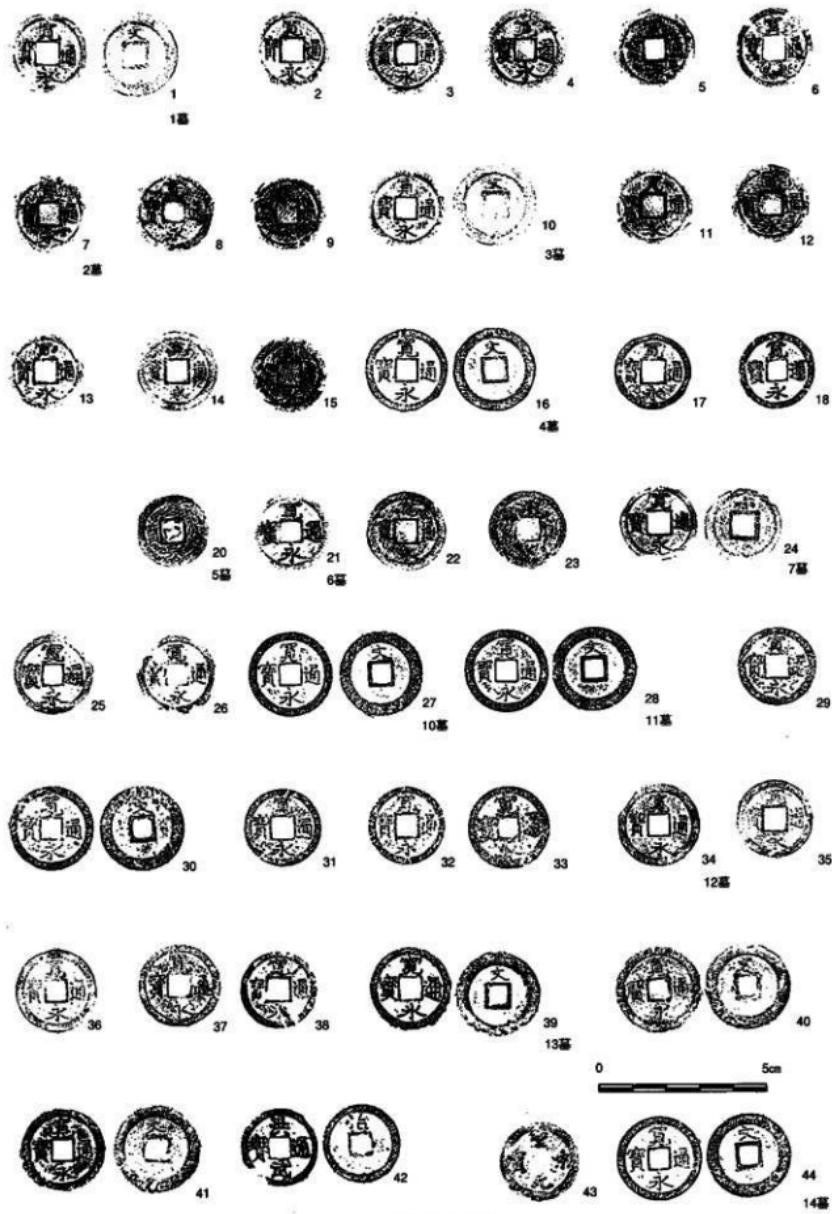


13基

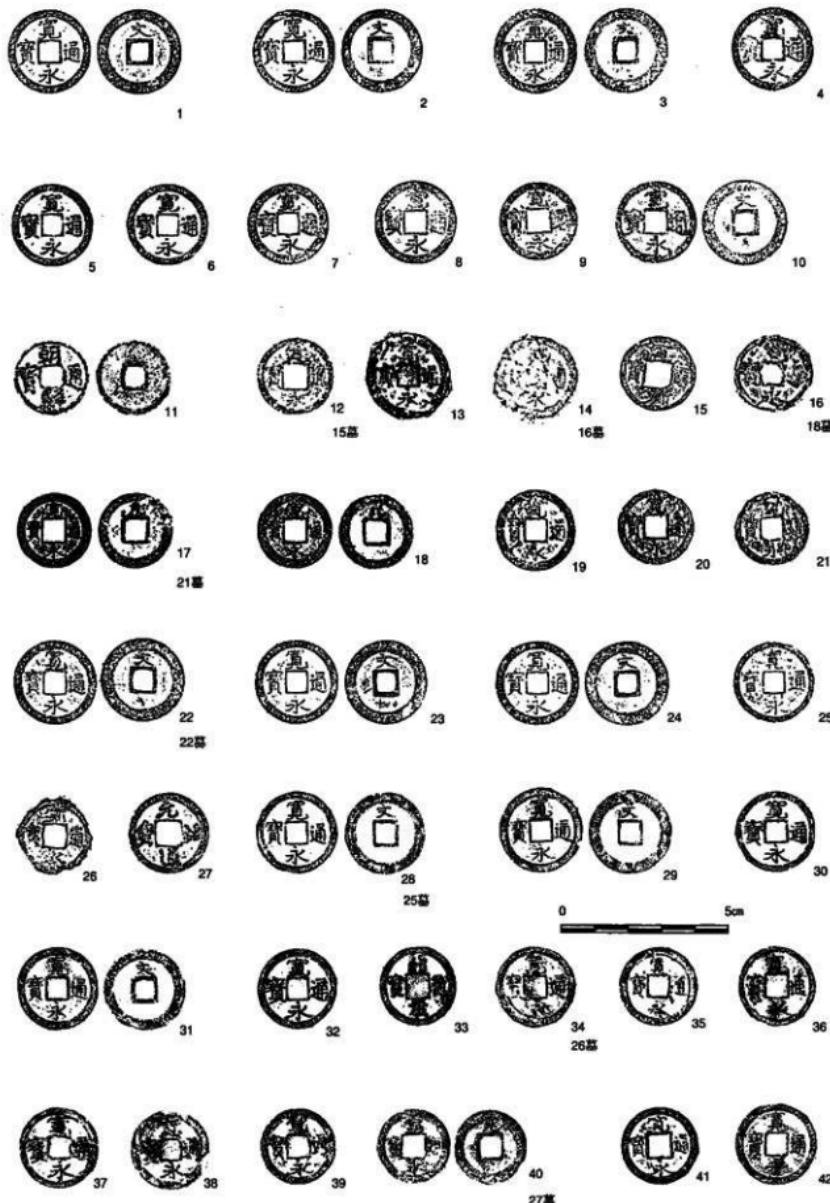
墓墳出土数珠類 (1)



墓壙出土数珠・ボタン類 (2)

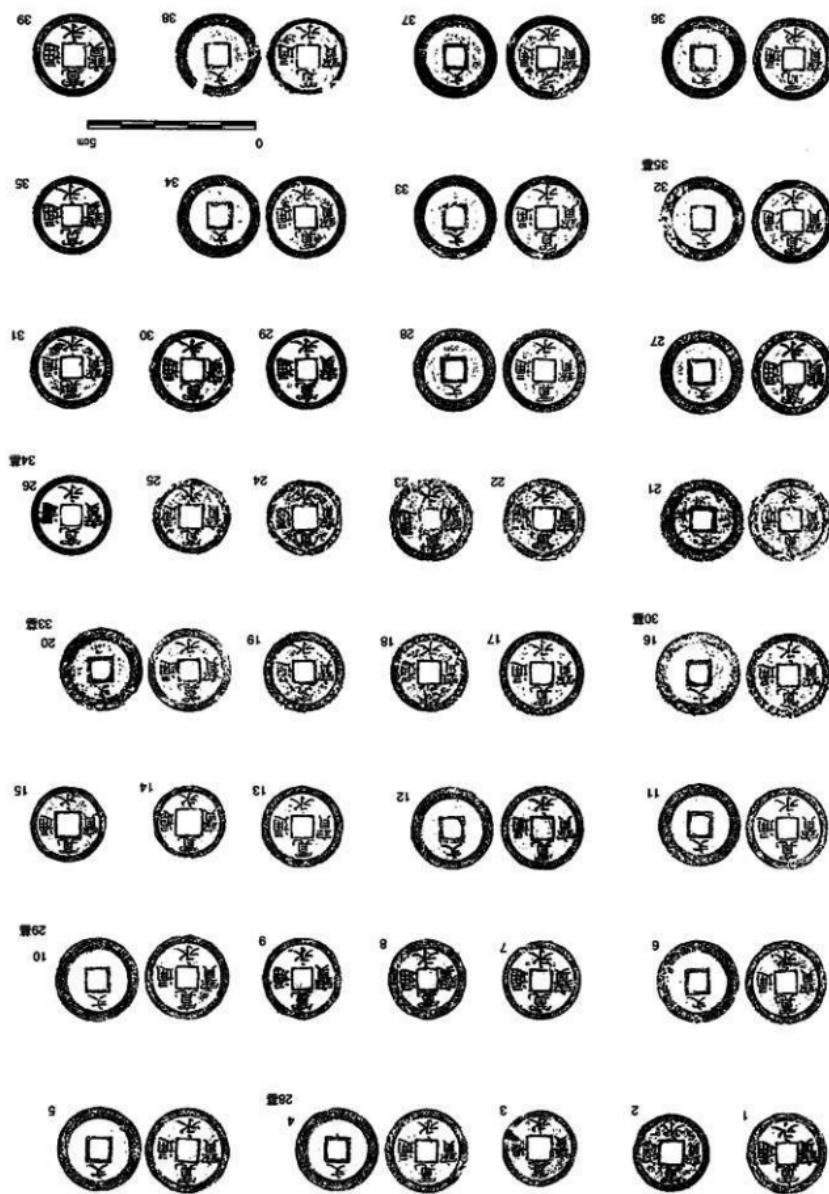


1～14号墓出土銭

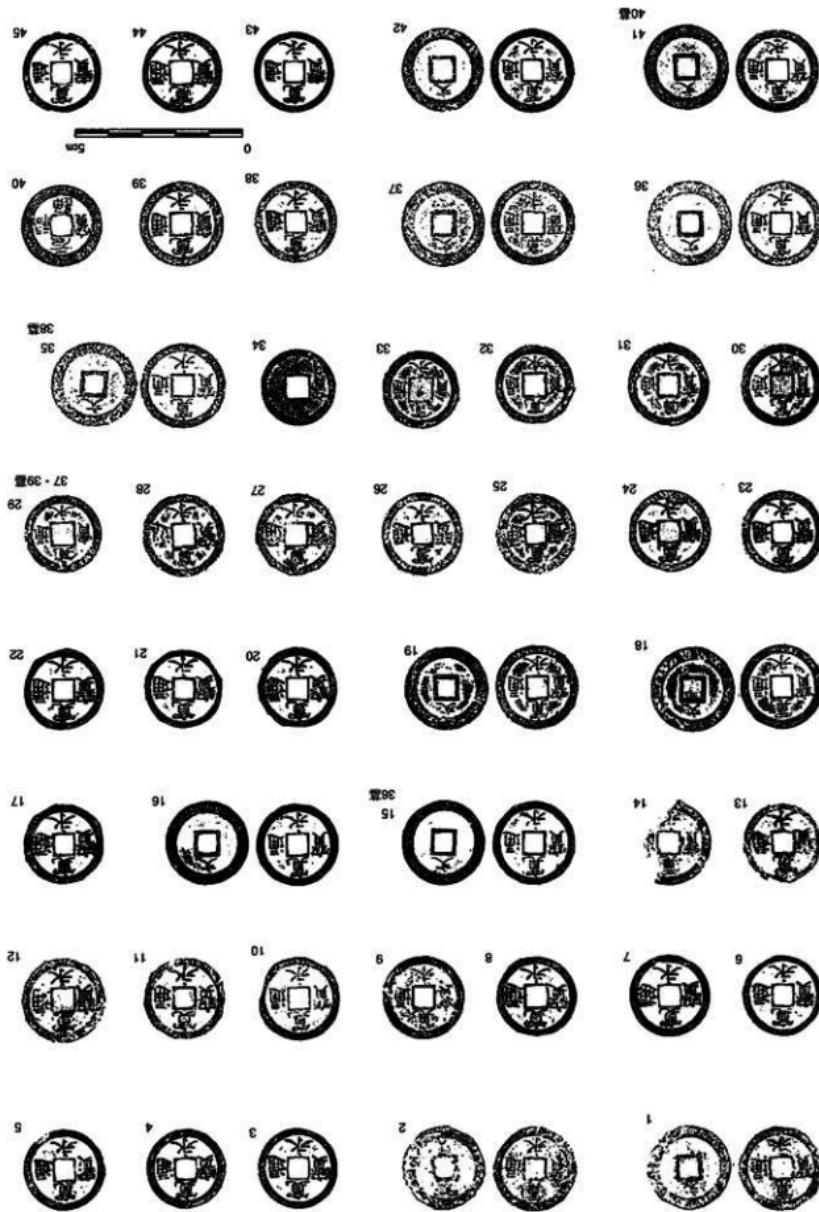


14~27号墓出土錢

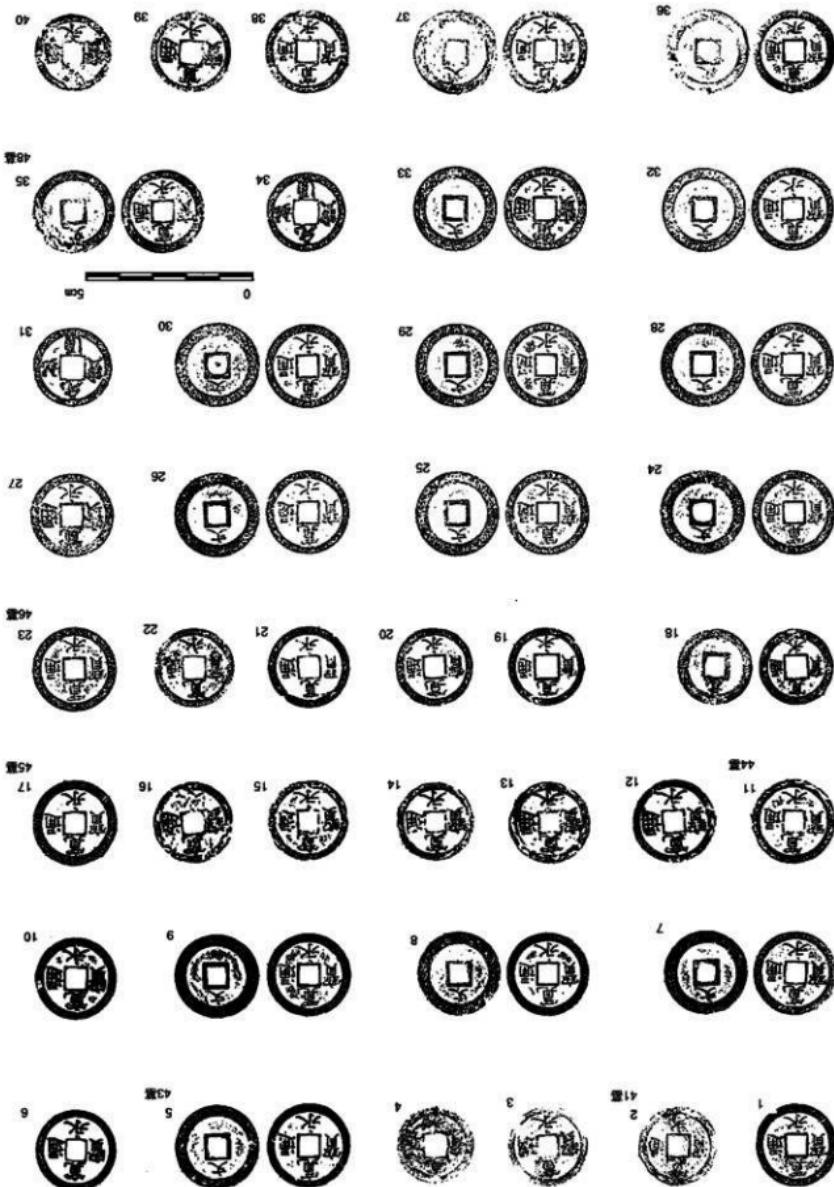
27~35号墓出土錢



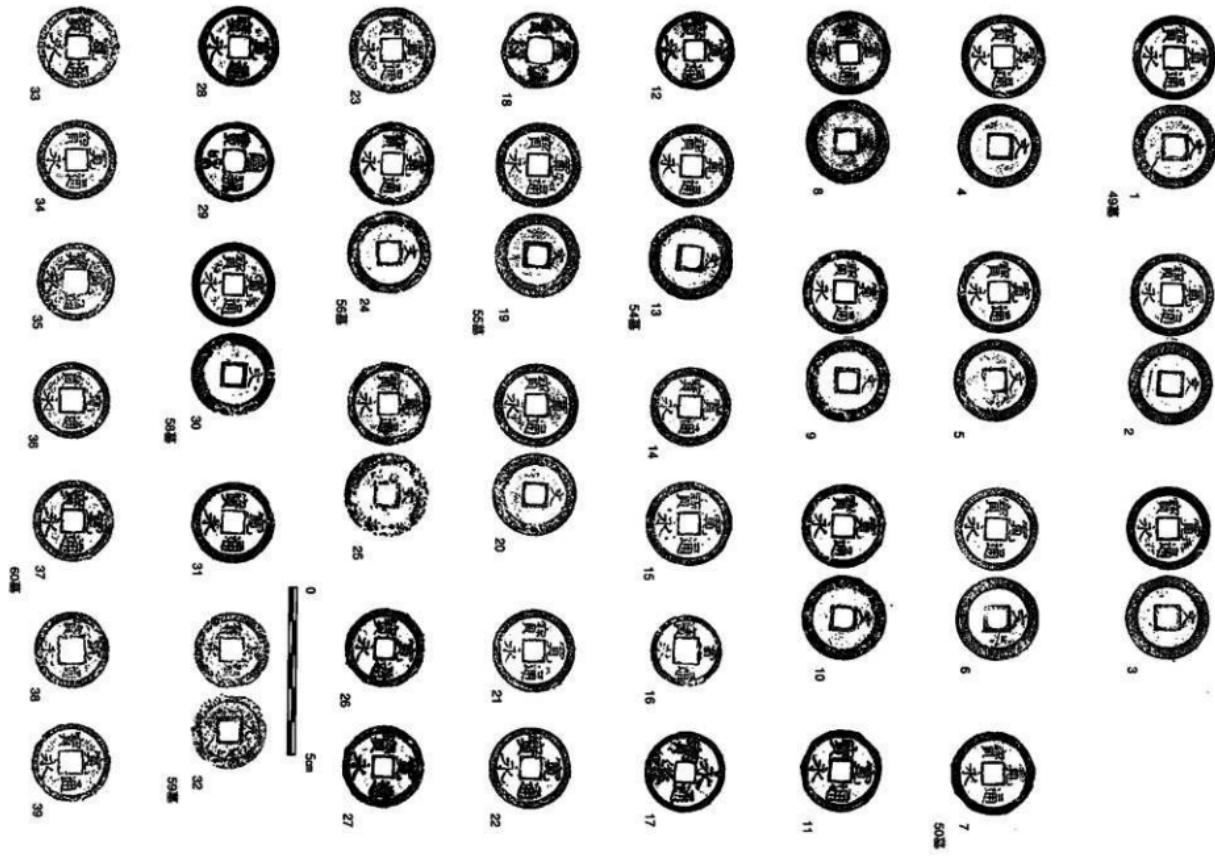
35~40号墓出土錢

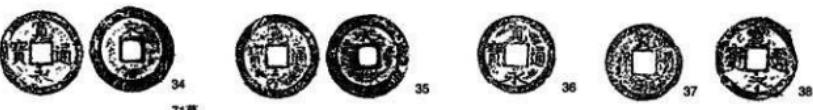


40~48号墓出土錢



第09~64





0 5cm



61~73号墓出土錢



74墓



75墓



76墓



77墓



81墓

0 5cm



82墓 83墓

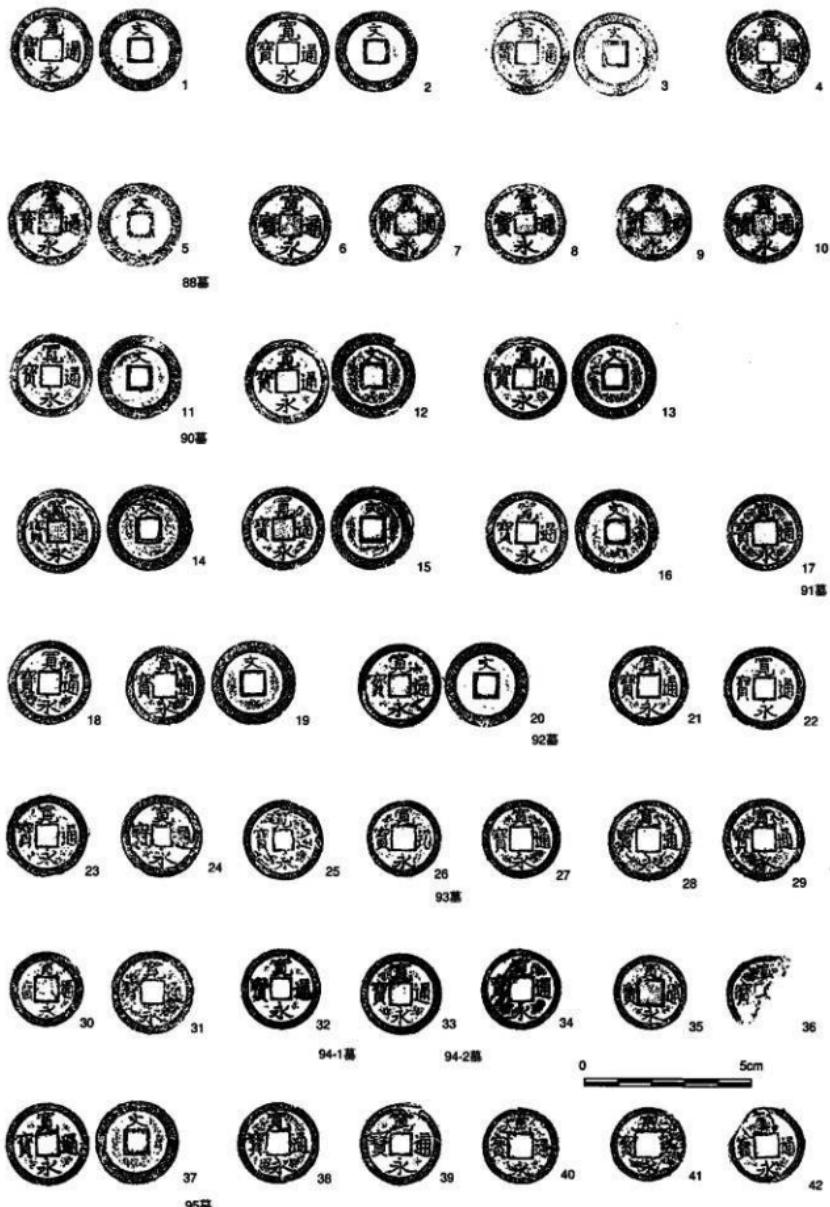


84墓

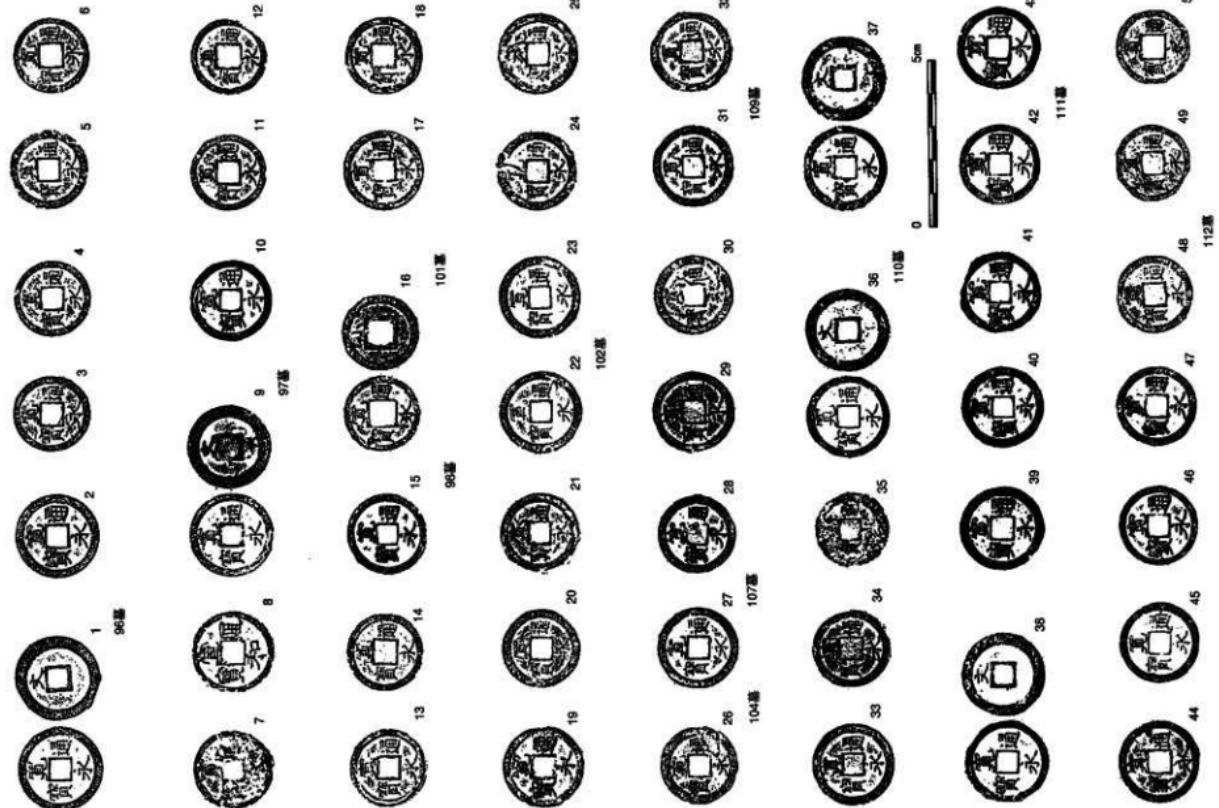


85墓

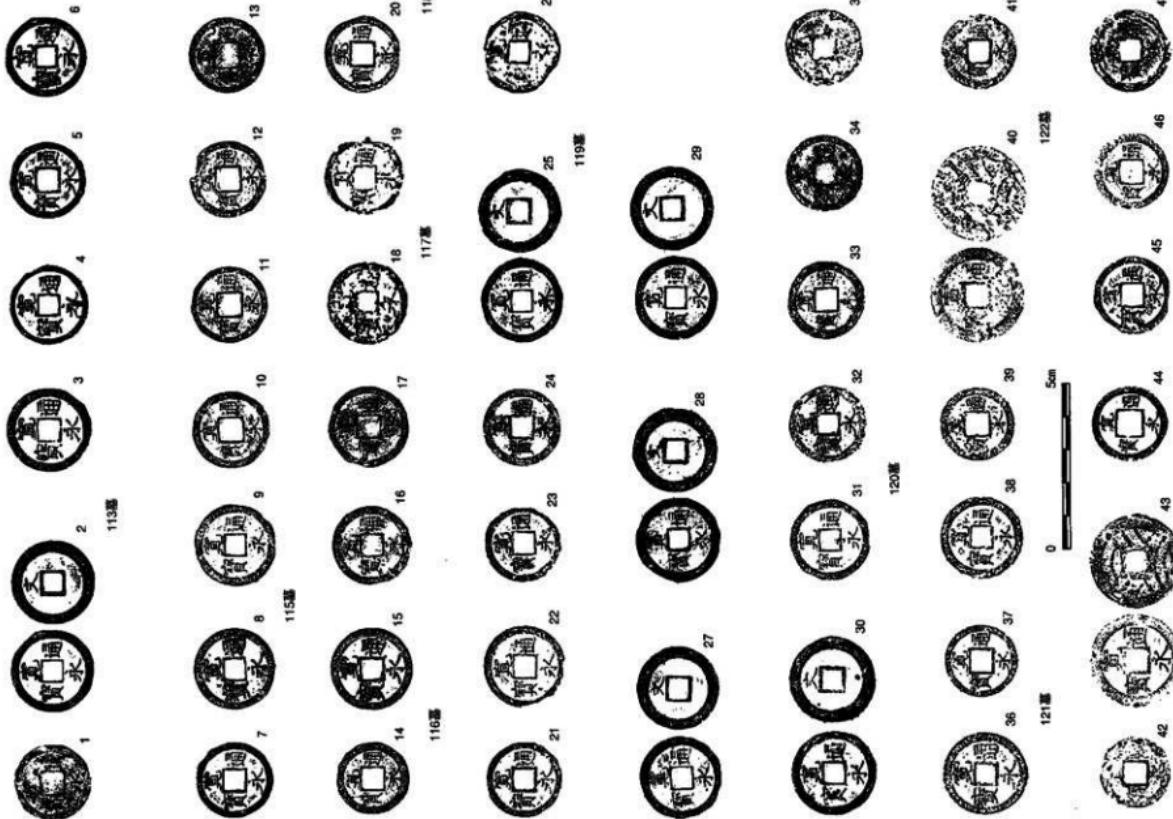
73~87号墓出土錢



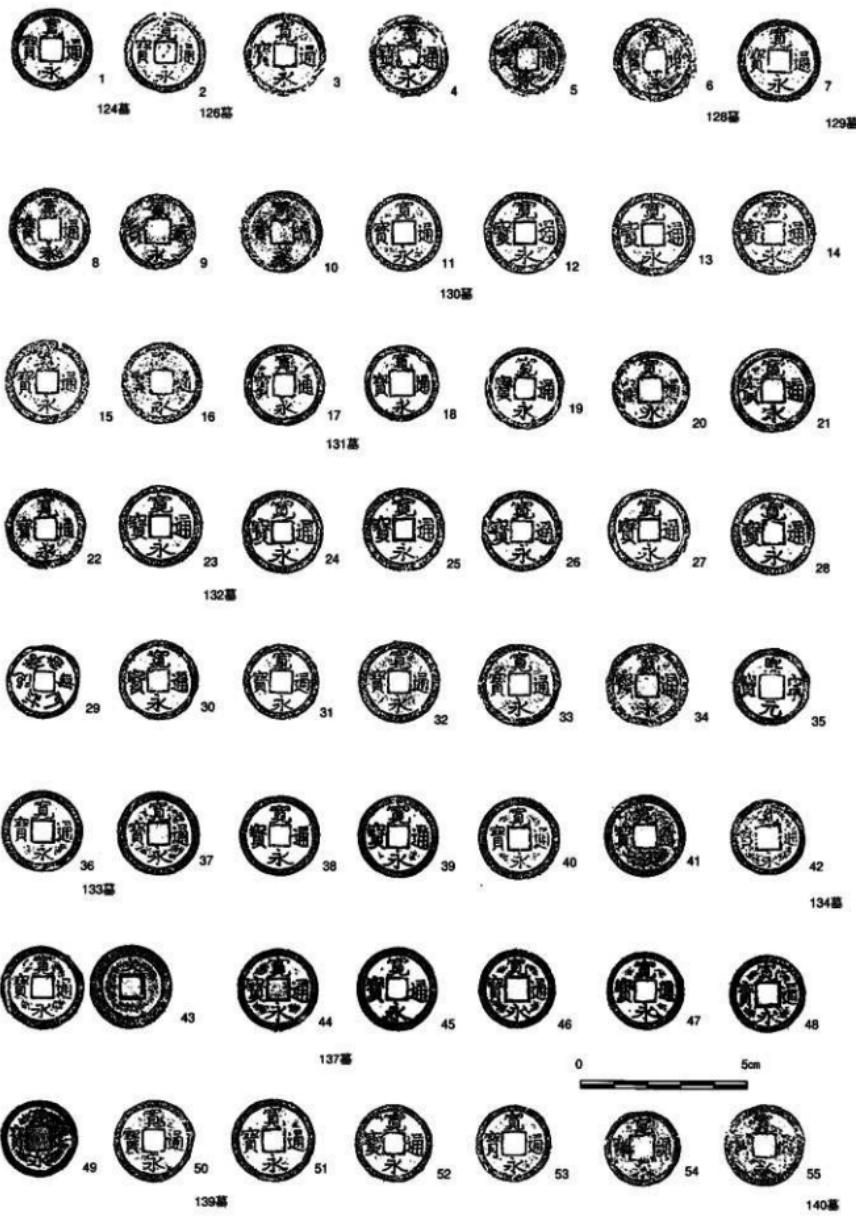
87~95号墓出土钱



96~112号墓葬出土錢

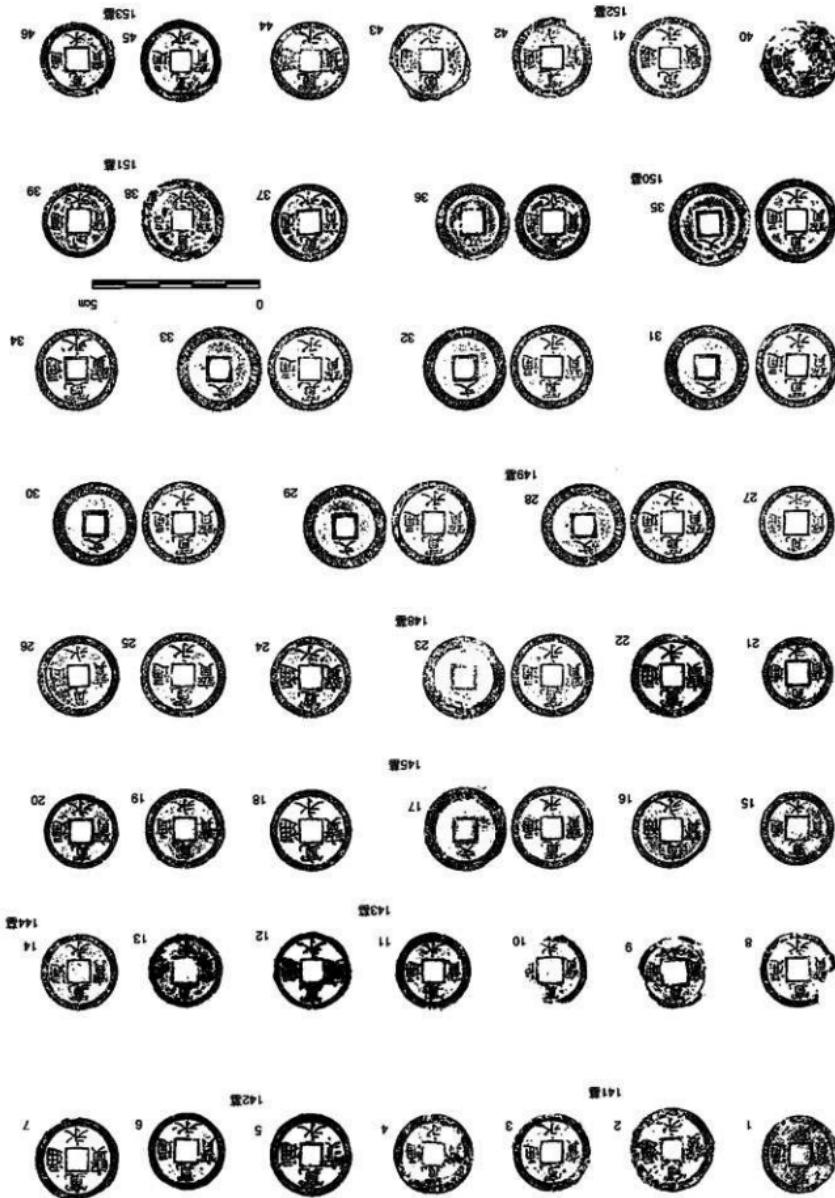


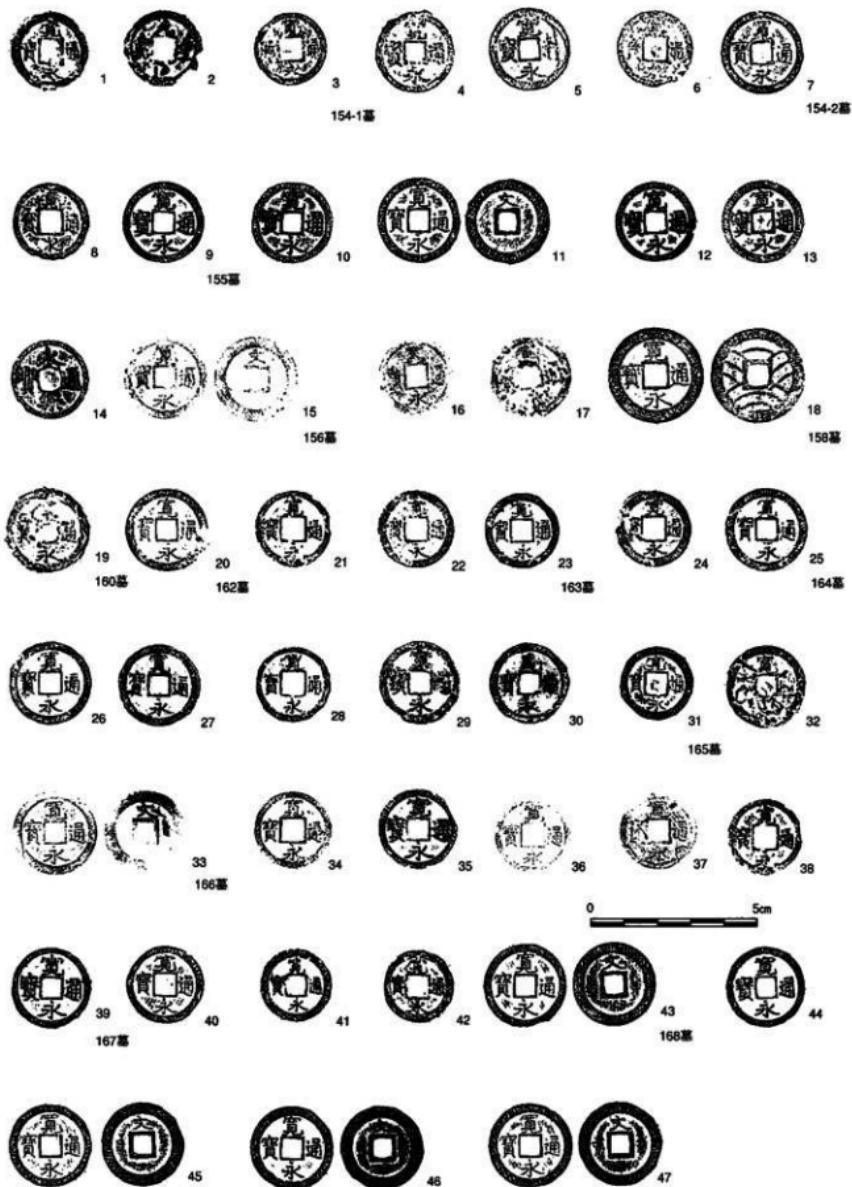
112~123号墓墳出土錢



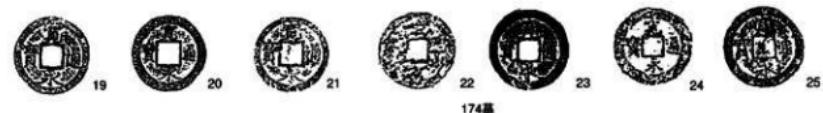
124~140号墓出土錢

140~153号墓出土錢





153~168号墓出土錢



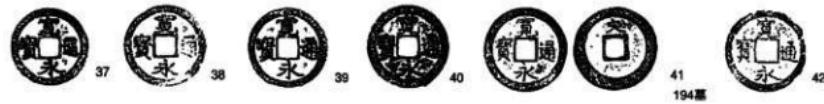
0 5mm



168～186号墓出土錢



0 5mm



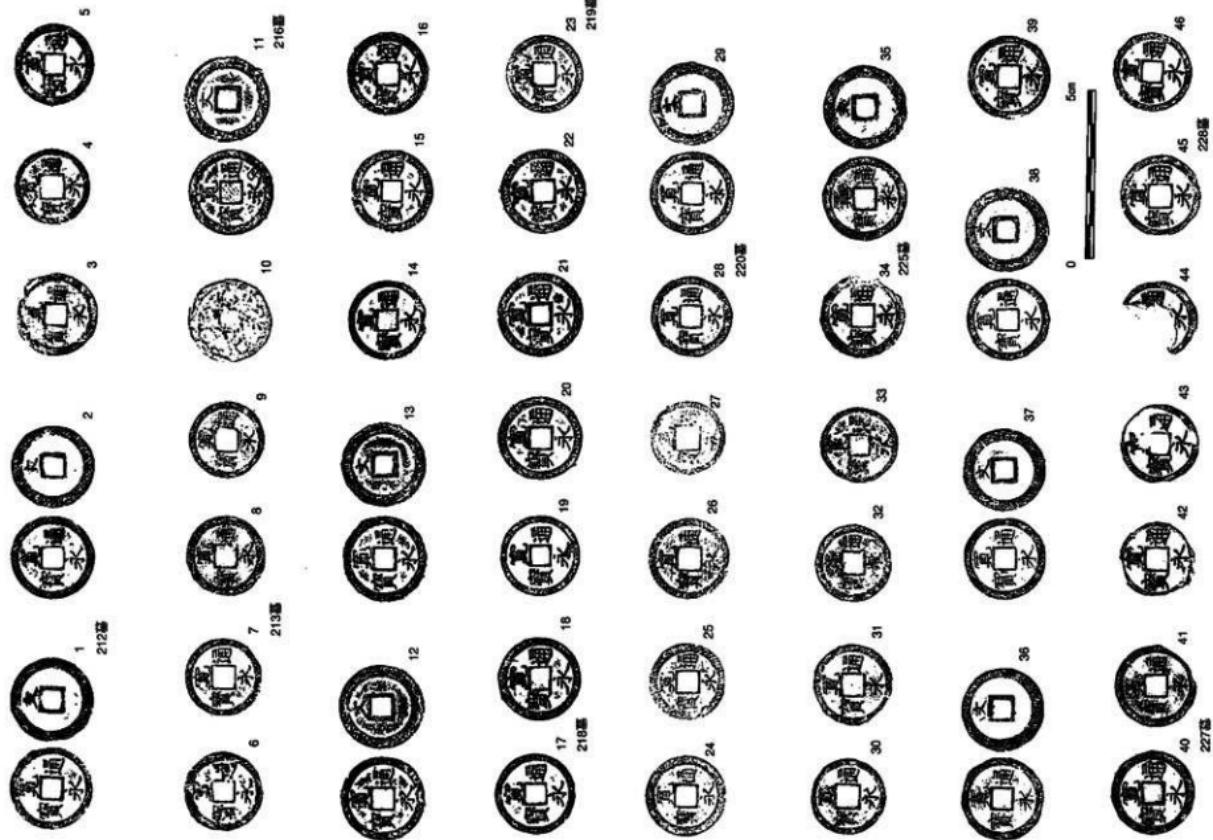
186~195号墓出土钱



0 5mm



195~211号墓出土錢



212~228号墓葬出土銅



229墓



230墓



231墓



234墓



235墓



236墓



238墓

0 5cm



239墓

228~239号墓出土錢



墓壙不明



0 5cm



1

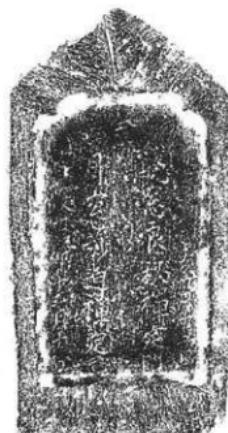


2



3

0 20cm



4



5



6

墓石 (1)



墓石 (2)



0 20cm

摹石(3)

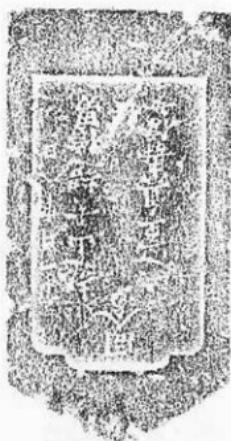
20cm 0



図版(4)

20m
0

5



4



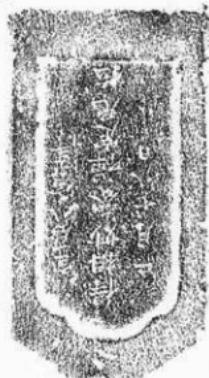
6



2



1





米倉山B遺跡遠景



調査風景



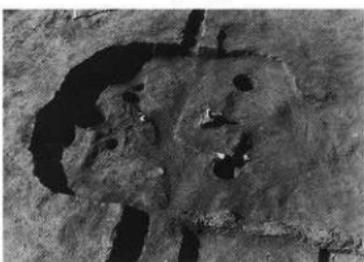
3号住居跡



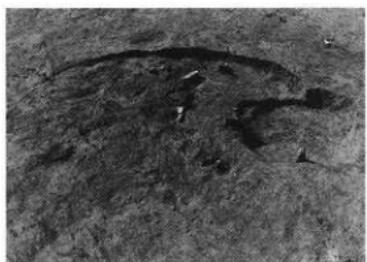
5号住居跡



8号住居跡



11号住居跡



15号住居跡



15号住居跡炉



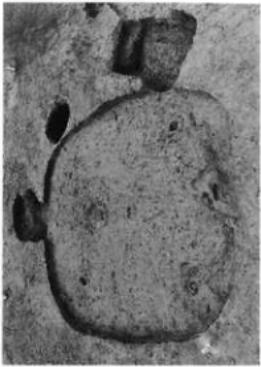
21号住居跡



24号住居跡遺物出土状況



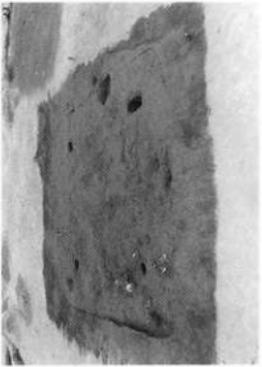
26号住居跡



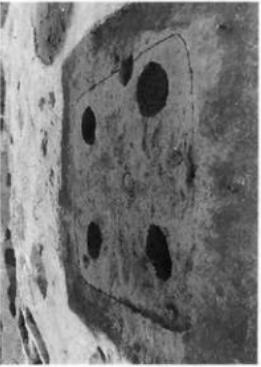
27号住居跡



20号住居跡



24号住居跡

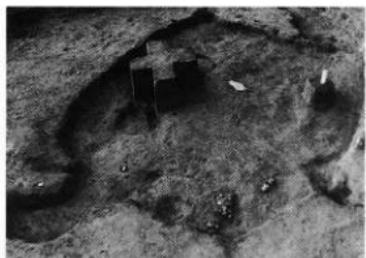


24号住居跡（柱穴掘方）



26号住居跡

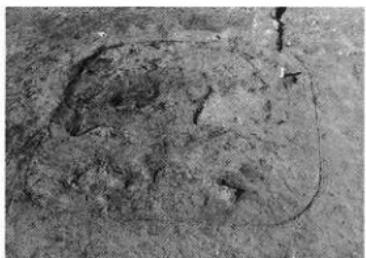
遺構・遺物（2）



28-2号住居跡



29-1～3号住居跡



31号住居跡



33・34号住居跡



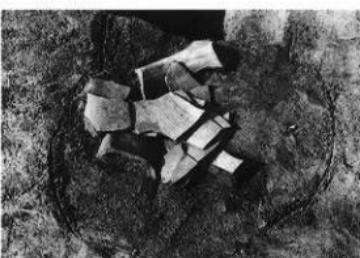
32号住居跡



32号住居跡炉



56号住居跡

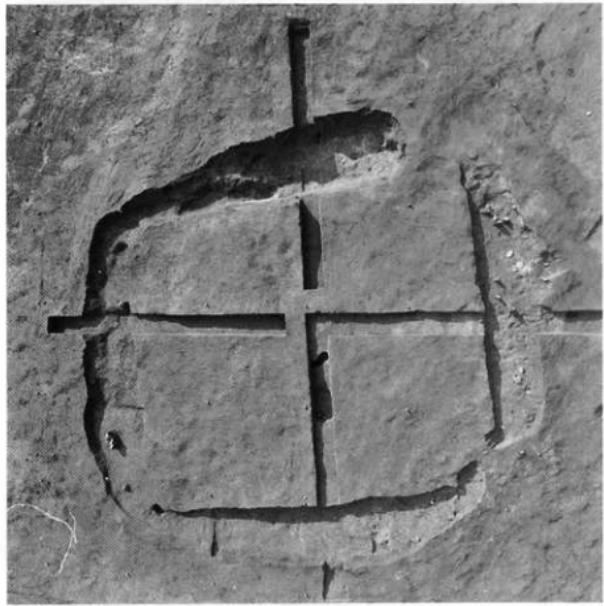


10号土壤須恵器出土状況

遺構・遺物 (4)



1号方形周溝墓及び住居跡群



図版一六四



1号周溝墓溝セクション



1号方形周溝墓溝セクション



1号溝



1号溝「貨泉」出土状況



1号填石室



1号填直刀出土状況



2号填石室



2号填石室掘方



くちゃあ塚古墳調査前状況



同調査前状況



同石室



同石室内部



同石室



同石室

遺構・遺物 (6)



くちゃあ塚古墳石室（後方より）



同墳丘セクション（北）



同墳丘セクション（西）



同墳丘セクション（東）



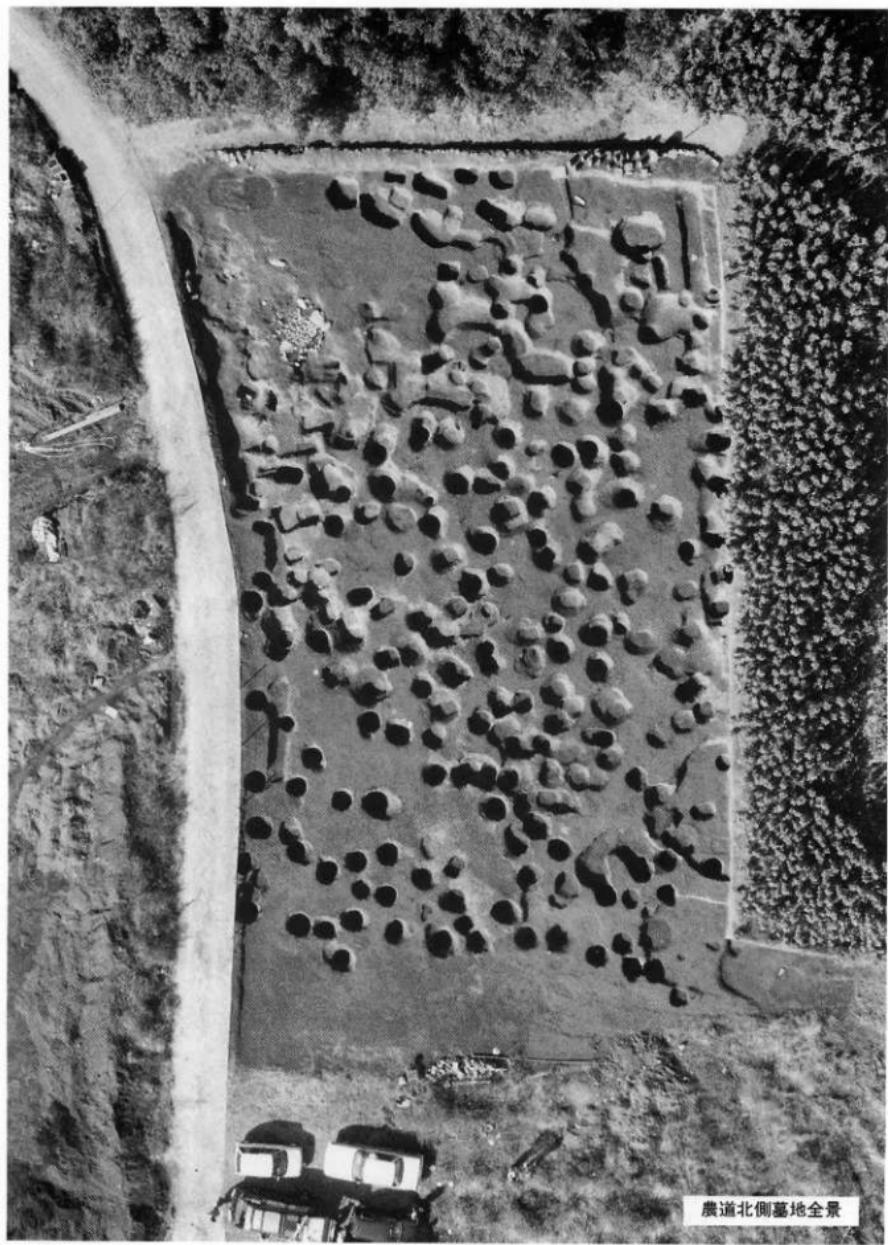
須恵器出土状況（奥壁）



周須恵器出土状況（入口）



同掘方



遺構・遺物 (8)



北西隅 墓石



3号墓



12~14号墓



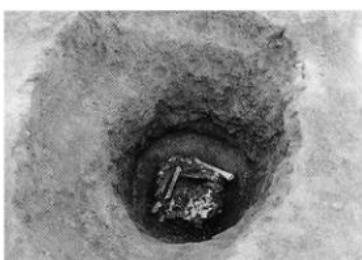
22.26~30号墓



84号墓



130号墓



157号墓



農道南側墓地（1～8号墓）



火打金・火打石



84号墓 砚



煙管

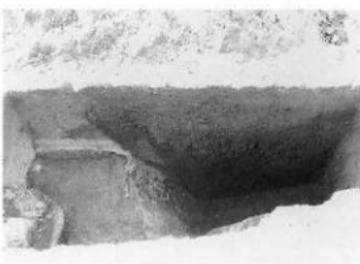


かわらけ



2号墳周辺芋穴

遺構・遺物（10）



断層

報告書概要

フリガナ	コメクラヤマピーイセキヨウサホウコクショ	
書名	米倉山B遺跡調査報告書	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第163集	
編集著者名	坂本美夫、保坂康夫、三田村美彦、石神孝子	
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土地開発公社	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL055-266-3881	
印刷所	(株)峠南堂印刷所	
印刷日・発行日	1999年3月24日・1999年3月31日	
コメクラヤマ ピーイセキ 米倉山B遺跡	所在地 25000分の1の地図名・位置	山梨県東八代郡中道町下向山字米倉山3,991番地ほか 市川大門北緯35°34'52" 東経35°34'52" 標高 380m
概要	主な時代	弥生時代末から古墳時代、江戸時代
	主な遺構	弥生時代末から古墳時代の住居跡52軒、土壙21基、溝1、方形周溝墓2基、古墳3基、江戸時代の墓245基。
	主な遺物	弥生時代末から古墳時代の土器、貨泉、須恵器。江戸時代の陶磁器、キセル、銭、火打金、火打石、メガネ。
	調査期間	1991年7月22日～1996年5月14日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第163集

米倉山B遺跡

印 刷 平成11年3月24日

発 行 平成11年3月31日

編 集 山梨県埋蔵文化財センター

発 行 山梨県教育委員会

印 刷 (株) 峡南堂印刷所
